秋　田　市

秋田新都市開発整備事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告書

下堤A遺跡
下堤B遺跡

1988.3　秋田市教育委員会

序

秋田新都市整備事業に係る御所野丘陵部の埋蔵文化財につきましては昭和56年度から対処し計画地域内31ヵ所の遺跡のうちこれまで秋田大学農地関係の遺跡を除き、28遺跡の調査を一応終了いたしました。

この台地は遺跡の宝庫であり、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、平安時代の貴重な遺構、遺物が検出され、これまで報告してきたところであります。今年度は下堤A、B、C遺跡の調査を実施し縄文時代中期、平安時代の集落跡が確認され集落跡研究上重要な資料と思われます。

調査の実施にあたっては県、関係機関の指導をはじめ地元関係者等多くの積極的なご協力をいただき深く感謝申しあげる次第です。

本報告書が文化財保護のため、さらなる研究資料として広く活用されれば幸甚に存じます。

昭和63年3月

秋田市教育委員会

教育長　高　泉　宏　作

例　　言

1．本報告書は秋田市四ッ小屋小阿地字下堤に所在する下堤Ａ遺跡・下堤Ｂ遺跡の発掘調査報告書である。

2．本報告書の執筆、編集は、下堤Ａ遺跡―西谷　隆、石郷岡誠一、下堤Ｂ遺跡―石郷岡誠一、その他を菅原俊行が行った。

3．発掘調査、整理作業の過程で下記の各氏より指導、助言を賜わった。

　宮本長二郎（奈良国立文化財研究所）、冨樫泰時（秋田県文化課）

4．石質の鑑定は、秋田県立博物館の照井紀一氏、佐々木厚氏によるものである。

5．遺跡の平面図、土層段面図中のＰは土器（片）、Ｓは（礫）を示す。タール状の付着物は点線で範囲を示した。石器実測図の石鏃、石匙、石槍等の外形図にはアスファルト付着物の箇所を示した。

6．遺構の土層断面およびエレベーション図中に標高の記されていないものは、前調査の図面を利用して作成したものである。

7．発掘調査による出土遺物、実測図、写真、その他の記録は秋田市教育委員会が保管する。

目　　次

序

例言

調査の概要

調査に至るまでの経過 …… 1

調査期間と体制 …… 1

調査の方法と経過 …… 2

遺跡の位置と地形・地質 …… 9

下堤 A 遺跡

遺跡の概観 …… 14

遺構と遺物 …… 14

縄文時代 …… 14

平安時代 …… 218

まとめ …… 223

下堤 B 遺跡

遺跡の概観 …… 344

遺構と遺物 …… 344

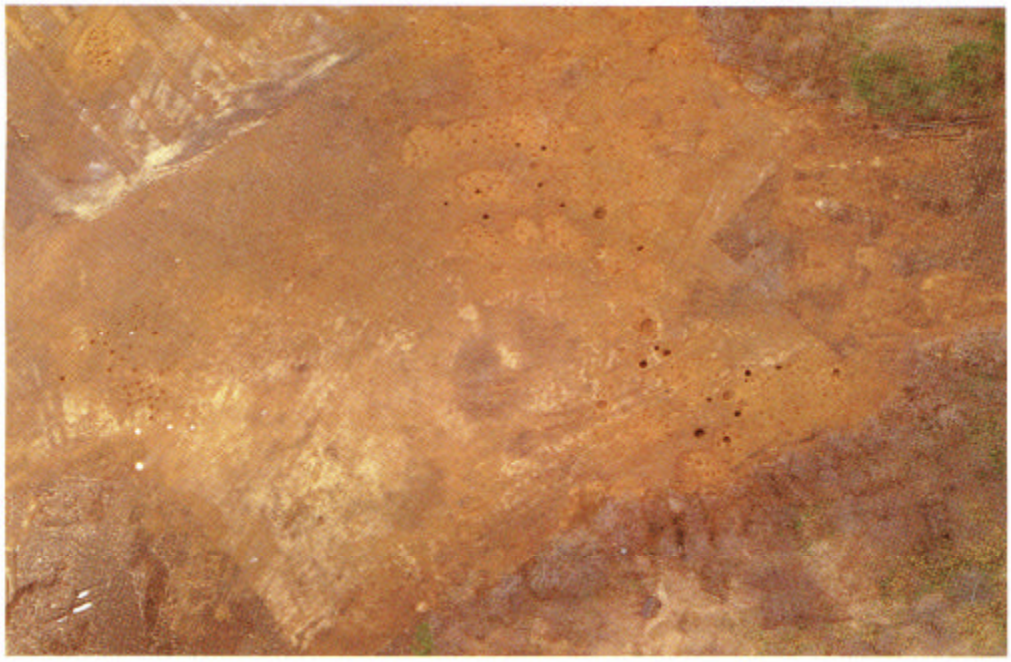
縄文時代 …… 344

平安時代 …… 436

まとめ …… 440

御所野丘陵部（西→）

下堤Ａ・Ｂ・Ｃ遺跡遠景（南→）



下堤Ａ遺跡（北東→）

下堤Ｂ遺跡（南→）

下堤Ａ遺跡27号・28号住居跡（南→）

下堤Ａ遺跡43号・44号・50号住居跡（東→）

下堤Ａ遺跡　23号住居跡石冠出土状況

下堤Ａ遺跡　７号フラスコ状ピット土器出土状況

下堤Ｂ遺跡　33号住居跡（南→）

下堤Ｂ遺跡　33号住居跡炉埋設土器断面

下堤Ｂ遺跡　40号住居跡

下堤Ｂ遺跡　40号住居跡複式炉

調査の概要

調査に至るまでの経過

秋田市南東部地域は、昭和56年6月の秋田空港の開港、東北横断自動車道秋田線秋田インターチェンジ開設予定等、空陸両面の交通の要衝に位置する所であることから、いち速く開発可能性等についての各調査が実施され、県市総合計画においても産業、住宅団地が一体となった総合的ニュータウン＝臨空港新都市として具体的に位置づけられた。

昭和55年に御所野台地全体の分布調査を実施し、約30カ所の遺物散布地を確認した。昭和56年度は開発計画地域内の西部工業団地造成に先だち、**下堤D遺跡**（秋田市「下堤D遺跡発掘調査報告書」1982年3月、秋田市教育委員会）の発掘調査を行った。昭和57年度は今後の開発計画に対処するため55年の分布調査に基づき、3ヶ月間で遺跡の範囲確認調査を実施し、範囲確認調査の結果に基づき関係機関と協議を重ね、引き続き年度別に計画的な発掘調査を実施することとし、昭和57年度は**下堤G遺跡、野畑遺跡、湯ノ沢B遺跡、坂ノ上C遺跡、坂ノ上D遺跡**（秋田市「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」1983年3月、秋田市教育委員会）、昭和58年度は**坂ノ上E遺跡、湯ノ沢A遺跡、湯ノ沢C遺跡、湯ノ沢F遺跡、湯ノ沢G遺跡、湯ノ沢H遺跡、野形遺跡**（秋田市「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」1984年3月、秋田市教育委員会）、昭和59年度は**下堤E遺跡、下堤F遺跡、坂ノ上F遺跡、狸崎A遺跡、湯ノ沢D遺跡、深田沢遺跡**（秋田市「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」1985年3月、秋田市教育委員会）、昭和60年度は**地蔵田B遺跡、台A遺跡、湯ノ沢I遺跡**、58年度に調査した湯ノ沢F遺跡の北西部（秋田市都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書」1986年3月、秋田市教育委員会）、昭和61年度は**地方遺跡、台B遺跡**（秋田市「秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書」1987年3月、秋田市教育委員会）の発掘調査を行った。

昭和62年度は、狸崎B遺跡、地蔵田A遺跡、秋大農場遺跡の調査を実施し、新都市開発計画地区内に所在する27カ所の遺跡が一応終了する予定であったが、昭和60年度に調査した地蔵田B遺跡の保存問題が出てきたため計画の一部見直しがあり、総合公園、医療福祉等複合施設建設予定地にある下堤A遺跡、下堤B遺跡、下堤C遺跡の発掘調査が必要になり、昭和61年度に一部表土除去作業を行っていた**下堤C遺跡**の発掘調査を実施することにした。**下堤A遺跡、下堤B遺跡**については調査費の関係で7月以降に発掘調査を行うこととなった。

調査期間と体制

調査期間　昭和62年7月20日～12月26日（下堤A遺跡）
　　10月6日～12月26日（下堤B遺跡）

調査主体者　地域振興整備公団

調査担当者　秋田市・秋田市教育委員会

調　査　員　菅原俊行、石郷岡誠一、西谷　隆、安田忠市（秋田市教育委員会文化振興課）

調査補佐員　船木佳久子

調査協力員　五十嵐芳郎（秋田考古学協会）、平塚長史（日本大学）

調査作業員　鈴木銀一、鈴木長治、鈴木末蔵、鈴木一美、三浦竹治、三浦馨、三浦吉男、秋本与次郎、三浦三治、水野金光、佐々木多治郎、加賀谷金一郎、鈴木銀三郎、堀野兼雄、佐々木東吉、鈴木藤一、渡部兼治、佐々木小一郎、藤沢啓治、渡部金次郎、鈴木ツヤ、鈴木ウメノ、鈴木鈴子、鈴木博子、三浦千枝子、三浦トミエ、三浦タキ、三浦ナツ、三浦トキ子、佐々木久子、工藤キクエ、熊谷文子、宮田トキ子、高島綾子、伊藤ツギ、長谷部ヤエ子、会場京子、渡部アイ子、渡部キネ子、渡部キヨ、渡辺フミ、佐々木ヨシ、佐々木縫子、高橋ヨシ子、矢倉アキ、加賀谷ヒデ、杉沢フミ、杉沢チエ子、鈴木ヒデ、鈴木ヒデ子、持主チエ、嵯峨キミ、鎌田ツヤ、佐藤アツ子、鈴木シワ、伊藤礼子、堀野ツタヨ

整理作業員　三浦秋子、堀井律子、伊藤秀子、佐々木カネ、橋本ゆき子、榎江美子、佐々木恵子、鎌田絹子

事　務　員　伊藤茂子、信太　緑

調査の方法と経過

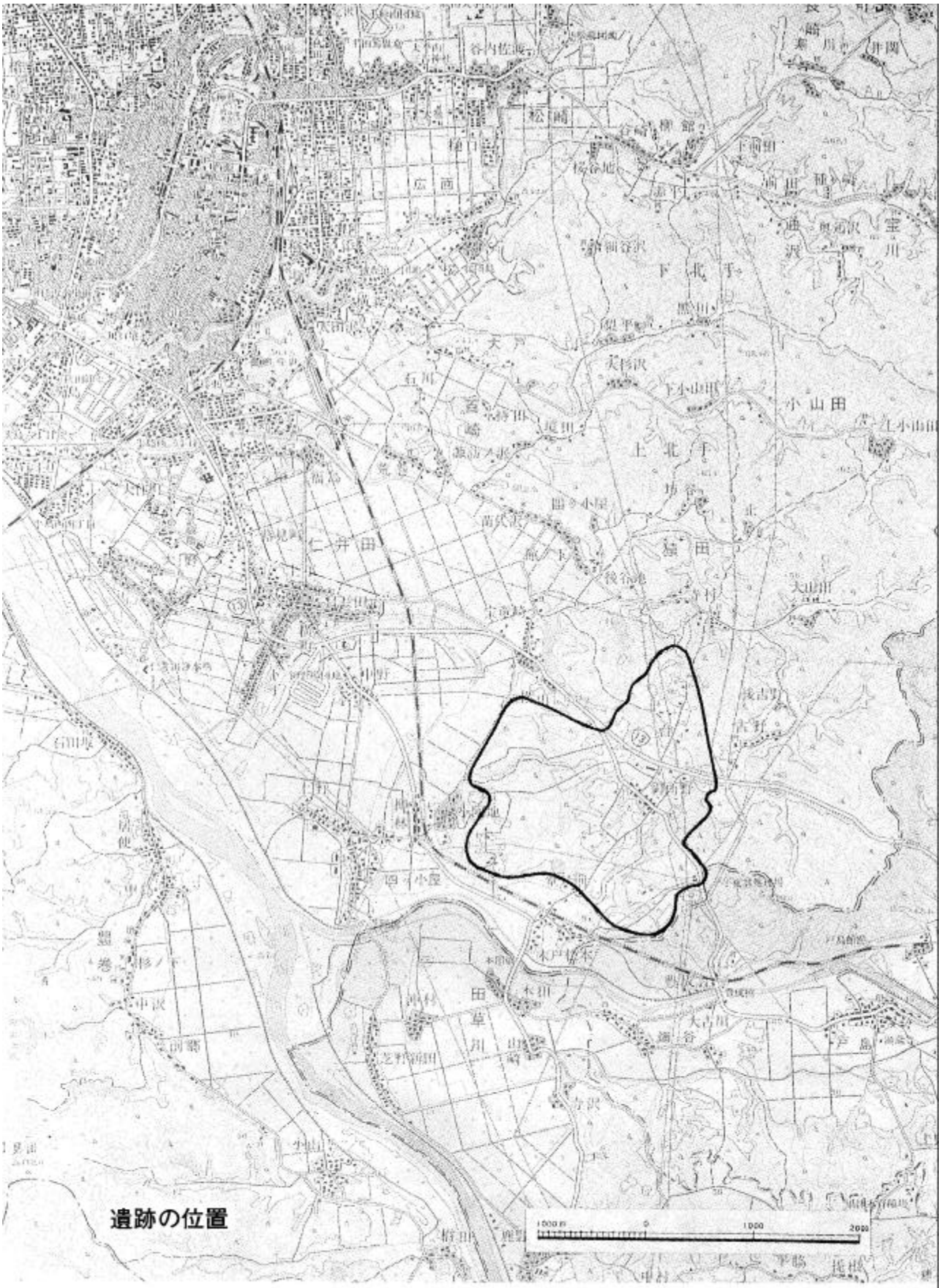
調査区は各遺跡ごとに任意の原点を決めて東西南北（磁北）に基準線を作り、調査全体に大グリッド（40 m× 40 m）を設定し、さらにその中に小グリッド（4 m× 4 m）を設定し、単位グリッドとした。大グリッドは（1～n）、小グリッドは東西（X 軸）に数字（1～10）、南北（Y 軸）にアルファベッド（A～J）を配し、その組み合せで遺跡番号、大グリッド番号、小グリッドの順に呼称することとした。

発掘調査は、7 月 20 日～ 12 月 26 日、10 月 6 日～ 12 月 26 の日程で実施した。下堤遺跡[註1]は昭和 42 年に発見され、昭和 43 年から昭和 48 年まで 6 次の調査がなされ、下堤 A・B 遺跡で竪穴住居跡が検出され、一部発掘されている。今年度調査の結果、下堤 A 遺跡では縄文時代中期の住居跡 76 軒、フラスコ状ピット、土壙、平安時代の住居跡 4 軒が検出された。また下堤 B 遺跡では縄文時代中期末葉の住居跡 45 軒、フラスコ状ピット、土壙、平安時代の住居跡 3 軒、土壙などが検出された。

（註 1）「小阿地、下堤、坂ノ上遺跡発掘調査報告書」1976 年 3 月　秋田市教育委員会

昭和 62 年度来跡者　（順不同、敬称略）

冨樫泰時（秋田県文化課）、横山伸司、石川恵美子（秋田県埋蔵文化財センター）、本間　宏（福島県文化センター）、井上秀雄（東北大学）、宮本長二郎（奈良国立文化財研究所）、武藤康弘（東京大学）、小林　都、南部公民館サークル連合会、南部公民館縄文土器を焼く会、南部公民館ふるさと探訪会、大内町文化財保護審議会、御野場中学校生徒 10 名、戸米川小学校生徒 24 名、市工業振興局職員


遺跡の位置
1000m
0
1000
2000

御所野丘陵部　遺跡一覧表

			範囲確認調査			発掘調査遺跡		
遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	面積㎡	地目	調査年度	調査面積㎡	内容
1	下堤E	秋田市四ツ小屋小阿地字下堤	縄文	5,626	畑	59	3,340	縄文（中期）集落
2	下堤F	〃　〃	〃	14.375	〃	59	2,950	縄文（前、中期）集落
3	下堤G	〃　〃	旧石器、縄文（中）	5,000	山林原野	57	1,550	旧石器、縄文（前、中期）集落
4	坂ノ上C	〃　四ツ小屋小阿地字坂ノ上	縄文	6,000	〃	57	1,000	縄文（中、晩期）
5	坂ノ上D	〃　〃	〃	14,060	〃	57	1,500	縄文（中、晩期）
6	坂ノ上E	〃　〃	〃	15,000	〃	58	5,000	縄文（中期）集落、9〜10c製鉄炉
7	坂ノ上F	〃　〃	〃	37,810	〃	59	18,800	縄文（中期）集落、弥生住居跡
8	狸崎A	〃　四ツ小屋小阿地字狸崎	縄文（晩）	13,750	畑、山林原野	59	1,910	縄文（前、晩期）土壙墓、弥生住居
9	狸崎B	〃　〃	縄文	11,250	原野			
10	地蔵田A	〃　四ツ小屋末戸松本字地蔵田	旧石器、縄文、平安	30,000	畑			
11	地蔵田B	〃　〃	縄文（中、晩）、弥生	25,000	山林原野	60	12,000	旧石器、縄文(中期)集落、弥生集落棚木跡
12	湯ノ沢A	〃　四ツ小屋末戸松本字湯ノ沢	縄文	21,555	〃	58	3,000	縄文（中期）、弥生住居跡
13	湯ノ沢B	〃　〃	縄文（前、中）	5,000	〃	57	2,340	縄文（中期）集落、平安住居跡
14	湯ノ沢C	〃　〃	縄文（中、晩）、弥生	11,565	〃	58	4,100	縄文（中期）集落
15	湯ノ沢D	〃　〃	縄文（中）	35,000	畑	59	3,220	縄文（中期）集落
16	湯ノ沢E	〃　〃	縄文	7,500	〃	58	1,920	縄文（後期）
17	湯ノ沢F	〃　〃	縄文、土師、須恵	5,310	〃	58・60	4,400	弥生土壙、平安墓（40墓）
18	湯ノ沢G	〃　〃	縄文（後）	1,300	原野	58	400	縄文（後期）
19	湯ノ沢H	〃　〃	縄文	5,940	畑	58	720	縄文（前、中、晩期）住居跡
20	野畑	〃　上北手御所野字野畑	縄文（中）	1,875	山林	57	640	縄文（中期）集落
21	野形	〃　上北手御所野字野形	土師、須恵	5,940	山林原野	58	980	平安住居跡、窯跡
22	深田沢	〃　上北手古野字深田沢	縄文、平安	6,875	畑	59	3,320	平安建物跡、住居跡
23	台A	〃　上北手古野字台	〃	8,440	〃	60	2,000	縄文（中期）集落
24	地方	〃　上北手猿田字堤ノ沢	縄文（晩）	54,670	畑、原野	61	11,500	縄文（中期)集落、(晩期)土壙墓
25	湯ノ沢I	〃　四ツ小屋末戸松本字湯ノ沢			苗圃	60	5,700	弥生
26	秋大農場	〃　四ツ小屋小阿地字狸崎			畑、原野			
27	台B	〃　上北手猿田字寺ノ沢			山林原野	61	1,150	縄文（中期）
28	下堤A	〃　四ツ小屋小阿地字下堤			原野	62	11,000	縄文（中期）集落、平安集落
29	下堤B	〃　〃			〃	62	5,100	縄文（中期）集落、平安集落
30	下堤C	〃　〃			〃	61・62	17,700	平安集落
31	下堤D	〃　〃			〃	56	17,000	旧石器、縄文(前〜晩期)集落、平安住居跡

遺跡の位置と地形・地質

位　　置

秋田市街から国道13号線を南下し、仁井田、横山を過ぎ、坂を登ると標高40m前後の広大な台地が開ける。これは奥羽本線四ツ小屋方面からもよく見える平坦な台地であり、御所野台地、末戸台と呼ばれている。この台地が秋田新都市整備事業計画地域である。

各遺跡の位置については挿図の、「御所野丘陵部発掘調査遺跡、範囲確認調査遺跡及び周辺遺跡」を参照されたい。

地形・地質

遺跡の存在する地形は、大別して和田丘陵と末戸台台地に分けられる。和田丘陵は平坦面をあまり持たない。しかし、定高性を持った標高60～150mのかなり開析を受けた老年期地形を示し、地形は第3系鮮新統に属する青色砂質シルト岩（笹岡層）と青灰色塊状泥岩（天徳寺層）、それに中新統に属する暗灰色泥岩（船川層）などからなっている。末戸台台地は標高25～50m強で、その表面は大変平坦である。この台地は和田丘陵と接して数段の段丘を識別できる。これらは内藤[註1]の区分からすると、上位から標高45～50m強の椿台段丘、標高40m強の上野台段丘Ⅰ、標高35m強の上野台段丘Ⅱ、標高25m強の宝竜崎段丘の4段階に分けられる。

椿台段丘

岩見川右岸末戸台台地では40～50m強の標高をもつ、いわゆる椿台面をその堆積面とする椿台層が厚い礫（最大径10㎝前後）、砂、粘土の互層で構成されている。ただ基底高度はわからない。岩相は最上部に1～2m褐色の粘土質火山灰層があり、次に礫、砂、粘土の互層で、砂礫の部分でしばしばクロス・ラミナ（斜交葉理）がみられ、砂土あるいはシルトは水平な細かい層理をなすことが多い。層厚をみると、礫層はうすく、砂、粘土層が厚い。その下部は第3系の泥岩（船川層）や砂質シルト（笹岡層）となっている。内藤はこの椿台面を関東の下末吉面に対比している。

上野台段丘Ⅰ

末戸台台地で椿台段丘の南側に標高40m強でついている段丘が上野台段丘と呼ばれている。表層の1～2m程度で、その下部は第3系となっている。下堤A、B、C遺跡は、この上野台段丘Ⅰに位置する。

上野台段丘Ⅱ

末戸台台地では上野台段丘Ⅰとの比高が5m強である。段丘堆積物の岩相は、上野台段丘Ⅰとほぼ同様で、層厚は5m前後である。内藤によれば、厚い礫層の下部は椿台層に当るとしている。

段丘堆積物の特徴は、上野台Ⅰ、Ⅱ面では最大径30㎝前後の亜円礫を主体とする。ほぼ一様な礫層をもち、河川堆積物で、厚さも加味すると岩見川などによる河成の侵食段丘面と考えられる。椿台、上野台Ⅰ、Ⅱ面の各面をおおっている層厚1～2mのシルト分を含んだ粘土質火山灰層は、男鹿半島の寒風山が起源と一応考えられている。[註2]この粘土質火山灰層の表面細粒物質の風化状態をみ

ていくと、椿台、上野台Ⅰ、Ⅱ面では黒色土の下の細粒物質のうち、上部50～100㎝が明褐色を呈し、下部は灰色で、境は漸移する。また、土壌面を見ると、椿台、上野台Ⅰ、Ⅱ面をおおう土壌はいわゆる高岡2統に属していると考えられ、比較的大きい円礫を混入していて、黒色土層を厚く堆積させている。この層中には火山ガラスを混入しており、火山灰が関係しているものと推定される。

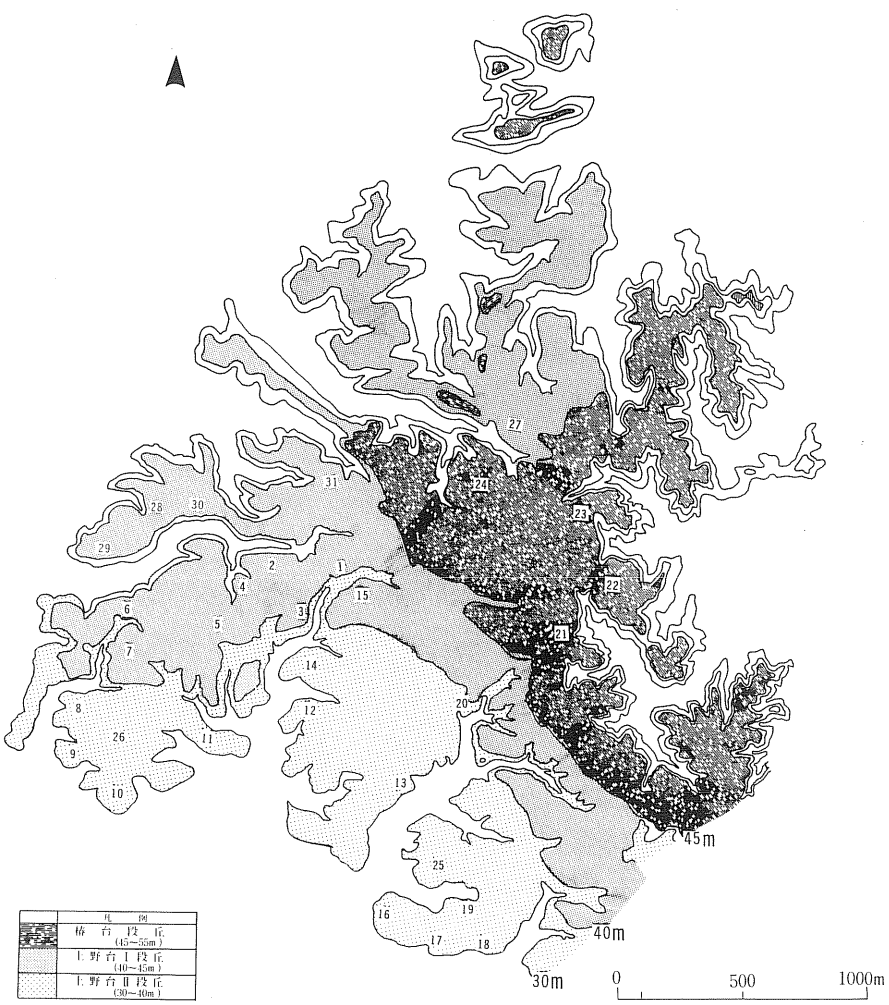
（註1）「秋田県岩見川流域およびその周辺の段丘について」 内藤博夫　1965年　第4紀研究第4巻第1号

（註2）「地形、表層地質・土壌、秋田」 経済企画庁土地分類基本調査　1966年

「八郎潟の研究」 秋田県教育委員会　1965年

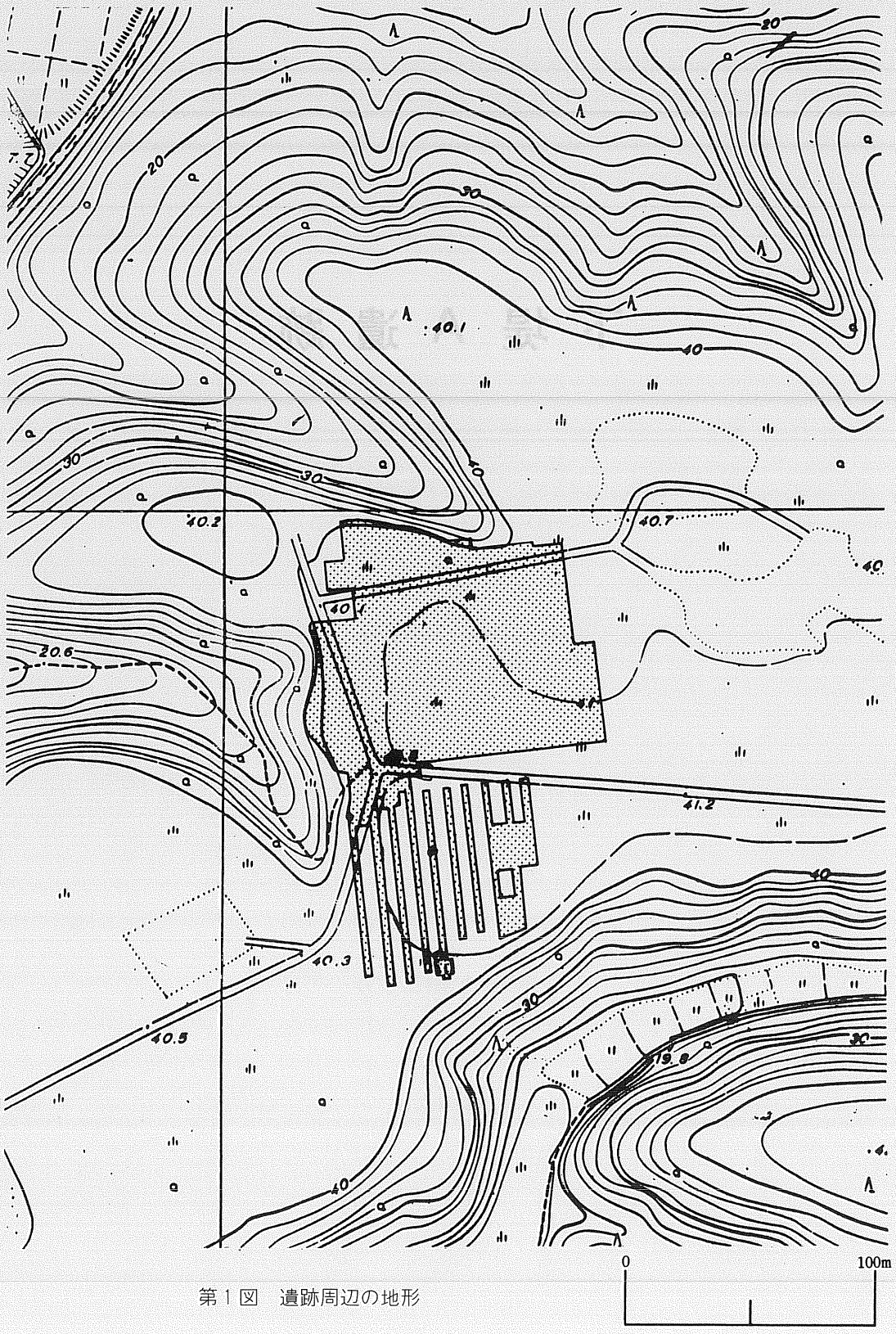
「火山活動と地形」 村山　馨　大明堂

「秋田県男鹿半島一の目潟の火山拠出物について」 林　宏　地質学雑誌第61巻第717号　1955年

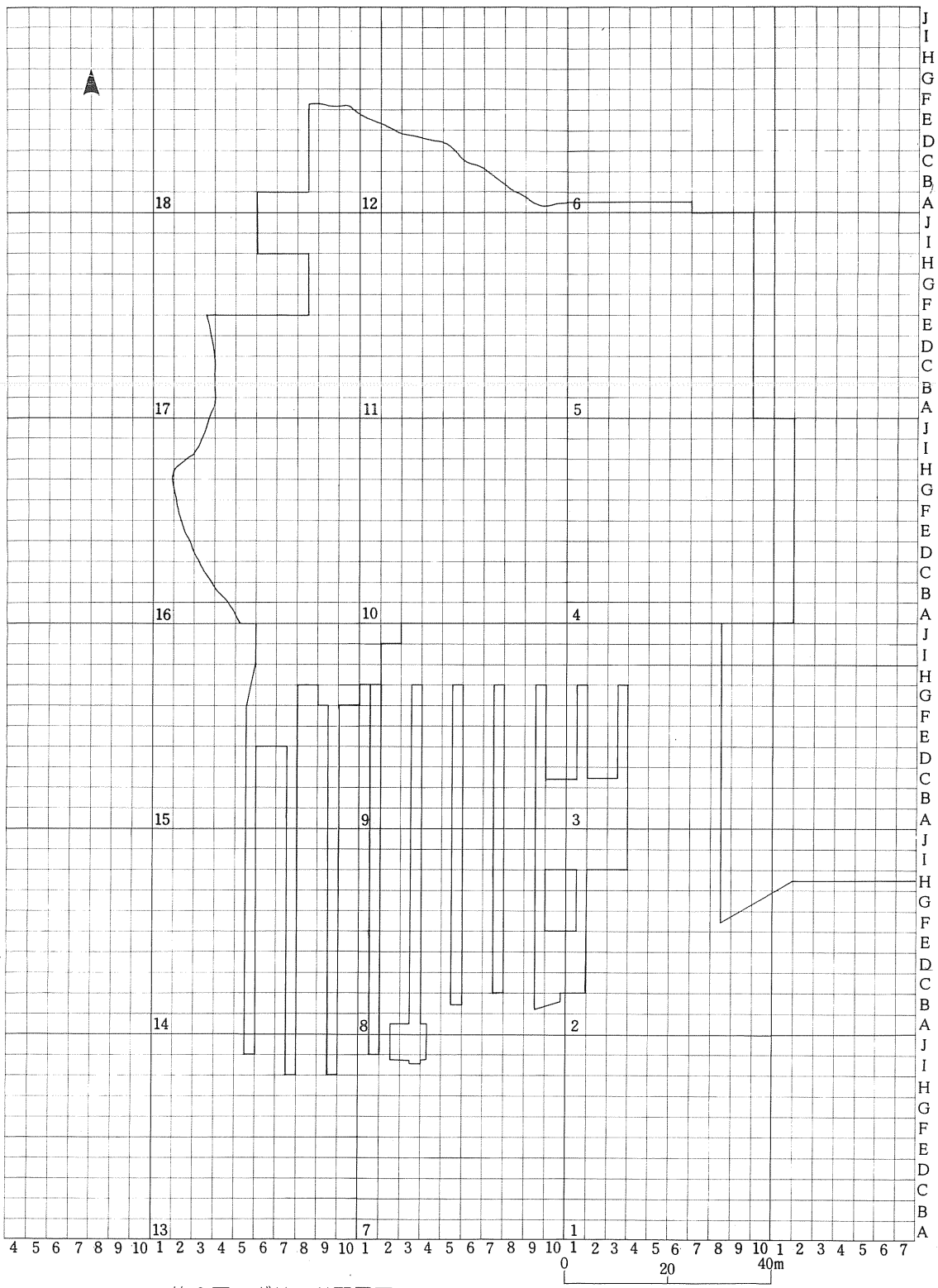


段丘及び遺跡の位置

下堤A遺跡



第１図　遺跡周辺の地形



第２図　グリッド配置図

遺跡の概観

御所野台地の北西部、JR 東日本奥羽本線四ツ小屋駅から北東へ約 1.2 ㎞の地点である。西と北側から大きな沢が入り込み、4 つの突出する舌状部をもつ台地が東から西に延びる。遺跡は東側の地峡部から入った中央部に位置する。標高は約 41 m である。

調査の結果、縄文時代中期の集落跡、フラスコ状ピット、土壙、平安時代の集落跡が検出された。隣接して東側に「下堤 C 遺跡」、南西約 300 m に「下堤 B 遺跡」が所在する。

遺構と遺物

縄文時代

下堤 A 遺跡で検出した 1 号住居跡～ 17 号住居跡・20・56・58 号住居跡は、昭和 43 年～ 48 年までの調査で発掘されているが、今回再発掘され、新たに報告することにした。

1 号住居跡（第 3 図）

調査区の中央南側で検出された。

プランは長軸 5.9 m、短軸 4.7 m の楕円形を呈する。確認面からの深さは 10 ㎝で、壁は斜めに立ち上がる。ピットは 18 個検出されており、主柱穴は住居内を周る深さ 30 ㎝以上のピット 6 個が考えられる。炉は 70 ㎝× 40 ㎝の方形石囲炉である。床面は炉周辺が堅く、他はやや軟弱である。

2 号住居跡（第 4 図）

調査区の中央南側で検出された。

プランは長軸 7.8 m、短軸 6.5 m の楕円形を呈する。確認面からの深さは 12 ㎝で、壁は斜めに立ち上がる。ピットは大小 26 個検出されており、主柱穴は住居内を周る深さ 30 ㎝以上の 8 個と考えられる。炉は中央に位置しており、土器埋設炉が 2 基検出された。

出土遺物

土器（第 70 図）

89 ～ 91 は覆土から出土した。いずれも粘土紐貼付による文様が展開する。粘土紐上に撚糸圧痕が施されるものもある。

石器（第 88 図）

1 は削器である。頁岩製。

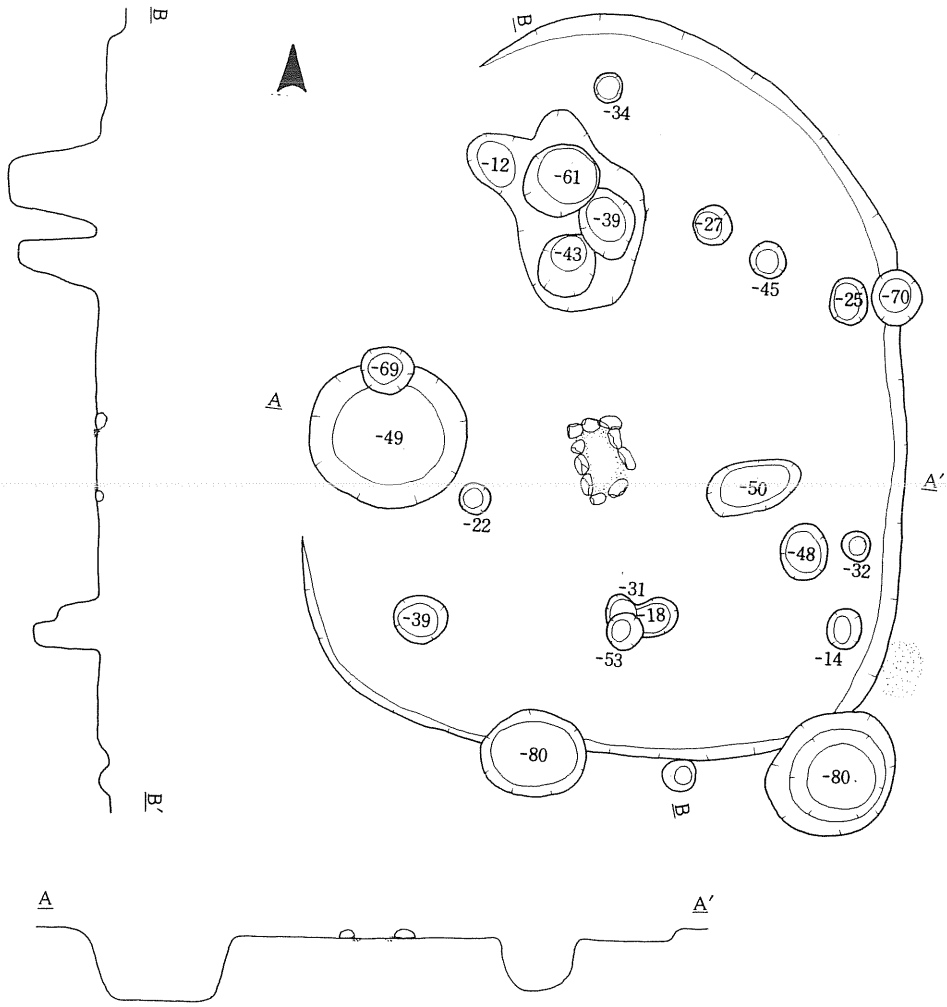
3 号住居跡（第 5 図）

調査区の中央部で検出された。

プランは 3 号住居跡の東側を 4 号住居跡が、また西側を 5 号住居跡が切っており、不明である。確認面からの深さは 16 ㎝で、壁は斜めに立ち上がる。ピットは住居内に 6 個検出されているが、主柱穴は不明である。炉は西側に位置しており、地床炉である。床面は堅く良好である。

出土遺物

土器（第 56 図）



第３図　１号住居跡

0　2m

１は覆土から出土した。四つの弁状把手をもつ深鉢形土器である。口唇部には粘土紐を貼付、刻みを入れてある。口縁部には粘土紐貼付による隆帯文が施文され、それに沿って撚糸圧痕文が縁取りされている。地文はLR（縦回転）単節斜縄文である。

４号住居跡（第６図）

調査区の中央部で検出された。

プランは長軸7.2ｍ、短軸6.4ｍの楕円形を呈する。確認面からの深さは24㎝で、壁は斜めに立ち上がる。ピットは18個検出されており、主柱穴は深さ70㎝以上の５本が考えられる。炉は中央に位置しており、土器埋設炉である。炉の周辺は火熱を受けて赤変してる。床面は西側が堅く、東

側がやや軟弱である。

住居内南西部に、110 cm× 98 cm、深さ 45 cmの不整円形を呈するピットの上縁を厚さ 6 ～ 8 cmの黄白色粘土で縁取りした施設を検出した。

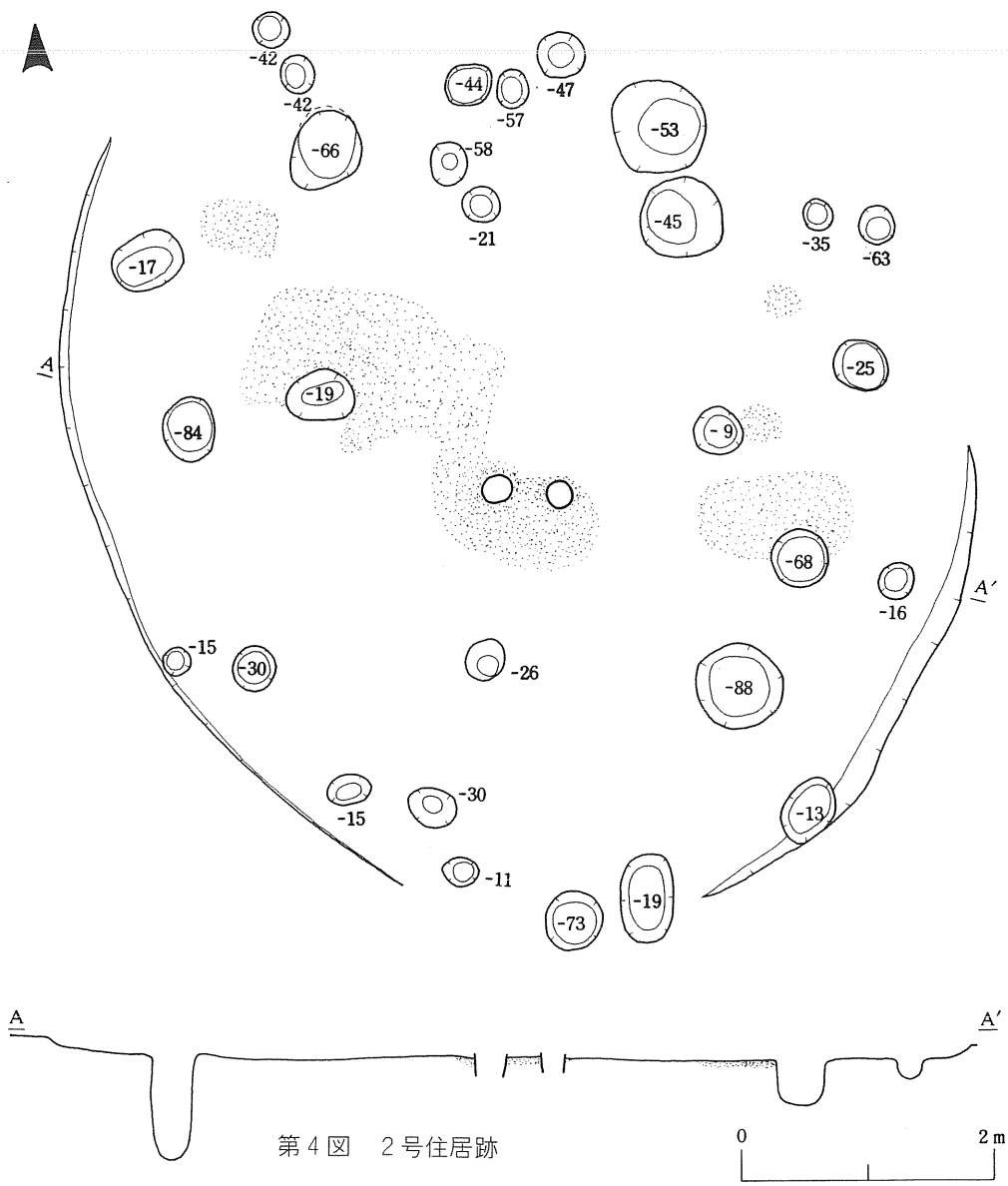
出土遺物

石器（第 88 図）

2 は石錐、3 は縦型石匙である。

5 号住居跡（第 7 図）

調査区の中央部で検出された。3 号住居跡を切り、8 号住居跡に切られている。

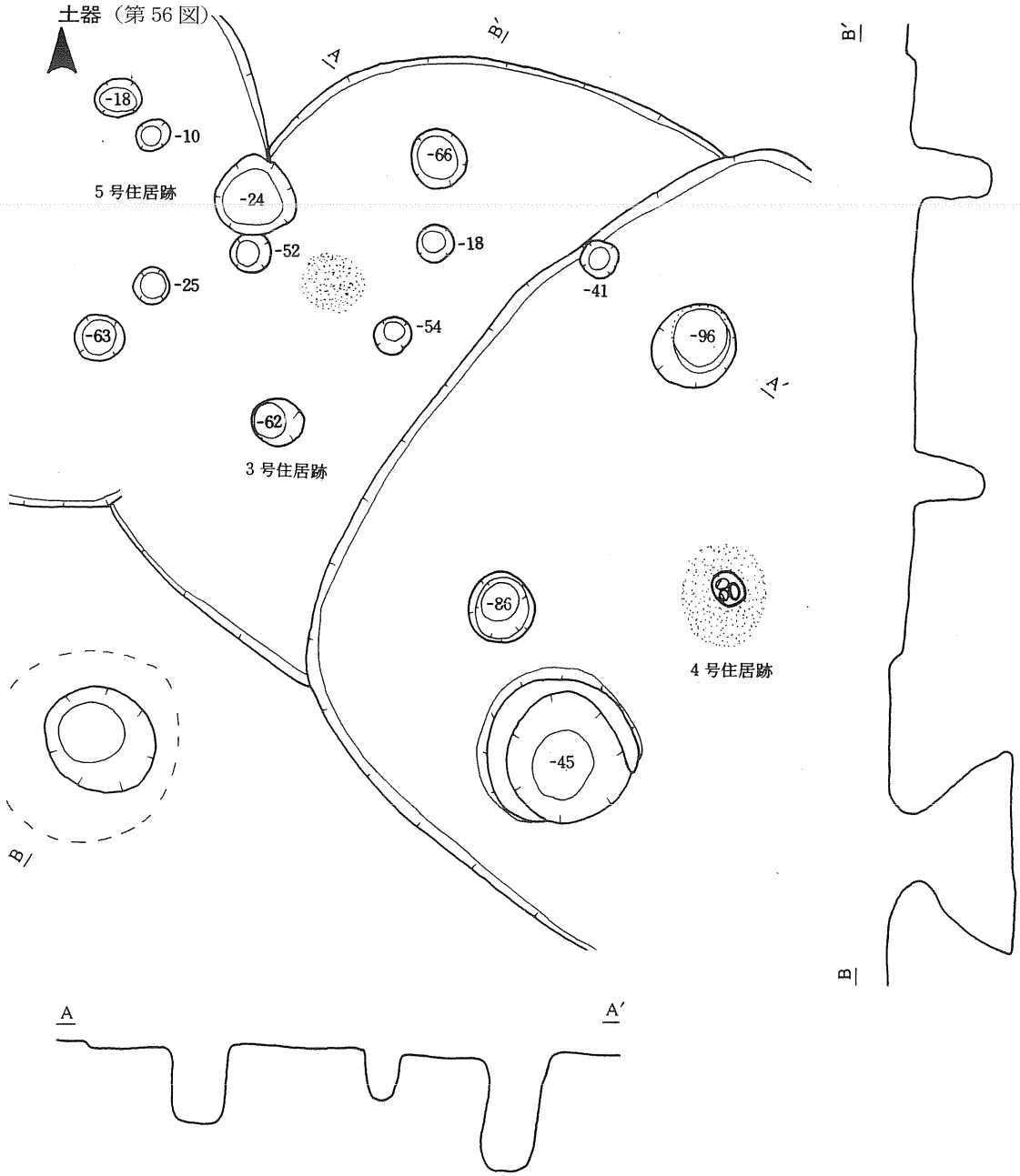


第 4 図　2 号住居跡

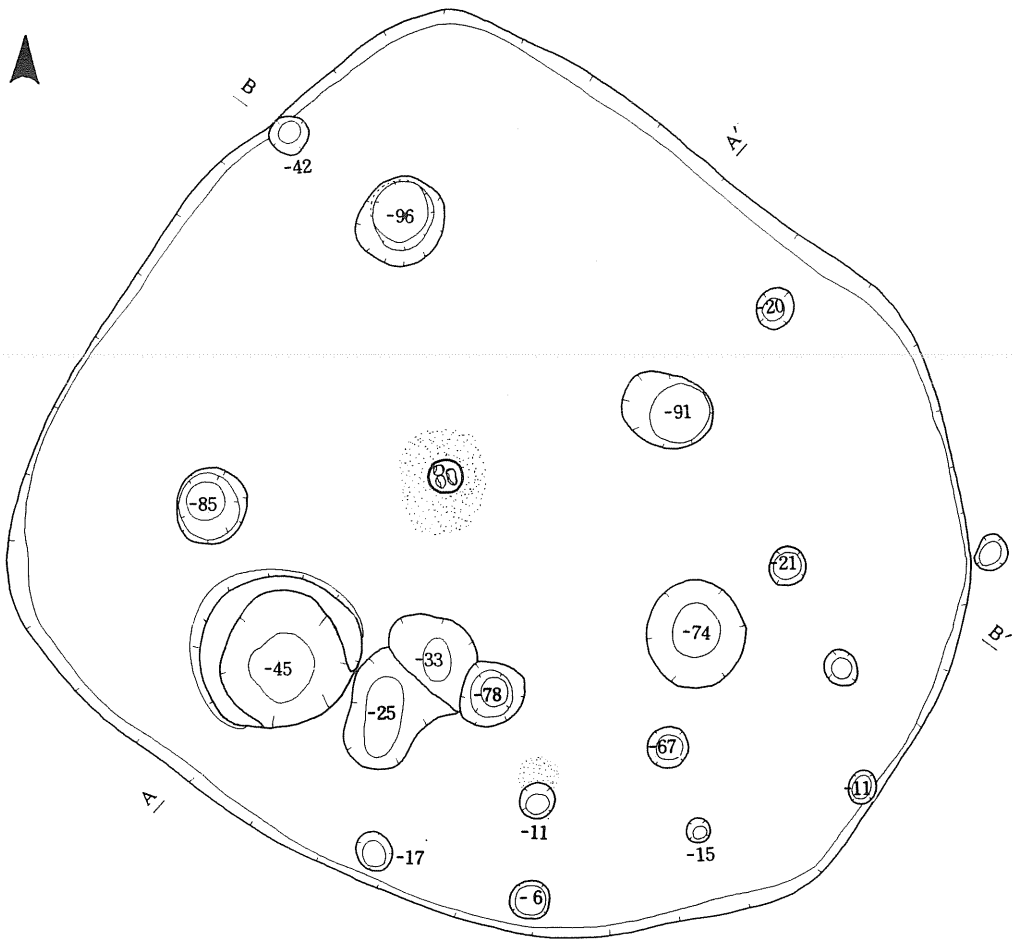
プランは長軸 6.3 m、短軸 5.7 m の楕円形を呈する。確認面からの深さは 14 cmで、壁は斜めに立ち上がる。ピットは 25 個検出され、主柱穴は住居内をめぐる深さ 30 cm以上のピットが考えられる。炉は西側に 110 cm× 95 cmの円形石囲炉、東側に土器埋設炉が検出された。炉の周辺は火熱を受け赤変している。埋設炉には深鉢形土器が正立に据えられている。

出土遺物

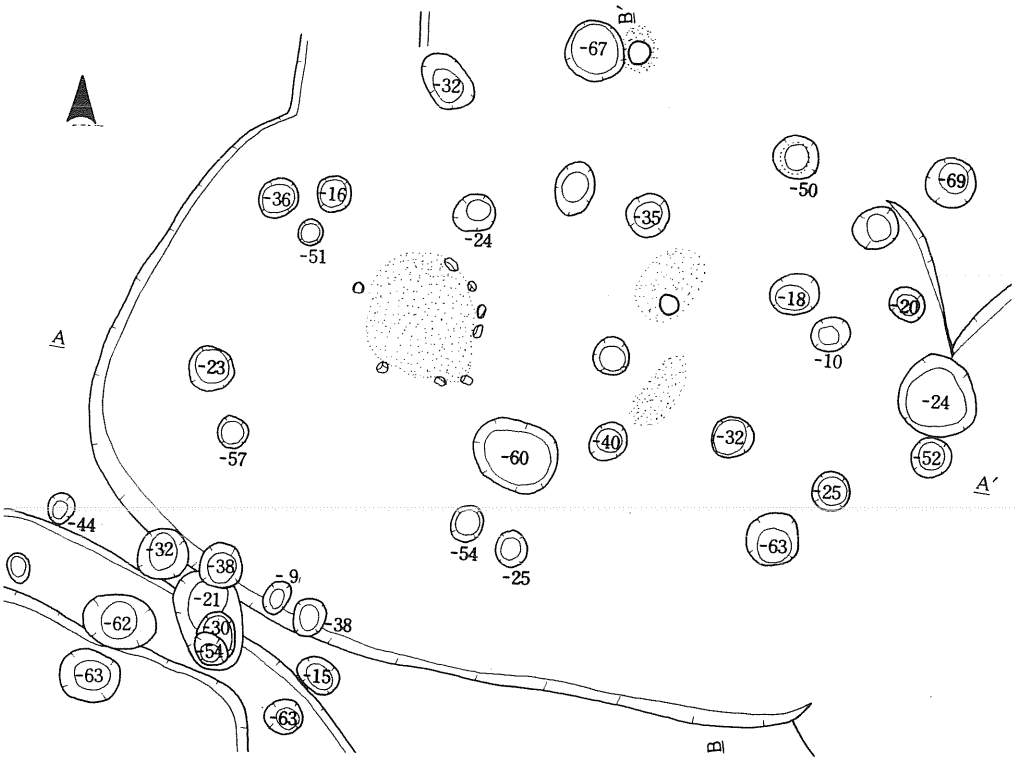
土器（第 56 図）

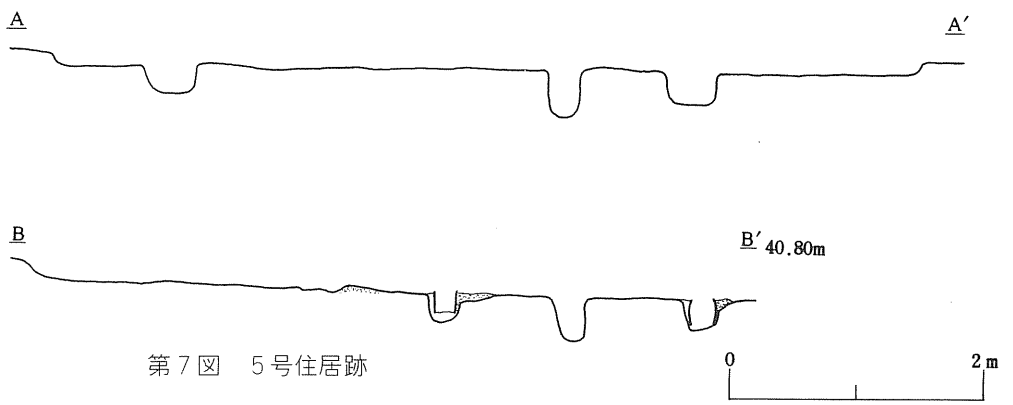


第 5 図　3 号住居跡



第６図　４号住居跡





第７図　５号住居跡

２は炉埋設土器である。口縁部と頸部に二条ずつの縄文の圧痕文が施文され、その間には同じく縄文の圧痕による山形文が施される。胴部には縦方向に結び目縄文が施される。地文はLR（縦回転）単節斜縄文である。

６号住居跡（第８図）

調査区の中央南側で検出された。

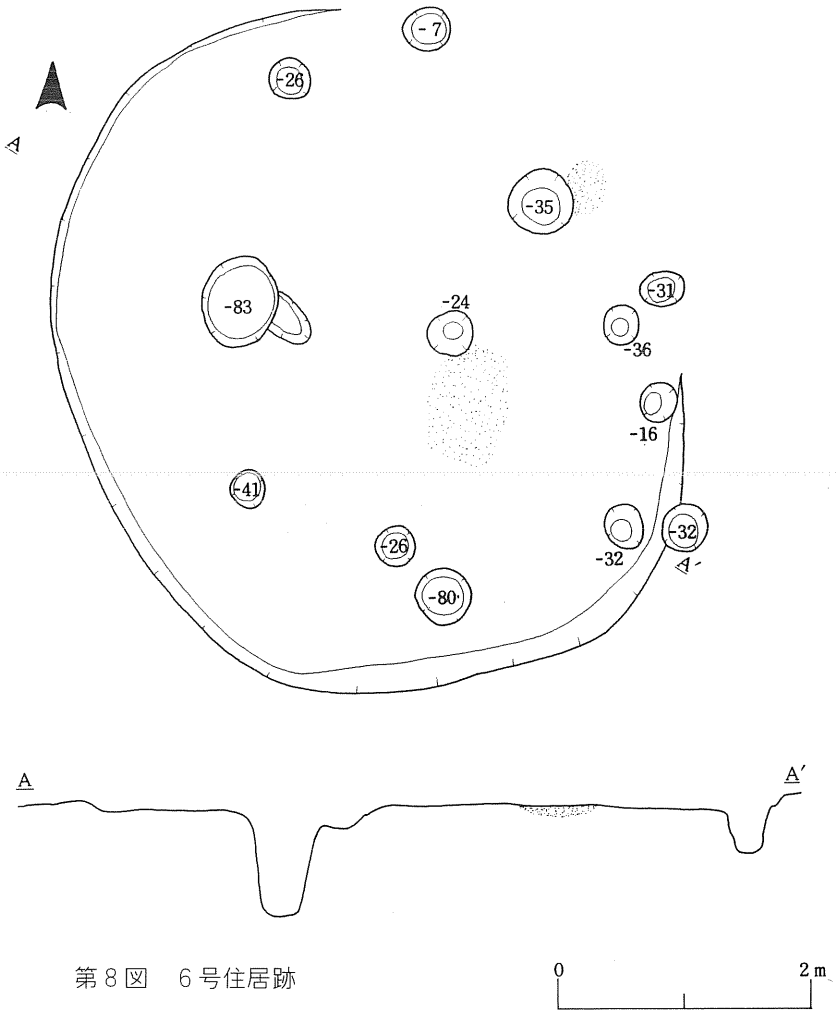
プランは長軸5.7 m、短軸4.9 mの楕円形を呈する。確認面からの深さは8 cmで、壁はゆるやかに立ち上がる。ピットは12個検出されており、主柱穴は深さ25 cm以上の６個と考えられる。炉は中央南側に位置しており、93 cm×70 cmの長方形を呈する地床炉が検出された。床面は堅く良好であ

る。

7号住居跡（第9図）

調査区の中央で検出された。

プランは長軸7.3 m、短軸6.2 mの楕円形を呈する。さらに、壁面より60～90 cm内側に長軸5.2 m、短軸4.4 mの不整楕円形のプランが検出されている。確認面からの深さは24 cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは多数検出されており、主柱穴は深さ50 cm以上のものと考えられる。炉は中央やや南側に位置しており、石囲土器埋設炉である。埋設土器は炉の北側に2個検出された。床面は堅く良好である。



第8図　6号住居跡

出土遺物

土器（第56・70図）

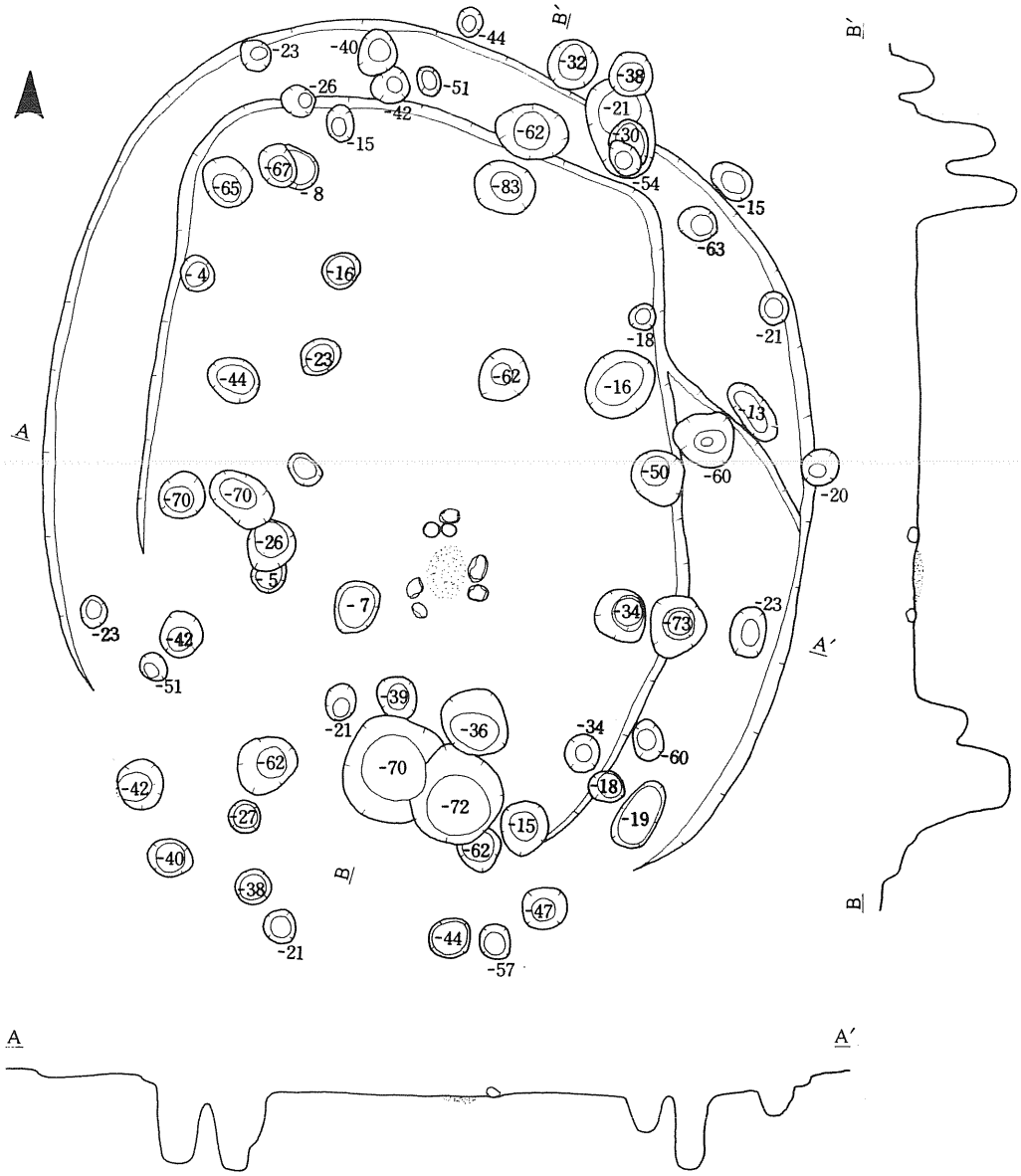
3は埋設土器、4は南側柱穴内覆土出土である。3は体部に沈線による剣先状渦巻文が施文されている。地文はLR（縦回転）単節斜縄文である。4は口縁部にヘラ状工具による浅い一条の沈線がめぐる。地文はLR（横回転）単節斜縄文である。92・93は粘土紐貼付けによる隆帯文を作り出し、縄文の圧痕文が施されるものもある。94は縦位、横位の細い沈線によって文様が展開する。

8号住居跡（第10図）

調査区の中央で検出された。

5号住居跡を切り、9号住居跡に切られている。

プランは長軸4.9 m、短軸4.4 mの隅丸方形を呈する。確認面からの深さは8 cmで、壁は斜めに立



第９図　７号住居跡

ち上がる。ピット、主柱穴は不明である。炉は南側に位置しており、土器埋設炉である。口縁部、底部を欠いた深鉢形土器を正立に据えている。炉の周辺は火熱を受け赤変している。

出土遺物

土器（第 56 図）

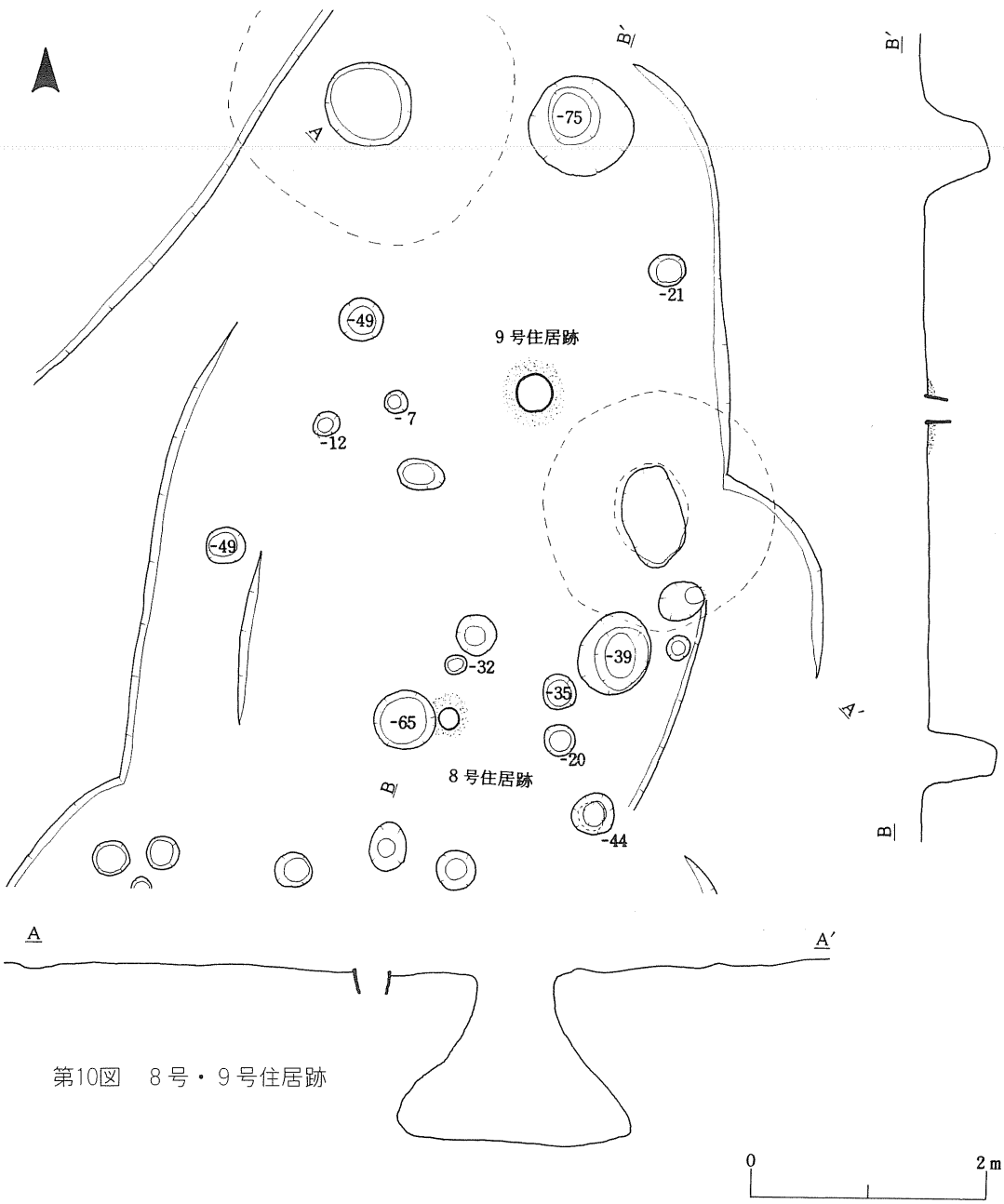
５は埋設土器、６は覆土からの出土である。頸部より下方に円形の突起を四ケ所配し、その突起を中心に突起間を連絡するように沈線文で文様を展開させている。地文は LR（縦回転）単節斜縄文

である。6はキャリパー形の深鉢形土器で、口唇部には粘土紐を貼付し、撚糸圧痕による刻目を施している。口唇部から下方にかけては二条ないし四条の撚糸圧痕と一条の隆帯によって文様を展開させている。地文は口縁部がRL（縦回転）単節斜縄文、胴部がLR（縦回転）単節斜縄文である。

9号住居跡（第10図）

調査区の中央で検出された。

プランは推定長軸7m以上、短軸4.7mの楕円形を呈する。確認面からの深さは10cmで壁は斜め



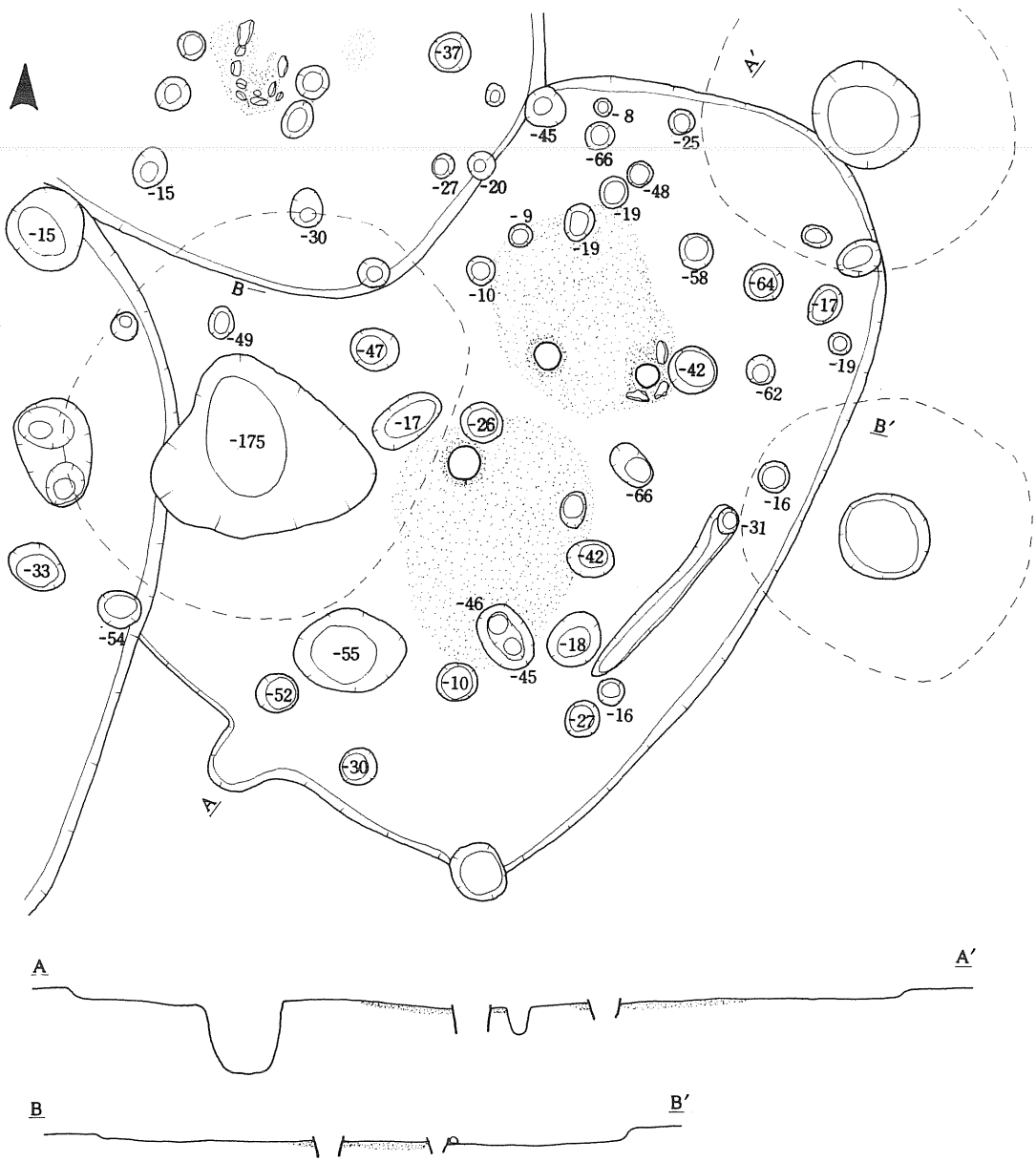
第10図　8号・9号住居跡

に立ち上がる。ピットは14個検出されており、主柱穴は深さ50㎝以上の5個と考えられる。炉は中央に位置しており、土器埋設炉である。炉の周辺は火熱を受けて赤変している。床面は堅く良好である。

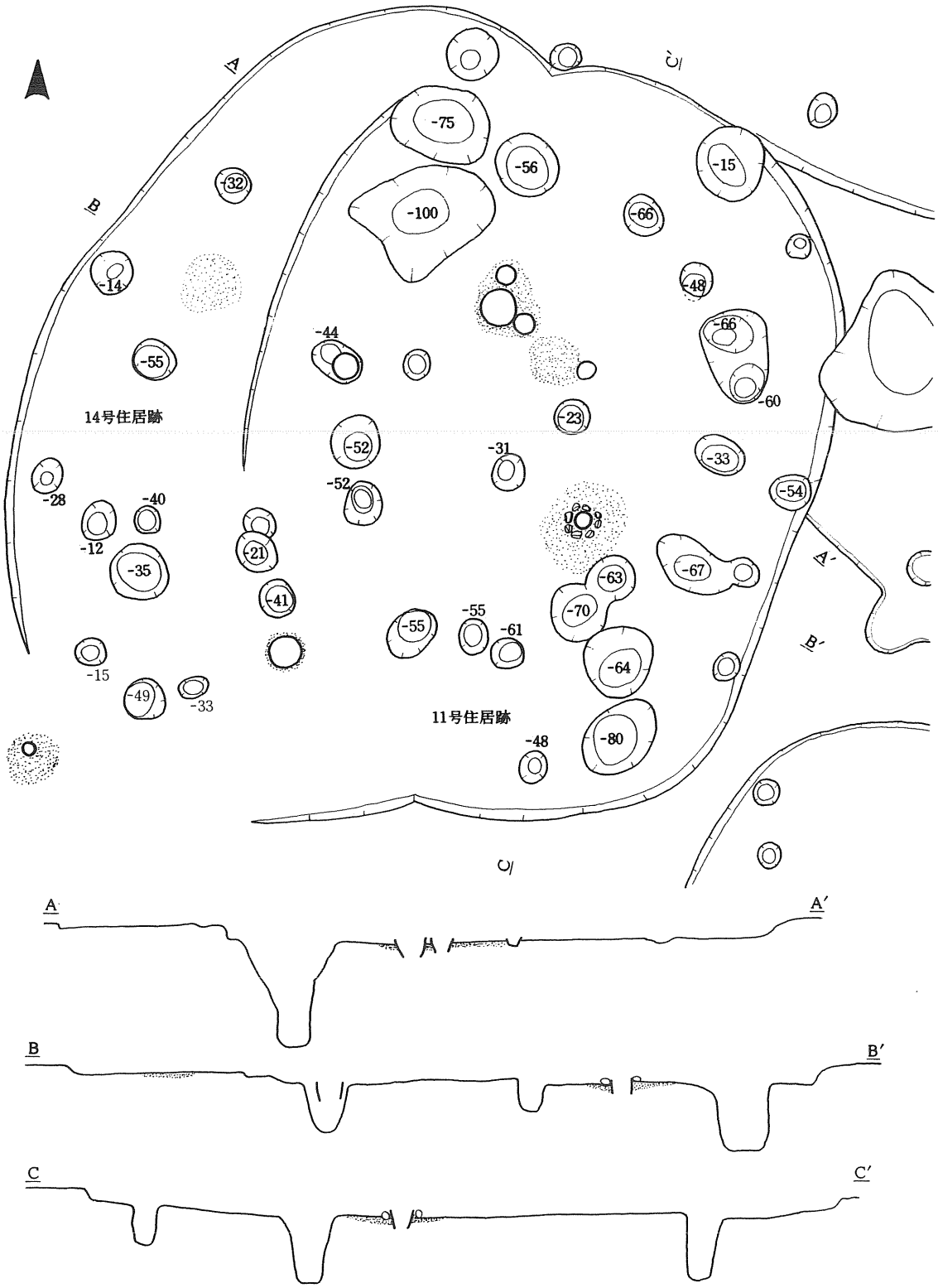
出土遺物

土器（第57図）

7は覆土からの出土である。浅鉢形土器で、口縁部は長楕円形の区画で撚糸圧痕を施文し、胴部



第11図　10号住居跡



第12図　11号・14号住居跡

0　2m

には垂下と横にひらく撚糸圧痕が交互に施文されている。

10 号住居跡（第 11 図）

調査区の中央で検出された。

11 号・13 号住居跡によって切られている。

プランは長軸 6.8 m、短軸 4.5 m の不整楕円形を呈する。確認面からの深さは 14 cmで、壁は斜めに立ち上がる。住居内東側に長さ 1.9 m、幅 20 cm、深さ 4 cmの浅い溝が検出された。ピットは多数検出されているが主柱穴は不明である。炉は中央部に三基、すなわち石囲土器埋設炉一基、土器埋設炉二基検出された。

出土遺物

石器（第 88 図）

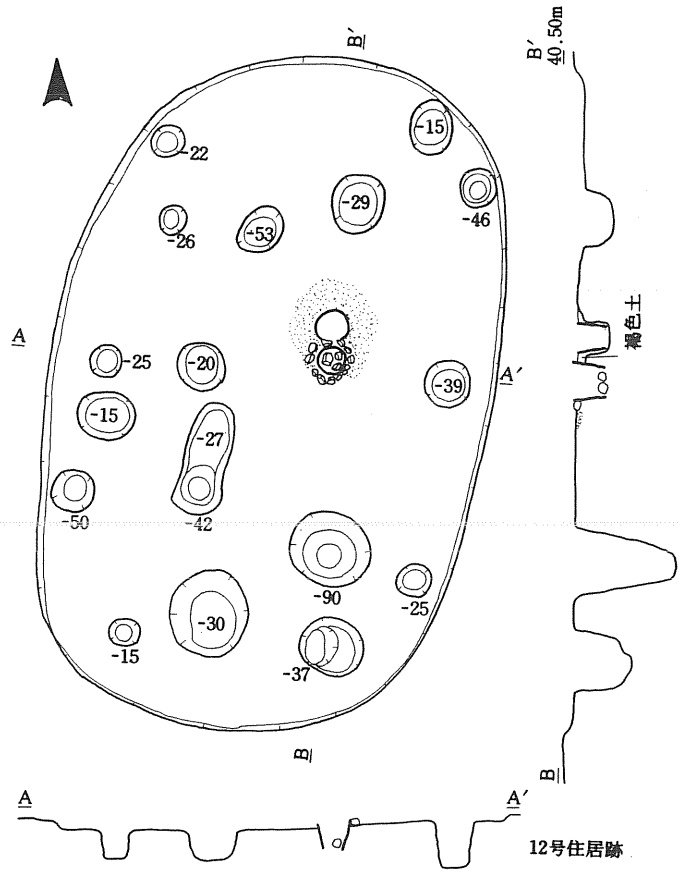
4 は無茎の石鏃で先端部が欠損している。

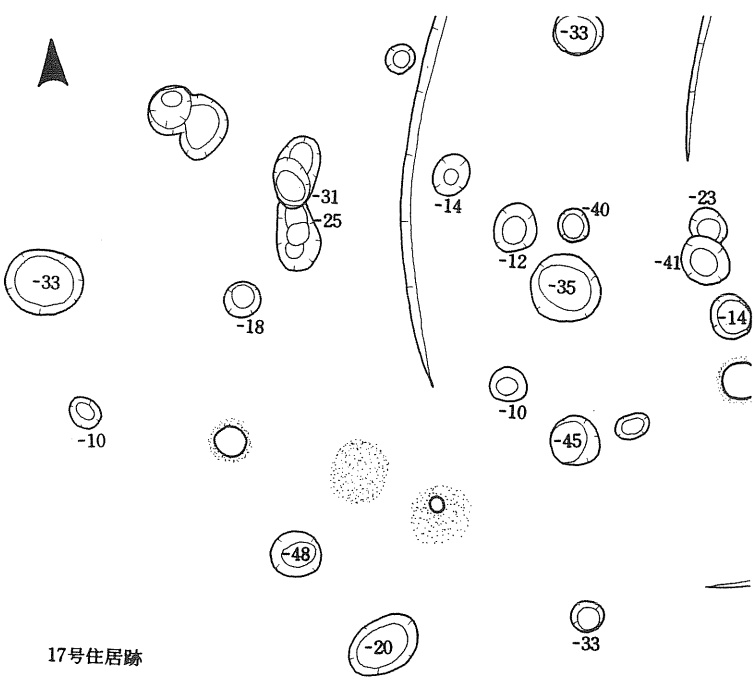
11 号住居跡（第 12 図）

調査区中央部で検出された。

14 号住居跡を切っている。

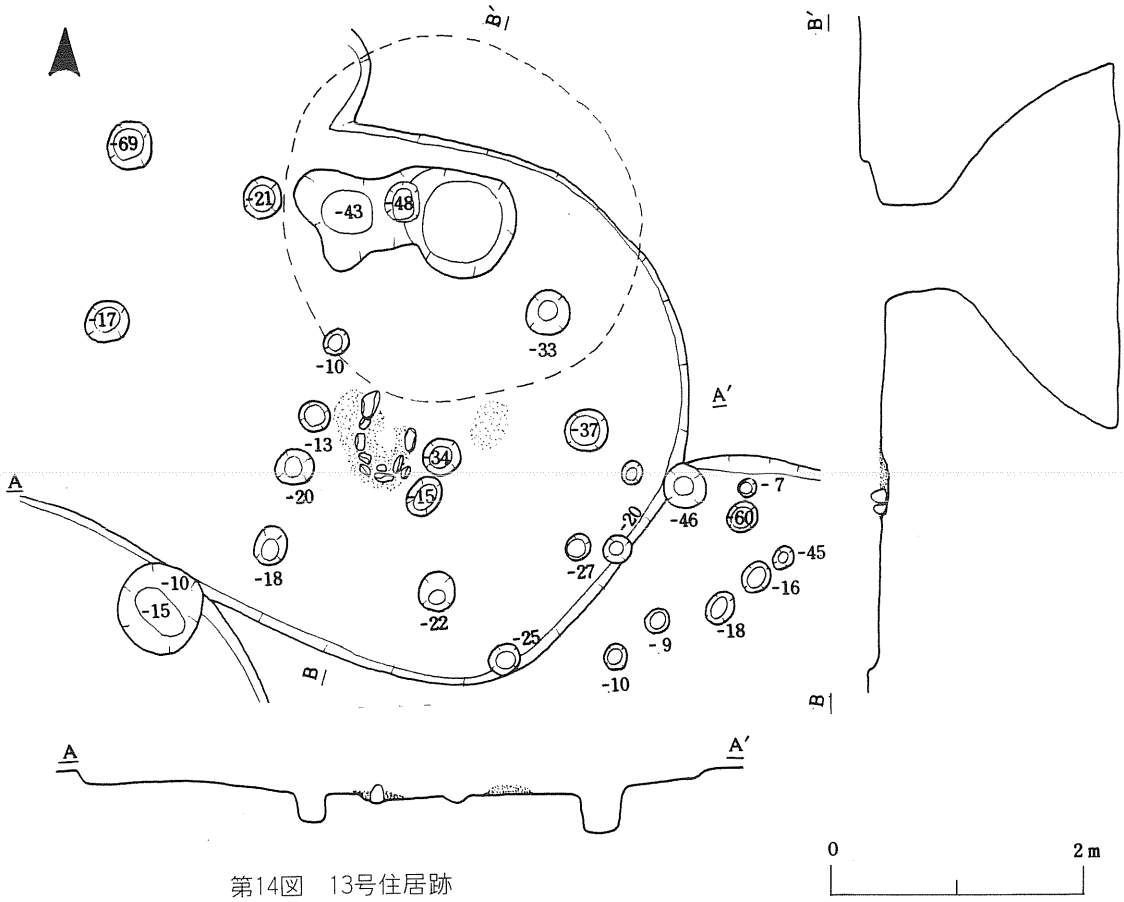
プランは長軸 7.3 m、短軸 5.5 m の楕円形を呈する。確認面からの深さは 18 cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは多数検出されているが主柱穴は不明である。炉は中央部に位置しており、石囲





第13図　12号・17号住居跡

0　2 m



第14図　13号住居跡

土器埋設炉である。炉の周辺は火熱を受け赤変している。

12 号住居跡（第 13 図）

調査区中央で検出された。

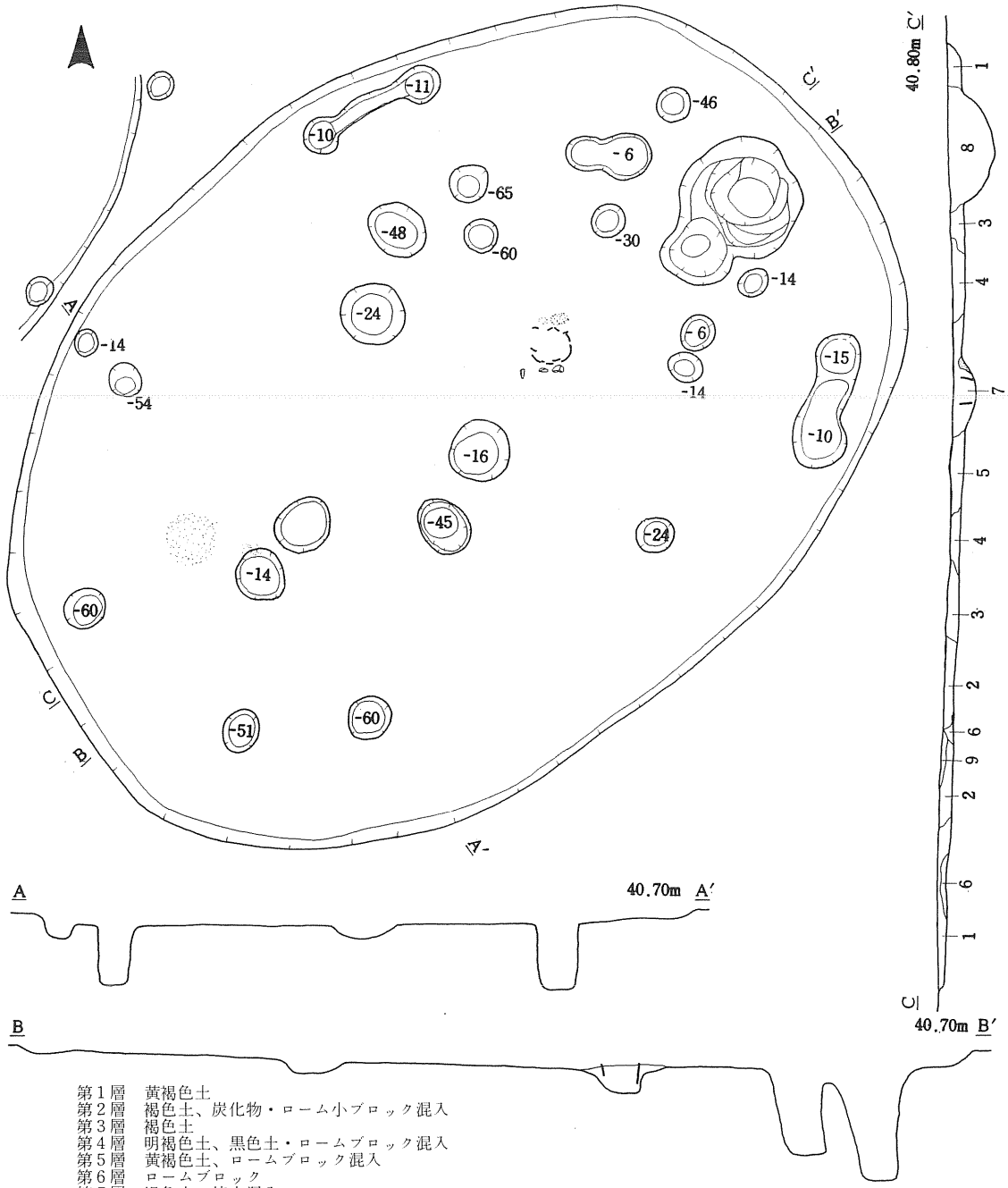
プランは長軸 5.5 m、短軸 3.5 m の楕円形を呈する。確認面からの深さは 10 cmで、壁は斜めに立ち上がる。ピットは 18 個検出され、主柱穴は深さ 25 cm以上の 6 個と考えられる。炉は中央部に位置し、新旧二時期のものが検出された。新炉は南側に位置し、小礫を円状に配した石囲土器埋設炉である。埋設土器内には小礫が込められていた。旧炉は新炉北側に堆積した焼土下より検出され、口縁部および底部を欠いた深鉢形土器が正立に据えられている。住居の拡張、縮少はみられないことから、同住居内で炉を移し替えたものと考えられる。いずれの炉の周辺も火熱を受け赤変している。床面は堅く良好である。

出土遺物

土器（第 57 図）

8 は旧炉埋設土器である。口縁部に粘土紐貼付による直線および波状の隆帯が施され、部分的に刺突も施される。地文は LR（縦回転）単節斜縄文である。

第15図　15号・16号住居跡



第１層　黄褐色土
第２層　褐色土、炭化物・ローム小ブロック混入
第３層　褐色土
第４層　明褐色土、黒色土・ロームブロック混入
第５層　黄褐色土、ロームブロック混入
第６層　ロームブロック
第７層　褐色土、焼土混入
第８層　褐色土、炭化物・明褐色土ブロック混入
第９層　黒色土

第16図　18号住居跡

0　2m

13 号住居跡（第 14 図）

調査区中央で検出された。

10 号住居跡、62 号住居跡を切っている。

プランは、長軸 4.9 m、短軸 4.3 mの楕円形を呈する。確認面からの深さは 23 cmで、壁は斜めに立ち上がる。ピットは 17 個検出されており、主柱穴は深さ 20 cm以上のものと考えられる。炉は中央部に位置しており、70 cm× 50 cmの大きさを計るコの字型石囲炉である。炉内から埋設土器を抜き取った痕跡とみられる落ち込みが検出された。

14 号住居跡（第 12 図）

調査区西側中央で検出された。

11 号住居跡に切られ、17 号住居跡を切っている。

プランは長軸 7.5 m、短軸 6.0 mの楕円形を呈する。確認面からの深さは 6 cmで、壁は斜めに立ち上がる。ピットは多数検出されたが主柱穴は不明である。炉は南側及び 11 号住居跡内の北側に位置しており、いずれも土器埋設炉である。

15 号住居跡（第 15 図）

調査区西側中央部で検出された。

16 号住居跡によって切られている。

プランは長軸 8.5 m、短軸 5.7 mの楕円形を呈する。確認面からの深さは 12 cmで、壁は斜めに立ち上がる。ピットは多数検出されているが、深さ 40 cm以上のものが考えられる。炉は 16 号住居跡内南東部の土器埋設炉が考えられる。床面は全般的に軟弱である。

出土遺物

土器（第 57 ・ 70 図）

58 はピット内覆土、95 ～ 102 は覆土からの出土である。58 はキャリパー形の深鉢形土器である。地文は RL（縦回転）単節斜縄文である。95 ・ 97 ～ 101 は粘土紐貼付による隆帯と撚糸圧痕で施文されている。96 ・ 102 は竹管状工具による沈線が施文されている。

石器（第 88 図）

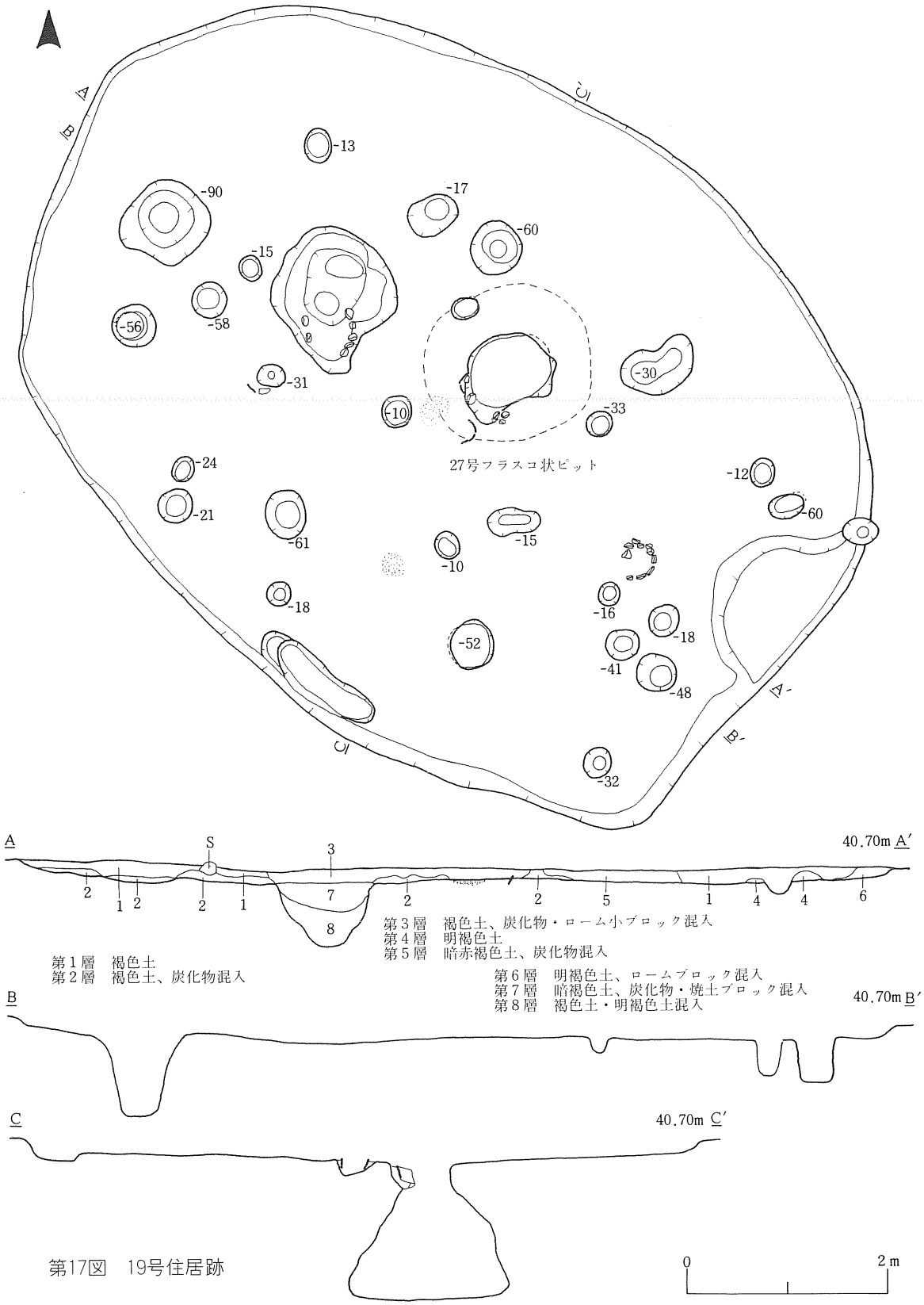
5 は無茎の石鏃である。

16 号住居跡（第 15 図）

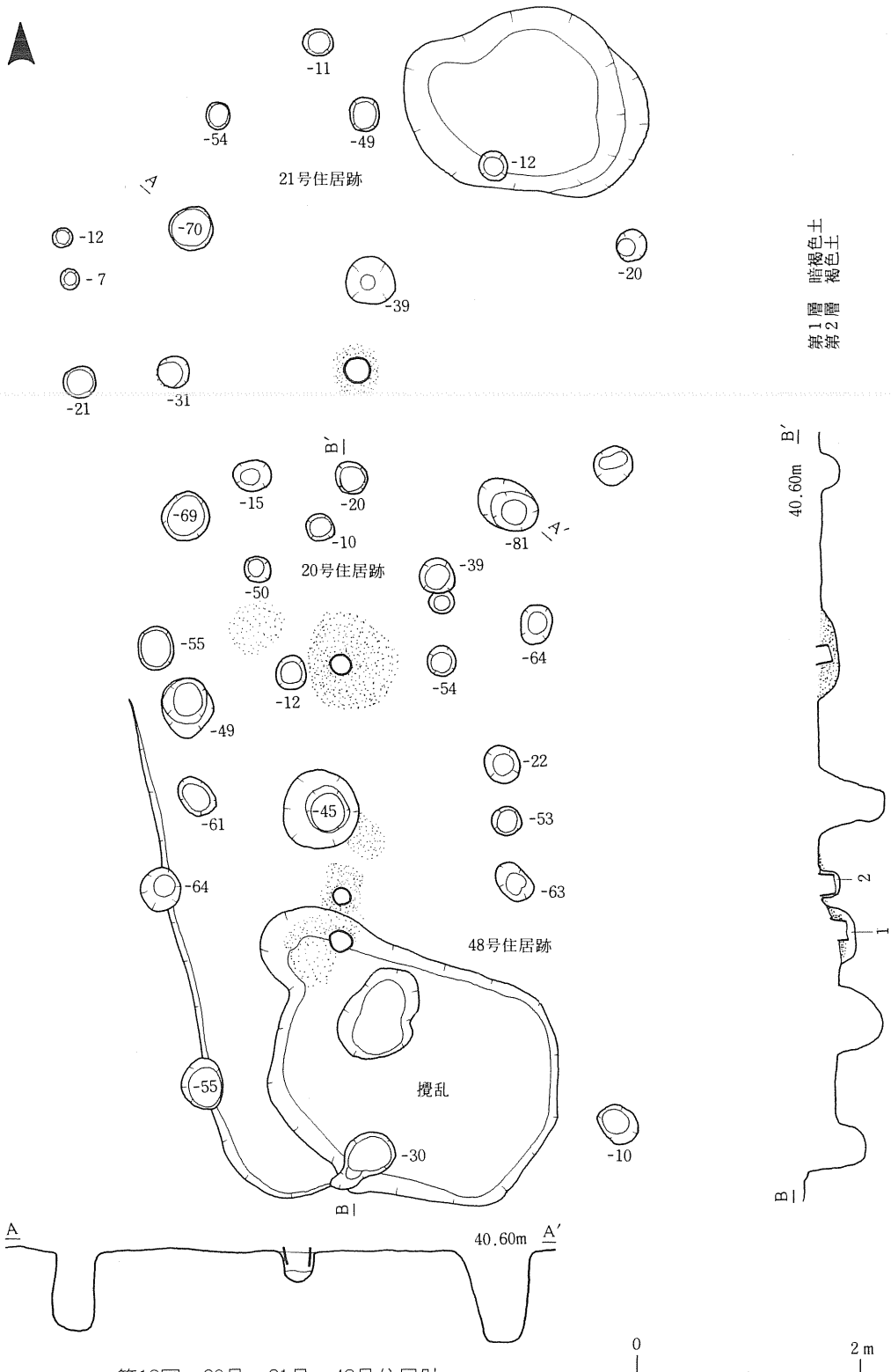
調査区西側中央部で検出された。

プランは長軸 7.4 m、短軸 4.9 mの楕円形を呈する。確認面からの深さは 20 cmで、壁は斜めに立ち上がる。ピットは多数検出されており、主柱穴は深さ 50 cm以上の 5 個と考えられる。炉は中央および北側に三基検出され、いずれも土器埋設炉である。炉周辺は火熱を受け赤変している。床面は堅く良好である。

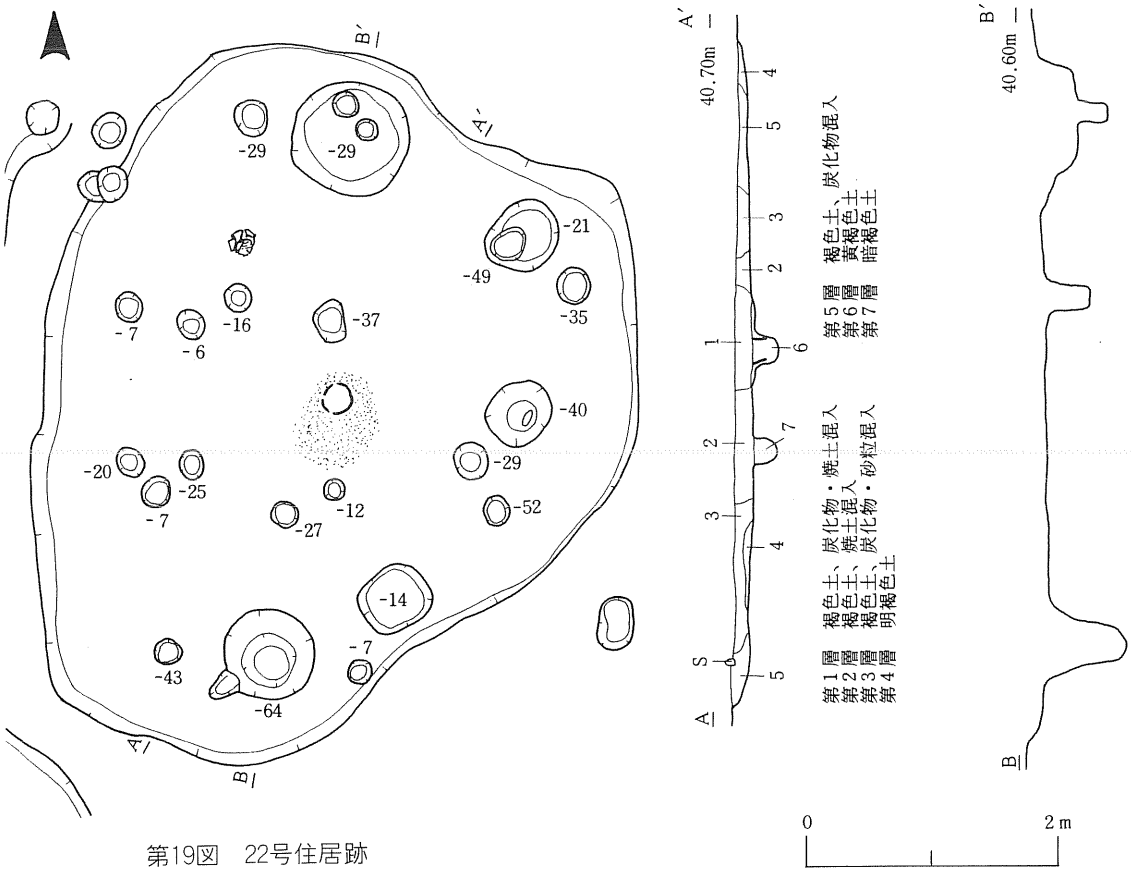
出土遺物


A
B
C
-13
-90
-17
-60
-15
-58
-56
-31
-30
-10
-33
27号フラスコ状ピット
-24
-12
-21
-61
-60
-15
-10
-18
-16
-18
-52
-41
-48
A'
B'
C'
-32
A
S
40.70m A'
3
2
1
2
2
1
7
8
2
2
5
1
4
4
6
第3層　褐色土、炭化物・ローム小ブロック混入
第4層　明褐色土
第5層　暗赤褐色土、炭化物混入
第1層　褐色土
第2層　褐色土、炭化物混入
第6層　明褐色土、ロームブロック混入
第7層　暗褐色土、炭化物・焼土ブロック混入
第8層　褐色土・明褐色土混入
B
40.70m B'
C
40.70m C'
0
2m

第17図　19号住居跡



第18図　20号・21号・48号住居跡



第19図　22号住居跡

土器（第 57 図）

11 は北側炉の埋設土器、10 は覆土からの出土である。11 は頸部が外反する深鉢形土器である。頸部には平行な二条の粘土紐貼付による隆帯、その間には波状の隆帯によって文様を構成している。地文は RL（縦回転）単節斜縄文である。10 は深鉢形土器で、体部地文が LR（横回転）単節斜縄文である。

17 号住居跡（第 13 図）

調査区の西側中央部で検出された。

長期間における客土作業と北西方向に走る農道により全体のプランは不明である。炉は北西部と南東部に位置し、いずれも土器埋設炉である。いずれも炉周辺は火熱を受け赤変している。

出土遺物

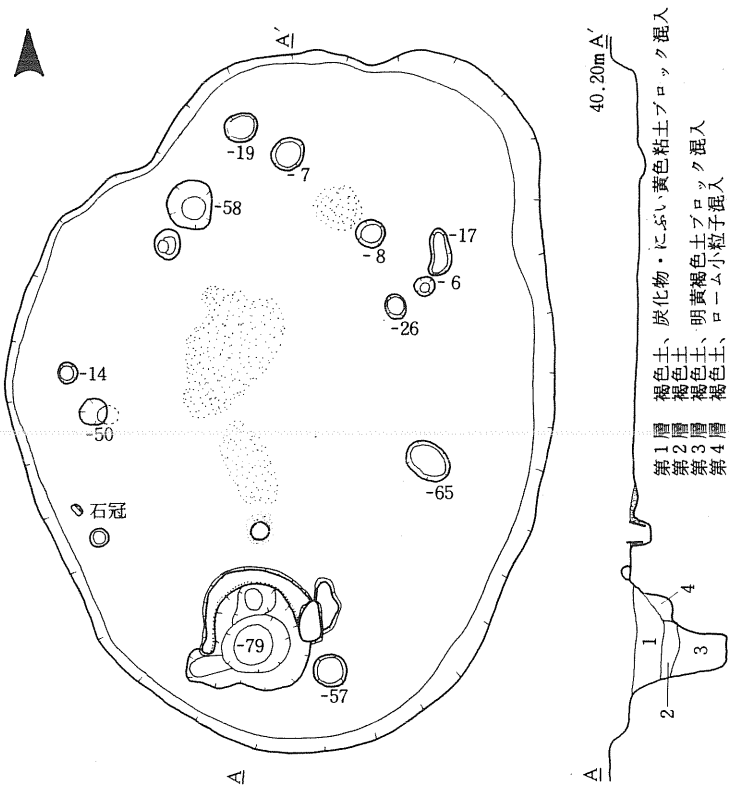
土器（第 57 図）

12 は南西部炉埋設土器である。頸部が外反する深鉢形土器である。粘土紐隆帯を横位または縦位に施し、隆帯上に撚糸圧痕が施される。また隆帯間には撚糸圧痕および紐の末端による圧痕（擬似爪形文）が施される。

18 号住居跡（第 16 図）

調査区の中央で検出された。

プランは長軸 8.5 m、短軸 6.1 m の楕円形を呈する。確認面からの深さは 12 cmで、壁は斜めに立ち上がる。ピットは 26 個検出され、主柱穴は深さ 40 cm以上の 7 ～ 8 個と考えられる。炉は北東側に位置しており、土器埋設炉である。炉の周辺は火熱を受け赤変している。埋設炉には深鉢形土器が正立に据えられている。床面はやや軟弱である。北東側に壙口部の大きさ 1.1 m、深さ 1.0 m の特異なピットが検出された。



第20図　23号住居跡

0　2 m

出土遺物

土器（第 57 ・ 70 図）

13 は埋設土器、103 ～ 114 は覆土からの出土である。13 は地文が RL（縦回転）単節斜縄文の深鉢形土器である。部分的に S 字状の縄文の圧痕文がみられる。103 ～ 104 は竹管状工具による沈線が施文される。105、106 ～ 113 は縄文（単節）による圧痕文が施文される。114 は粘土紐隆帯上に刻目が施文されている。

石器（第 88 図）

6 は石錐で、先端部がわずかながら欠損している。7 ・ 8 は縦型石匙である。9 は槍先状石器である。

土製品

土偶（第 162 図）

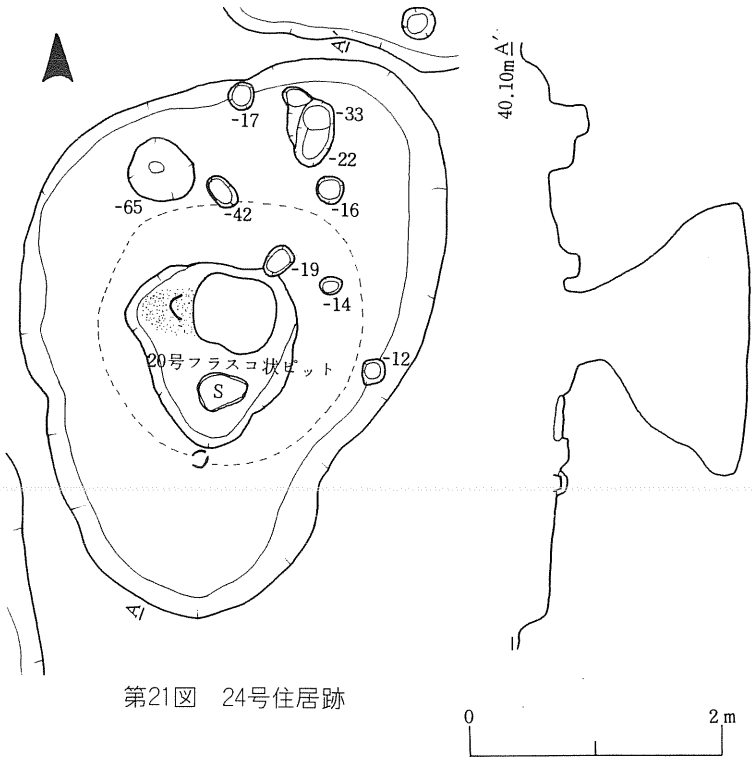
24 は土偶の頭部である。上部に刻みがあり、目、口が表されている。

第 19 号住居跡（第 17 図）

調査区の中央部で検出された。

プランは長軸 9.0 m、短軸 6.6 m の楕円形を呈する。確認面からの深さは 12 cmで、壁は斜めに立

ち上がる。ピットは25個検出され、主柱穴は深さ30㎝以上の8個と考えられる。炉は北西部と南西部に石囲炉、また中央部に2基の土器埋設炉が検出されたが、北側の炉は27号フラスコ状ピットにより北半分が壊されている。いずれも深鉢形土器を正立に据えており、周辺は火熱を受けて赤変している。床面はやや軟弱である。



第21図　24号住居跡

出土遺物

土器（第57・58・71図）

14・15は炉埋設土器、115～126は覆土からの出土である。14は深鉢形土器で、粘土紐貼付と沈線によって文様を展開する。平行する隆線間には弧状の隆線、沈線を配している。地文は単節の圧痕文が施される。15は深鉢形土器の頸部から胴部にかけての破片である。粘土紐貼付の隆線と半截竹管状工具による沈線の組み合わせで文様を施している。115・116・150・121・123～125は粘土紐貼付による隆帯および隆線や半截竹管状工具による沈線で文様を展開している。117・118は単節縄文の圧痕文によって文様が展開される。126は単節縄文の圧痕文や爪形文を施し文様を展開させている。

石器（第88図）

10は縦型石匙である。11は木葉形を呈する石槍である。12はヘラ状石器である。13は側面を利用した削器である。

20号住居跡（第18図）

昭和48年度に調査されている住居跡である。（N 23 E 1住居跡）

調査区の中央部で検出された。

全体のプランは不明であるが、径4m以上の円形もしくは楕円形を呈するものと考えられる。主柱穴は炉を中心として円形もしくは楕円状に周る深さ40㎝以上のものと考えられる。炉は土器埋設炉で、周辺は火熱を受け赤変している。床面は堅く良好である。

出土遺物

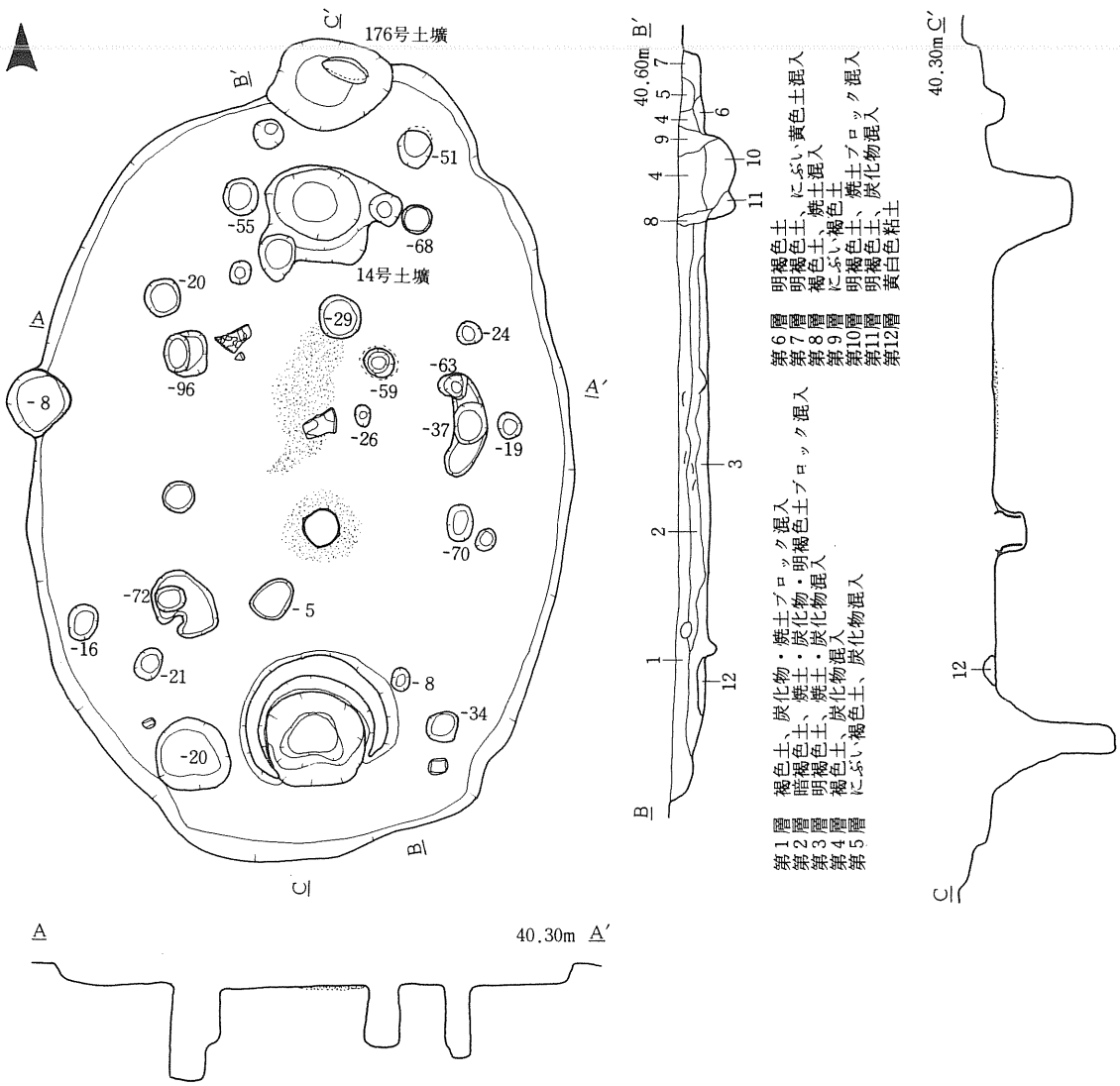
土器（第58図）

16 は炉埋設土器である。粘土紐貼付による隆帯上に撚糸圧痕文を施し、隆帯間には「C」字状に撚糸圧痕文を施文している。地文は結束のある横位の羽状縄文である。

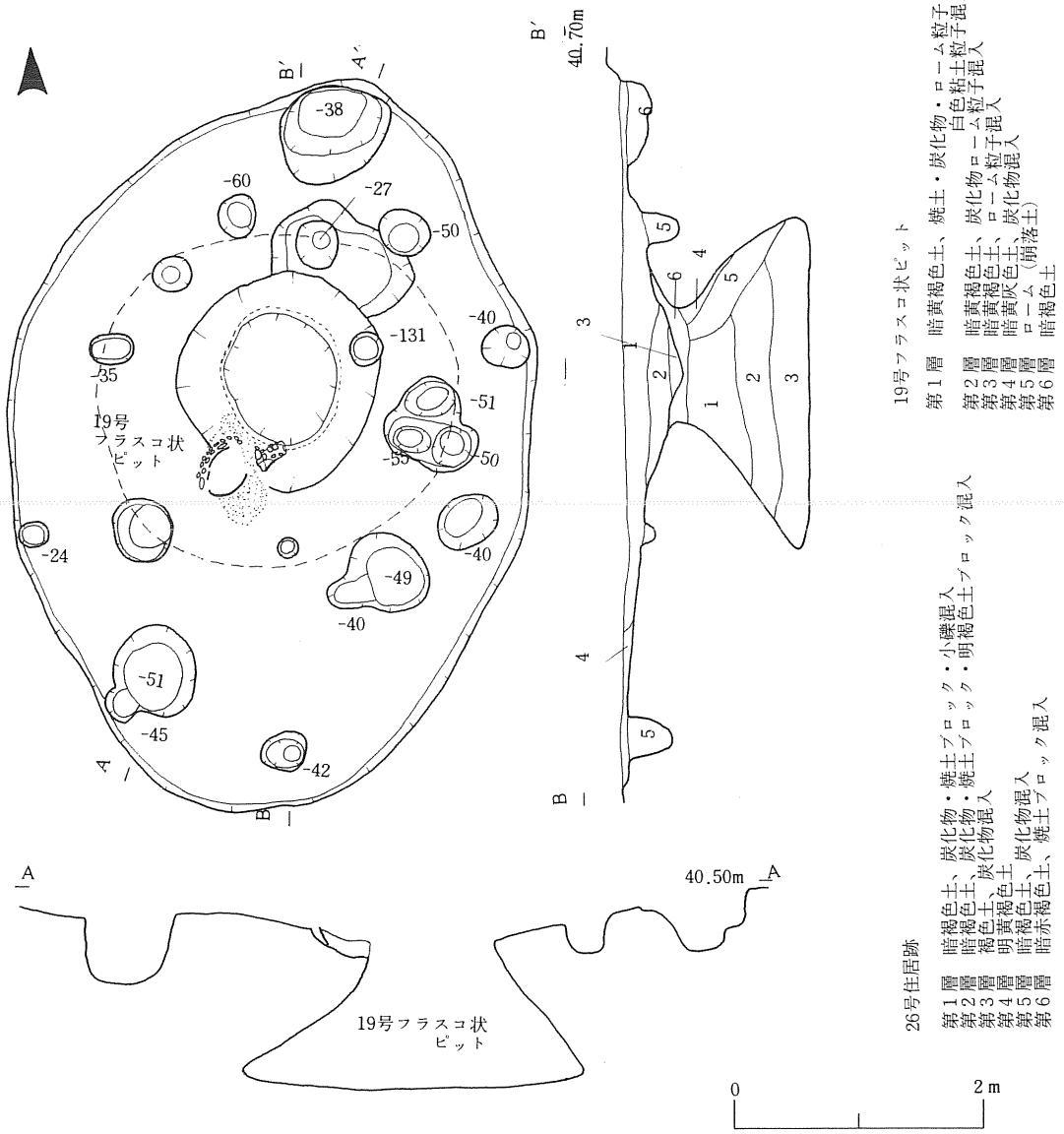
21 号住居跡（第 18 図）

20 号住居跡の北側で検出された。

全体のプランは不明であるが、径 4.3 m 以上の円形もしくは楕円形を呈するものと考えられる。主柱穴は炉を中心として円形もしくは楕円形状に周る深さ 20 ㎝以上のものと考えられる。炉は土器埋設炉で、周辺は火熱を受け赤変している。埋設炉には深鉢形土器を正立に据えている。床面は堅く良好である。



第22図　25号住居跡



第23号　26号住居跡

出土遺物

土器（第 58 図）

17 は炉埋設土器である。口縁部が外反する深鉢形土器で、頸部に段がつく。口縁部に波状の粘土紐貼付による隆線が垂下する。地文は LR（横回転）単節斜縄文で、縦方向に綾繰文が施文されている。

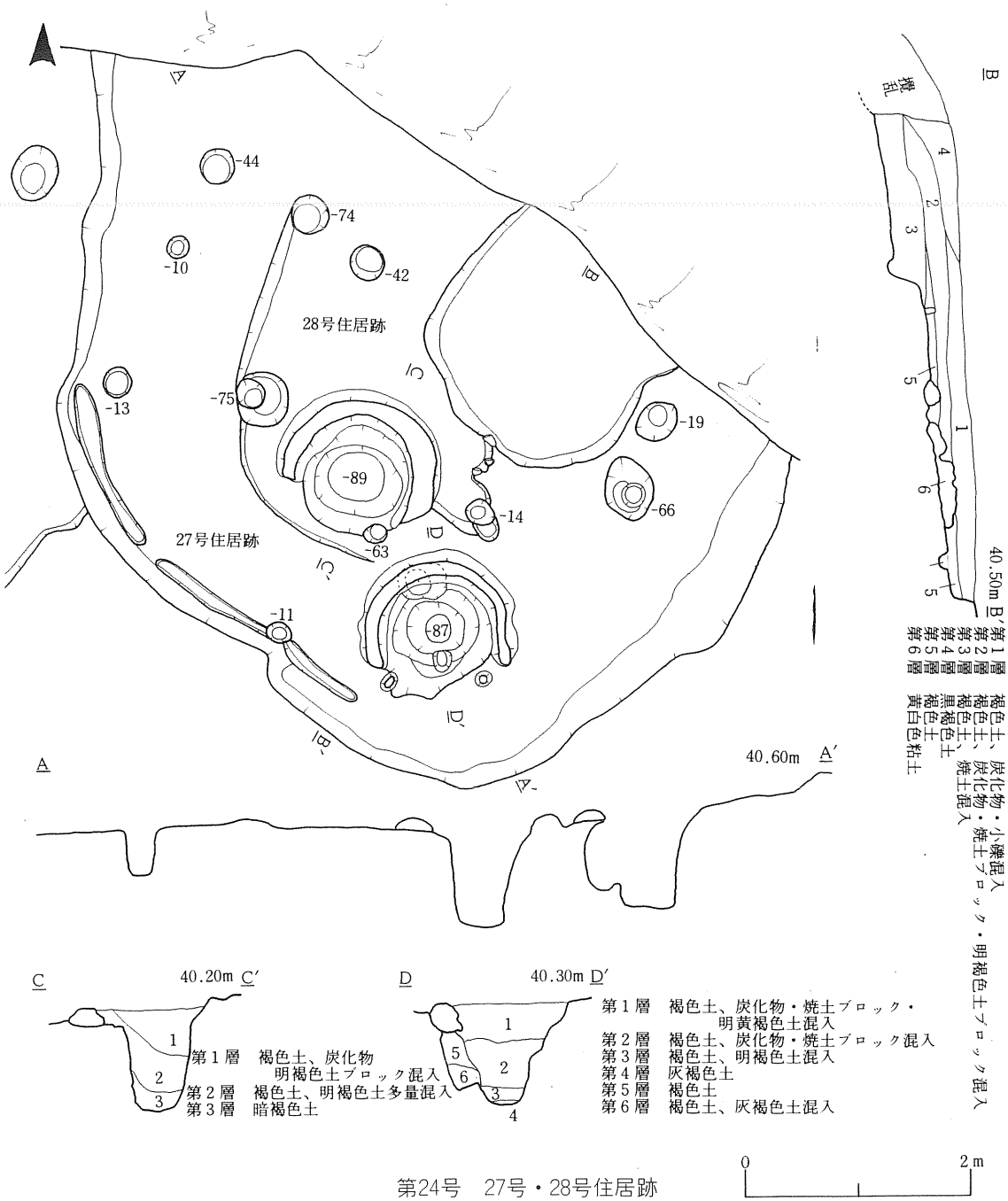
石器（第 88 図）

14 は槍先状石である。

22 号住居跡（第 19 図）

調査区の中央部で検出された。

プランは長軸 5.7 m、短軸 4.8 m の不整楕円形を呈する。確認面からの深さは 14 cmで、壁は斜めに立ち上がる。ピットは 21 個検出され、主柱穴は深さ 35 cm以上のものと考えられる。炉は中央部に位置しており、土器埋設炉である。炉の周辺は火熱を受け赤変している。埋設炉には深鉢形土器が正立に据えられている。床面は堅く良好である。南側に壙口部の大きさが 70 cm、深さ 64 cmの特異なピットが検出された。

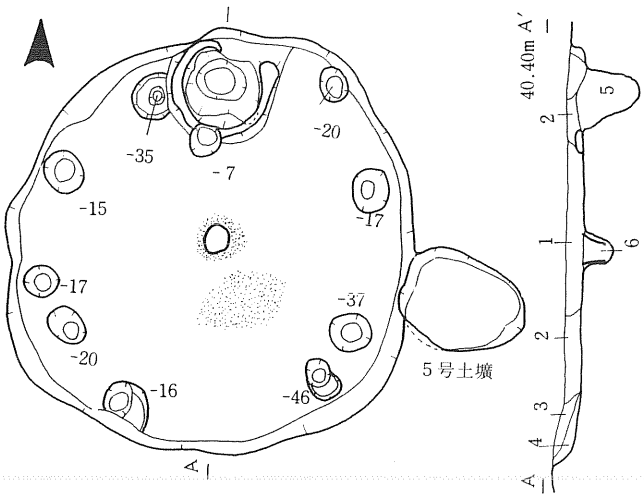


第24号　27号・28号住居跡

出土遺物

土器（第 58 ・ 71 ・ 72 図）

18 は炉埋設土器である。口縁部がキャリパー状を呈する深鉢形土器で、口縁部には半截竹管状工具により凸部を作り出し文様を展開させている。頸部にはボタン状の突起を付けている。地文は口縁部～頸部まではLR（横回転）単節斜縄文で、胴部がLR（縦回転）単節斜縄文である。127 は竹管状工具による沈線で三角形の文様を作り、その間に同工具による刺突文が施文されている。128 ～ 133 は粘土紐貼付による隆線や沈線による文様の展開がみられる。134 ・ 135 は細い粘土紐貼付によって二本の平行な隆線を作り出し、その間には鋸歯状の隆線を施す。さらに隆線によって作り出された文様帯の両端やその近辺には沈線による文様が展開する。137 ・ 138 は口唇部に波状の粘土紐貼付による隆帯を施しその上に刻目を施すものもある。



第 1 層　褐色土、炭化物・明褐色土ブロック混入
第 2 層　褐色土、炭化物混入
第 3 層　褐色土
第 4 層　褐色土、炭化物・暗褐色土混入
第 5 層　暗黄褐色土
第 6 層　暗褐色土、炭化物混入

0　2 m

第25号　29号住居跡

石器（第 88 ・ 97 図）

15 ～ 17 は無茎の石鏃である。18 は先端が細く鋭利な石鏃、19 は縦型の石匙である。20 はヘラ状石器である。21 は磨製石斧である。183 は石錘、184 は磨石である。扁平な礫を使用している。

23 号住居跡（第 20 図）

調査区の西側北西寄りで検出された。

プランは長軸 5.6 m、短軸 4.4 m の楕円形を呈する。確認面からの深さは 20 ㎝で、壁は斜めに立ち上がる。ピットは 14 個検出され、主柱穴は深さ 50 ㎝以上のもの 5 個と考えられる。炉は南側に位置しており、土器埋設炉である。また中央部に三ケ所焼土が検出された。炉の周辺は火熱を受けて赤変している。深鉢形土器を正立に据えている。床面はやや軟弱である。

住居内南側に 88 ㎝× 66 ㎝、深さ 79 ㎝の楕円形を呈するピットの上縁を厚さ 6 ～ 8 ㎝の黄白色粘土で馬蹄形状に縁取りした施設を検出した。

出土遺物

土器（第 58 ・ 72 図）

19 は炉埋設土器である。沈線による渦巻状の文様と、垂下する文様を展開させている。地文はRL（縦回転）単節斜縄文である。139 ～ 145 は粘土紐貼付による隆線や半截竹管状工具による沈線

等による文様が展開される。147・148は口唇部に縦位の刻目が施文される。149は渦巻文により肥厚な口唇部をなしている。

石器（第88・89・168図）

22～24は無茎の石鏃である。26は石錐で先端部が欠損している。27は石槍である。28はヘラ状石器である。31は石棒状の石器で、きれいに面取りされている。

土製品（第161・163図）

20は土偶の体部である。裏面には背骨を表現する一条の沈線が施されている。

石製品（第163図）

34は石冠である。断面が楔形をなし、底部は平坦で長方形を呈する。沈刻線によって文様が施されている。側面から底面にかけて孔が穿たれている。

24号住居跡（第21図）

調査区の西側北寄りで検出された。

プランは長軸4.6 m、短軸3.3 mの楕円形を呈する。確認面からの深さは28 cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは10個検出されているが、主柱穴は不明である。炉は中央部で検出されたが、20号フラスコ状ピットに東側部分が切られている。炉は土器埋設炉で、深鉢形土器を正立に据えている。炉の周辺は火熱を受け赤変している。床面は堅く良好である。

出土遺物

土器（第58・72・73図）

20は炉埋設土器である。頸部がやや外反する器形で、粘土紐貼付による平行な二条の隆線等による文様展開がみられる。地文はLR（縦回転）単節斜縄文である。150～160・162は粘土紐貼付けによる隆線や半截竹管状工具による沈線、単節縄文による圧痕文などで文様が展開される。161・163・164は渦巻文等で肥厚な口唇部をなしている。

石器（第89・97図）

29はヘラ状石器である。30は掻器である。186は扁平な礫を利用した石錘である。

土製品（第160図）

10は装飾品と考えられる。面取りを行い上下に刻線を施している。

25号住居跡（第22図）

調査区の西側北寄りで検出された。

プランは長軸6.5 m、短軸4.3 mの楕円形を呈する。確認面からの深さは25 cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは24個検出されているが、深さ34 cm以上のもの7～8個が主柱穴と考えられる。炉は中央部に位置しており、土器埋設炉である。深鉢形土器を正立に据えている。炉の周辺は火熱を受けて赤変している。床面は堅く良好である。

住居内南側に94 cm×90 cm、深さ1.0 mの円形を呈するピットの上縁を幅20～32 cm、厚さ10 cm

の黄白色粘土で馬蹄形状に縁取りした施設を検出した。

出土遺物

土器（第 58 ・ 59 ・ 73 ・ 74 図）

21 は炉埋設土器である。口縁部から頸部にかけて粘土紐貼付による隆線とそれに沿う沈線によって大きな波状文や渦巻を施文しており、波状文の頂点には小さなコブ状の突起が付く。頸部の隆線とは「H」状の隆線が連絡している。胴部には沈線によって渦巻文、また隆線による垂下する小さな波状の文様が施されて下部の文様帯と連絡している。地文は頸部より上方が RL（縦回転）単節斜縄文、頸部より下方が LR（縦回転）単節斜縄文である。21 は口縁部が波状口縁（4 波）をなし、頂部に刻目を施している。頂部と頂部の中間には小さな突起が作り出されている。頂部と中間部突起は細い粘土紐を波状に貼付けて文様を構成している。地文は LR（縦回転）単節斜縄文である。23 は四つの山状突起を有する深鉢形土器で、突起間には波状に粘土紐貼付による隆線が施される。胴部にも同じ手法により直線的あるいは曲線的な文様が施される。地文は Rℓ（縦回転）無節斜縄文である。167 ～ 175 は単節縄文による圧痕文で文様を構成している。177 ～ 182 は粘土紐貼付による隆帯や半截竹管状工具による沈線で文様が展開される。

石器（第 89 ・ 90 ・ 97 図）

31 ～ 38 は無茎の石鏃、39 ・ 40 は有茎の石鏃である。アスファルトの付着しているものがある。41 ・ 42 は石錐である。43 ・ 44 は縦型石匙である。45 ～ 47 は撥状石器、48 はヘラ状石器である。49 ～ 51 は磨製石斧である。187 は石錘である。

土製品（第 160 図）

8 は円筒状の土製品で、装飾品と考えられる。

26 号住居跡（第 23 図）

調査区の西側北寄りで検出された。

プランは長軸 6.0 m、短軸 4.3 m の楕円形を呈する。確認面からの深さは最深部で 50 cmで、壁はゆるやかに立ち上がる。ピットは 16 個検出され、深さ 35 cm以上の 6 ～ 7 個が主柱穴と考えられる。炉は中央部に位置しており、石囲土器埋設炉である。浅鉢形土器の破片を正立に据えている。炉の周辺は火熱を受けて赤変している。床面は住居内中央部が窪んでおり、この部分に貼床が施されていた。これを除去したところ 19 号フラスコ状ピットが検出された。

出土遺物

土器（第 59 ・ 74 図）

24 は炉埋設土器である。頸部に太い粘土紐貼付による隆帯、また口縁部にも同様の粘土紐貼付による渦巻文が施される。地文は口縁部のみで、LR（縦回転）単節斜縄文である。186 ～ 194 ・ 196 ・ 197 は粘土紐貼付による隆線や半截竹管状工具による沈線等によって文様が展開される。195 は粘土紐貼付により、隆帯上や隆帯に沿う形で単節縄文の圧痕文が施される。

石器（第 90 ・ 97 図）

52 ・ 53 は無茎の石鏃、54 は磨製石斧である。188 は石棒である。189 はくぼみ石、190 は石皿である。

土製品（第 160 図）

4 は中央に穿孔が施されている鼓状の土製品である。 耳飾りと考えられる。 26 は三角形土製品で、各角から底辺にむかって刺突文が施されている。

石製品（第 162 図）

29 は硬玉製大珠である。孔は上部に偏在し一方向穿孔によって貫通している。30 は二方向穿孔の施されたものである。32 は扁平なハート形を呈し、上部の両側に穿孔が施されている。表裏面には擦痕が多数みられる。いずれも装飾品としての用途が考えられる。

27 号住居跡（第 24 図）

調査区の北側で検出された。住居の北側は沢が入り込み傾斜地となっており不明である。

プランは長軸 4.8 m 以上、短軸 7.0 m の楕円形を呈するものと考えられる。確認面からの深さは 33 ㎝で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは 11 個検出されているが、深さ 40 ㎝以上のものが主柱穴と考えられる。炉は検出されなかった。床面は堅く良好である。

住居内南側に 106 ㎝× 96 ㎝、深さ 87 ㎝の円形を呈するピットの上縁を幅 20 ～ 30 ㎝、厚さ 20 ～ 26 ㎝の黄白色粘土で馬蹄形状に縁取りした施設を検出した。一方この施設の北西側にも黄白色粘土を使用した同様の施設が残っており、精査したところ床面下に住居跡がさらに一軒残存しているところが判明した。28 号住居跡である。貼床は施されていない。

出土遺物

土器（第 75 図）

203 ～ 216 は覆土からの出土である。 粘土紐貼付による隆帯やこれに沿う沈線または単節縄文による圧痕文などで文様が展開する。

石器（第 90 図）

64 は縦型の石匙である。

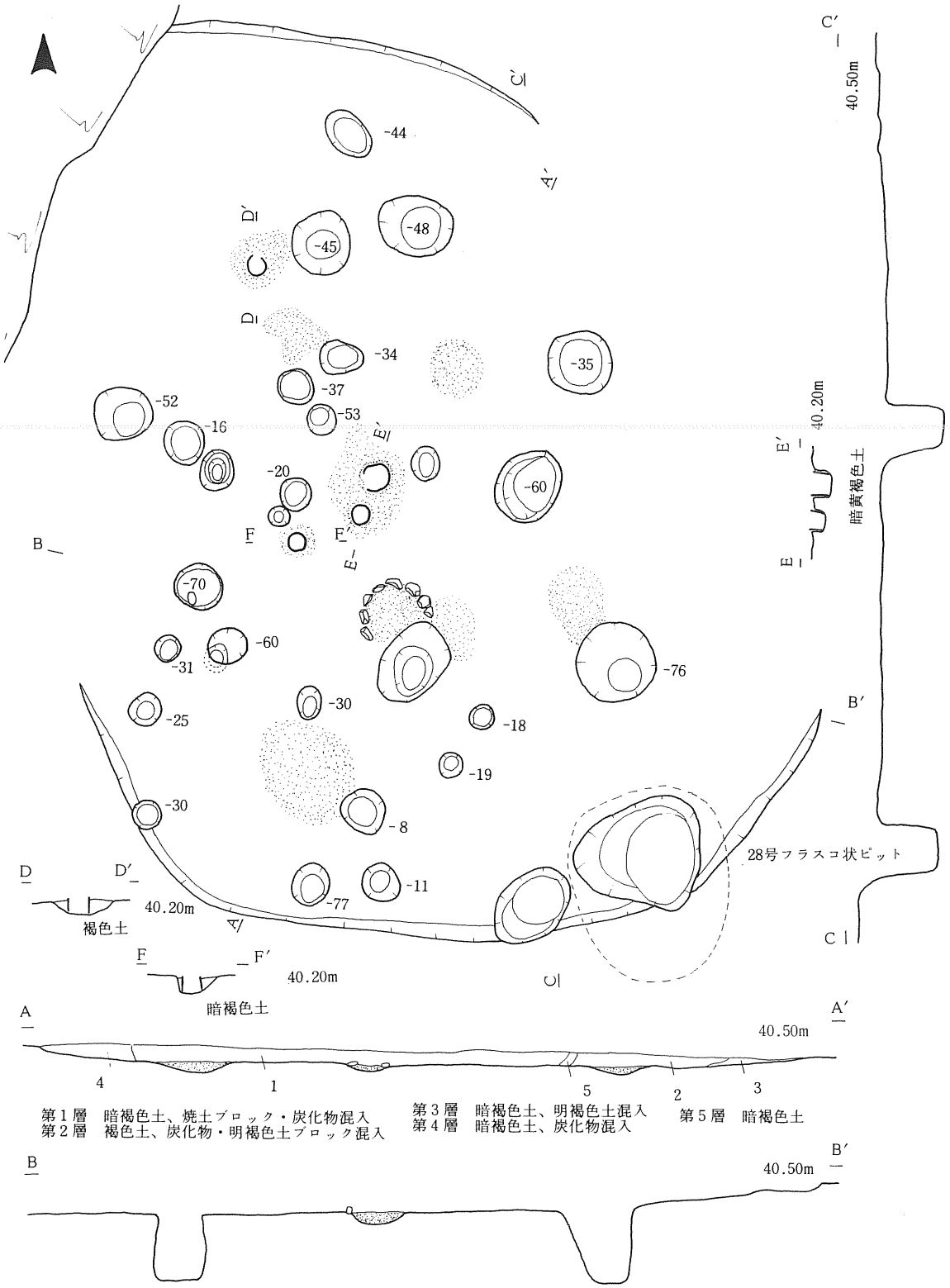
28 号住居跡（第 24 図）

調査区の北側で検出された。

全体のプランは不明であるが、楕円形を呈するものと考えられる。

炉は検出されなかった。床面は堅く良好である。

住居内南側に 110 ㎝× 100 ㎝、深さ 89 ㎝の円形を呈するピットの上縁を幅 30 ～ 35 ㎝、厚さ 18 ㎝の黄白色粘土で馬蹄形状に縁取りした施設を検出した。この施設は 27 号住居跡のものよりも一段低くなっており、黄白色粘土も一部削り取られたように平坦な部分が観察された。一方、27 号住居跡に伴う同施設内の北側では、28 号住居跡に伴うものと、考えられるピットが検出された。した



C′
40.50m
-44
A′
D′
-45
-48
D
-34
-35
-37
-52
-53
-16
E′
40.20m
E′
暗黄褐色土
-20
-60
F
F′
E
B
-70
-60
-31
-76
-30
B′
-25
-18
-19
-30
-8
28号フラスコ状ピット
D
D′
-11
-77
40.20m
褐色土
A′
C
F
F′
40.20m
暗褐色土
C
A
A′
40.50m
4
1
5
2
3
第1層　暗褐色土、焼土ブロック・炭化物混入
第2層　褐色土、炭化物・明褐色土ブロック混入
第3層　暗褐色土、明褐色土混入
第4層　暗褐色土、炭化物混入
第5層　暗褐色土
B
B′
40.50m
0
2m

第26図　30号住居跡

がって 28 号住居跡が古く、これを拡張して構築されたのが 27 号住居跡であることが判明した。

出土遺物

土器（第 74 ・ 75 図）

198 ・ 199 は細い平行沈線によって文様を構成する。200 ～ 202 は粘土紐貼付による隆帯で渦巻文を形成するものや、隆帯の上下に竹管状工具による刺突文が施されるものなどがある。

石器（第 90 ・ 97 図）

55 ・ 56 は無茎の石鏃、57 ・ 58 は有茎の石鏃で、アスファルトの付着しているものもある。59 は石錐である。61 ・ 62 は槍先状石器である。63 は石ベラ状石器である。191 は磨石である。

29 号住居跡（第 25 図）

調査区の西側で検出された。

プランは長軸 3.4 m、短軸 3.3 m の円形を呈する。確認面からの深さは 14 ㎝で、壁は斜めに立ち上がる。ピットは 11 個検出されており、主柱穴は深さ 20 ㎝以上のもの 4 個が考えられる。炉は中央部に位置しており、土器埋設炉である。深鉢形土器を正立に据えている。炉の周辺は火熱を受けて赤変している。

住居内北部に、65 ㎝× 56 ㎝、深さ 46 ㎝の円形を呈するピットの上縁を幅 14 ～ 18 ㎝、厚さ 7 ㎝の黄褐色粘土で馬蹄形状に縁取りした施設を検出した。

出土遺物

土器（第 59 ・ 76 図）

25 は炉埋設土器である。頸部が外反する。地文は LR（縦回転）単節斜縄文である。217 ～ 221 は、粘土紐貼付による隆線や半截竹管状工具による沈線で文様を構成する。

30 号住居跡（第 26 図）

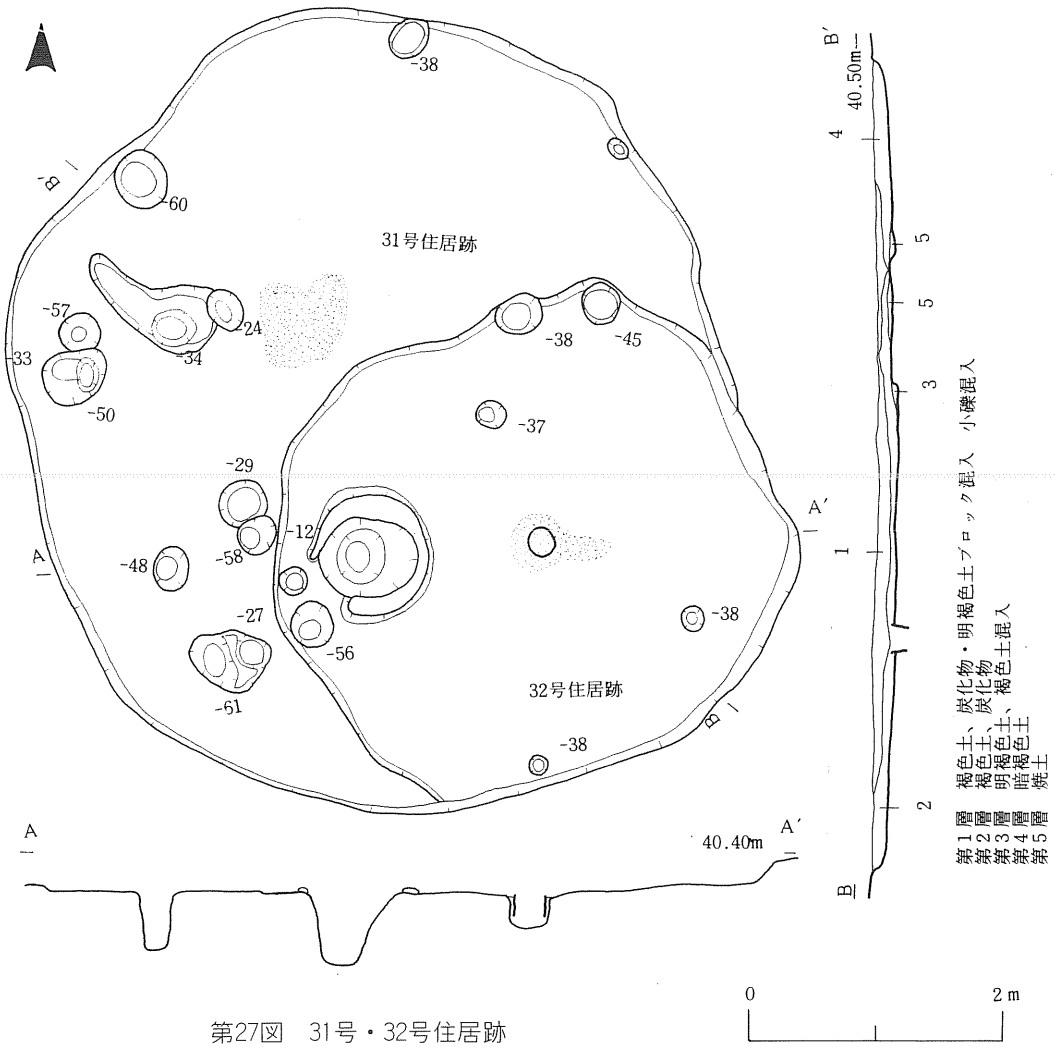
調査区中央西側で検出された。北西壁は沢、東、西壁は削平で不明である。

プランは、長軸 8.9 m、短軸は推定 6.0 m の南北に長い楕円形を呈する。確認面からの深さは遺存の良好な部分で 10 ㎝である。壁は斜めにゆるやかに立ち上がる。ピットは 28 個検出されているが主柱穴については不明である。炉は石囲炉、土器埋設炉四基が検出されているが、すべて本住居跡にともなうものなのか不明である。石囲炉は南の礫が抜き取られている。土器埋設炉は中央付近に三基、北側に一基検出されており、周辺は火熱を受けて赤変している。また、南側の二ケ所に焼土が分布する範囲が認められる。床面は平坦で堅く良好である。

出土遺物

土器（第 59 ・ 60 ・ 76 図）

26 ～ 29 は炉埋設土器である。26 は深鉢形土器の胴部である。四ケ所に粘土紐貼付の隆帯を二本一組にして垂下させ端を円くする。上部には刻み状に撚糸圧痕を施し、間には撚糸圧痕による擬似爪形文が施文される。27 は深鉢形土器の胴部である。粘土紐貼付の隆帯がめぐり、上部には刻み状



第27図　31号・32号住居跡

の撚糸圧痕が施される。間は半截竹管状工具による爪形の刺突文で充塡している。28・29は深鉢形土器の胴部であり、結束のない羽状縄文が施文される。30・222～232は覆土から出土した破片である。半隆起線文による垂下する波状、直線文が施されるもの、撚糸圧痕文により平行、Y状の文様が施されるもの、さらに粘土紐貼付の隆帯上に撚糸圧痕、隆帯間に爪形文などが施されるものがある。

石器（第90・97図）

覆土から出土した。65・66は無茎石鏃、67は有茎石鏃である。68は縦型石匙である。石質はすべて頁岩である。192は円形を呈する磨石である。

土製品（第161図）

21は覆土から出土した土偶の足部である。三本の刻みがあり指を表していると思われる。

31号住居跡（第27図）

調査区北側で検出された。32 号住居跡と重復しており、本住居跡が切られている。

プランは、長軸 6.5 m、短軸 5.5 m の楕円形を呈する。確認面からの深さは 4 cmで、壁は斜めに立ち上がる。ピットは 11 個検出されているが主柱穴は不明である。炉は 32 号住居跡に切られたのか検出できなかった。北西寄りに焼土の分布する範囲が認められる。床面は平坦で堅く良好である。

出土遺物

土器（第 76 図）

233 ～ 235 は覆土から出土した破片である。細い粘土紐貼付の隆帯を直線・波状に施している。

石器（第 90 図）

覆土から出土した。69 は無茎石鏃、70 は縦型石匙である。石質はいずれも頁岩である。

32 号住居跡（第 27 図）

調査区北側で検出された。31 号住居跡と重複し、本住居跡が切っている。

プランは、径 3.9 m のほぼ円形を呈する。確認面からの深さは遺存の良好な東壁で 18 cmを計り、壁は斜めに立ち上がる。ピットは 7 個検出されているが主柱穴は不明である。西側に径 90 cm、深さ 60 cmの円形を呈する特異なピットが掘り込まれている。縁には黄白色粘土を馬蹄形状に盛土している。炉は中央部に位置する土器埋設炉で、周辺は火熱を受けて赤変している。床面は平坦で堅く良好である。

出土遺物

土器（第 60 ・ 76 ・ 77 図）

31 は炉埋設土器である。深鉢形土器の胴部で、頸部から胴上部に粘土紐貼付の隆帯を直線・弧状にめぐらし、間には半截竹管状工具による刺突文を充塡している。236 ～ 241 は覆土から出土した土器片である。粘土紐貼付の隆帯文・撚糸圧痕文・刺突文などが施されている。

石器（第 91 図）

覆土から出土した。71 は有茎石鏃、72 は両面加工のヘラ状石器である。石質はいずれも頁岩である。

33 号住居跡（第 49 図）

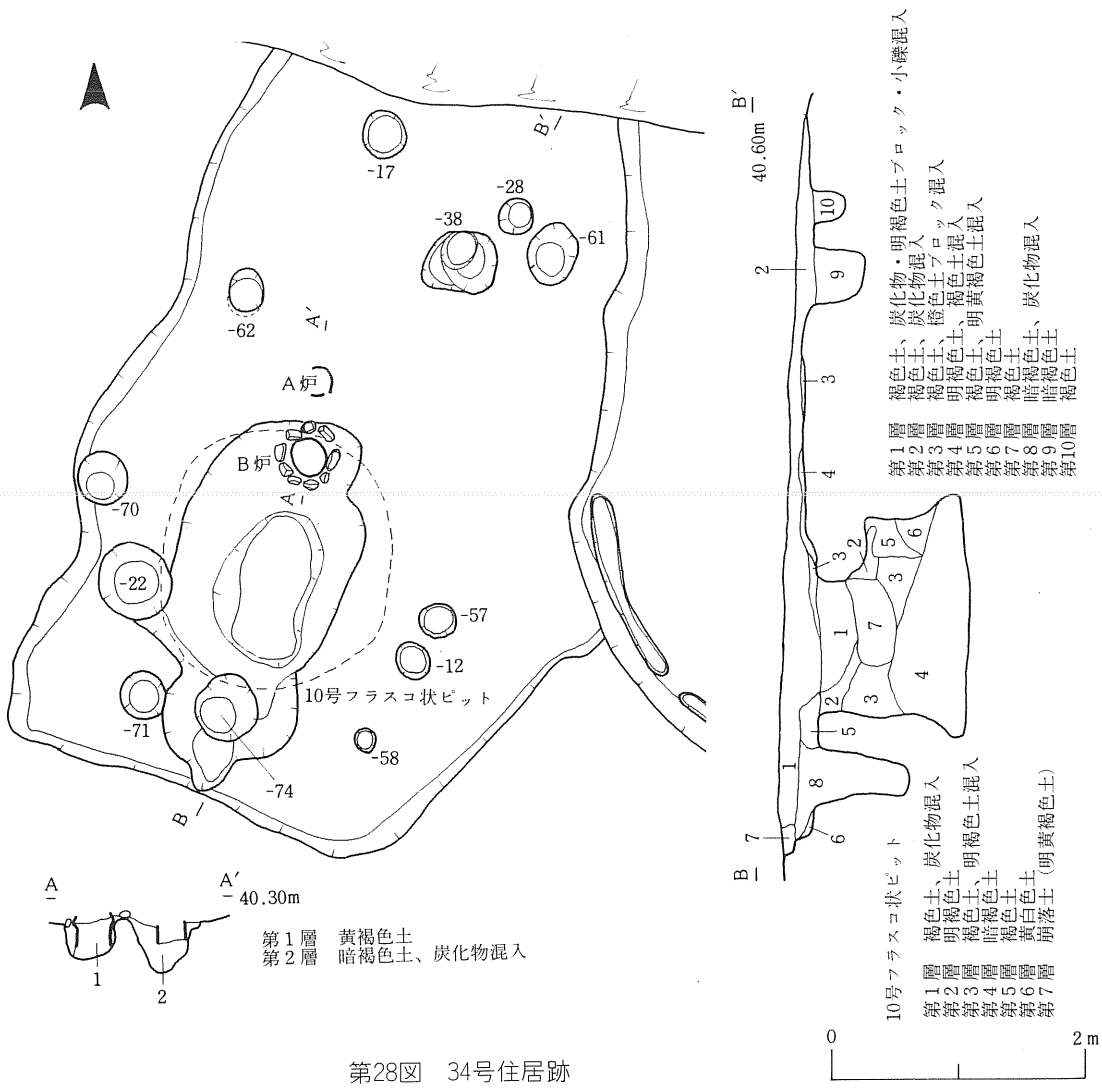
調査区中央部西側で検出された。68 号住居跡の中央部を切って構築されている。

プランは、長軸 3.0 m、短軸 2.3 m の不整楕円形を呈する。確認面からの深さは 38 cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは 8 個検出されており、主柱穴は四隅にある深さ 31 cm以上のものが考えられる。炉は検出されなかった。床面は凹凸があるが堅く良好である。

出土遺物

土器（第 77 図）

242 ～ 255 は覆土から出土した土器片である。複合口縁を有し粘土紐貼付の隆帯で円文、垂下する波状文を施するもの（242）、半隆起線文、刺突文が施されるもの（244 ・ 245 ・ 248）や、撚糸圧



第28図　34号住居跡

痕文がＹ状に施文されるもの（246）、粘土紐貼付の両側に押圧縄文で縁どりされるもの（247）、さらに粘土紐貼付の隆帯を直線・波状にめぐらし、その上部に刻み状の撚糸圧痕などが施文されるもの（250 ～ 255）などがある。

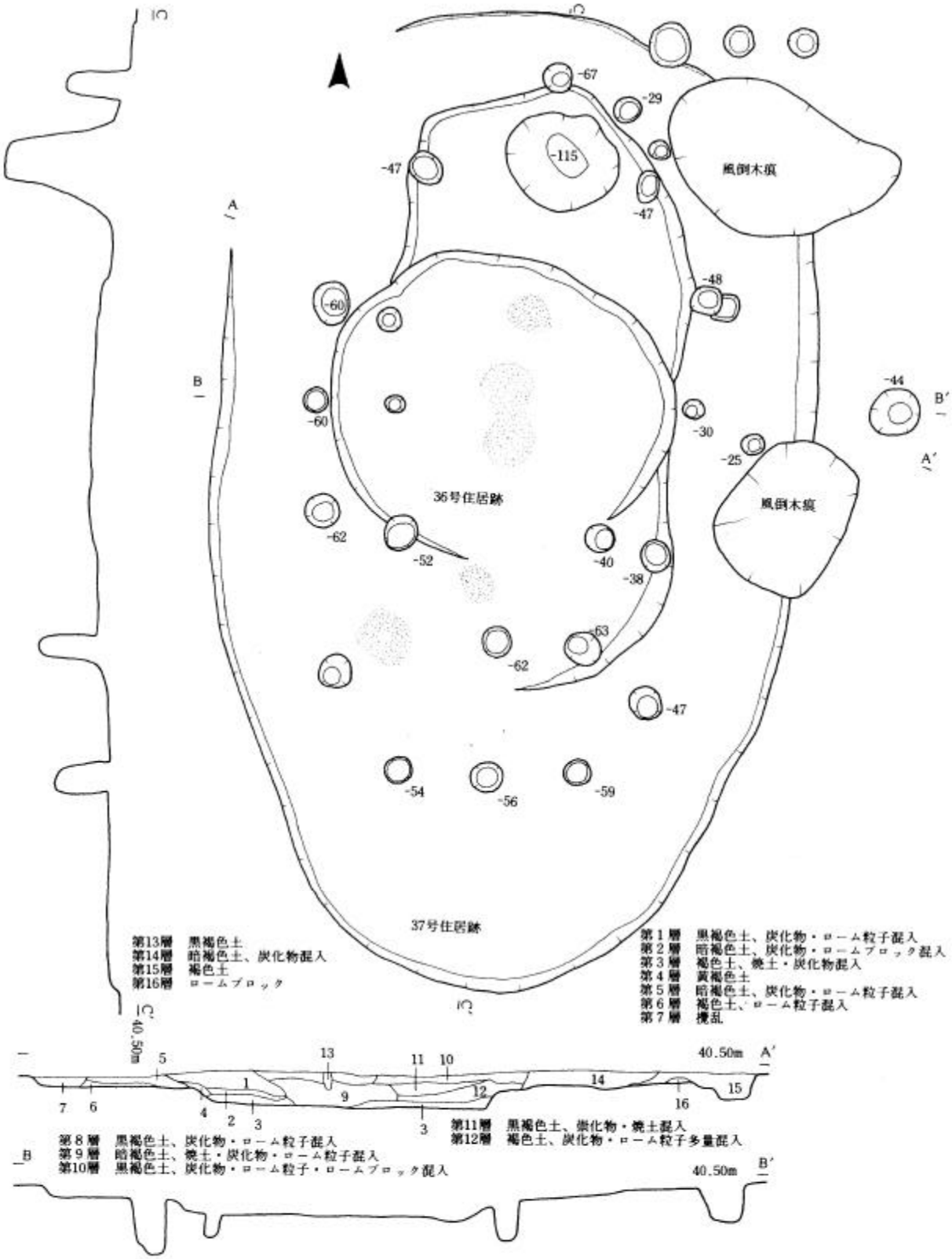
石器（第 91 図）

覆土から出土した。73 は無茎石鏃、74 は縦型石匙である。石質はいずれも頁岩である。

34 号住居跡（第 28 図）

調査区北端で検出された。北側は沢で削平され、東側は 27 号住居跡に切られている。

プランは、現在する長軸 6.0 m、短軸 4.2 mの隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは 20 cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面中央から南側にかけて住居跡より古い 10 号フラスコ状ピットが掘り込まれているが、貼床は認められなかった。ピットは 12 個検出されており、主柱穴は長軸に沿う、深さ 50 cm以上のものと思われる。炉は中央部に二基検出された。古い A 炉は土器埋設炉、新し



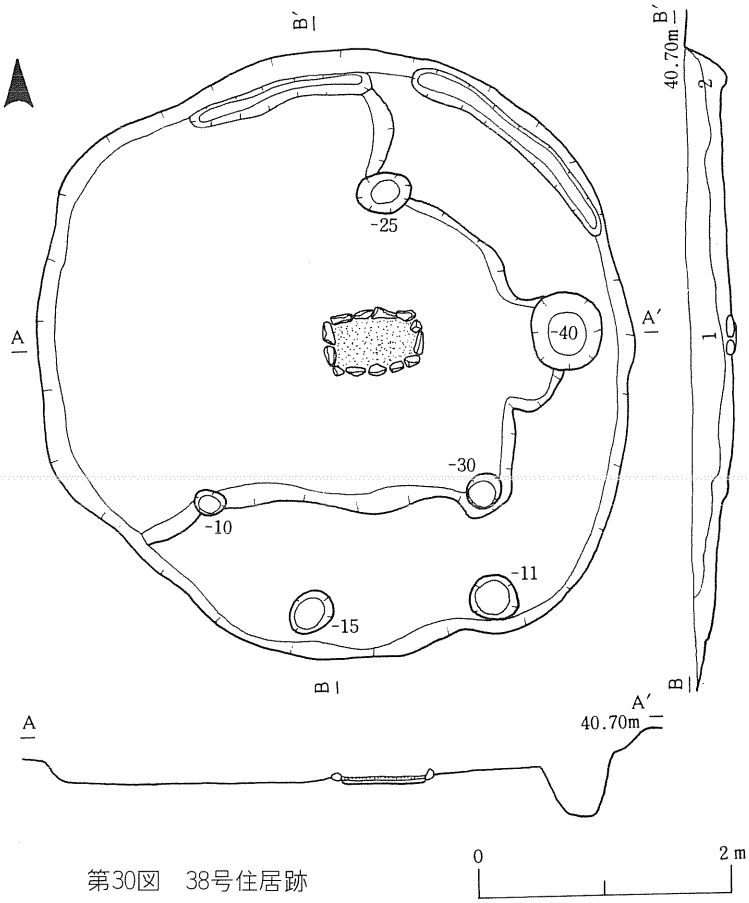
第29図　36号・37号住居跡

いＢ炉は石囲土器埋設炉である。周辺は火熱を受けて赤変している。南側に径 50 ㎝、深さ 74 ㎝の円形を呈する特異なピットが掘り込まれている。床面は平坦で堅く良好である。

出土遺物

土器（第 60 ・ 61 ・ 77 図）

32 はＡ炉、33 はＢ炉の埋設土器である。32 は深鉢形土器の胴部で、地文は LR（縦回転）単節斜縄文である。33 はキャリパー形を呈する深鉢形土器である。粘土紐貼付の渦巻状の突起、隆帯を波状にめぐらし、押圧縄文によって楕円文・渦巻文などが展開する。256 ～ 261 は覆土から出土した。粘土紐貼付の隆帯を施し、渦巻文などがみられるもの（255 ～ 257 ・ 259）や、粘土紐貼付の隆帯を波状や縦に配し、上部に刻み状の撚糸圧痕を施すもの（260 ・ 261）などがある。



第30図　38号住居跡

石器（第 91 図）

覆土から出土した。75 は無茎、76 は有茎の石鏃である。77 は縦形石匙、78 は小形のヘラ状石器である。石質はいずれも頁岩である。

36 号住居跡（第 29 図）

調査区中央西端部で検出された。37 号住居跡の中央部を切って構築されている。

プランは、長軸 3.7 ｍ、短軸 3.3 ｍの楕円形を呈する。確認面からの深さは 20 ㎝で、壁は斜めに立ち上がる。ピットは 2 個検出されている。炉は地床炉と思われ、中央部と北側に焼土が分布している。床面は平坦で堅く良好である。

出土遺物

土器（第 61 ・ 62 図）

34 ～ 38 ・ 39 ・ 41 は覆土から出土した。34 は頸部が外反し、口縁部が直立する深鉢形土器である。弁状把手を有し口縁部には刻み状の撚糸圧痕文によって文様が施される。35 は口縁部が内湾す

る浅鉢形土器である。半截竹管状工具内面使用の半隆起線文が施され、口縁部に爪形文が付される。頸部から胴部にかけては沈線によりフ状の文様がみられる。36 は頸部から口縁部にかけて外反する深鉢形土器である。山形口縁を有し、粘土紐貼付の渦巻文が付される。頂部下には長楕円形の粘土紐貼付の隆帯が付され、頸部には一条の貼付文がめぐる。37 は頸部から口縁部にかけて外反する深鉢形土器である。山形口縁を有し、頂部下に二本一組の粘土紐貼付の隆帯が付され、その間にはヘラ状工具による細い沈線が配される。胴上部には縦に四条の沈線が施されている。38 は深鉢形土器の破片である。山形口縁を有し、頂部下に粘土紐貼付の渦巻文、垂下する波状文が施される。口縁部、頸部には半隆起線文によって文様が配される。39 は頸部から口縁部にかけて外反する深鉢形土器である。細い粘土紐貼付文が頂部下には縦に施され、頸部には一条めぐっている。地文は口縁部、胴部とも RL（縦回転）単節斜縄文である。41 はゆるく内湾する浅鉢形土器である。一ケ所に舌状の突起を有する。突起下には細い粘土紐を V 状に貼付し、押圧縄文によって縁どりしている。口縁部には押圧縄文を施している。

石器（第 91 図）

覆土から出土した。79 ～ 82 は無茎石鏃、83 ～ 85 は柳葉形の石鏃である。86 は両端が欠損するヘラ状石器、87 は縦型石匙、88 ・ 89 は横型石匙である。石質はいずれも頁岩である。

37 号住居跡（第 29 図）

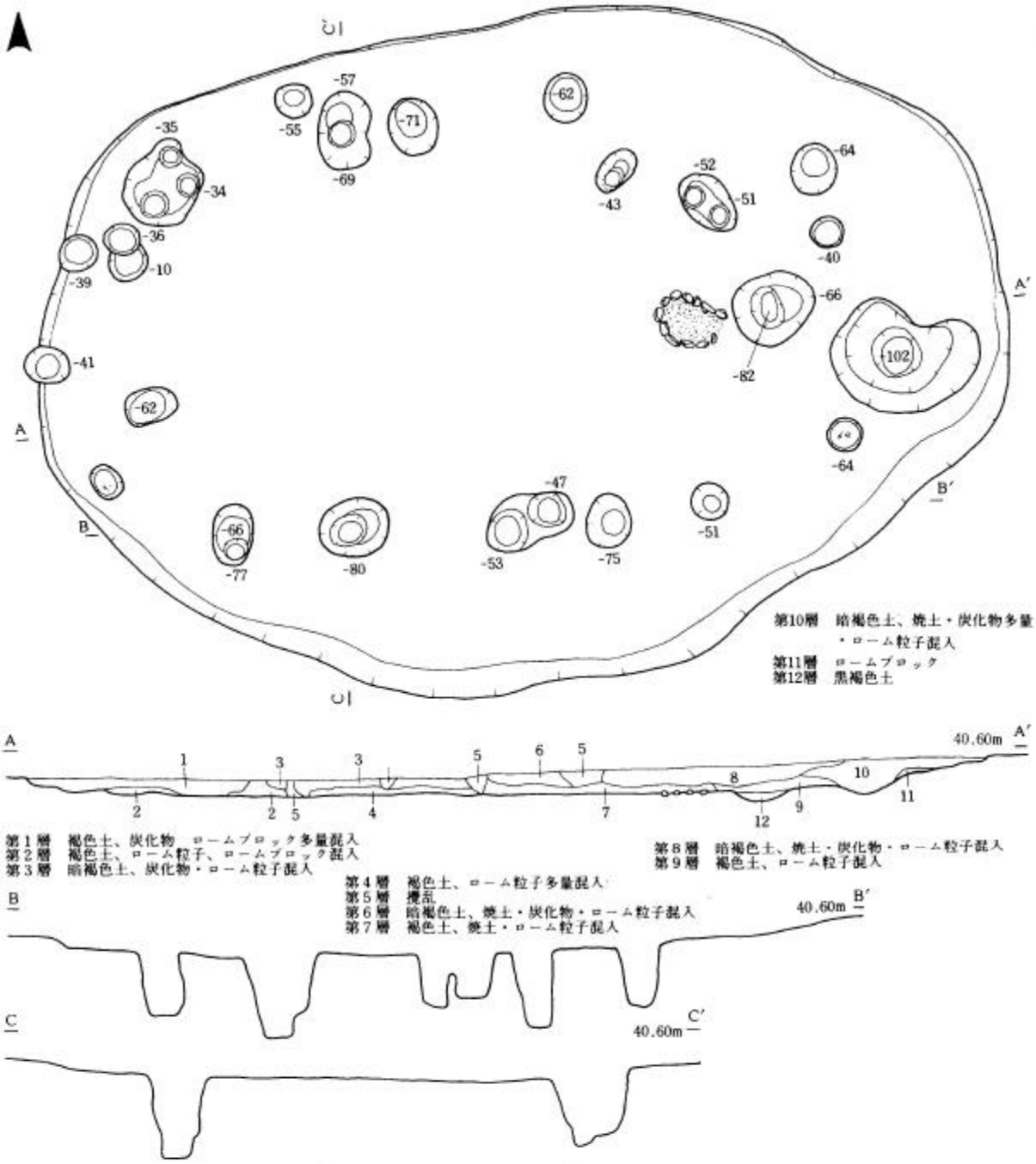
調査区中央西端部で検出された。中央部は 36 号住居跡によって切られている。

プランは、長軸 10.7 m、短軸 6.4 m の南北に長い楕円形を呈する。確認面からの深さは 10 ㎝で、壁は斜めに立ち上がる。壁から約 1.5 m 内側に長軸 6.6 m、短軸 3.0 m の楕円形を呈する一段低い落ち込みが検出される。これは本住居跡にともなうベッド状の遺構と思われる。ピットは 22 個検出されている。主柱穴は長軸に沿っているピットである。炉は中央南側に焼土が分布する範囲が認められ、地床炉と考えられる。床面は平坦で堅く良好である。

出土遺物

土器（第 62 ・ 63 ・ 78 図）

42 ～ 45 ・ 262 ～ 264 は覆土から出土した。42 ・ 44 ・ 45 は頸部から口縁部にかけて外反する深鉢形土器である。42 は粘土紐貼付の隆帯上に刻み状の撚糸圧痕文を施し、間には擬似爪形文を充塡している。43 は口縁部に対をなす山形口縁を有する浅鉢形土器で、無文である。44 は四単位の土器で山形口縁の頂部下に渦巻文、縦に三本の隆帯を施している。頸部に一条の隆帯をめぐらし上部に押圧縄文を刻んでいる。口縁部、胴部は横・縦方向に半截竹管状工具内面による半隆起線によって文様が施文されている。45 は平縁で、主に半隆起線文によって文様が施文されている。口縁部は三角形状に、胴部は縦方向に垂下、鋸歯状に配される。262 は押圧縄文、263 は格子目文と半隆起線文によって文様が施される北陸系の土器である。 264 は刻み状の撚糸圧痕が施される隆帯と擬似爪形文が施文されている。


第10層　暗褐色土、焼土・炭化物多量・ローム粒子混入
第11層　ロームブロック
第12層　黒褐色土
第1層　褐色土、炭化物　ロームブロック多量混入
第2層　褐色土、ローム粒子、ロームブロック混入
第3層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第4層　褐色土、ローム粒子多量混入
第5層　攪乱
第6層　暗褐色土、焼土・炭化物・ローム粒子混入
第7層　褐色土、焼土・ローム粒子混入
第8層　暗褐色土、焼土・炭化物・ローム粒子混入
第9層　褐色土、ローム粒子混入
40.60m
0
2m

第31図　39号住居跡

石器（第 91 図）

覆土から出土した。90 ・ 91 は無茎石鏃、92 は上部が欠損するヘラ状石器である。石質はすべて頁岩である。

38 号住居跡（第 30 図）

調査区中央南側で検出された。

プランは径 4.9 m のほぼ円形を呈する。確認面からの深さは 30 cmで、壁は斜めに立ち上がり遺存は極めて良好である。北壁下に一部周溝が検出されている。南・東壁から約 60 ～ 90 cmの床面で低い段がつく。ピットは 6 個検出されているが主柱穴は不明である。炉は中央部に位置する。長方形の石囲炉で内部は火熱を受けて赤変している。埋設土器は認められない。床面は堅く良好である。

出土遺物

土器（第 78 図）

265 ～ 267 は覆土から出土した。連鎖状文、粘土紐貼付文、押圧縄文などが施文される。

土製品（第 163 図）

33 は覆土から出土した土冠である。側面に穿孔され、沈線によって文様が施される。

39 号住居跡（第 31 図）

調査区中央西南部で検出された。

プランは、長軸 9.5 m、短軸 6.5 m の東西に長い楕円形を呈する。確認面からの深さは 20 cmで、壁は斜めに立ち上がる。ピットは 24 個検出されており、主柱穴は壁に沿って周る深さ 60 cm以上のピットが考えられる。炉は東側に位置している。楕円形を呈する石囲炉で、内部は火熱を受けて赤変している。床面は平坦で堅く良好である。

出土遺物

土器（第 63 ・ 78 図）

46 ・ 268 ～ 273 は覆土から出土した。46 は深鉢形土器の底部で数条の縦に垂下する沈線が施されている。268 ～ 271 は細い粘土紐貼付が垂下、横走して平行・波状に施文される。272 は隆帯上に刻み状の撚糸圧痕が施され、273 は隆帯により渦巻、楕円文が施文される。

石器（第 91 図）

93 ・ 94 は覆土から出土したヘラ状石器である。94 は表面に自然面を残している。

40 号住居跡（第 32 図）

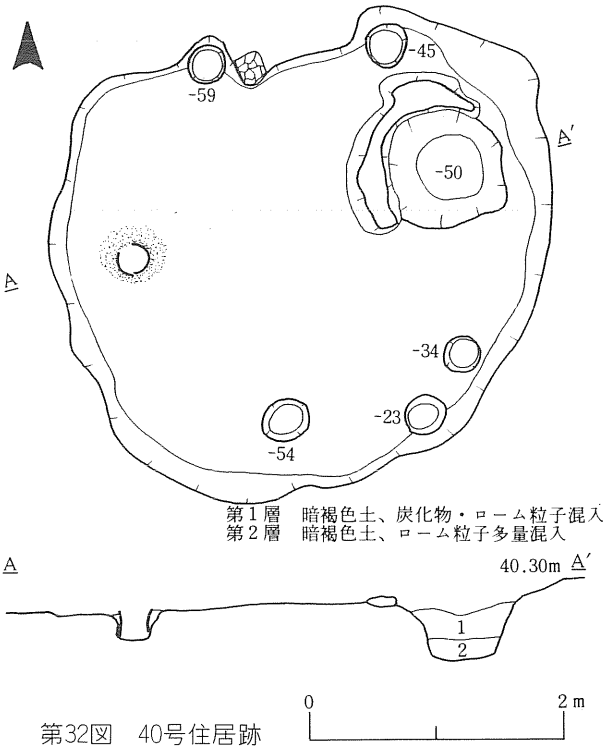
調査区中央西端部で検出された。

プランは、長軸 4.0 m の不整円形を呈する。確認面からの深さは 12 cmで、壁は斜めに立ち上がる。ピットは 5 個検出されているが、主柱穴は不明である。東側には黄白色粘土を馬蹄形状に西側にのみ盛土した、径 90 cm、深さ 50 cmの特異なピットが掘り込まれている。炉は西側に位置する。土器埋設炉で周辺は火熱を受けて赤変している。床面は平坦で堅く良好である。

出土遺物

土器（第 63 ・ 78 ・ 79 図）

47 は炉埋設土器である。深鉢形土器の胴部で粘土紐貼付の隆帯が施される。地文は RL（縦・斜回転）単節斜縄文である。274 ～ 283 は覆土から出土した。274 ～ 276 は粘土紐貼付、半隆起線文が施され、刺突文もみられる。277 ・ 278 は撚糸圧痕文、279 は平行沈線、円形刺突文が施されている。283 は太い粘土紐貼付の隆帯上に刻み状の撚糸圧痕を施し、その間を擬似爪形文で充塡している。



第32図　40号住居跡

41 号住居跡（第 33 図）

調査区中央西側で検出された。西側は 36 号住居跡、風倒木痕に壊されている。

プランは確認できる範囲で長軸 4.8 m以上、短軸 4.5 m の楕円形を呈する。確認面からは非常に浅く壁の立ち上がりはかすかに認められる程度である。ピットは 11 個検出されており、主柱穴は中でも深さ 50 cm以上の掘り方のしっかりしたピットと思われる。炉は二ケ所に検出され、土器埋設炉である。周辺は火熱を受けて赤変している。床面は平坦で堅く良好である。

出土遺物

土器（第 64 ・ 80 図）

49 は炉埋設土器である。口縁部が外反する深鉢形土器で、地文は RL（縦回転）単節斜縄文である。50 ・ 51 ・ 298 ～ 307 は覆土から出土した。50 は R$\left\{\begin{smallmatrix}L\\R\end{smallmatrix}\right.$撚糸文、51 は口縁に粘土紐を貼付する深鉢形土器である。298 ～ 307 は土器破片で細い沈線で文様を描くもの（300）や粘土紐貼付の隆帯を施し、上部に撚糸圧痕文を施すもの、間に刺突文を配するものなどがある。また木目状撚糸文が施されるものもある。

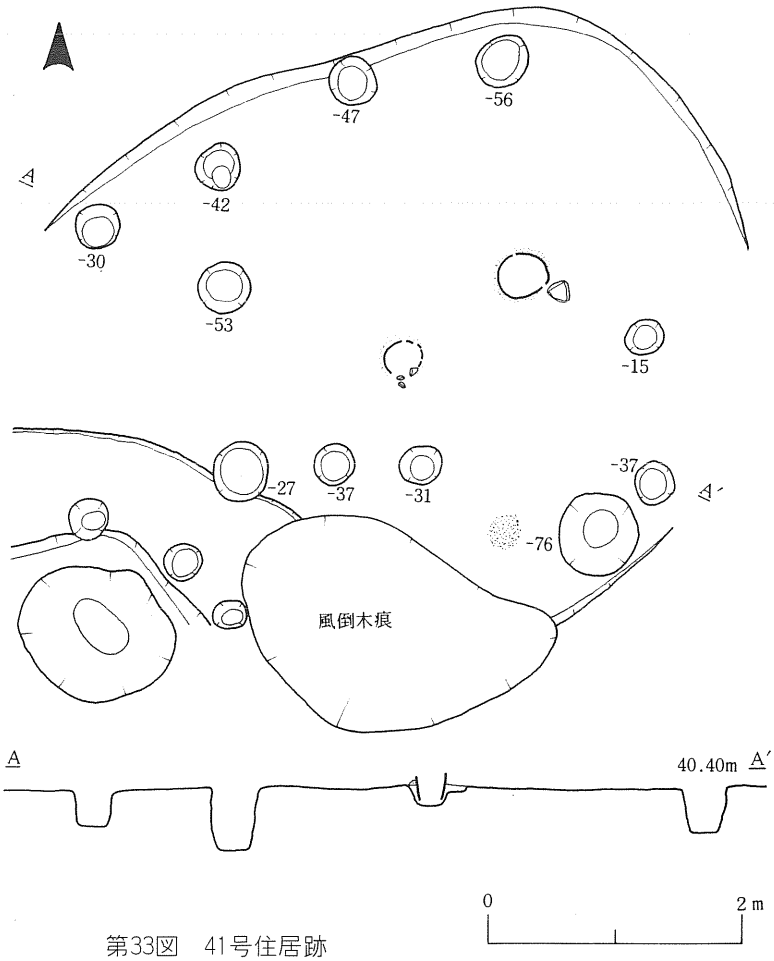
石器（第 92 図）

101 ～ 104 は覆土から出土した。101 は先端部が欠損する無茎石鏃、102 は石錐、103 は縦型石匙、104 は両面加工のヘラ状石器である。すべて石質は頁岩である。

42 号住居跡（第 35 図）

調査区中央西側で検出された。中央、南西部は風倒木痕により壊され、北東隅は 8 号土壙によって壊されている。

プランは長軸 11.2 m、短軸 6.5 m の楕円形を呈する。確認面からの深さは 20 ㎝で、壁はゆるやかに斜めに立ち上がる。南東部壁から 2 m内側は床が若干下がり段がつく。ピットは 21 個検出されているが主柱穴は不明である。炉は南西側に検出された石囲炉である。西側の礫は抜き取られている。周辺は火熱で赤変している。南側床面に焼土の広がりが認められる。床面は平坦で堅く良好である。



第33図　41号住居跡

出土遺物

土器（第 64 ・ 80 図）

52 ～ 55 ・ 308 ～ 329 は覆土から出土した。52 は胴部が膨らむ鉢形土器である。頸部に三条の沈線がまわり、胴部は垂下する沈線で棘状文が施される。53 はキャリパー形を呈する深鉢形土器である。頸部の上下に平行沈線文がまわり、口縁部、胴部は沈線による渦巻文が施される。55 は深鉢形土器で地文は LR（縦回転）単節斜縄文である。308 ～ 318 は口縁部破片である。粘土紐貼付の隆帯を鋸歯状に施すものや、ゆるく波状にめぐらすものもある。さらに撚糸圧痕文や沈線による渦巻文などもみられる。

石器（第 92 ・ 98 図）

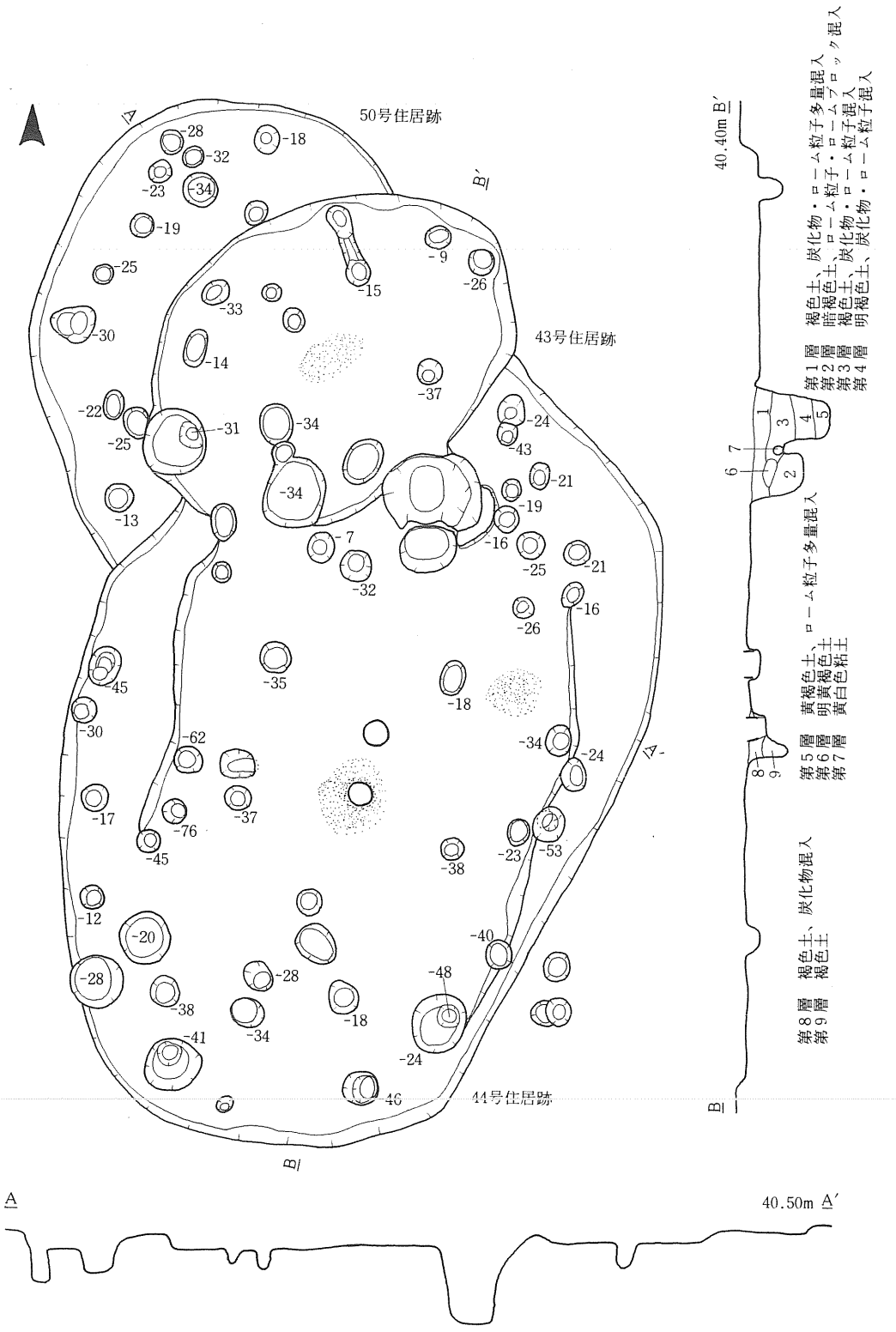
105 ～ 109 は覆土から出土した。105 は有茎石鏃、106 は基部が欠損する細身の石鏃である。107 ～ 109 は両面加工のヘラ状石器である。石質はすべて頁岩である。

土製品（第 161 図）

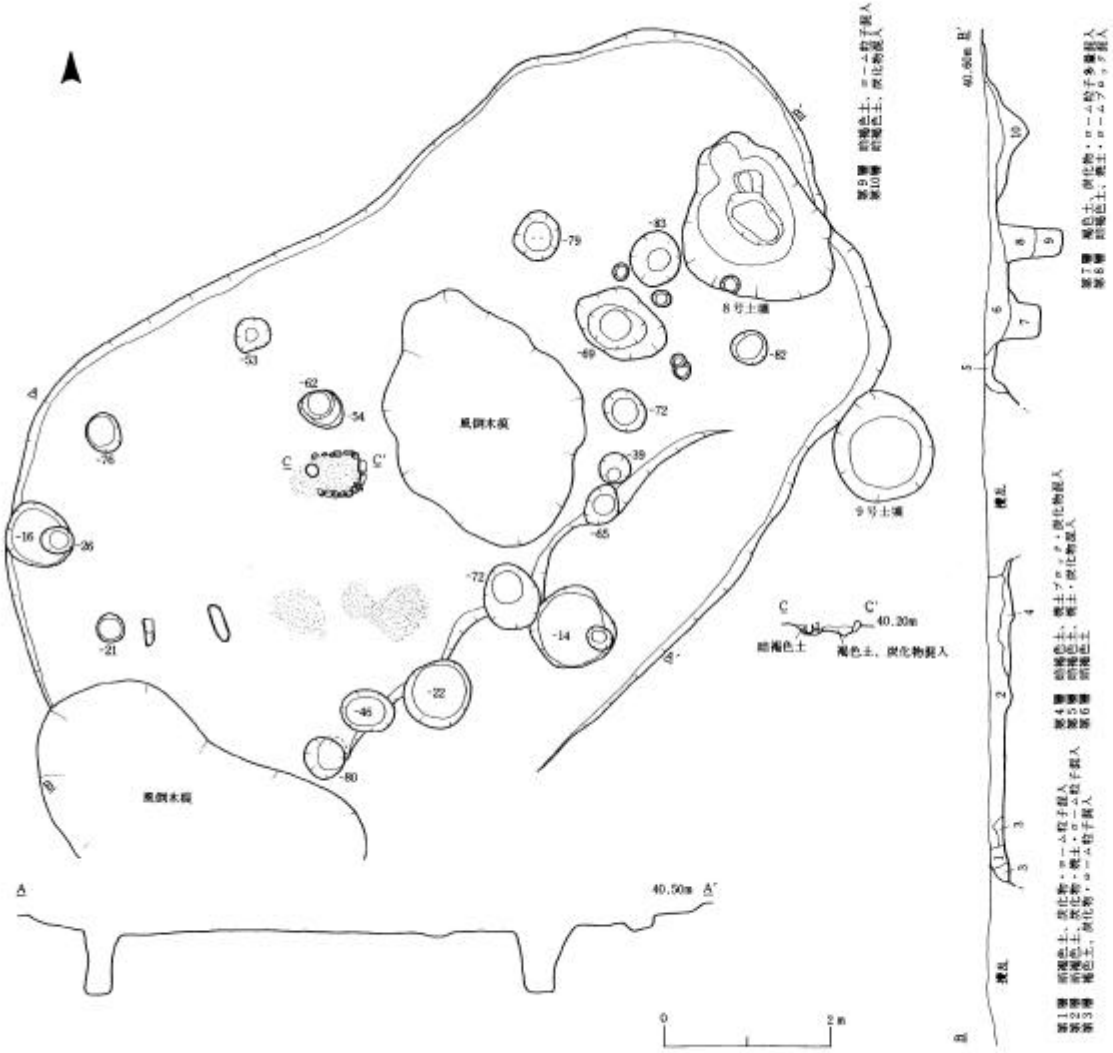
18 は小形のうすい三角形土製品である。

43 号住居跡（第 34 図）

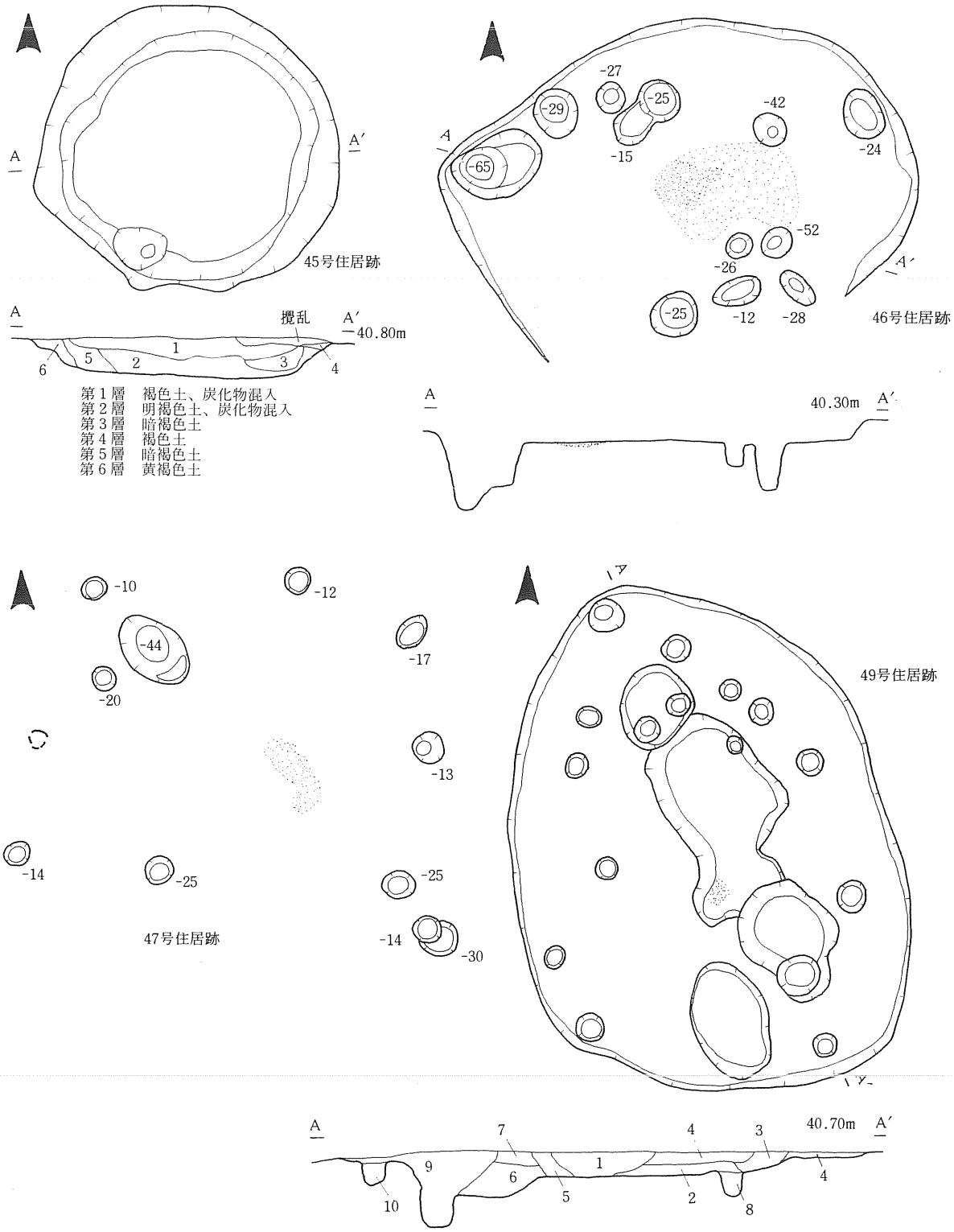
調査区中央部で検出された。44 ・ 50 号住居跡と重複しておりいずれも本住居跡が切っており新しいものである。



第34図　43号・44号・50号住居跡



第35図　42号住居跡



第1層　褐色土、炭化物混入
第2層　明褐色土、炭化物混入
第3層　暗褐色土
第4層　褐色土
第5層　暗褐色土
第6層　黄褐色土

第1層　褐色土、炭化物・焼土ブロック混入
第2層　明褐色土
第3層　褐色土
第4層　褐色土、炭化物・小礫混入
第5層　明褐色土、褐色土混入
第6層　褐色土、焼土・炭化物・明褐色土小ブロック混入
第7層　明褐色土、焼土ブロック混入
第8層　暗褐色土
第9層　明褐色土、炭化物混入
第10層　褐色土

0　2m

第36図　45号・46号・47号・49号住居跡

プランは長軸 3.9 m、短軸 2.6 mの楕円形を呈する。確認面からの深さは 10 cmで壁は斜めに立ち上がる。ピットは 13 個検出されており主柱穴は深さ 26 cm以上の 6 個と思われる。炉は中央部に検出された地床炉で、火熱で赤変している。床は平坦で堅く良好である。

出土遺物

土器（第 65 ・ 81 図）

56 ・ 57 は床面から出土した。56 はキャリパー状を呈する深鉢形土器である。四単位で波状口縁をなす。頂部間に粘土紐貼付の渦巻状の突起を配し、粘土紐貼付の隆帯で連絡させ、隆帯に沿って押圧縄文で縁どりされる。胴部は隆帯文を縦に垂下させている。57 はキャリパー形を呈する深鉢形土器である。四単位の土器で口縁部の四ケ所に瘤状の突起をもち、沈線を施す。頸部には一条の沈線がめぐり、間には瘤状の突起に向かい二条の沈線が弧状に配される。地文は LR（縦回転）単節斜縄文である。330 ～ 335 は覆土から出土した。口縁部破片で竹管状工具内面による半隆起線文が施され、上部に刺突文が施されるものや、沈線と粘土紐貼付の隆帯文が施されるものなどがある。

石器（第 93 図）

111 ～ 114 は覆土から出土した。111 は先端部が欠損する細身の縦型石匙である。112 ～ 114 は両面加工のヘラ状石器である。石質はすべて頁岩である。

土製品（第 162 図）

23 は覆土から出土した土偶である。首・手足は欠損している。沈線で文様が描かれ、背面には渦巻文がみられる。首部の欠損箇所には厚くアスファルトが付着している。

44 号住居跡（第 34 図）

調査区中央部で検出された。 43号･50号住居跡と重複しており、 本住居跡は 43 号住居跡に切られ、50 号住居跡を切っている。

プランは長軸 7.9 m、短軸 5.0 mの楕円形を呈する。確認面からの深さは 12 cmで壁は斜めに立ち上がる。東・西壁から約 40 ～ 90 cm内側で床面が下がり段がつき、いわゆるベッド状を呈している。ピットは総数 44 個検出されており主柱穴は深さ 40 cm以上のものと思われる。北側に径 90 cm、深さ 90 cmで、東南部に黄白色粘土を土手状に盛土した特異なピットがある。炉は中央部に二基検出された。土器埋設炉で周辺は火熱で赤変している。床面は平坦で堅く良好である。

出土遺物

土器（第 65 ・ 81 ・ 82 図）

58 ・ 59 は炉埋設土器である。上・下部が欠損する深鉢形土器で 58 はキャリパー形を呈する。336 ～ 345 は覆土から出土した破片である。押圧縄文が弧状・波状に施されるものや、粘土紐貼付の隆帯が施され、その上部、両側に撚糸圧痕文を施しているものもある。

石器（第 93 ・ 94 図）

115 ・ 116 ・ 197 は覆土から出土した。115 は先端部欠損の無茎石鏃、116 は両面加工のヘラ状石

器である。石質はいずれも頁岩である。197 は両端を打ち欠いて作られた石錘である。

45 号住居跡（第 36 図）

調査区中央南側で検出された。

プランは径 2.9 m の円形を呈する。確認面からの深さは 35 cmで、壁は斜めにゆるやかに立ち上がり中程で段を有する。ピットは南に 1 個認められる。炉は認められない。床面は平坦で堅く良好である。

出土遺物

土器（第 65 ・ 66 ・ 82 図）

60 ～ 64 ・ 346 ～ 348 は覆土から出土した。60 ～ 63 はキャリパー形を呈する深鉢形土器である。60 は口縁部に粘土紐貼付の隆帯を施し、 先端が渦巻状になる。 頸部から胴上部には粘土紐が三・二・二本組になってまわる。胴下部は三条の沈線がまわり、その下には渦巻文が施される。地文は LR（縦回転）単節斜縄文である。61 は沈線によって文様が施され、頸部に六条の沈線がまわり、口縁部、胴部には渦巻文が施される。62 ・ 63 は口縁の一ケ所に把手を有する。口縁部は細い粘土紐貼付で文様が施され、63 は端で渦巻文を作る。頸部から下部は三条の沈線がまわり、垂下する沈線が施される。64 は胴部が膨らみ口縁部が外反する深鉢形土器である。口縁部に隆帯があり、頸部には三条の沈線がまわっている。胴部は垂下する沈線で区画され、渦巻文が施されている。346 ～ 348 は破片で、粘土紐貼付の隆帯が施され、348 は間に疑似爪形文が施されている。

石器（第 93 図）

117 ・ 118 は覆土から出土した。両面加工のヘラ状石器である。石質は頁岩である。

土製品（第 160 図）

3 は舟形を呈する土製品で、上部の一端には穴が穿たれ内部は中空になっている。土笛と思われる。

46 号住居跡（第 36 図）

調査区北側で検出された。南壁は削られて不明である。

プランは長軸 4.3 m、短軸 3.3 m の楕円形を呈する。確認面からの深さは 20 cmで、壁は斜めに立ち上がる。ピットは 13 個検出されているが主柱穴は不明である。炉は中央部に作られた地床炉であり、火熱で広範囲に赤変している。床面は平坦で堅く良好である。

出土遺物

土器（第 82 図）

349 ～ 351 は覆土から出土した破片である。粘土紐貼付の隆帯・半隆起線文などが施されている。

石器（第 93 ・ 98 図）

119 ・ 198 は覆土から出土した。119 は縦型石匙、198 は石皿である。中央部は溝状に磨られている。

47 号住居跡（第 36 図）

調査区中央南側で検出された。

壁は削られて不明で、炉と周辺ピットの配列から住居跡と確認された。プランはピットの配置で推定すると長軸 4.5 m、短軸 4.0 mの楕円形を呈すると思われる。ピットは 9 個検出されている。炉は中央部に認められる地床炉で火熱で赤変している。床は平坦である。

出土遺物

土器（第 82 図）

352 ～ 355 は覆土から出土した破片である。粘土紐貼付の渦巻文や、沈線による文様が施されている。

石器（第 93 ・ 99 図）

120 ・ 121 ・ 199 は覆土から出土した。無茎石鏃で 121 は一端が欠損する。石質は頁岩である。199 は磨石である。

48 号住居跡（第 18 図）

調査区中央東側で検出された。20 号住居跡と重複している。

プランは、西壁の一部が遺存するだけであるが、ピットの配列などから南北に長い楕円形を呈すると思われる。確認面からの深さは遺存する西壁で約 5 ㎝、壁は斜めに立ち上がる。ピットは 22 個検出されているが、20 号住居跡と重複するものもあると思われ、主柱穴については不明である。また南側に楕円形の大きな攪乱が認められる。炉は土器埋設炉二基が検出され、周辺は火熱で赤変している。床面は平坦で堅く良好である。

出土遺物

土器（第 66 図）

65 ・ 66 は炉埋設土器である。上・下部が欠損する深鉢形土器である。地文は 65 が LR、66 が RL の縦回転単節斜縄文である。

49 号住居跡（第 36 図）

調査区中央部で検出された。

プランは長軸 5.2 m、短軸 3.7 mの楕円形を呈する。確認面からの深さは 10 ㎝で、壁は斜めに立ち上がる。ピットは 15 個検出されているが主柱穴は不明である。中央部には新しい土壙が掘り込まれ住居跡を壊しており、炉は検出できなかった。かすかに中央南側に焼土が認められた。床面は平坦で堅く良好である。

出土遺物

土器（第 82 図）

356 ～ 358 は覆土から出土した口縁部破片である。押圧縄文、粘土紐貼付の隆帯などが施されている。

50 号住居跡（第 34 図）

調査区中央部で検出された。43 ・ 44 号住居跡と重複しており、いずれも本住居跡が切られており最も古いものである。

プランは規模は不明であるが、南北に長い楕円形を呈する。確認面からの深さは 12 ㎝で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは 12 個検出されており深さ 30 ㎝以上のものが主柱穴と思われる。炉は認められない。床面は平坦で堅く良好である。

出土遺物

土器（第 82 図）

359 ・ 360 は覆土から出土した口縁部破片である。粘土紐貼付の隆帯が波状、「×」状に施され、上部や縁に撚糸圧痕文、押圧縄文などが施文されている。

石器（第 99 図）

200 は覆土から出土した。扁平な礫の両端を打ち欠いて作られた石錘である。

51 号住居跡（第 39 図）

調査区中央北側で検出された。

プランは長軸 5.9 m、短軸 4.2 m の楕円形を呈する。確認面からの深さは 18 ㎝で、壁は斜めに立ち上がる。ピットは 22 個検出されており、深さ 30 ㎝以上のものが主柱穴と思われる。炉は検出されなかった。床面は平坦で堅く良好である。

出土遺物

土器（第 83 図）

361 ～ 369 は覆土から出土した破片である。粘土紐貼付の隆帯によって文様が施され、三～四条平行に貼付されるものや、渦巻文などがみられる。また沈線によって文様が施されるものもある。

石器（第 93 ・ 99 図）

122 ～ 124 ・ 201 ～ 203 は覆土から出土した。122 は無茎、123 は基部欠損の石鏃である。124 は両面加工のヘラ状石器と思われる。201 ・ 202 は磨石、203 は大きな礫を使用した磨石である。

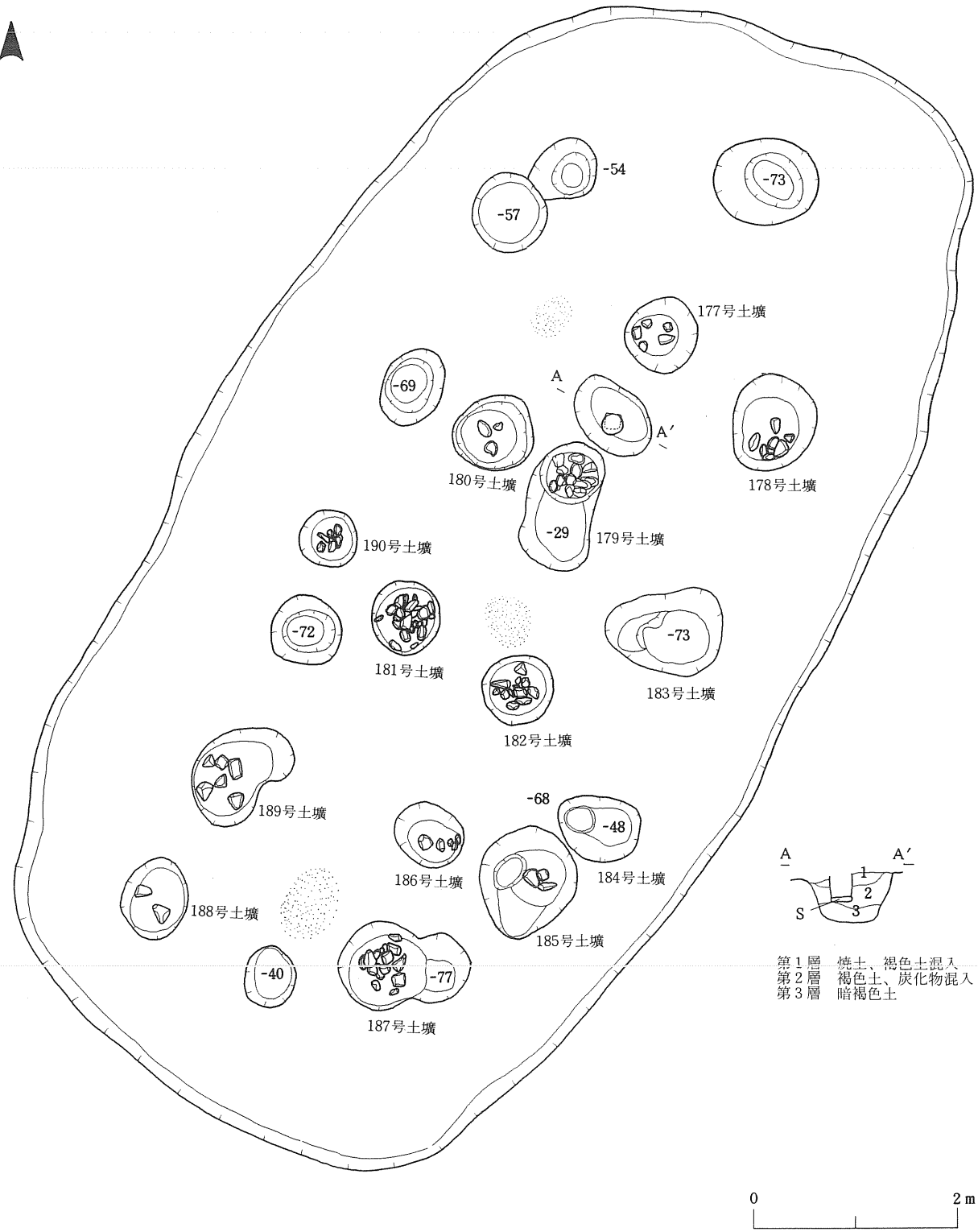
52 号住居跡（第 37 図）

調査区南東部で検出された。礫の詰った円形の土壙が新しく掘り込まれており、ピット数個を切っている。

プランは長軸 12 m、短軸 6.5 m の隅丸長方形を呈する大形のものである。壁の大部分は削られ深さは 2 ㎝と浅い。ピットは 8 個検出されており、いずれも径 50 ～ 70 ㎝、深さ 40 ～ 77 ㎝としっかりしており主柱穴と思われる。炉は中軸線上に二基、北側でわずかに西に寄ったところに一基の計三基検出されている。すべて地床炉で火熱で赤変している。床面は平坦で堅く良好である。

出土遺物

土器（第 66 ・ 83 図）


-54
-57
-73
177号土壙
-69
A
A′
180号土壙
178号土壙
-29
179号土壙
190号土壙
-72
181号土壙
-73
183号土壙
182号土壙
189号土壙
-68
-48
186号土壙
184号土壙
188号土壙
185号土壙
-40
-77
187号土壙
A
A′
1
2
3
S
第1層　焼土、褐色土混入
第2層　褐色土、炭化物混入
第3層　暗褐色土
0
2m

第37図　52号住居跡

67 ・ 370 ～ 381 は覆土から出土した。 67 は上・下部が欠損する深鉢形土器である。 地文は LR（斜回転）単節斜縄文である。370 ～ 381 は破片である。370 ～ 374 は撚糸圧痕文・押圧縄文が主体で文様が施される。375 ～ 380 は粘土紐貼付の隆帯が施され、渦巻文・波状文などが施文される。381 は口縁に粘土紐を波状に貼付し上部に撚糸圧痕文が施される。

石器（第 93 ・ 99 図）

125 ～ 129 ・ 204 は覆土から出土した。125 ・ 126 は無茎石鏃、127 は先端が鋭利な細身の石鏃である。128 ・ 129 は両面加工のヘラ状石器である。石質はすべて頁岩である。204 は扁平な礫の両端を打ち欠いた石錘である。

53 号住居跡（第 38 図）

調査区南東端部に検出された。

プランは径 7.3 m の円形を呈する。 確認面からの深さは 50 ㎝で、 壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは中央に 1 個、壁に沿って円形に 9 個の計 10 個検出されている。主柱穴は掘り方のしっかりした壁沿いに周る 8 個と思われる。炉は東側に位置する。土器埋設部、掘り込み部、掘り込み部からなる。土器埋設部には深鉢形土器が埋設され、周辺は赤変している。床面は平坦で堅く良好である。

出土遺物

土器（第 67 ・ 83 図）

69 は炉埋設土器である。口縁部、底部が欠損する深鉢形土器である。沈線区画の磨消帯が「J」字状に横方向に大きく展開する。地文は LR（縦回転）単節斜縄文である。382 ・ 385 は覆土から出土した破片である。沈線区画の磨消帯・渦巻文などが施される。

石器（第 99 図）

205 は覆土から出土した磨石である。

54 号住居跡（第 39 図）

調査区中央南側で検出された。

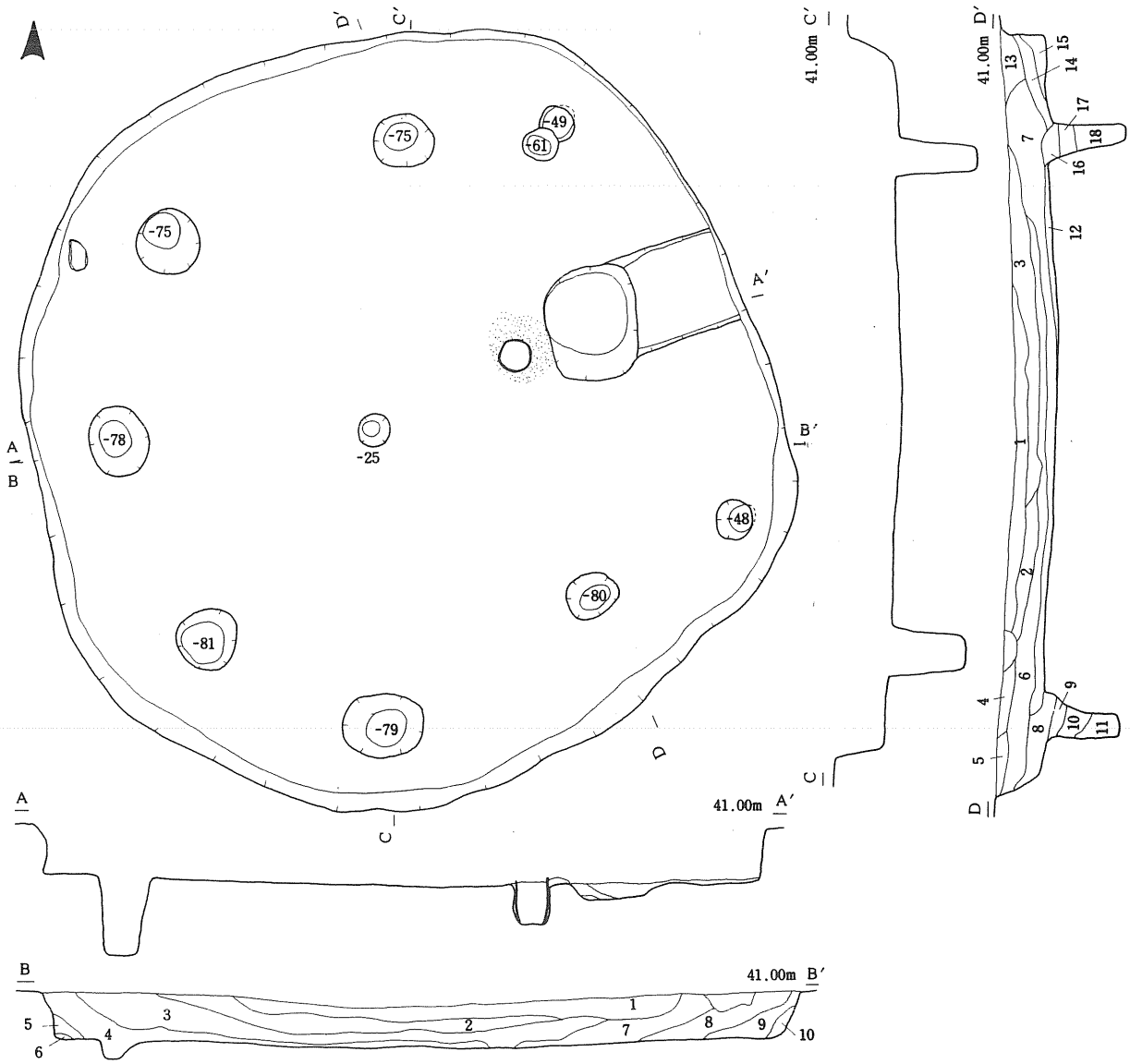
プランは径 3.0 m のほぼ円形を呈する。確認面からの深さは北東部で 10 ㎝、南西部で 30 ㎝で、壁は斜めに立ち上がる。ピットは南西部に 3 個検出されている。炉は中央部よりやや南側に位置する土器埋設炉である。埋設土器は細片になっている。周辺は火熱を受けて赤変している。床面は若干傾斜しているが堅く良好である。

出土遺物

土器（第 84 図）

384 ・ 385 は覆土から出土した破片である。384 は LR（縦回転）単節斜縄文、385 は沈線区画の磨消帯が施されている。

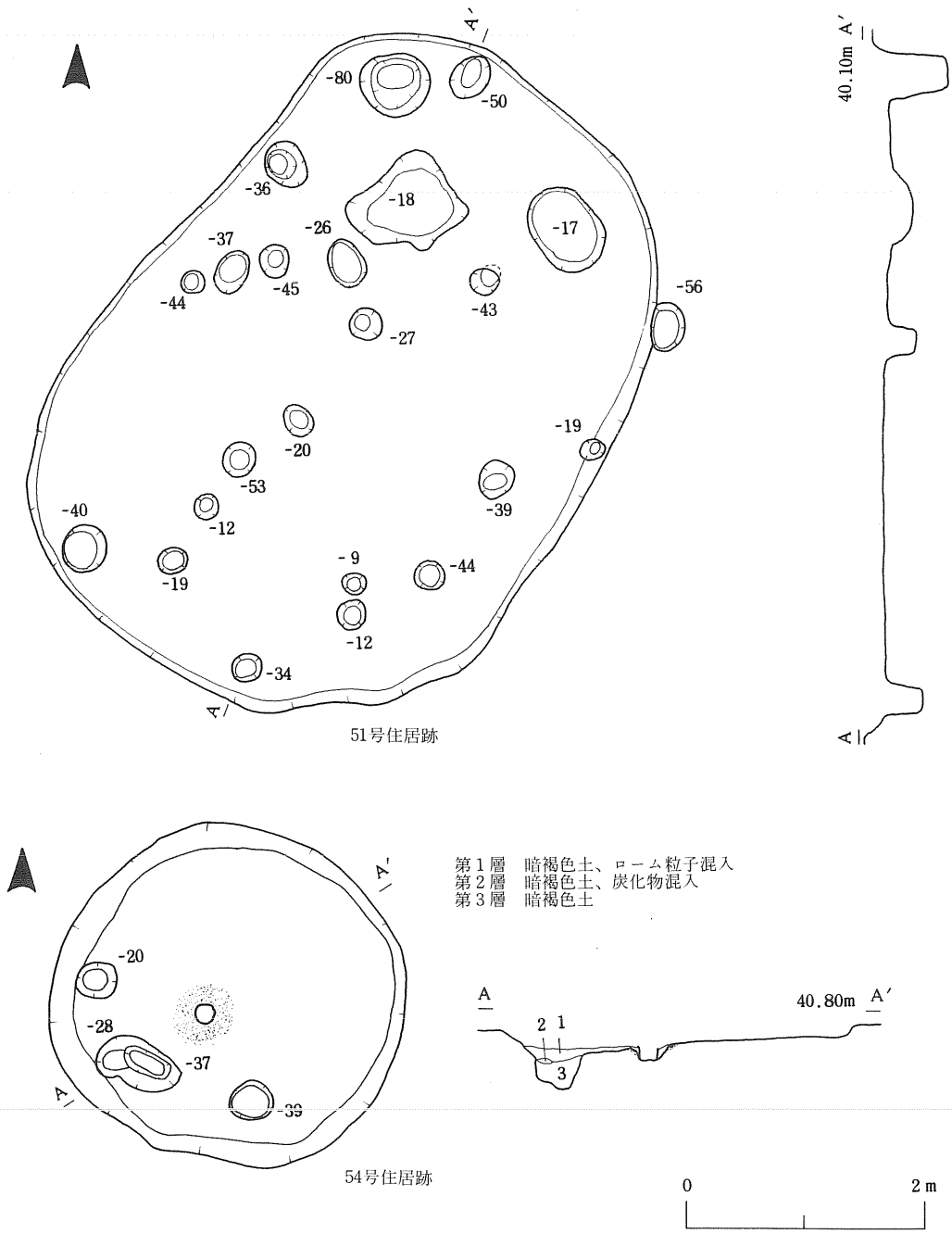
56 号住居跡（第 40 図）



第１層　黒色腐植土
第２層　黒褐色土
第３層　黒褐色土、ローム粒子混入
第４層　暗褐色土、炭化物混入
第５層　褐色土
第６層　褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第７層　褐色土、ローム粒子、ロームブロック混入
第８層　褐色土、炭化物混入
第９層　褐色土
第10層　暗褐色土、ローム粒子混入
第11層　暗褐色土
第12層　褐色土、ローム粒子混入
第13層　褐色土、ローム粒子混入
第14層　褐色土
第15層　褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第16層　褐色土、ローム粒子混入
第17層　黄褐色土、ローム粒子混入
第18層　黄褐色土

0　2m

第38図　53号住居跡



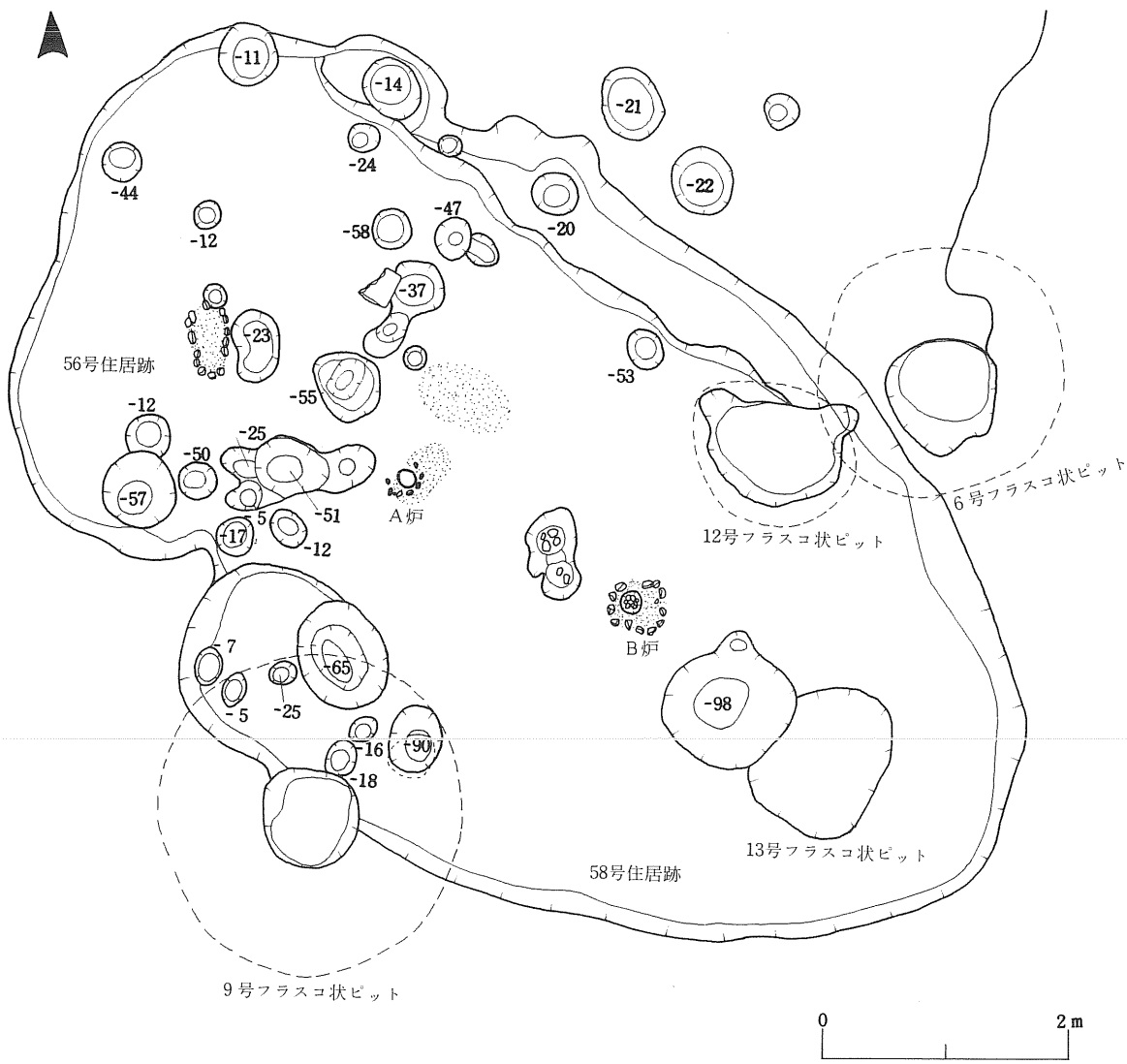
第39図　51号・54号住居跡

調査区北側で検出された。昭和47年度に発掘された住居跡である。

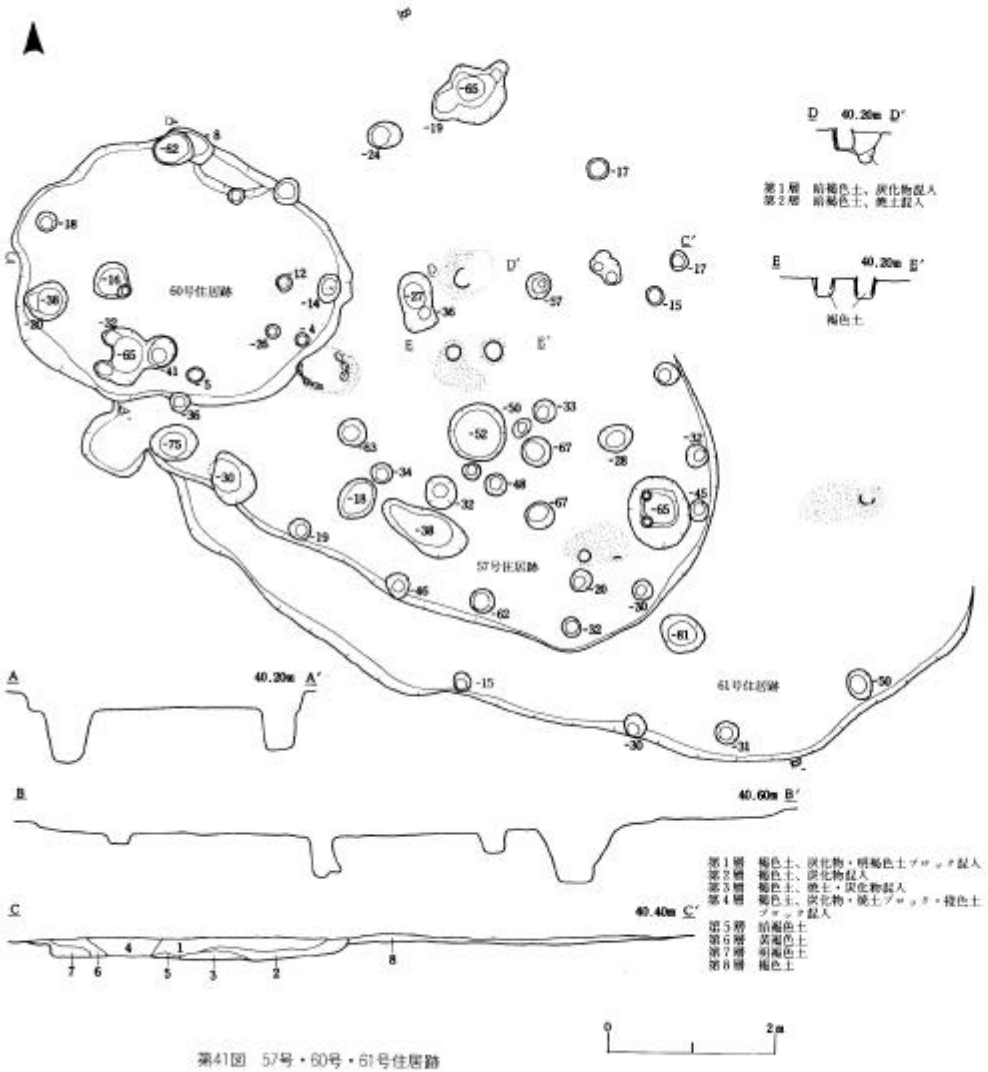
プランは長軸4.4 m、短軸は推定3.0 mの楕円形を呈する。非常に浅く、壁はゆるく斜めに立ち上がる。本住居跡にともなうピットは18個であるが主柱穴は不明である。炉は長方形の石囲炉で南側に埋設土器が配されていたようである。58号住居跡と重複しているが新旧関係は明確でない。ただ埋設土器からみると本住居跡が新しいようである。

出土遺物

土器：図示はしていないが、埋設土器として深鉢形土器の胴部が出土している。粘土紐貼付二本一組の隆線で渦巻文、鈎状文が配される（「小阿地下堤遺跡」昭和51年3月、秋田市教育委員会、参照のこと）。



第40図　56号・58号住居跡

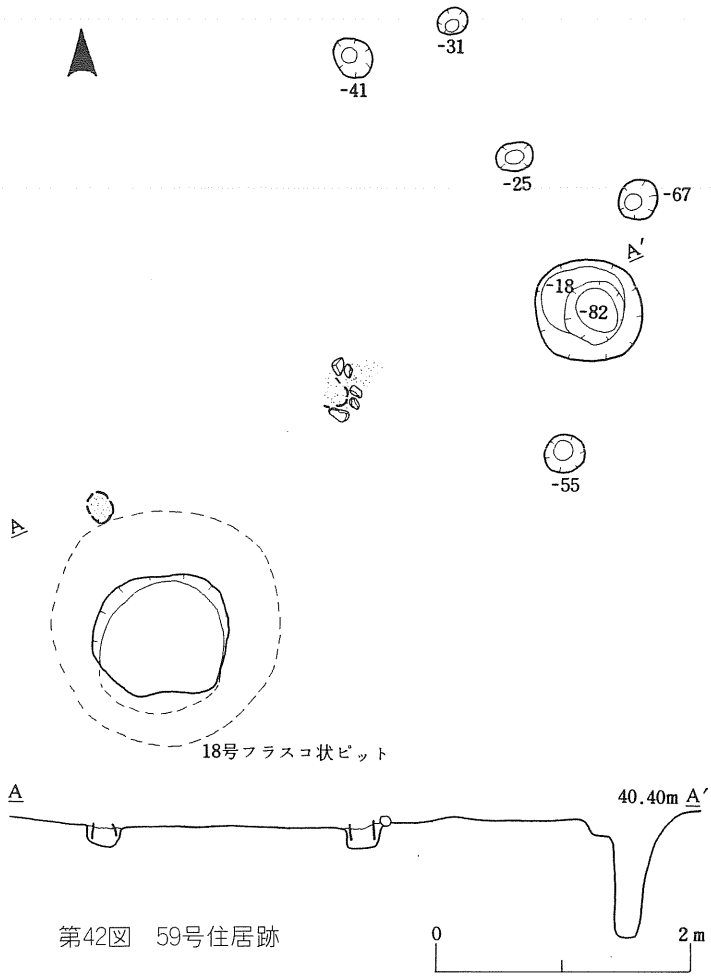


第41図　57号・60号・61号住居跡

57 号住居跡（第 41 図）

調査区北側で検出された。60 ・ 61 号住居跡と重複しており、61 号住居跡を切り、60 号住居跡に切られている。

プランは、北・西側が不明で規模は明確でないが楕円形を呈する。確認面からの深さは 10 ㎝で、壁は斜めに立ち上がる。ピットは総数 25 個検出されている。主柱穴は壁直下を周る深さ 30 ㎝以上のピットと思われる。炉は北西部に石囲炉が検出され、火熱で赤変している。また、南東、北部に四ケ所土器埋設炉が検出され周辺が赤変しているが、すべて本住居跡にともなうか不明である。床面は平坦で堅く良好である。



第42図　59号住居跡

出土遺物

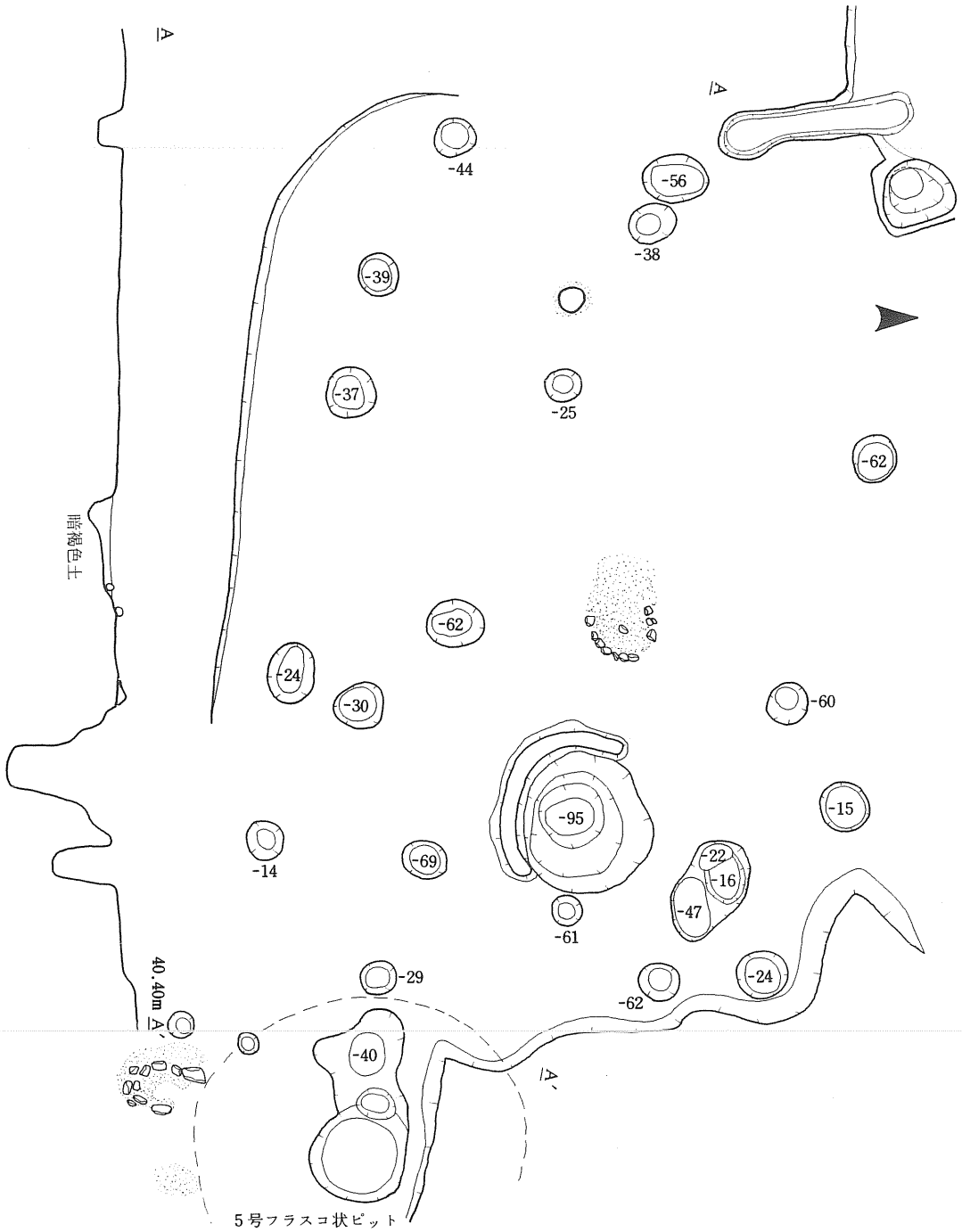
土器（第 67 ・ 84 図）

70 ～ 73 は土器埋設炉の埋設土器である。70 は口縁部が外反する深鉢形土器である。山形口縁をなし頂部の四ケ所に瘤状の突起を貼付し、口縁には粘土紐貼付の隆帯をめぐらし、上部に撚糸圧痕文が施される。頸部から下部は頂部下に垂下する粘土紐貼付の隆帯を施し指による押圧を加えている。それらを連絡するように細い粘土紐を弧状に貼り付けている。71 ～ 73 は上・下部が欠損する深鉢形土器で 72 は無文、71 ・ 73 は地文の縄文だけである。386 ～ 394 は覆土から出土した破片である。隆帯上に撚糸圧痕文が施されるもの、粘土紐貼付の隆帯が平行、波状に施文されるもの、また縁どりとして押圧縄文のみられるものなどがある。

石器（第 93 ・ 94 ・ 99 図）

130 ～ 135 ・ 206 は覆土から出土した。130 は先端が欠損する無茎石鏃、131 は縦型石匙、132 ～ 134 はヘラ状石器である。石質はすべて頁岩である。135 は丸みをもつ磨製石斧である。

58 号住居跡（第 40 図）

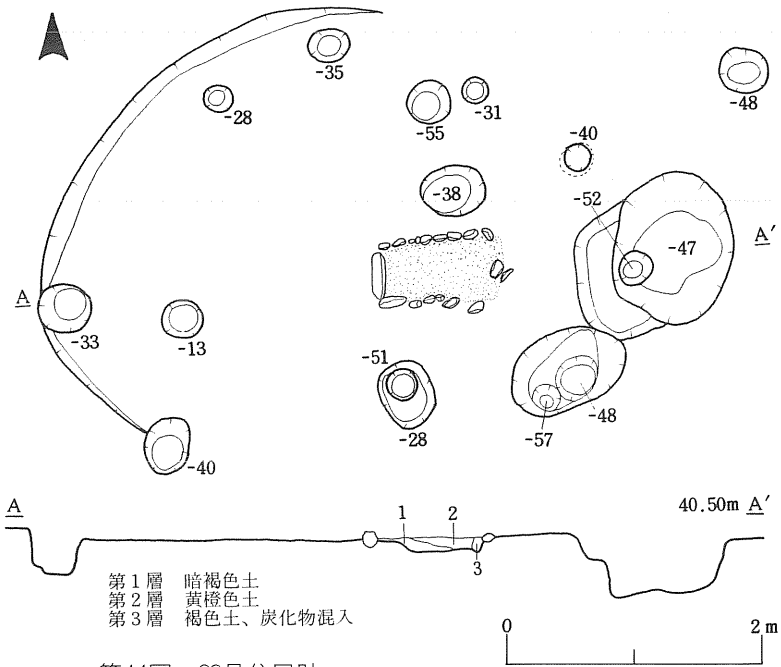


第43図　62号住居跡

0　2m

調査区の北側で検出された。昭和47年度に発掘された住居跡である。56号住居跡と重複しており新旧関係は明確でないが、炉埋設土器から本住居跡が新しいようである。

プランは、長軸推定約7.0 m、短軸5.5 mの楕円形を呈する。壁は非常に浅い。ピットは9個検出されているが、主柱穴は不明である。南東部に径1.0 m、深さ98 cmの特異なピットが検出された。炉は中軸線上に石囲炉を二基検出した。A炉には深鉢形土器が埋設されている。B炉の中央には小穴が掘られ礫が詰められている。いずれも内部、周辺は火熱で赤変している。床面は平坦で堅く良好である。



第44図　63号住居跡

出土遺物

土器（第66・84図）

68はA炉埋設土器である。キャリパー形を呈する深鉢形土器である。口縁部に波状、頸部には三条の粘土紐貼付の隆帯をめぐらしている。地文はRL（縦回転）単節斜縄文である。395～397は覆土から出土した破片である。粘土紐を貼付し渦巻文などが施される。

石器（第94図）

136～138は覆土から出土した。136は縦型石匙、137は上部が欠損するヘラ状石器である。石質はいずれも頁岩である。138は上部欠損の磨製石斧である。

59号住居跡（第42図）

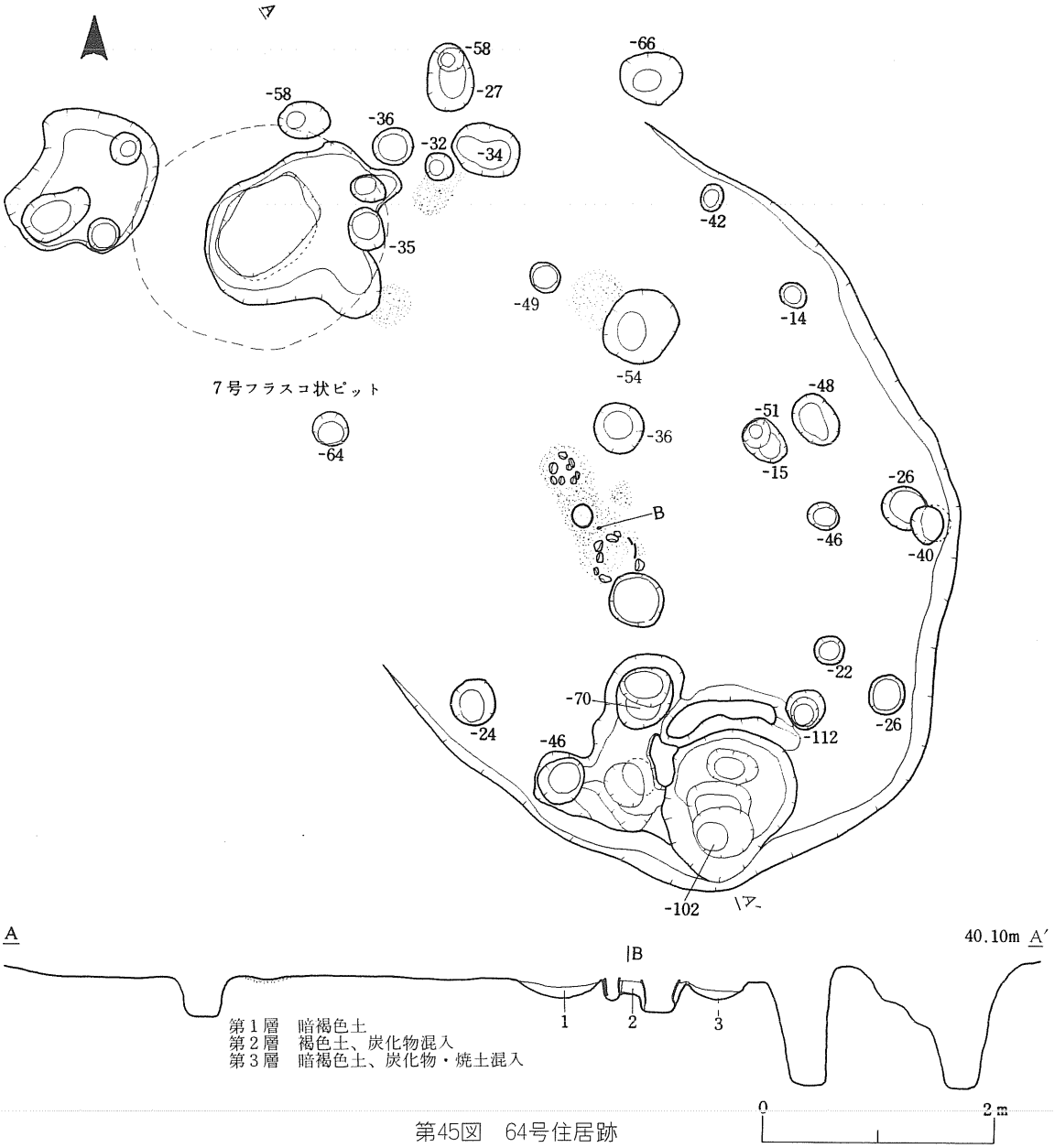
調査区北側で検出された。

削平されプランは不明である。石囲土器埋設炉と、それにともなうと考えられるピットが北東部で検出され住居跡と判明した。炉の礫は西側が抜き取られており、また埋設土器は小破片になっている。

60号住居跡（第41図）

調査区北側で検出された。57号住居跡と重複しており本住居跡が57号住居跡を切っている。

プランは長軸4.0 m、短軸3.2 mの楕円形を呈する。確認面からの深さは20 cmで、壁はほぼ垂直



第45図　64号住居跡

に立ち上がる。ピットは15個検出されているが主柱穴は不明である。炉は検出されなかった。床面は平坦で堅く良好である。

出土遺物

土器（第84図）

398～401は覆土から出土した破片である。細い粘土紐貼付の隆帯や沈線が施される。隆帯上に撚糸圧痕文が施されるものもある。

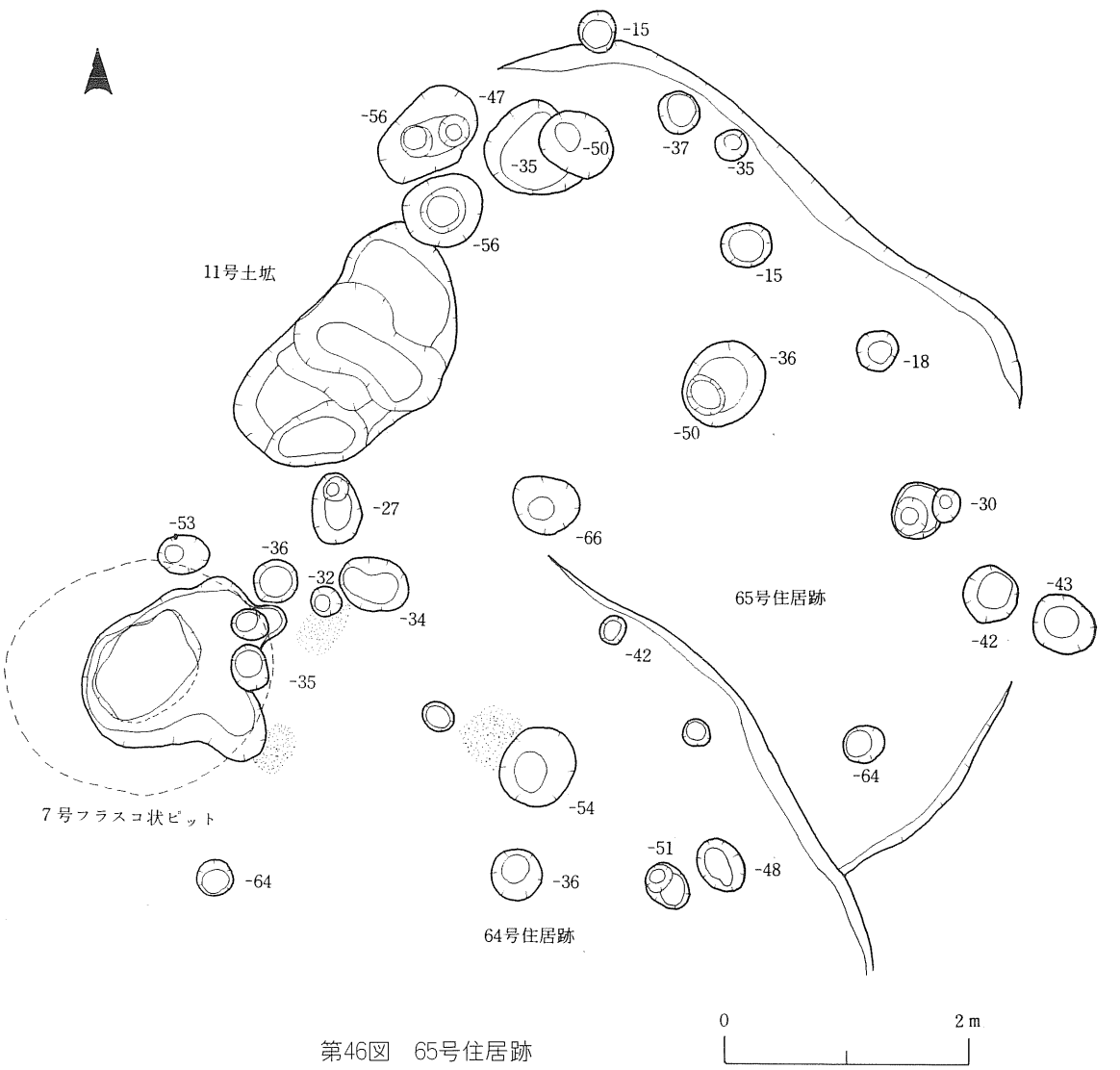
石器（第94図）

139 ～ 141 は覆土から出土した。139 ・ 140 は無茎石鏃である。141 は縦型石匙である。石質はすべて頁岩である。

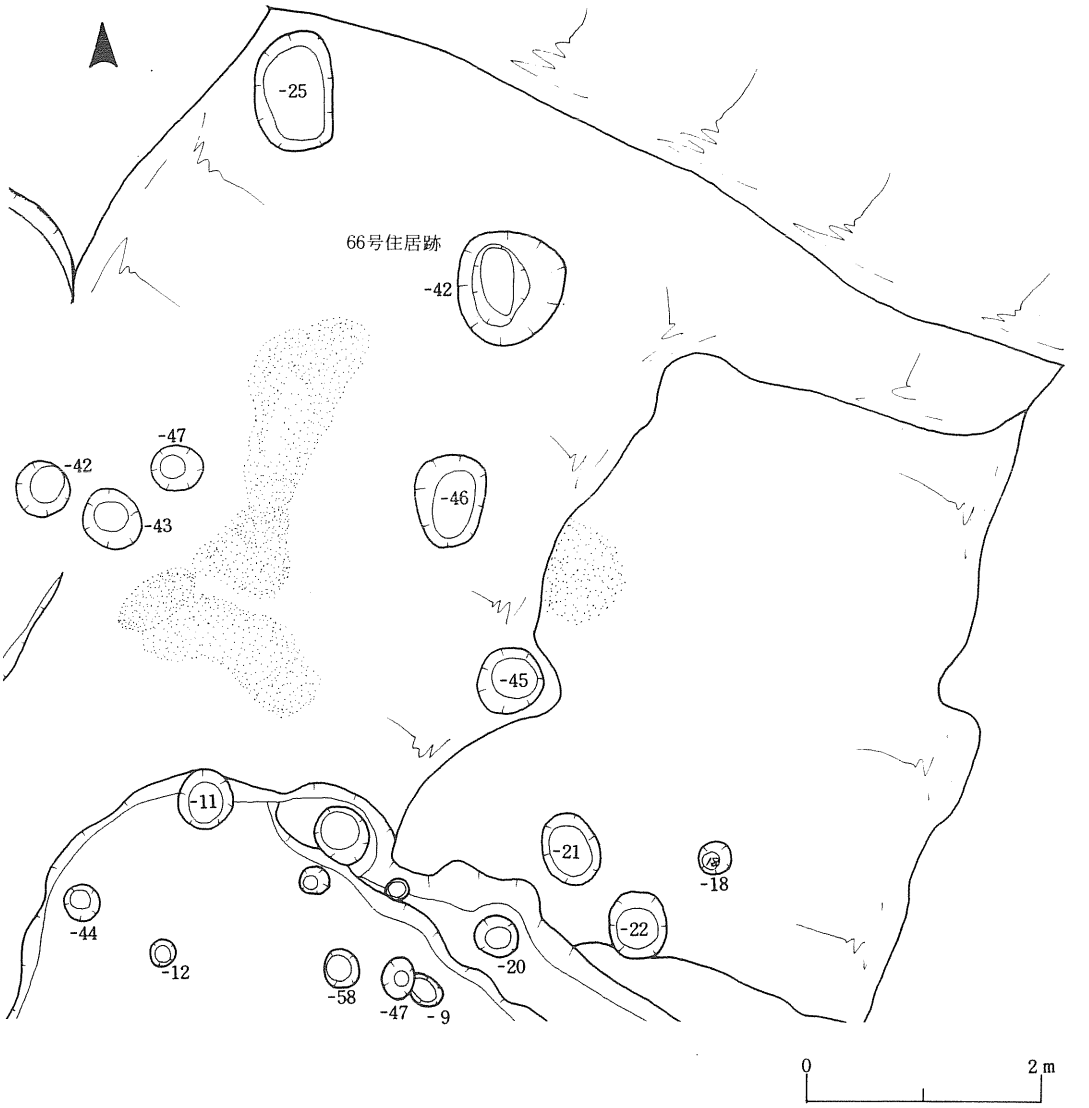
61 号住居跡（第 41 図）

調査区北側で検出された。57 号住居跡と重複しており、本住居跡が切られており大部分が 57 号住居跡に占められる。北壁は削平されており不明である。

プランは、規模は不明であるが東西に長い楕円形を呈する。確認面からの深さは 10 cmで、壁は斜めにゆるやかに立ち上がる。ピットは南壁下に 5 個検出されている。炉は南東部に土器埋設炉が検出された。深鉢形土器の胴部が埋設され、周辺は火熱で赤変している。57 号住居跡床面で検出されている土器埋設炉の中には本住居に含まれるものがある可能性が考えられる。床面は平坦で堅く良



第46図　65号住居跡



第47図　66号住居跡

好である。

出土遺物

土器（第 67 ・ 84 図）

74 は炉埋設土器である。深鉢形土器の胴部で羽状縄文が施文される。402 は覆土から出土した破片である。粘土紐貼付の隆帯上に撚糸圧痕文が施される。

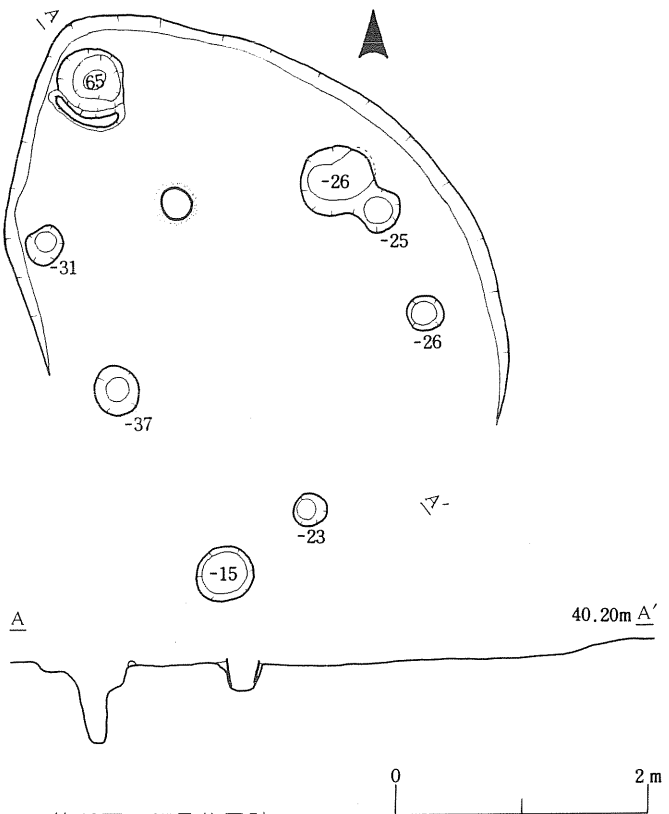
石器（第 94 図）

142 は覆土から出土した無茎石鏃で、石質は頁岩である。

62 号住居跡（第 43 図）

調査区中央部西側で検出された。北・西・南東部の壁は削平されて不明である。

プランは、推定で長軸 8.5 m、短軸 5.5 m の隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは遺存の良好な東側で深さ 10 cmで、壁は斜めに立ち上がる。ピットは 21 個検出されているが主柱穴については不明である。炉は中央部に石囲炉が検出されている。西側の礫は抜き取られて無い。内部は火熱で赤変している。また、西側に小形の土器埋設炉が認められる。中軸線東側に径 1.3 m、深さ 95 cmの断面がロート状を呈する特異なピットが検出された。南西部には黄白色粘土を馬蹄形状に盛土している。床面は平坦で堅く良好である。



第48図　67号住居跡

出土遺物

土器（第 84 図）

403 ～ 407 は覆土から出土した破片である。粘土紐貼付や沈線による菱形・渦巻文・半截竹管状工具による刺突文などが施される。

石器（第 94 図）

143 ～ 146 は覆土から出土した。143 は両面加工のヘラ状石器である。144 ～ 146 は刃部、上部が欠損する磨製石器である。

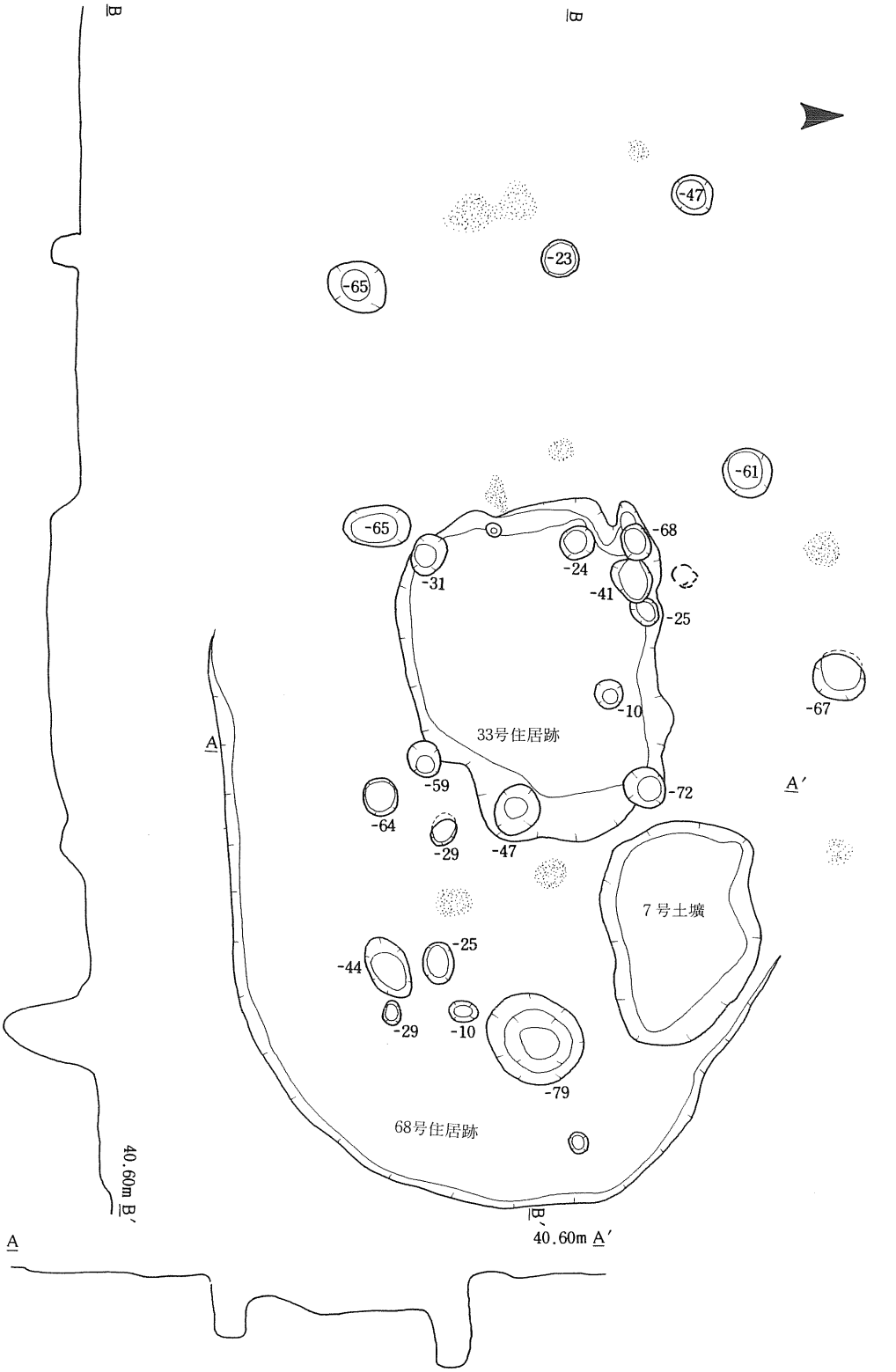
土製品（第 163 図）

35 は覆土から出土した。三角柱形を呈する土製品で一辺に面取りされている。土冠と思われる。

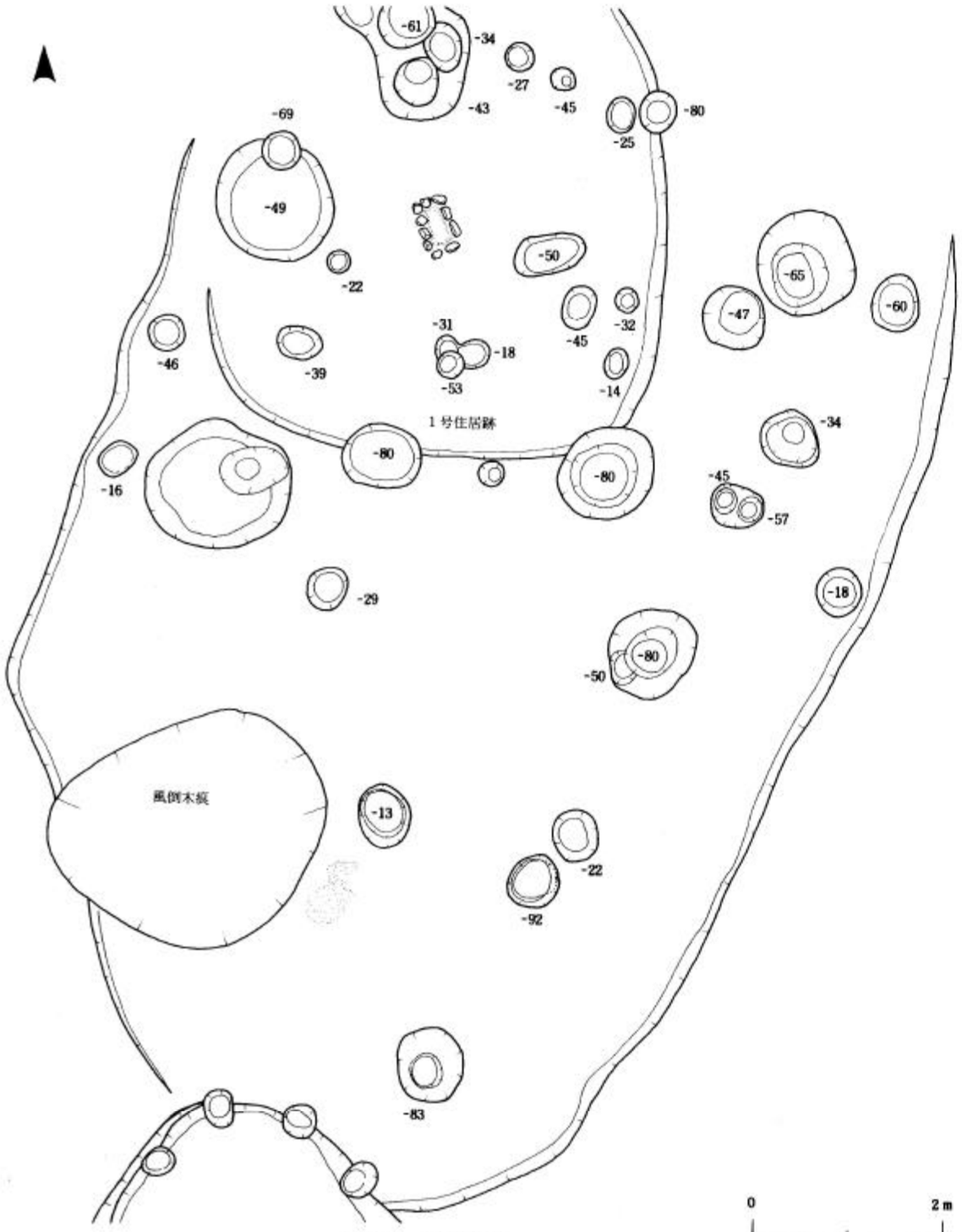
63 号住居跡（第 44 図）

調査区中央部西側で検出された。

プラン、規模は西壁しか検出できず不明であるが、ピットの配列から推定すると、東西に長い楕円形を呈すると思われる。遺存する西壁で確認面からの深さ 7 cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。ピットは 13 個検出され楕円形に配される。主柱穴は深さ 30 cm以上のものと思われる。炉は中央部



第49図　33号・68号住居跡


-61
-34
-27
-45
-43
-80
-25
-69
-49
-50
-22
-65
-60
-47
-31
-18
-45
-32
-46
-39
-53
-14
1号住居跡
-34
-80
-80
-16
-45
-57
-29
-18
-80
-50
風倒木痕
-13
-22
-92
-83
0
2m

第50図　69号住居跡

に位置する。西側に大きな礫を配し、拳大の礫がまわる長方形石囲炉である。内部は火熱で赤変している。床面は平坦で堅く良好である。

出土遺物

土器（第 84 図）

408 ～ 410 は覆土から出土した小破片である。沈線によって文様が施され、刻目文などが施文される。

石器（第 94 図）

147 は覆土から出土した無茎石鏃である。石質は頁岩である。

64 号住居跡（第 45 図）

調査区北側で検出された。北西・西壁は削平されて不明である。

プランは、推定長軸 7.0 m、短軸 5.0 m の南北に長い楕円形を呈する。確認面からの深さは良好な部分で約 5 ㎝と浅い。壁は斜めに立ち上がる。ピットは 21 個検出されており、主柱穴は壁に沿って周る深さ 40 ㎝以上のものが考えられる。炉は中央部に位置する。二基の石囲炉が北・南側に隣接して検出され、その間に土器埋設炉が確認された。周辺は火熱で赤変している。中軸線上南壁下に径 1.1 m、深さ約 1.0 m、断面形がロート状を呈する特異なピットが検出された。北側に黄白色粘土が馬蹄形状に盛土されている。床面は平坦で堅く良好である。

出土遺物

土器（第 68 ・ 87 図）

75 ・ 76 は炉埋設土器である。口縁部、底部が欠損する深鉢形土器である。75 は粘土紐貼付の隆帯によって文様が施される。口縁部は弧状に貼付された両側に押圧縄文が縁どりされている、頸部には二条の隆帯がめぐり、上部には同様の押圧縄文がみられる。76 は頸部に一条の隆線がめぐり、縦に蛇行する粘土紐貼付が施される。411 ～ 424 は覆土から出土した口縁部破片である。粘土紐貼付の隆帯で文様が施され渦巻文などが施文される。413 ～ 418 のように隆帯に沿って押圧縄文で縁どりされるものと、419 ～ 424 のように隆帯だけのものがある。

石器（第 94 図）

148 ～ 153 は覆土から出土した。148 ・ 149 は無茎石鏃、150 ・ 151 は両面加工のヘラ状石器である。石質はすべて頁岩である。152 ・ 153 は磨製石斧である。152 は刃部が欠損している。

65 号住居跡（第 46 図）

調査区北端で検出された。64 号住居跡と重複しており本住居跡が切られている。北西壁、東コーナー部は削平されて不明である。

プランは、長軸 7.0 m、推定短軸 4.7 m の楕円形を呈する。壁は非常に浅く、かすかに立ち上がっている。ピットは 15 個検出されているが主柱穴は不明である。炉は検出されなかった。床面は凹凸があるが堅く良好である。

出土遺物

土器（第 85 図）

425 ～ 433 は覆土から出土した破片である。粘土紐貼付の隆帯を主体に文様が施され、波状・弧線・渦巻文などが施文される。428 は口縁に撚糸圧痕文を施す隆帯が貼付される。430 は撚糸圧痕文が「r」状や隆帯を縁どる形で施文されている。

石器（第 95 ・ 99 図）

154 ～ 160 ・ 207 は覆土から出土した。154 は無茎石鏃、155 は鋭利な石錐である。156 は縦型石匙、157 ～ 159 はヘラ状石器で、159 は大型である。160 は刃部が欠損する磨製石斧、207 は磨石である。

66 号住居跡（第 47 図）

調査区最北端で検出された。北側は沢で削平されている。東側は不明の落ち込み、南側は 56 号住居跡によって壊されている。

プラン、規模は不明で、西壁がわずかに確認されている。床面に、火熱により焼土が広範囲に認められる。

出土遺物

土器（第 86 図）

434 ～ 442 は覆土から出土した口縁部破片である。山形、平縁の口縁部を有し、粘土紐貼付・沈線文などで文様が施される。434 ・ 441 は沈線文が施され細長い刻みがみられる。435 ～ 438 は弧状、垂下する粘土紐貼付が施され、439 ・ 440 は渦巻文、菱形文などが施文される。

石器（第 95 ・ 99 図）

161 ～ 168 ・ 208 は覆土から出土した。161 ～ 163 は無茎石鏃である。161 は抉り部分にアスファルトが付着している。164 は縦型石匙、165 は三脚石器と思われる。166 ・ 167 はヘラ状石器、168 は刃部が欠損する磨製石斧である。208 は卵形を呈する磨石である。

67 号住居跡（第 48 図）

調査区北側で検出された。南・西壁の一部は削平されて不明である。

プランは、長軸 4.7 m、短軸 3.4 m の楕円形を呈する。確認面からの深さは 10 ㎝で、壁は斜めにゆるやかに立ち上がる。ピットは 7 個検出されており主柱穴と思われる。中軸線北側に径 55 ㎝、深さ 65 ㎝、断面がロート状を呈する特異なピットがある。南側に黄白色粘土を土手状に盛土している。炉は中央やや北西部に位置する土器埋設炉である。周辺は火熱で赤変している。

出土遺物

土器（第 68 ・ 86 図）

77 は炉埋設土器で、キャリパー形を呈する深鉢形土器である。四単位の土器で口縁四ケ所に瘤状の突起が配される。口縁部、頸部に粘土紐貼付の隆帯がめぐり、それらの間には波状に隆帯がめぐ

り、頂部下には橋状、中間点には弧状の粘土紐貼付が施文される。地文はLR（縦回転）単節斜縄文である。443 ～ 450 は覆土から出土した破片である。443 ・ 444 は粘土紐貼付の隆帯と撚糸圧痕文が施され、444 は刺突文もみられる。445 ～ 448 は隆帯による渦巻文、449 ・ 450 は沈線によって文様が施される。

石器（第 95 ・ 99 図）

169 ～ 172 ・ 209 ・ 210 は覆土から出土した。169 は無茎、170 は有茎の石鏃である。171 は石錐と思われる。172 は両面加工のヘラ状石器である。石質はすべて頁岩である。209 ・ 210 は磨石である。

68 号住居跡（第 49 図）

調査区中央部西側で検出された。西側⅔は削平のため不明である。また、中央部には本住居跡を切って 33 号住居跡が構築されている。

ピットの配列からプラン、規模を推定すると、長軸約 9.7 m、短軸約 5.2 m の東西に長い隅丸長方形を呈するようである。壁が遺存する東側では、確認面からの深さは約 10 cmで、壁は斜めに立ち上がる。住居跡にともなうピットは 14 個検出されている。主柱穴は長軸に沿って長方形に配される深さ 40 cm以上のピットと思われる。中軸線東側に径 80 cm、深さ 79 cmの特異なピットが検出された。炉は中軸線に三ケ所、その他に二ケ所焼土が分布する個所が認められ地床炉と思われる。床面は平坦で堅く良好である。

出土遺物

土器（第 86 図）

451 ～ 457 は覆土から出土した破片である。粘土紐貼付の隆帯、撚糸圧痕文で文様が施される。451 ～ 453 は縦に隆帯を垂下させ、鋸歯状文がみられる。454 は口縁に撚糸圧痕文、455 ・ 457 は隆帯上に撚糸圧痕文が施される。

石器（第 96 図）

174 ・ 175 は覆土から出土した。174 は石鏃、175 は両面加工のヘラ状石器である。石質はいずれも頁岩である。

69 号住居跡（第 50 図）

調査区中央南側で検出された。北壁は削平され不明である。また 1 号・ 72 号住居跡、風倒木痕によって壊されている。

プランは、北側が不明であるが推定長軸 12.8 m、短軸 8.1 m の隅丸長方形を呈する。壁は非常に浅く、斜めに立ち上がる。住居跡にともなうピットは 18 個検出されている。主柱穴は長軸壁と並行する深さ 60 cm以上の掘り方のしっかりしたピットと思われる。炉は検出できなかったが、南に焼土が分布する範囲が認められ、これが地床炉のひとつと思われる。床面は平坦で堅く良好である。

出土遺物

土器（第 87 図）

458 ～ 462 は覆土から出土した土器片である。沈線によって平行・波状・渦巻文などが施されている。

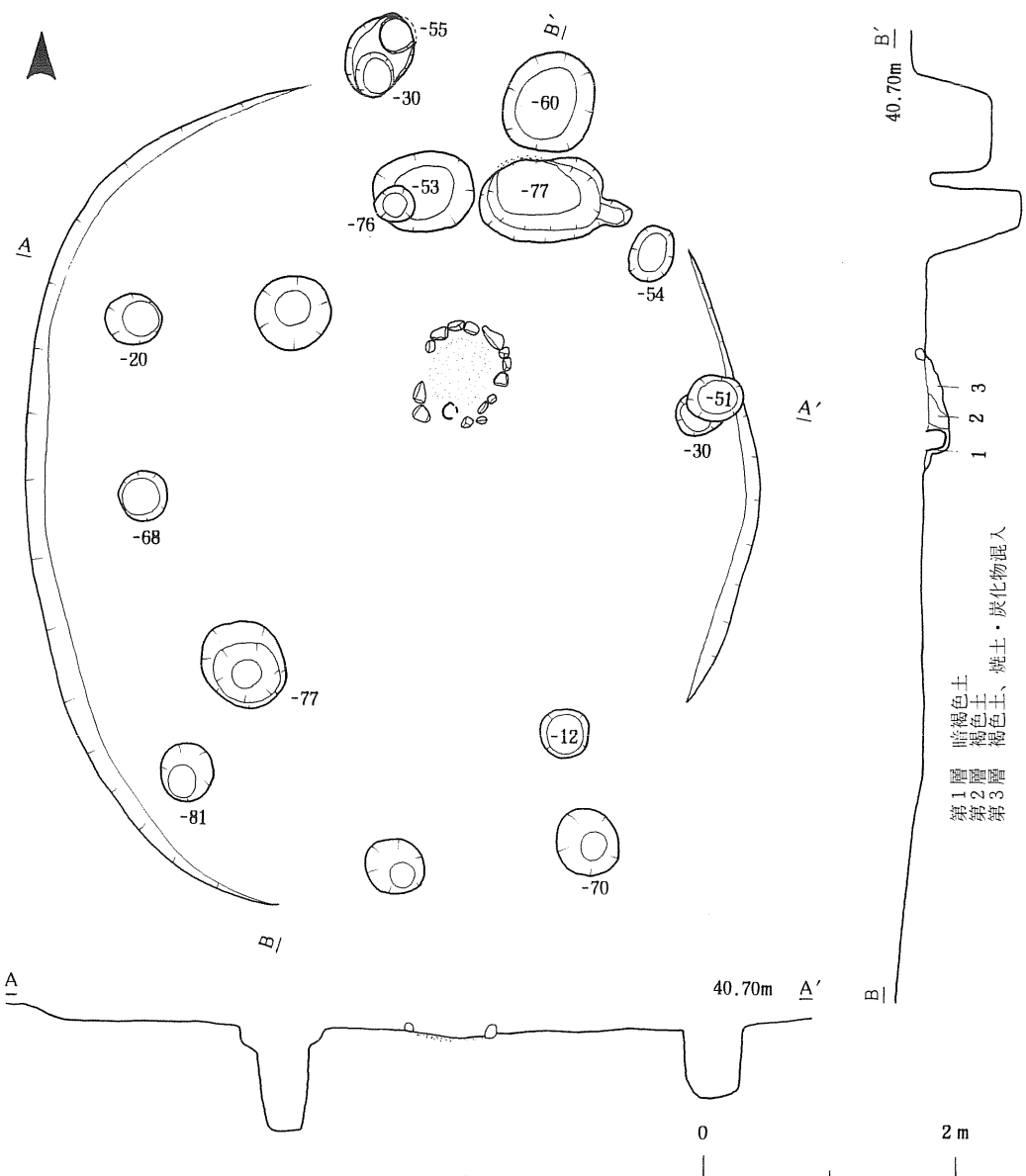
石器（第 96 図）

176 は覆土から出土した無茎石鏃である。

71 号住居跡（第 51 図）

調査区中央南側で検出された。北西・南壁は削平されて不明である。

プランは長軸 6.6 m、短軸 5.9 m の楕円形を呈する。確認面からの深さは 10 cmで、壁は斜めに立



第51図　71号住居跡

ち上がる。ピットは15個検出されている。主柱穴は深さ50㎝以上の掘り方のしっかりしたピットと思われる。炉は北寄りに位置する。石囲土器埋設炉で、埋設土器は南寄りに埋設されている。礫は西、南側の一部が抜き取られている。中は火熱で赤変している。床面は平坦で堅く良好である。

出土遺物

土器（第68・87図）

78は炉埋設土器である。胴部が膨らむ深鉢形土器で口縁部、底部は欠損する。頸部に四条の沈線文がめぐり、胴部には垂下する沈線から渦巻文が展開する。地文はLR（縦回転）単節斜縄文である。466・467は覆土から出土した。467は太い隆帯が施される。

石器（第96図）

177は覆土から出土した細身の磨製石斧である。

72号住居跡（第51図）

調査区中央南側に検出された。73号住居跡の北側を壊して構築されている。

プランは長軸3.5ｍ、短軸3.0ｍの小さな楕円形を呈する。確認面からの深さは42㎝で、壁は斜めに立ち上がるが、東壁は傾斜がゆるやかである。住居跡にともなうピットは4個と思われるが、主柱穴は不明である。炉は検出できなかった。床面は堅く良好である。

出土遺物

土器（第87図）

468～474は覆土から出土した土器片である。粘土紐貼付の隆帯や、沈線によって文様が施される。468・469・472・474は隆帯が平行・波状・鋸歯状に施される。471は細い隆帯が「フ」状に描かれている。470・473は沈線によって平行、渦巻文などが施文される。

石器（第96・99図）

178・179・211は覆土から出土した。178は無茎石鏃で抉りの部分にアスファルトが付着する。179は両面加工のヘラ状石器である。石質はいずれも頁岩である。211は欠損する磨石である。

73号住居跡（第52図）

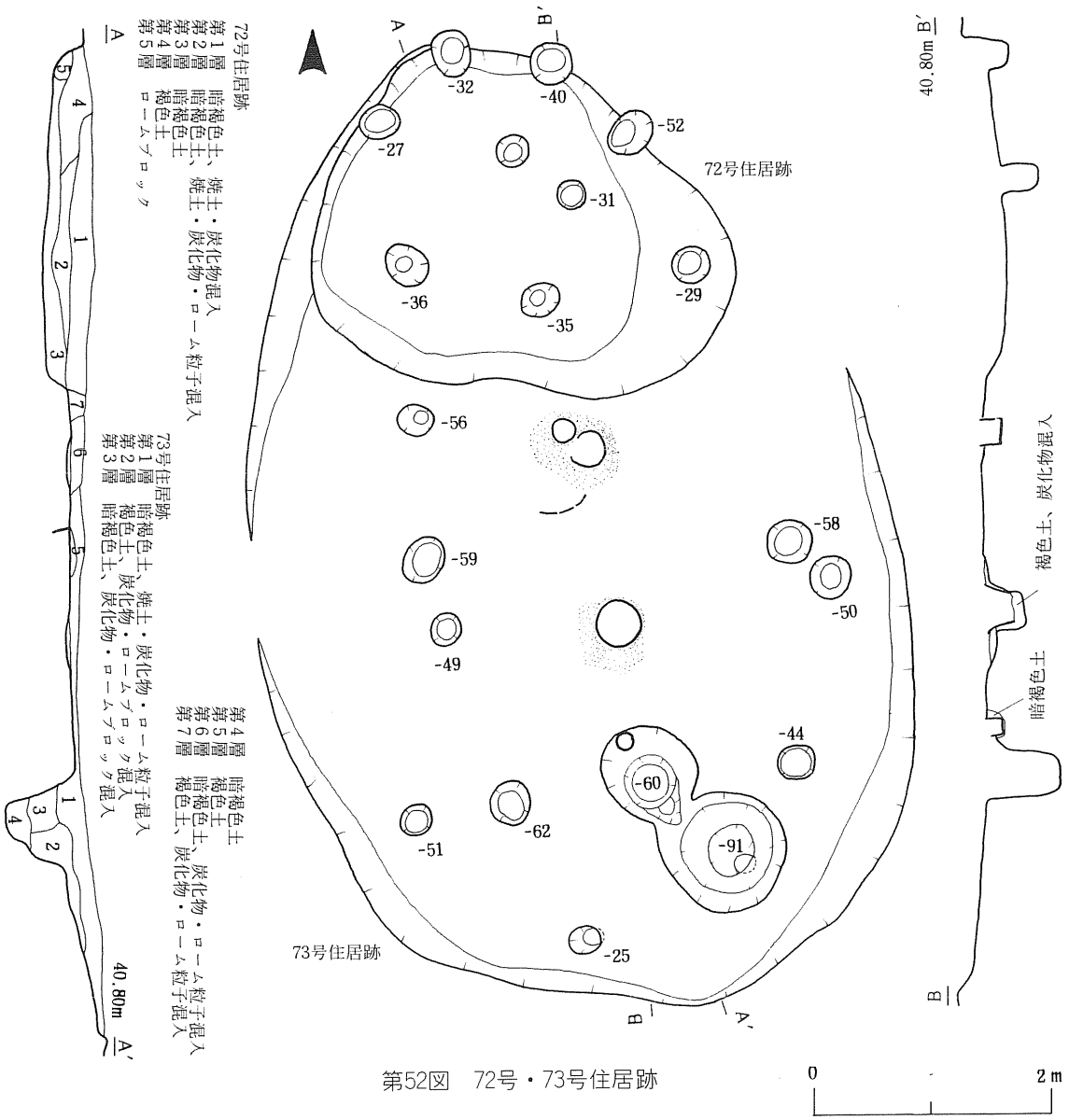
調査区中央南側で検出された。北側は72号住居跡によって壊されている。

プランは、推定長軸約8.3ｍ、短軸5.4ｍを呈する楕円形を呈する。確認面からの深さは10㎝で、壁は斜めに立ち上がる。ピットは15個検出されている。主柱穴は長軸に並行して周る深さ30㎝以上のピットと思われる。炉は中央長軸線上に土器埋設炉が二基検出された。周辺は火熱で赤変している。床面は平坦で堅く良好である。

出土遺物

土器（第68・69・87図）

79～82は炉埋設土器である。79は口縁部、底部が欠損する深鉢形土器である。口縁部、頸部には粘土紐貼付の隆帯、胴部に二・三条の沈線がめぐっている。地文はRL（縦回転）単節斜縄文であ



第52図　72号・73号住居跡

る。80 は口縁部の四ケ所に太い隆帯で横に「∽」状の文様が施される。地文は LR（縦回転）単節斜縄文である。81 は口縁部、底部が欠損する深鉢形土器である。地文は LR（縦回転）単節斜縄文である。82 は頸部から外反する口縁部、底部が欠損する深鉢形土器である。口縁下部に細い粘土紐貼付により鋸歯状文が施される。地文は LR（縦回転）単節斜縄文である。475 は覆土から出土した土器片である。口縁部に二条の隆帯がめぐっている。

石器（第 96 図）

180 ～ 182 は覆土から出土した。181 は細身の縦型石匙、182 は先端部が欠損する削器状の石器である。石質はいずれも頁岩である。183 は刃部が欠損する磨製石斧である。

74 号住居跡（第 53 図）

調査区中央東側で検出された。

プランは径 6.3 m のほぼ円形を呈する。 確認面からの深さは 10 cmで、 壁は斜めに立ち上がる。ピットは 11 個検出されているが主柱穴は不明である。炉は中央部に位置する。土器埋設炉で埋設土器が 2 個体出土した。周辺は火熱で赤変している。床面は平坦で堅く良好である。

出土遺物

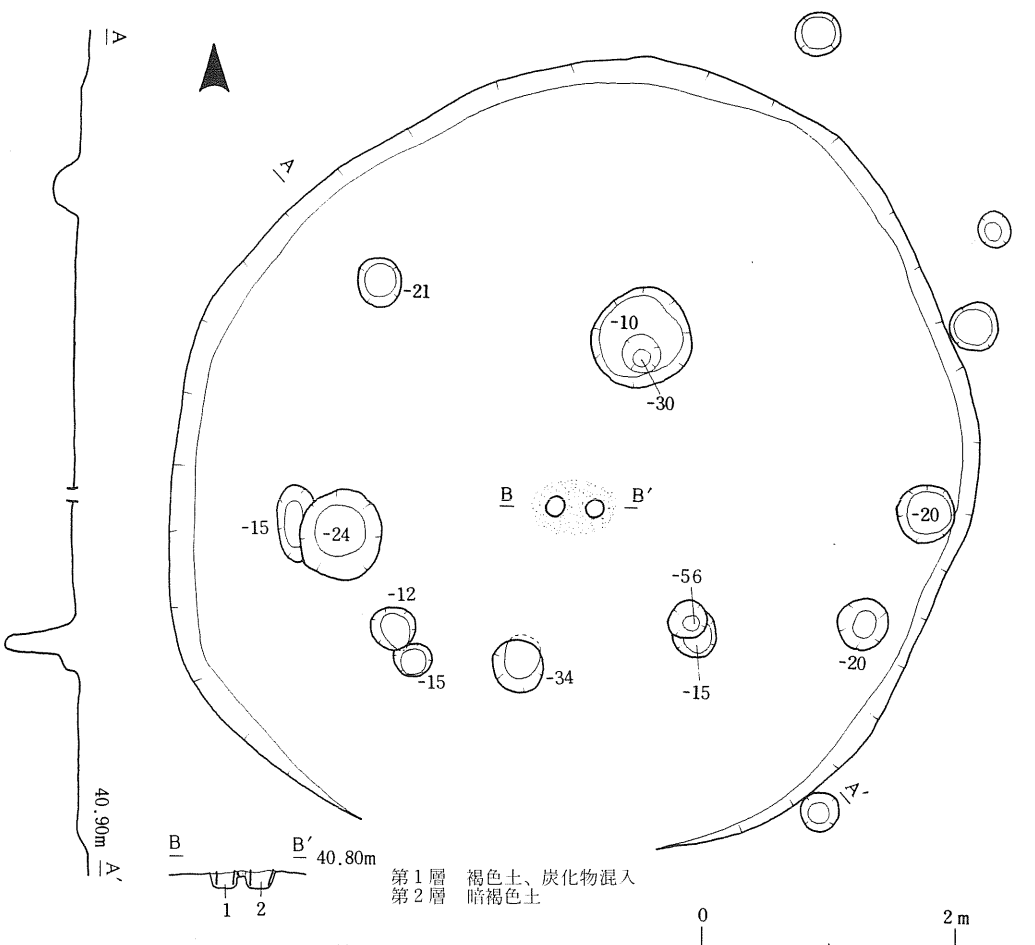
土器（第 69 図）

83 ・ 84 は炉埋設土器である。いずれも口縁部、底部が欠損する深鉢形土器である。83 は縦、84 は横方向に結束のある羽状縄文が施される。

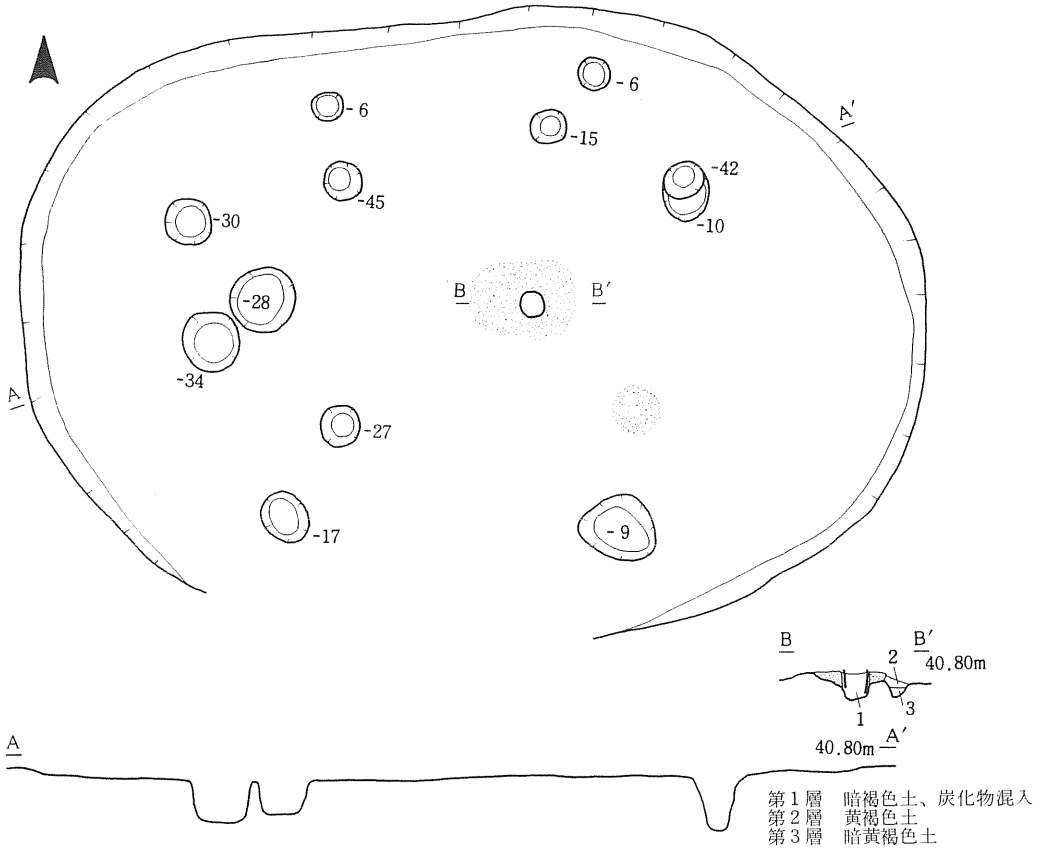
75 号住居跡（第 54 図）

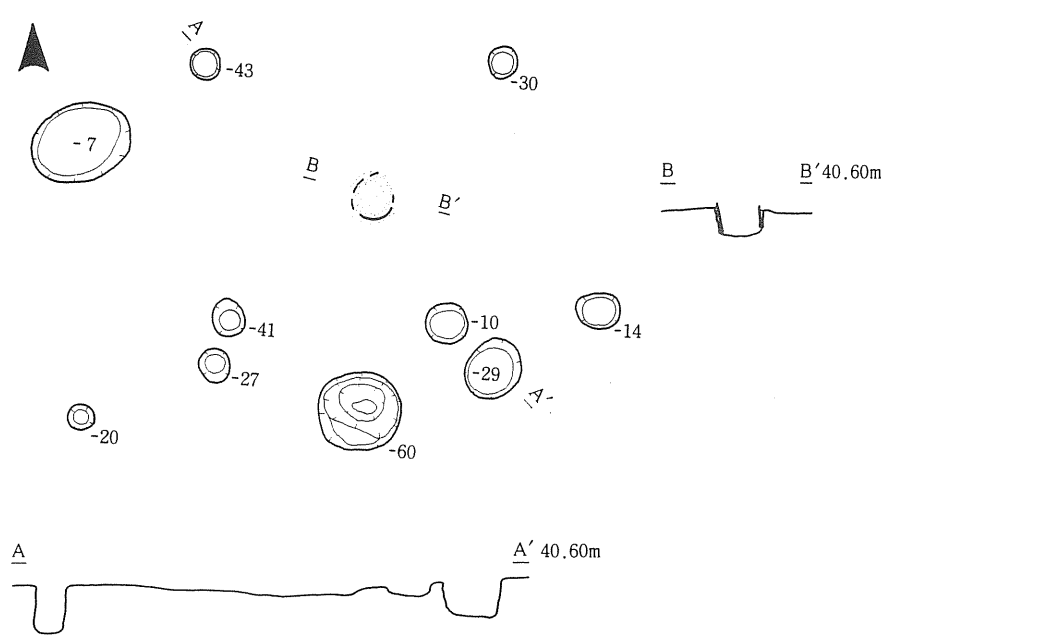
調査区中央東側で検出された。南壁は一部削平され不明である。

プランは長軸 7.1 m、短軸 5.1 mの楕円形を呈する。確認面からの深さは約 4 cmと浅く、壁は斜めに立ち上がる。ピットは 11 個検出されているが主柱穴は不明である。炉はほぼ中央部に位置する。



第53図　74号住居跡





第54図　75号・76号住居跡

土器埋設炉で深鉢形土器が埋設されており、周辺は火熱を受けて赤変している。床面は平坦で堅く良好である。

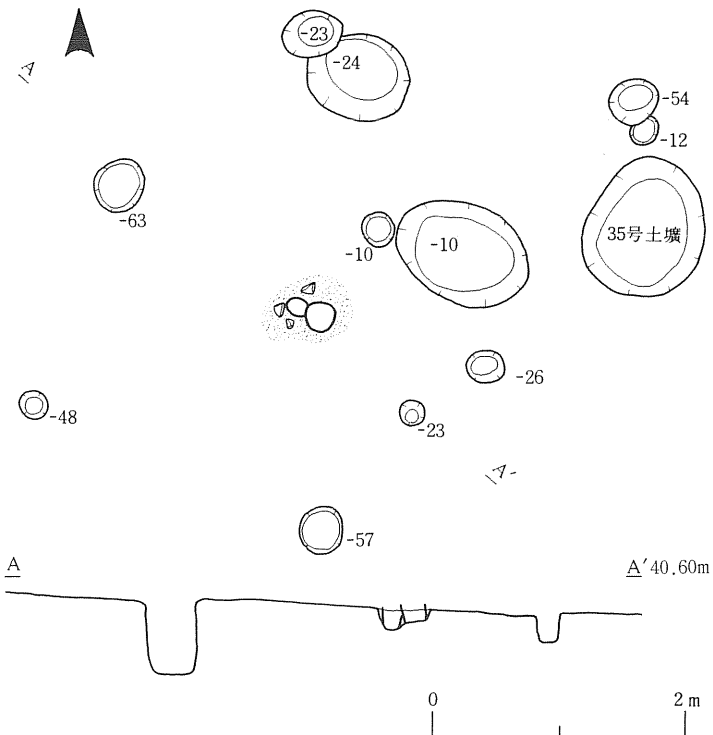
出土遺物

土器（第 69 図）

85 は炉埋設土器である。口縁、底部が欠損する深鉢形土器である。口縁部に粘土紐隆帯と半截竹管状工具内面による半隆起線文で山形の文様が施されている。

76 号住居跡（第 54 図）

調査区中央北側で検出された。壁は削平され、プラン、規模は不明である。炉と周辺ピットにより住居跡と判明した。炉は土器埋設炉で周辺は火熱で赤変している。炉の周りに 10 個程ピットが検出されているが主柱穴は不明である。



第55図　77号住居跡

出土遺物

土器（第 69 図）

86 は炉埋設土器である。深鉢形土器の胴部で地文は LR（縦回転）単節斜縄文である。

77 号住居跡（第 55 図）

調査区北東部に検出された。壁は削平され、プラン・規模は不明である。炉と周辺ピットにより住居跡と判明した。炉は石囲土器埋設炉である。礫は 3 個確認される他は抜き取られている。埋設土器は 2 個体出土した。周辺は火熱で赤変している。

出土遺物

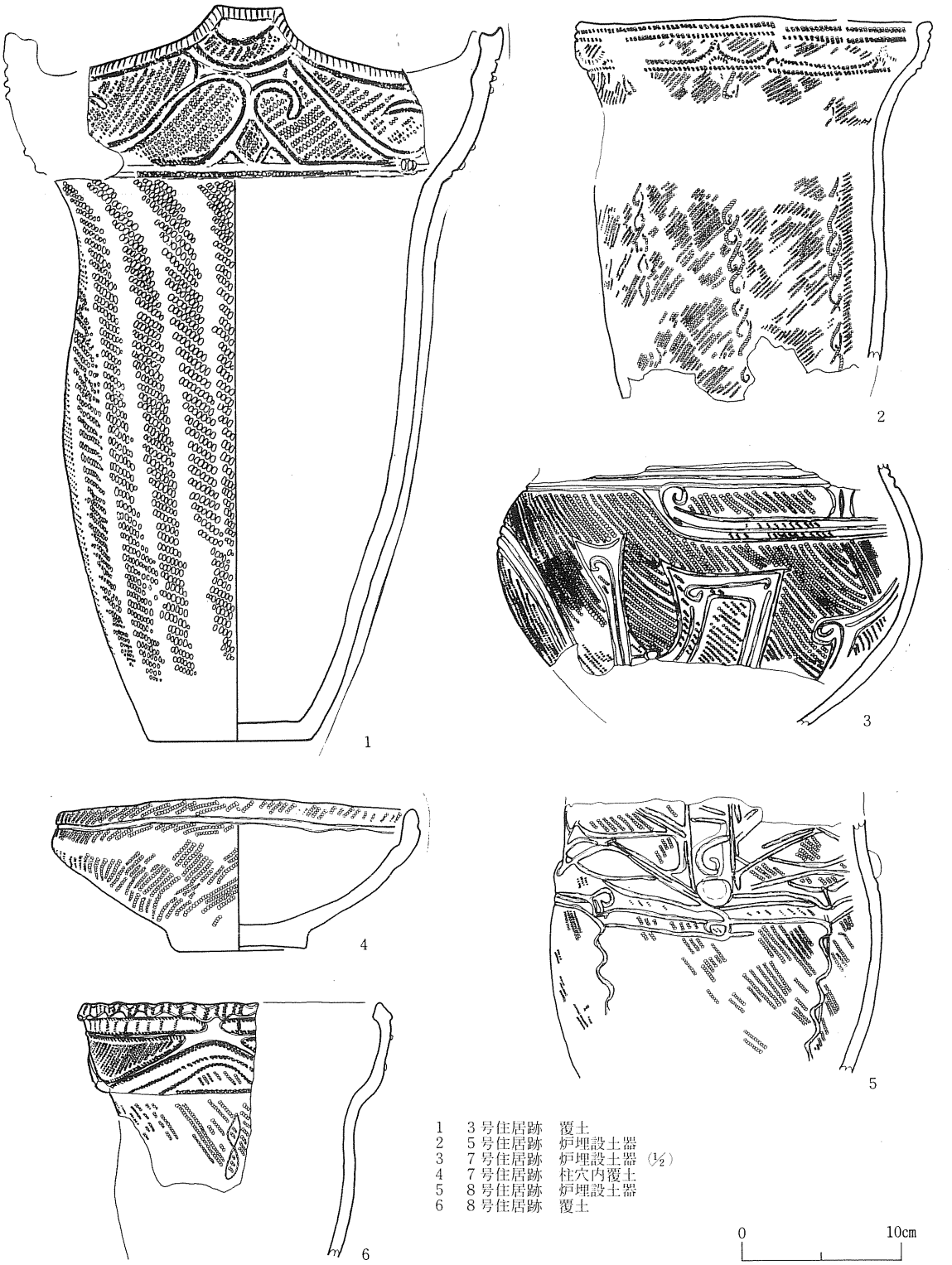
土器（第 69 図）

87 ・ 88 は炉埋設土器である。口縁部、底部が欠損する深鉢形土器である。地文は RL（縦回転）単節斜縄文である。

フラスコ状ピット・土壙

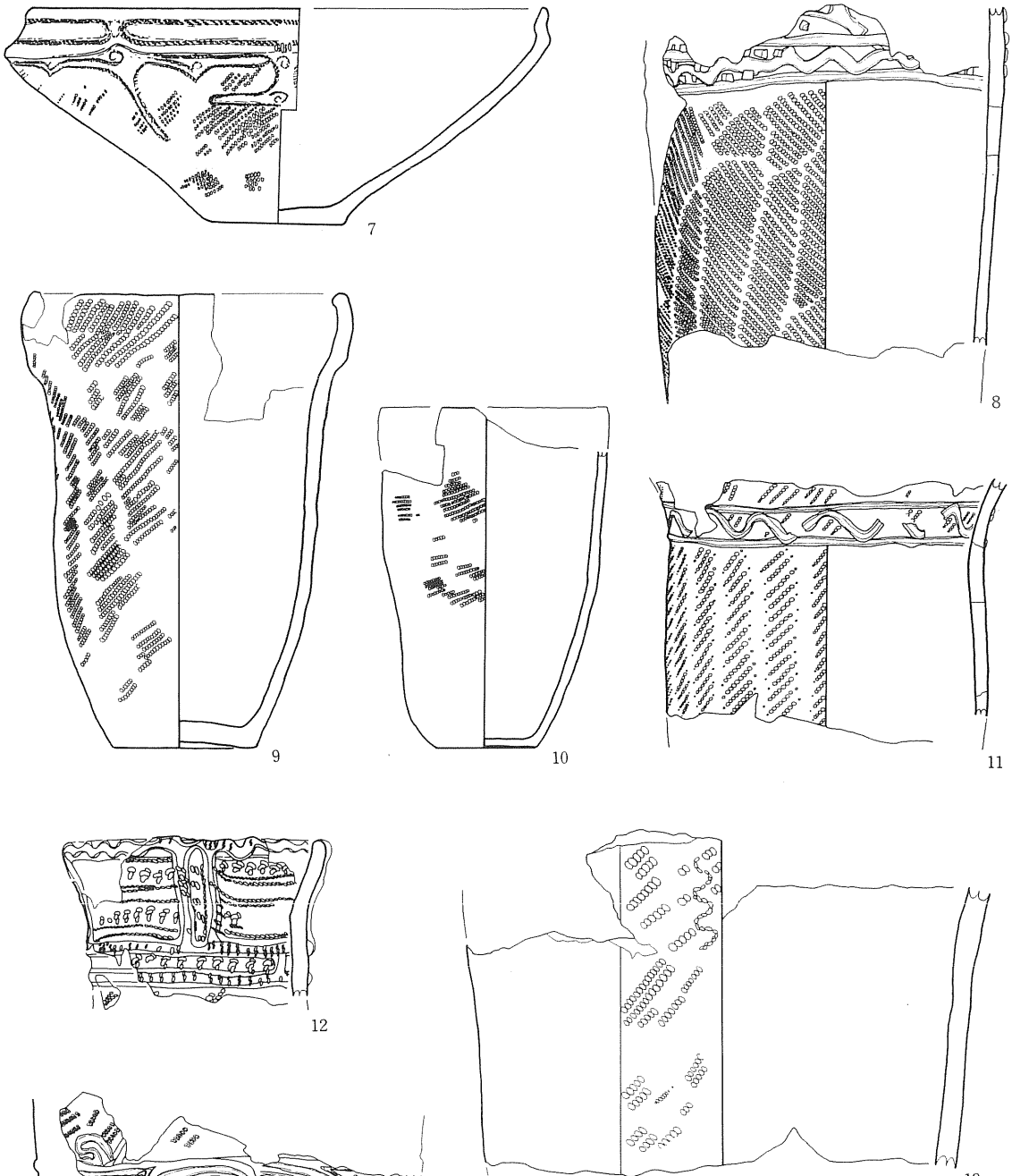
本遺跡からフラスコ状ピット 28 基、土壙 190 基が検出された。詳細については表にしてまとめた。

フラスコ状ピット出土遺物



1　3号住居跡　覆土
2　5号住居跡　炉埋設土器
3　7号住居跡　炉埋設土器（½）
4　7号住居跡　柱穴内覆土
5　8号住居跡　炉埋設土器
6　8号住居跡　覆土

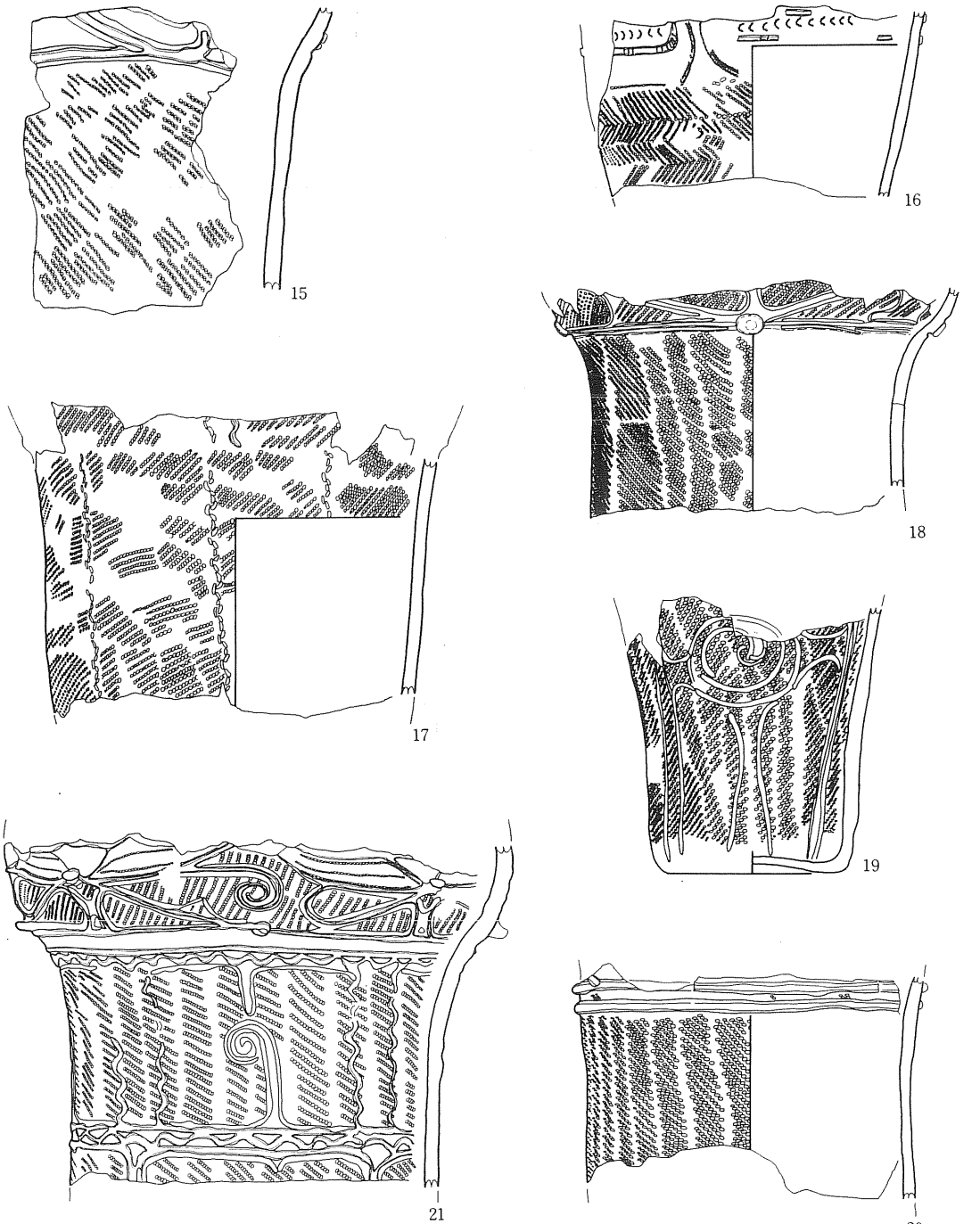
第56図　遺構内出土土器



7　9号住居跡　覆土
8　12号住居跡　旧炉埋設土器
9　15号住居跡　ピット内覆土
10　16号住居跡　覆土
11　16号住居跡　北側炉埋設土器
12　17号住居跡　炉埋設土器
13　18号住居跡　炉埋設土器
14　19号住居跡　炉埋設土器

0　10cm

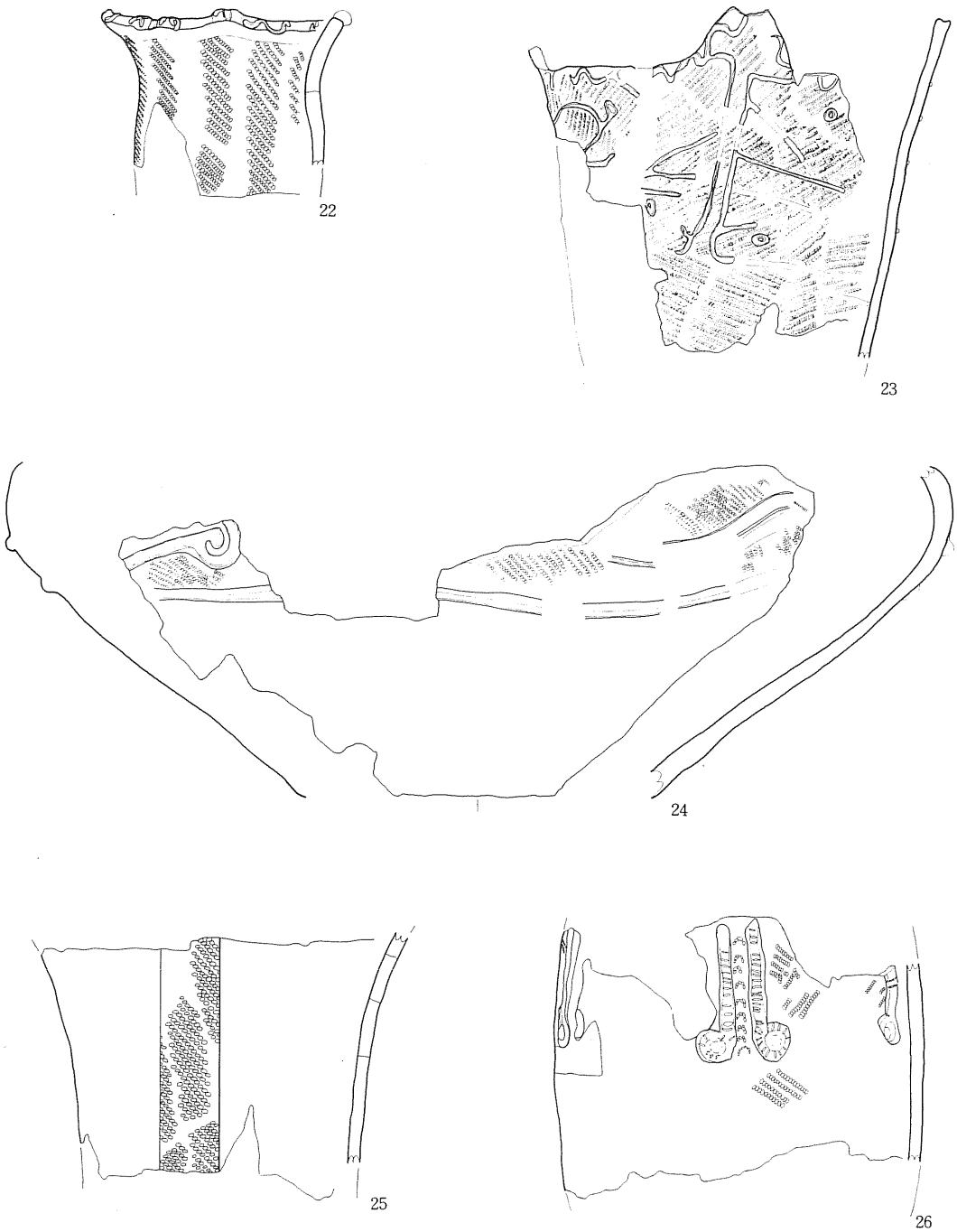
第57図　遺構内出土土器



15　19号住居跡　炉埋設土器
16　20号住居跡　炉埋設土器
17　21号住居跡　炉埋設土器
18　22号住居跡　炉埋設土器
19　23号住居跡　炉埋設土器
20　24号住居跡　炉埋設土器
21　25号住居跡　炉埋設土器

0　10cm

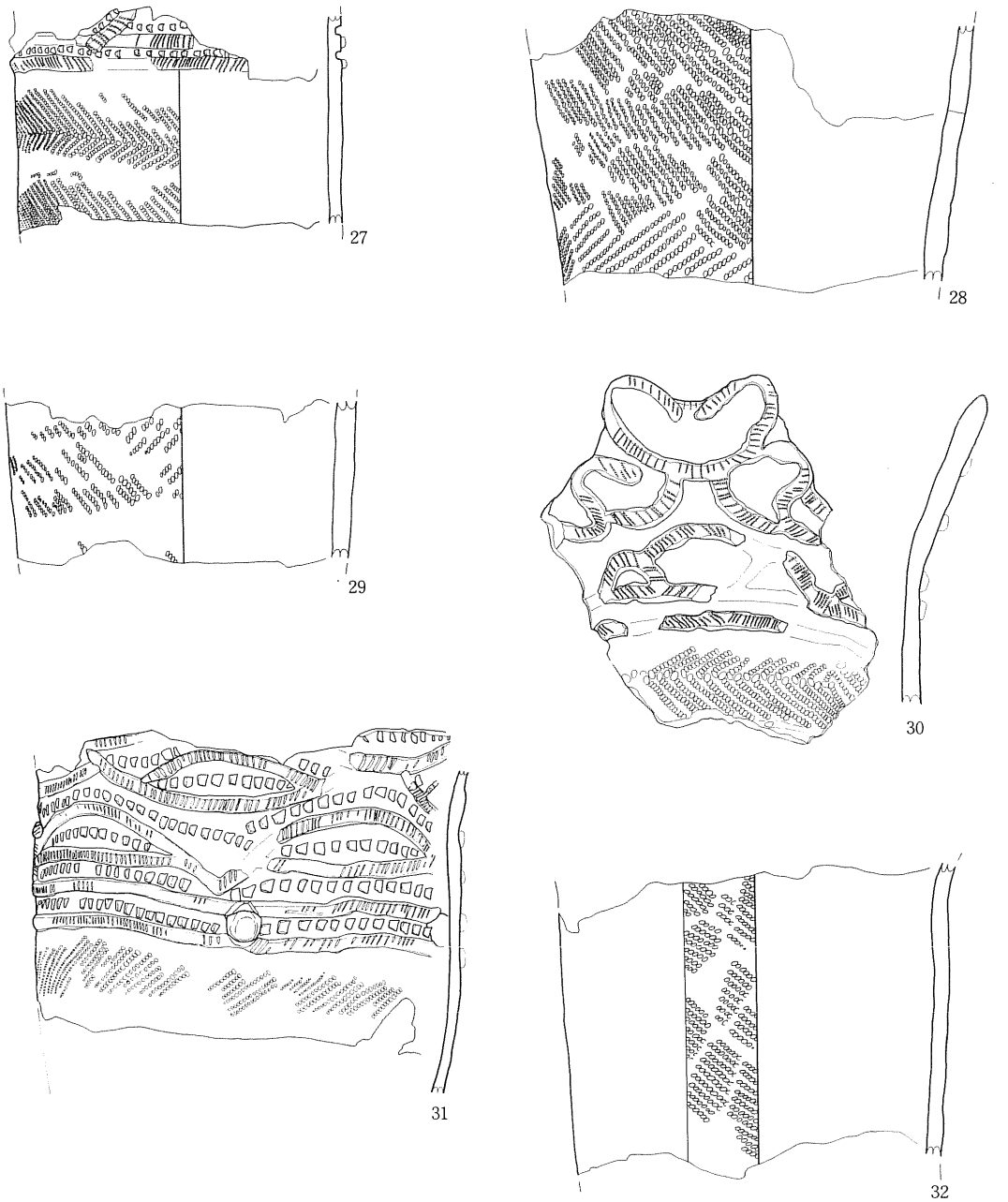
第58図　遺構内出土土器



22　25号住居跡　覆土
23　25号住居跡　覆土
24　26号住居跡　炉埋設土器
25　29号住居跡　炉埋設土器
26　30号住居跡　炉埋設土器

0　10cm

第59図　遺構内出土土器

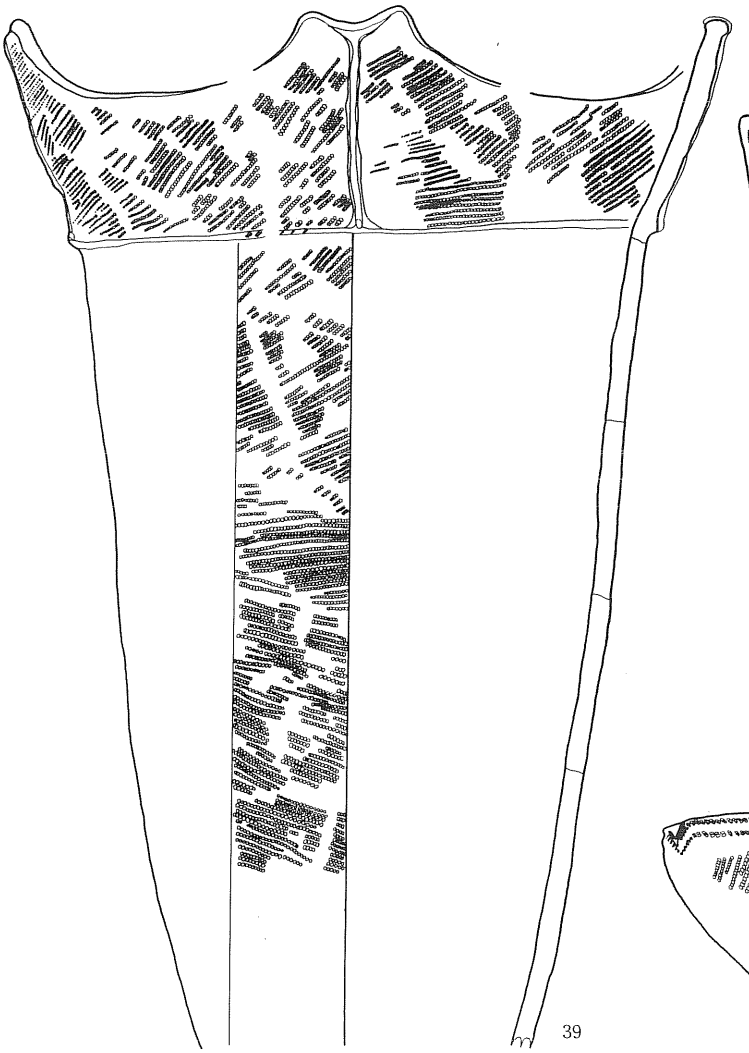


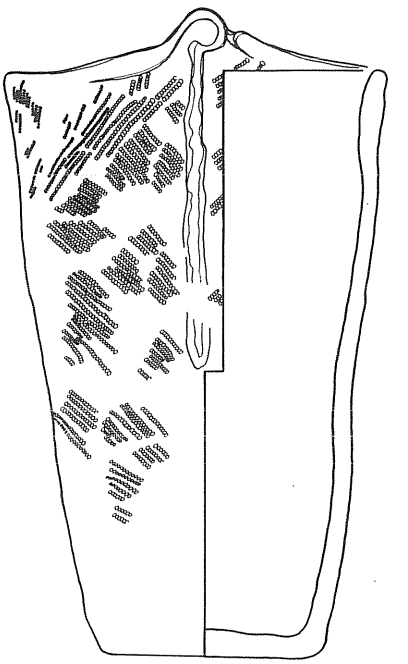
27　30号住居跡　炉埋設土器
28　30号住居跡　炉埋設土器
29　30号住居跡　炉埋設土器
30　30号住居跡　覆土
31　32号住居跡　炉埋設土器
32　34号住居跡　A炉埋設土器

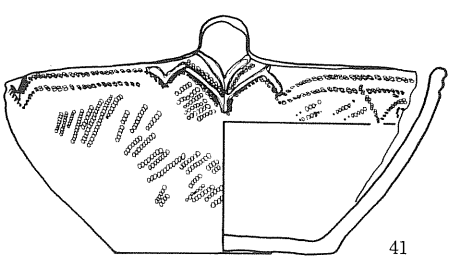
0　10cm

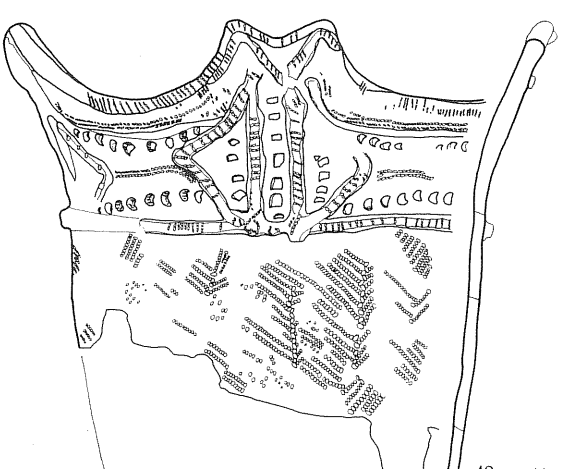
第60図　遺構内出土土器

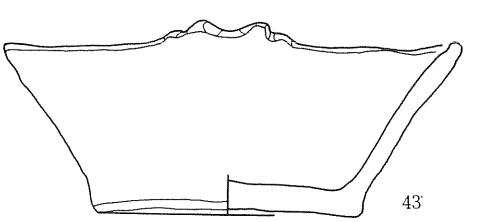
第61図　遺構内出土土器







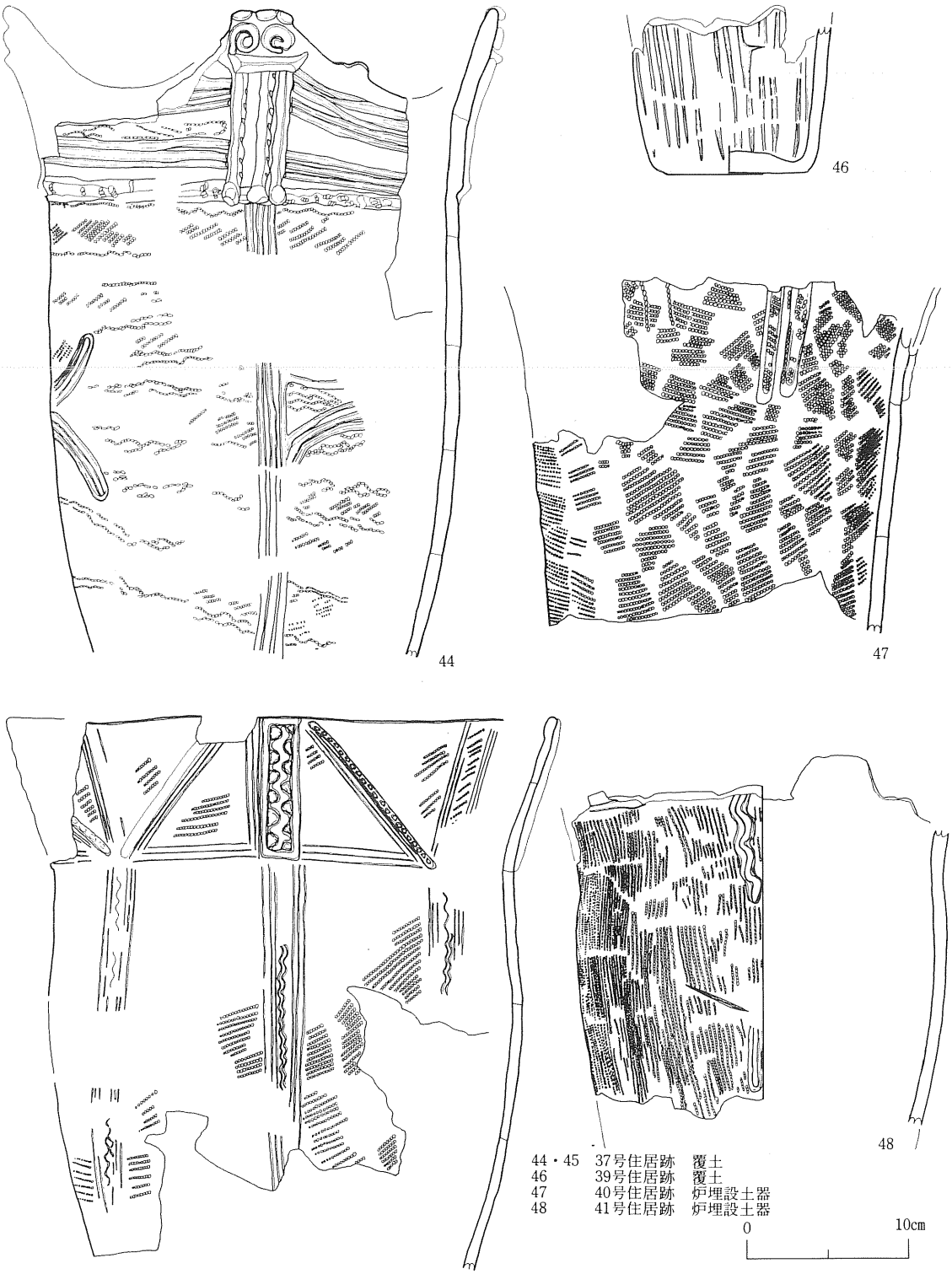




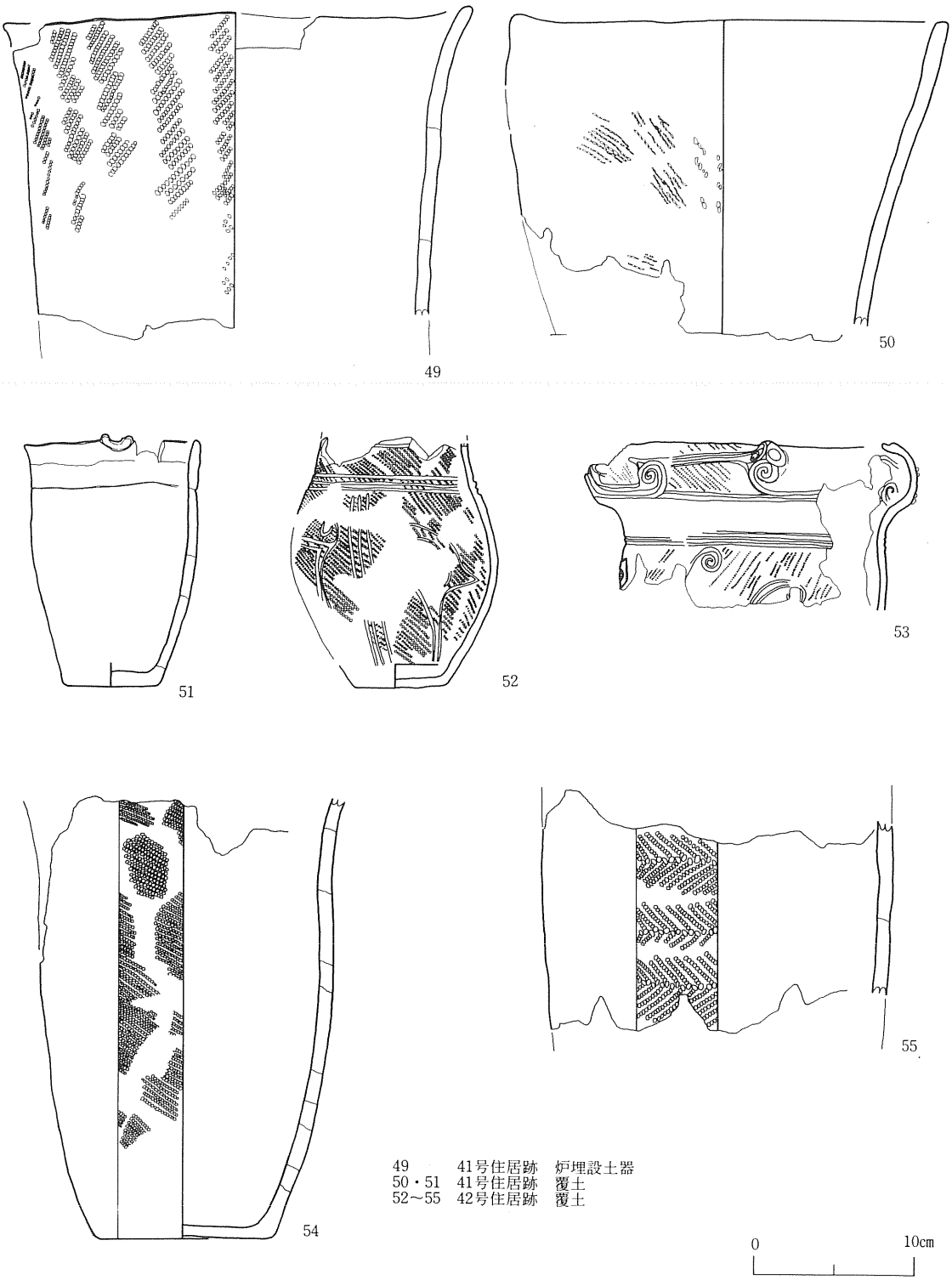
39　36号住居跡　覆土
40　37号住居跡　覆土
41　36号住居跡　覆土
42　37号住居跡　覆土
43　37号住居跡　覆土

0　10cm

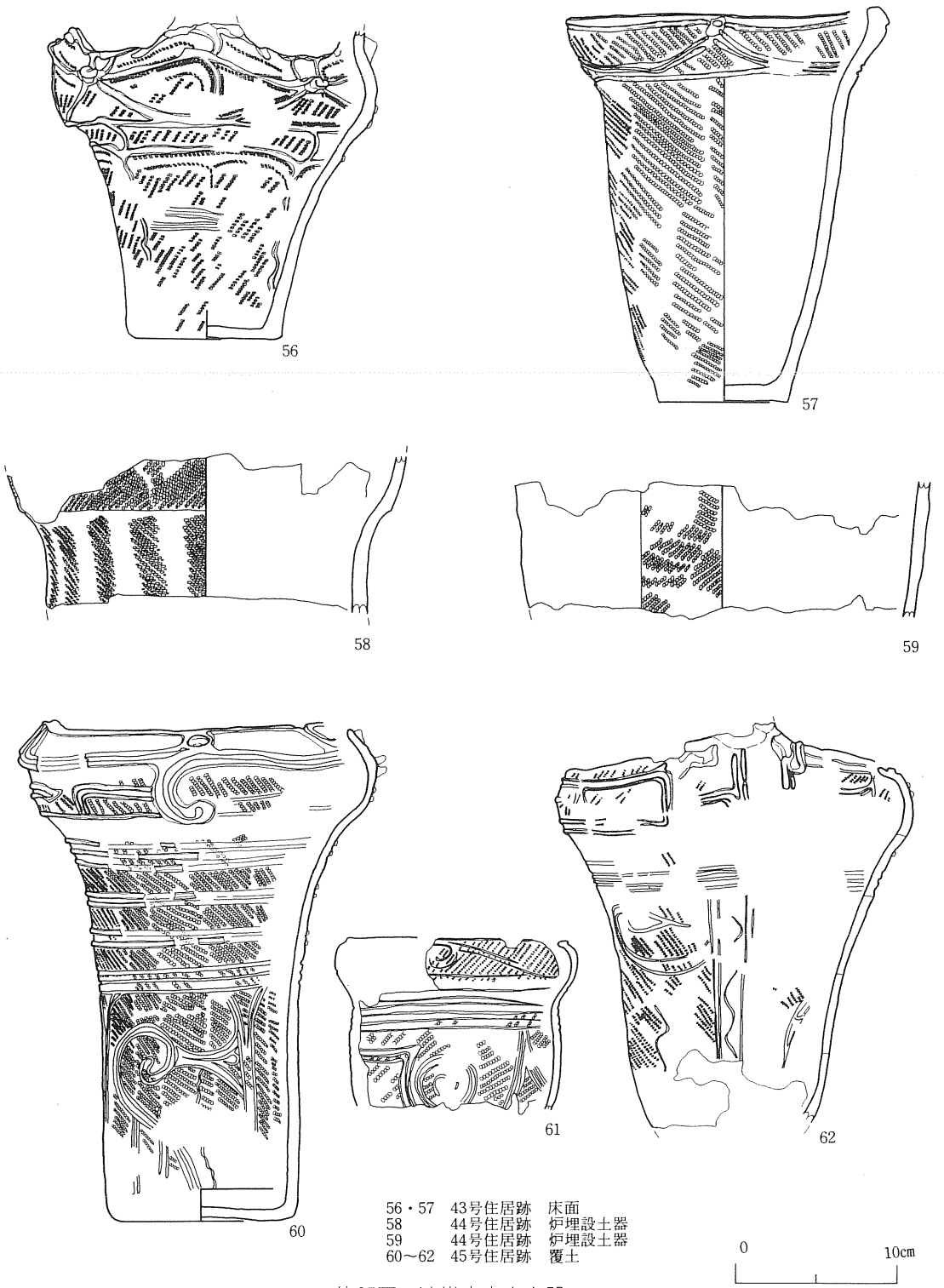
第62図　遺構内出土土器



第63図　遺構内出土土器

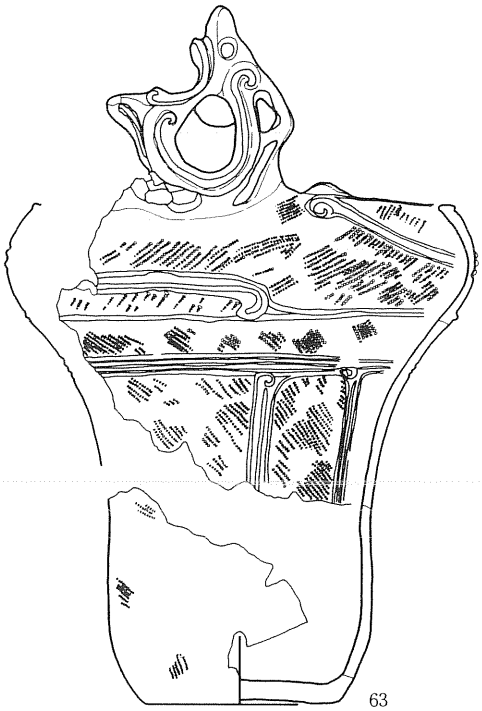


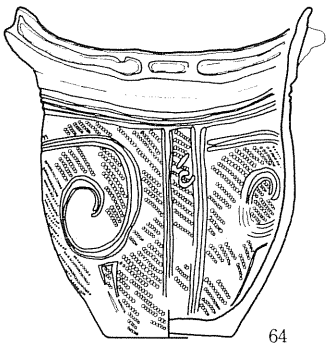
第64図　遺構内出土土器

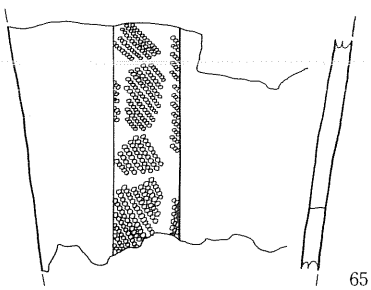


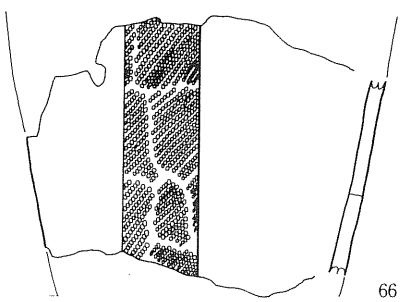
56・57　43号住居跡　床面
58　44号住居跡　炉埋設土器
59　44号住居跡　炉埋設土器
60～62　45号住居跡　覆土

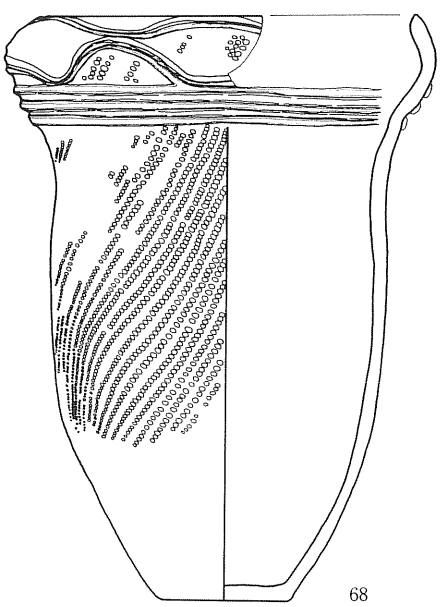
第65図　遺構内出土土器

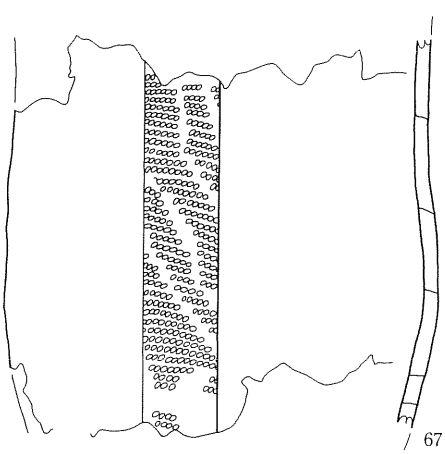








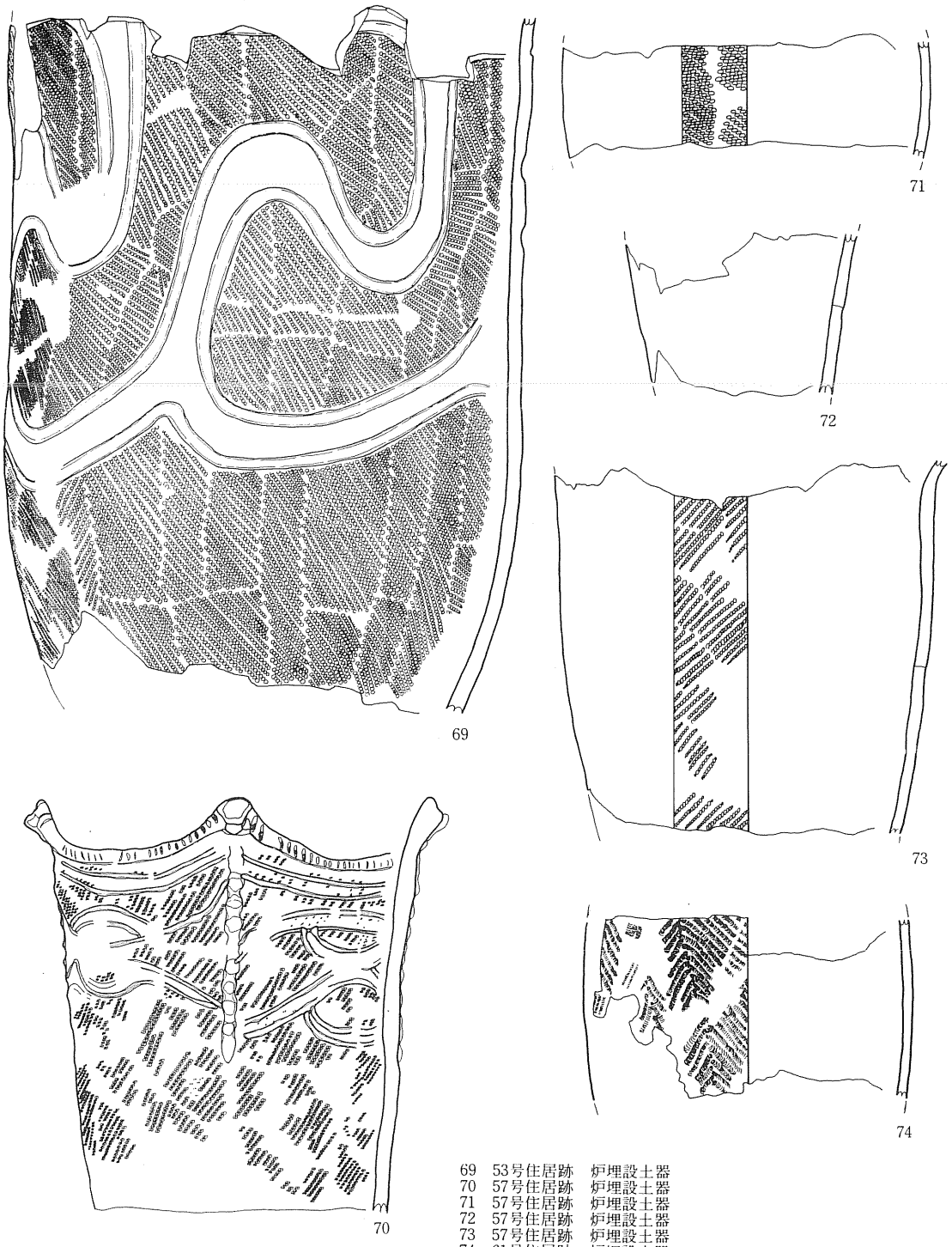




63・64	45号住居跡	覆土
65	48号住居跡	炉埋設土器
66	48号住居跡	炉埋設土器
67	52号住居跡	
68	58号住居跡	A炉埋設土器

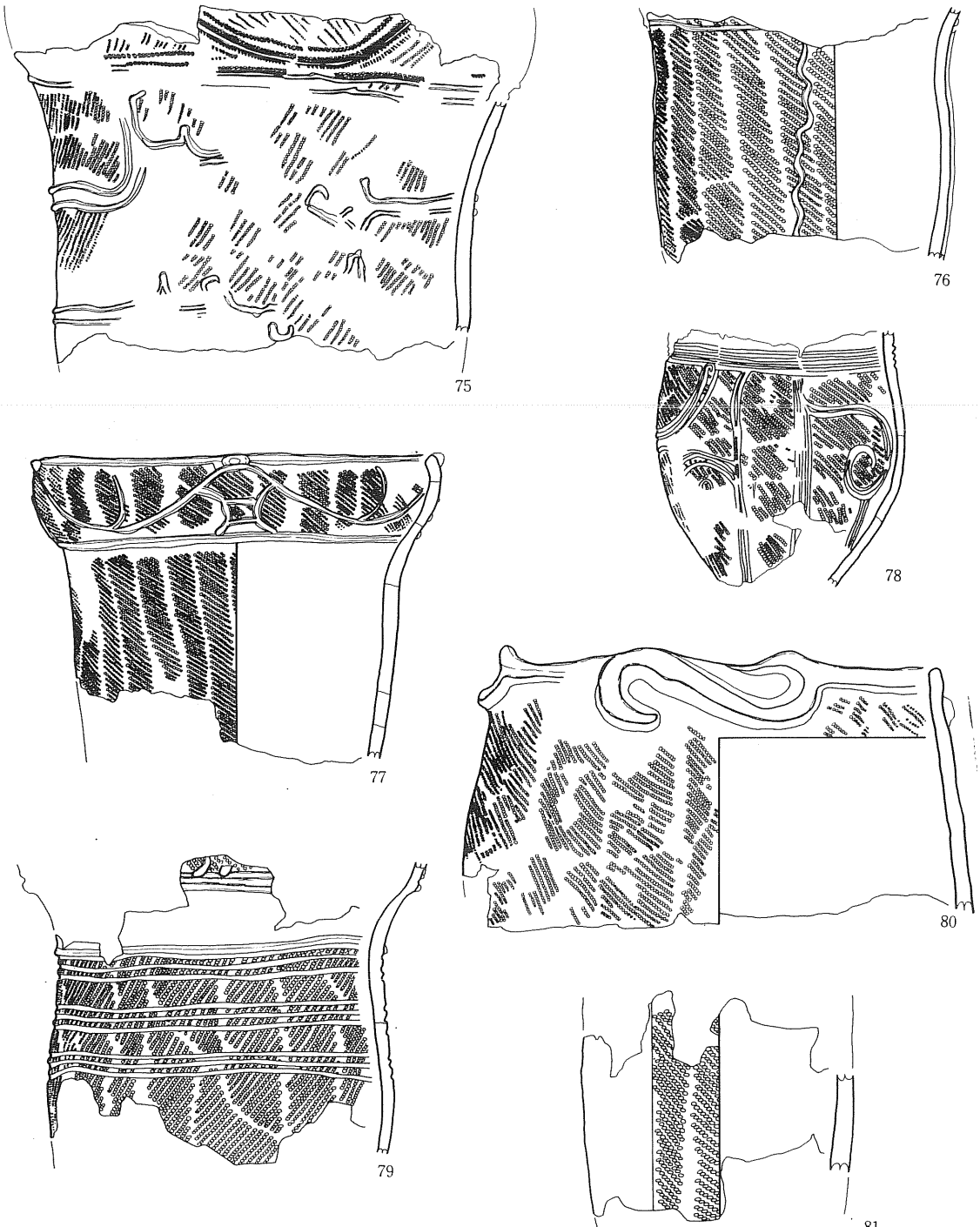
0　10cm

第66図　遺構内出土土器



69　53号住居跡　炉埋設土器
70　57号住居跡　炉埋設土器
71　57号住居跡　炉埋設土器
72　57号住居跡　炉埋設土器
73　57号住居跡　炉埋設土器
74　61号住居跡　炉埋設土器

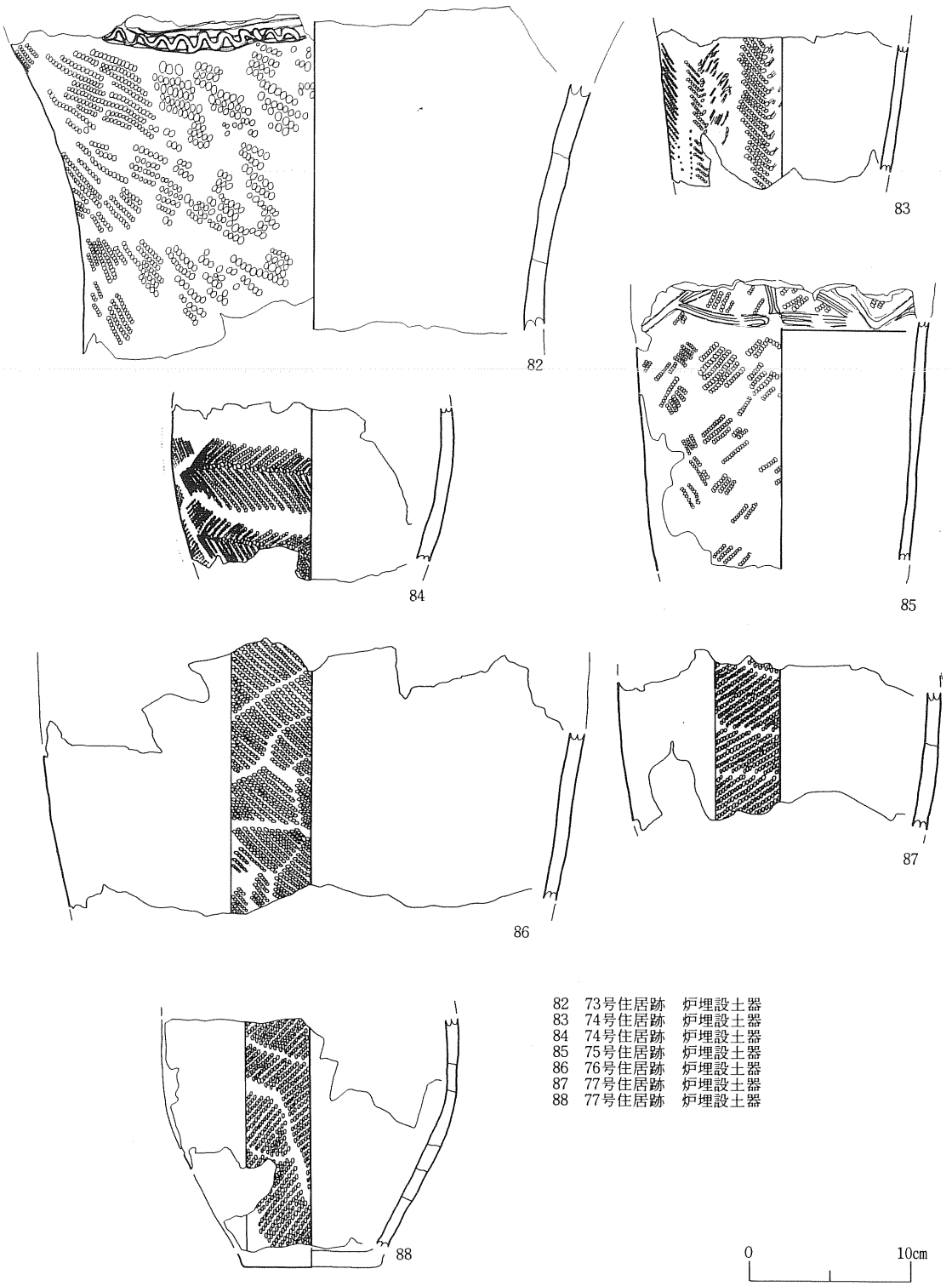
第67図　遺構内出土土器



75　64号住居跡　炉埋設土器
76　64号住居跡　炉埋設土器
77　67号住居跡　炉埋設土器
78　71号住居跡　炉埋設土器
79　73号住居跡　炉埋設土器
80　73号住居跡　炉埋設土器
81　73号住居跡　炉埋設土器

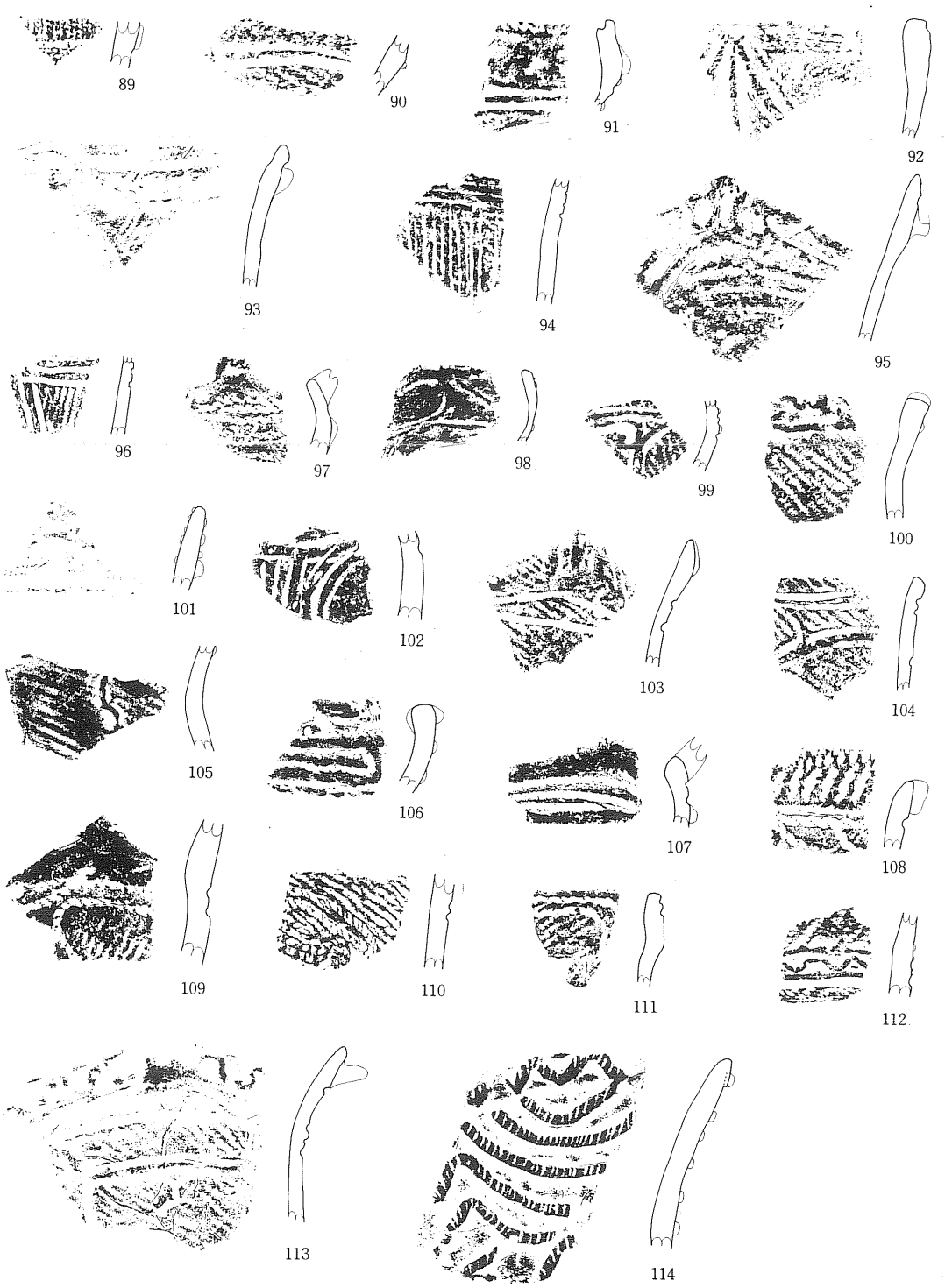
0　10cm

第68図　遺構内出土土器



82　73号住居跡　炉埋設土器
83　74号住居跡　炉埋設土器
84　74号住居跡　炉埋設土器
85　75号住居跡　炉埋設土器
86　76号住居跡　炉埋設土器
87　77号住居跡　炉埋設土器
88　77号住居跡　炉埋設土器

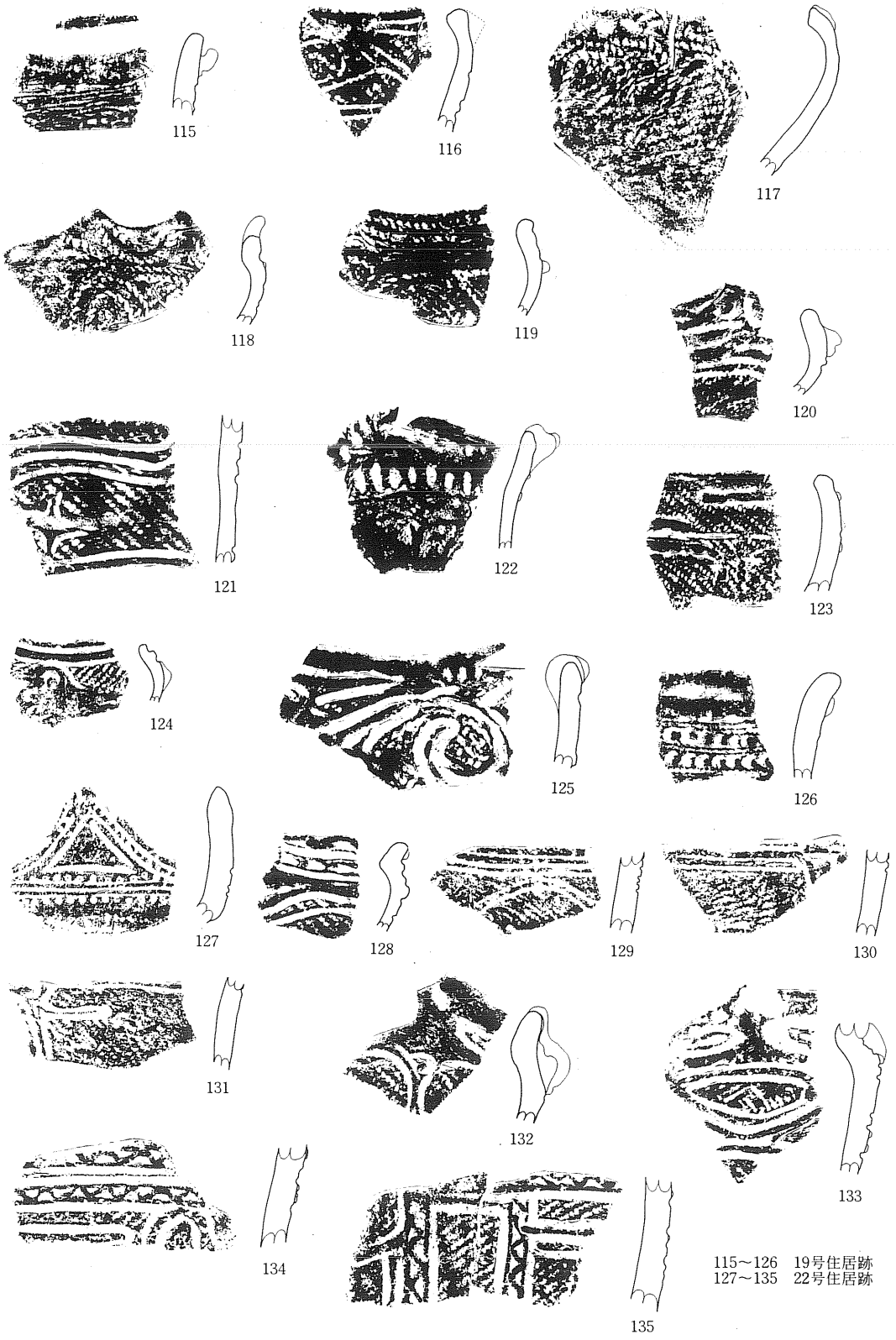
第69図　遺構内出土土器



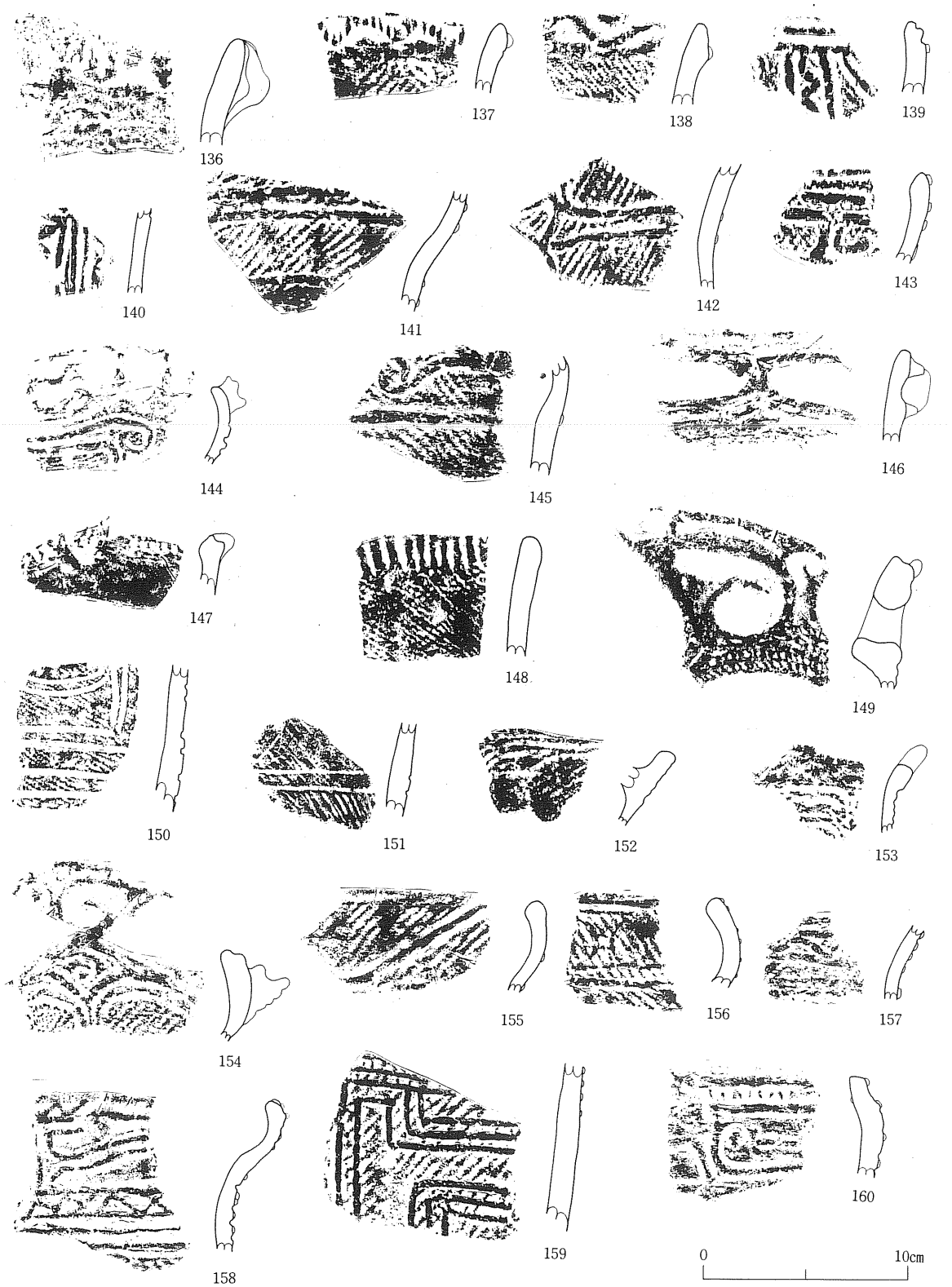
89～91　2号住居跡
92～94　7号住居跡
95～102　15号住居跡
103～114　18号住居跡

0　10cm

第70図　遺構内出土土器

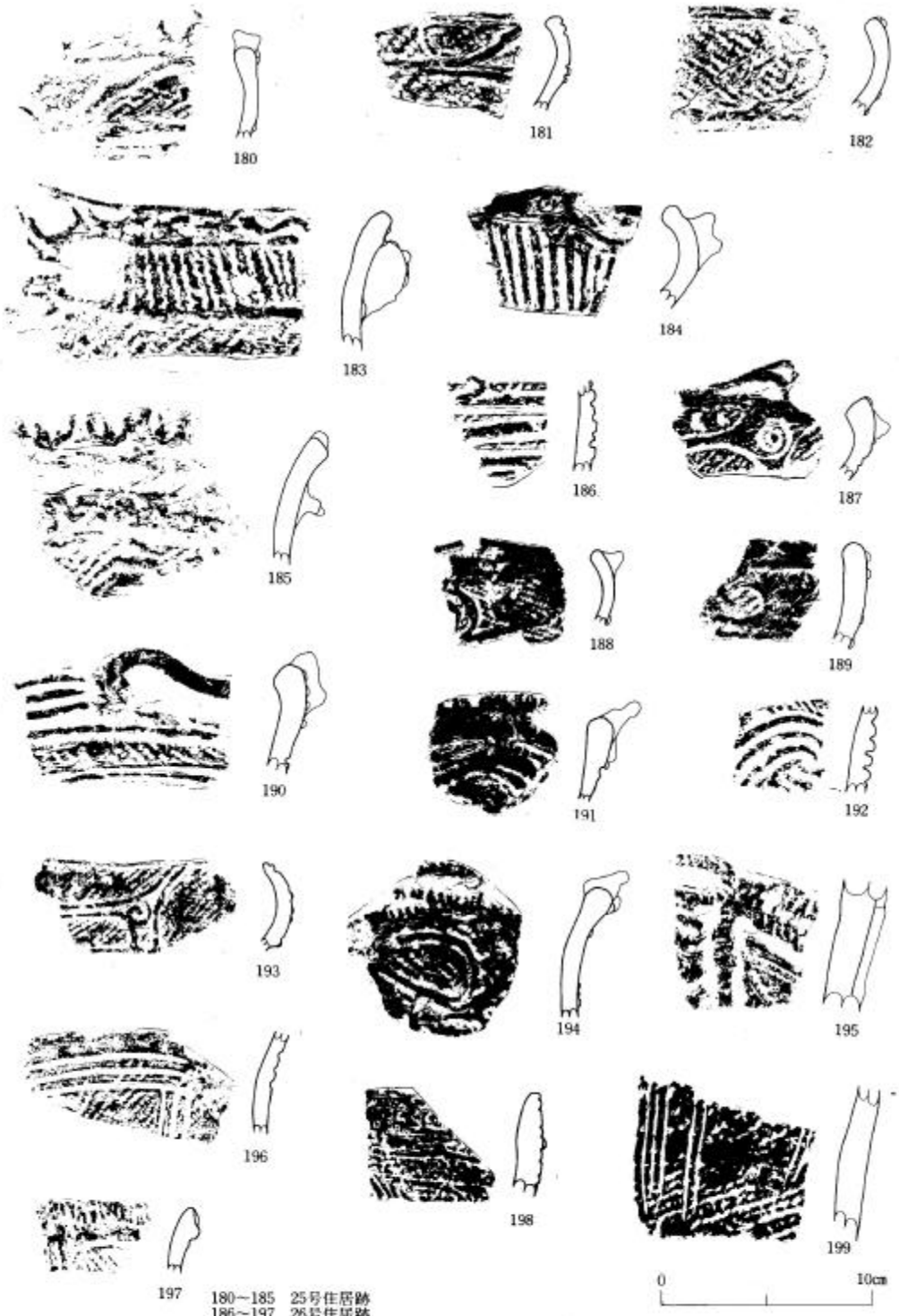


第71図　遺構内出土土器



第72図　遺構内出土土器　　136～138　22号住居跡　150～160　24号住居跡
139～149　23号住居跡

第73図　遺構内出土土器

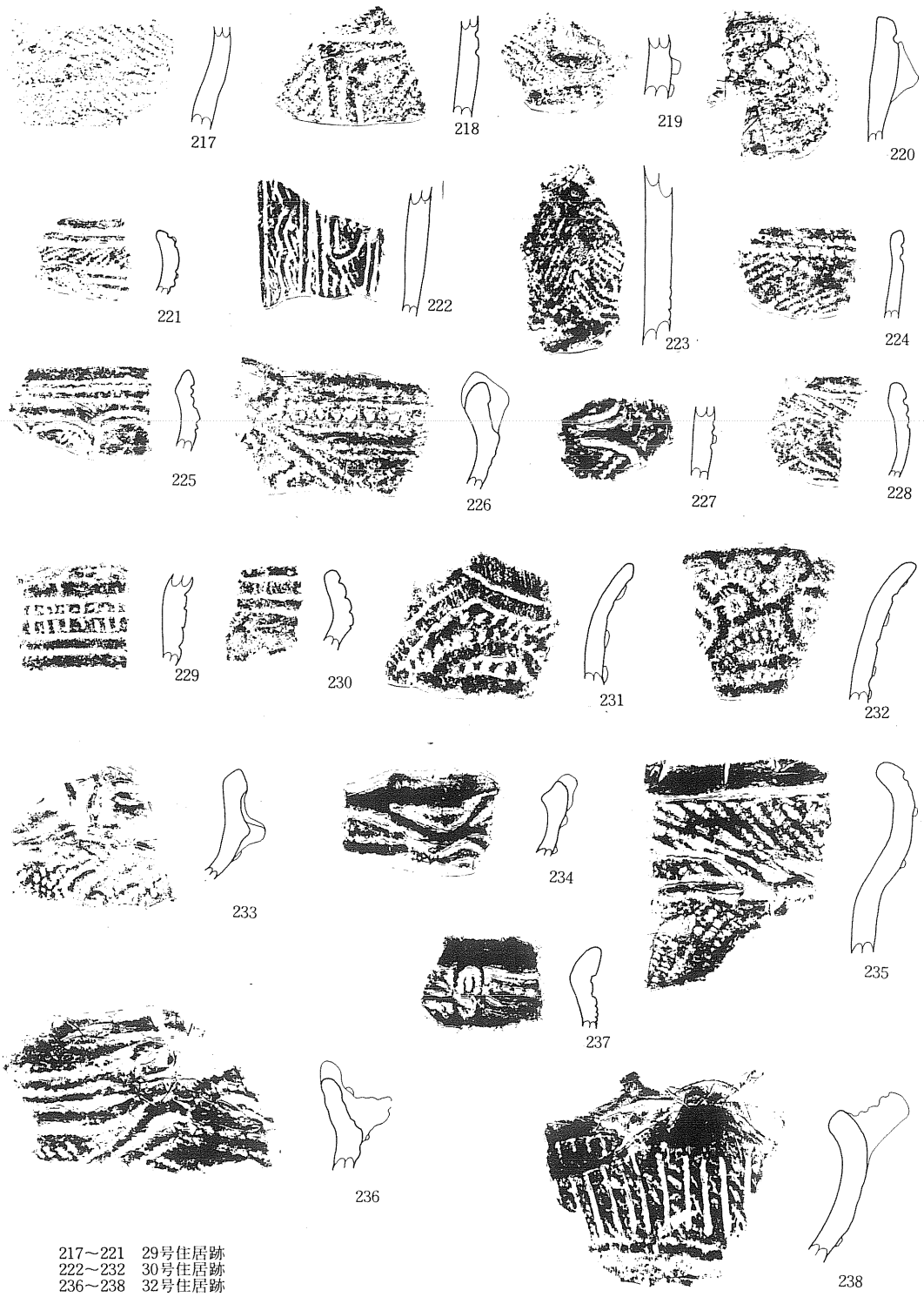


180～185　25号住居跡
186～197　26号住居跡
198・199　28号住居跡

第74図　遺構内出土土器

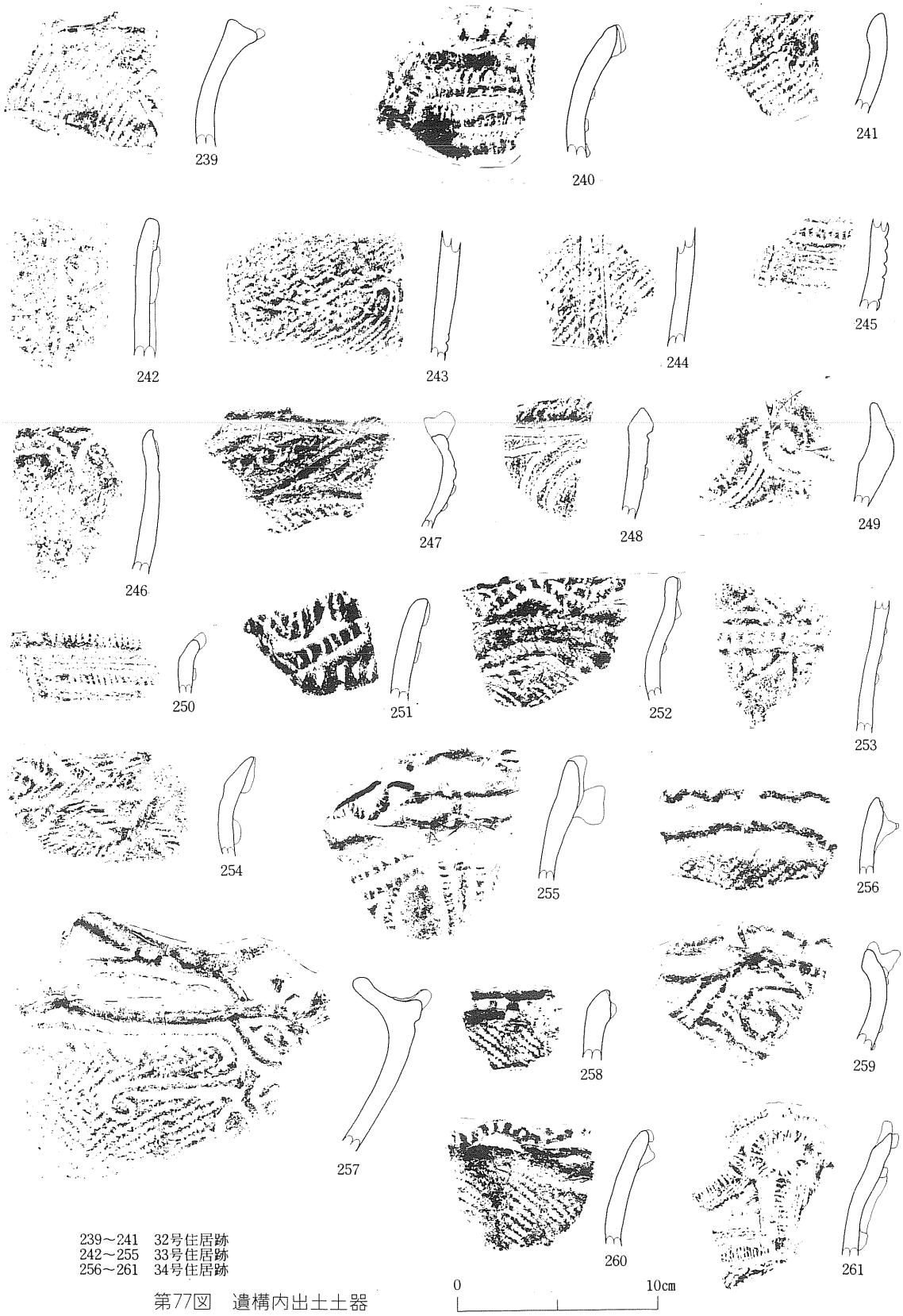
200～202　28号住居跡
203～216　27号住居跡

第75図　遺構内出土土器



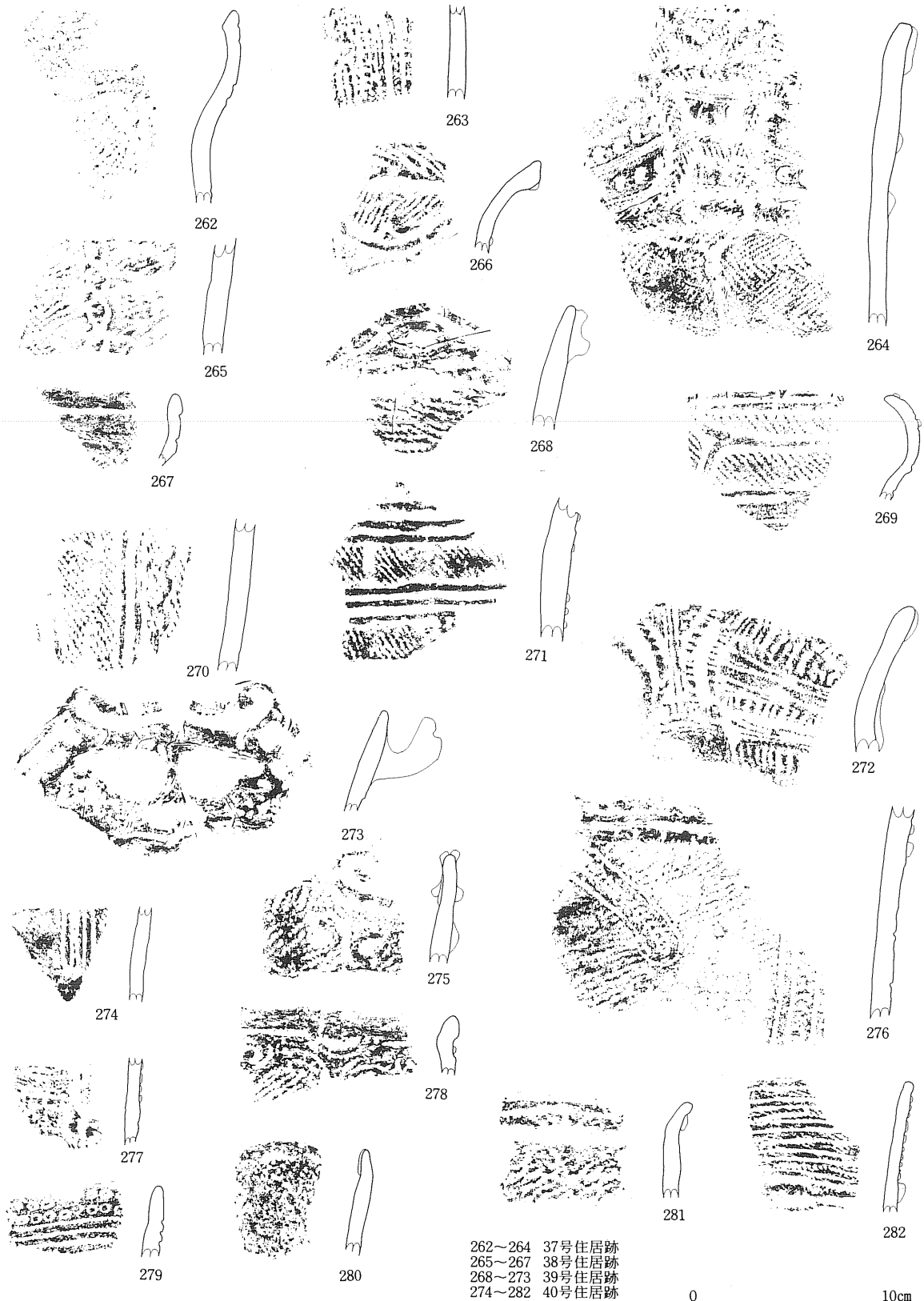
217～221　29号住居跡
222～232　30号住居跡
236～238　32号住居跡

第76図　遺構内出土土器

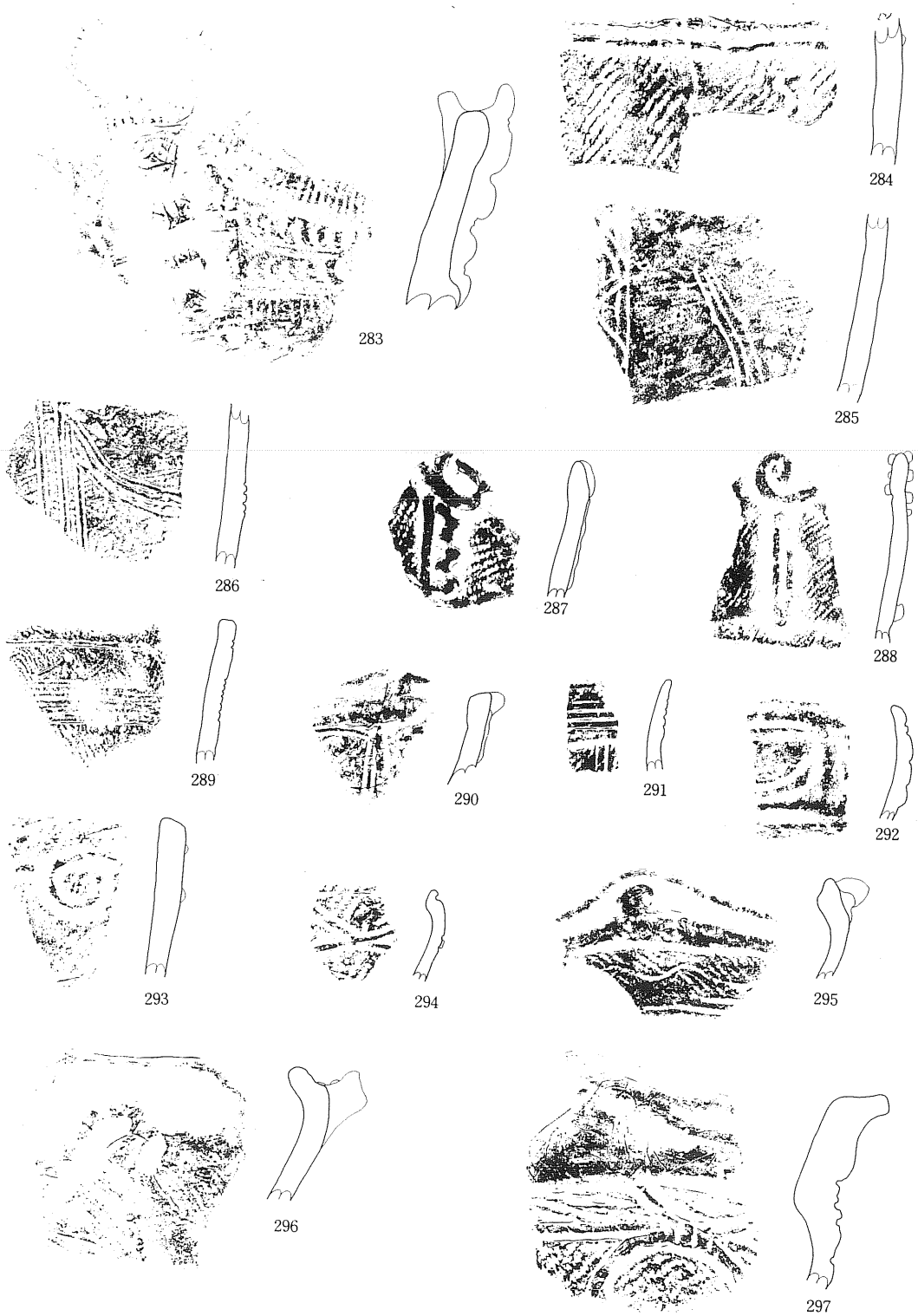


239～241　32号住居跡
242～255　33号住居跡
256～261　34号住居跡

第77図　遺構内出土土器



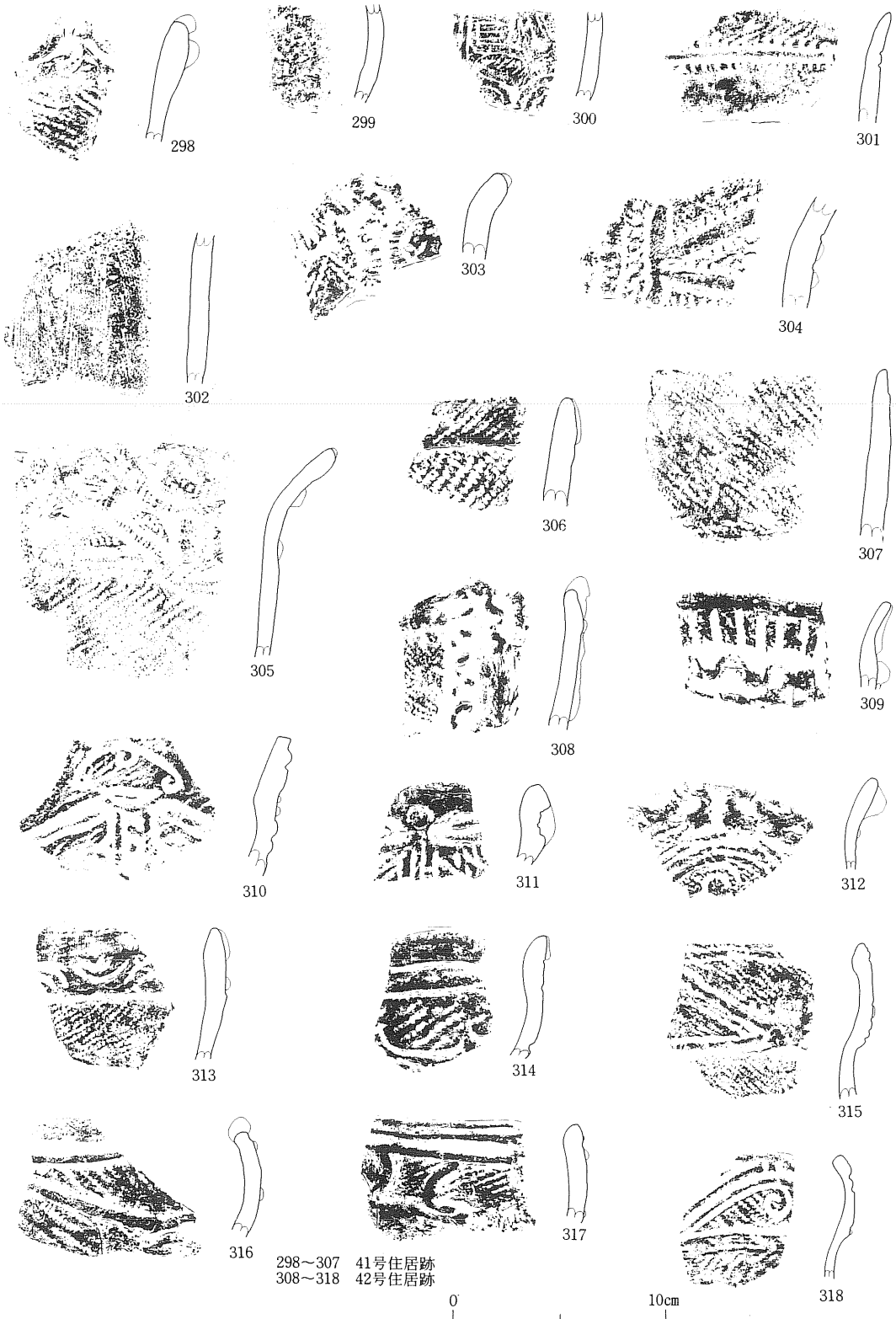
第78図　遺構内出土土器



283　　40号住居跡
284～297　41号住居跡

0　10cm

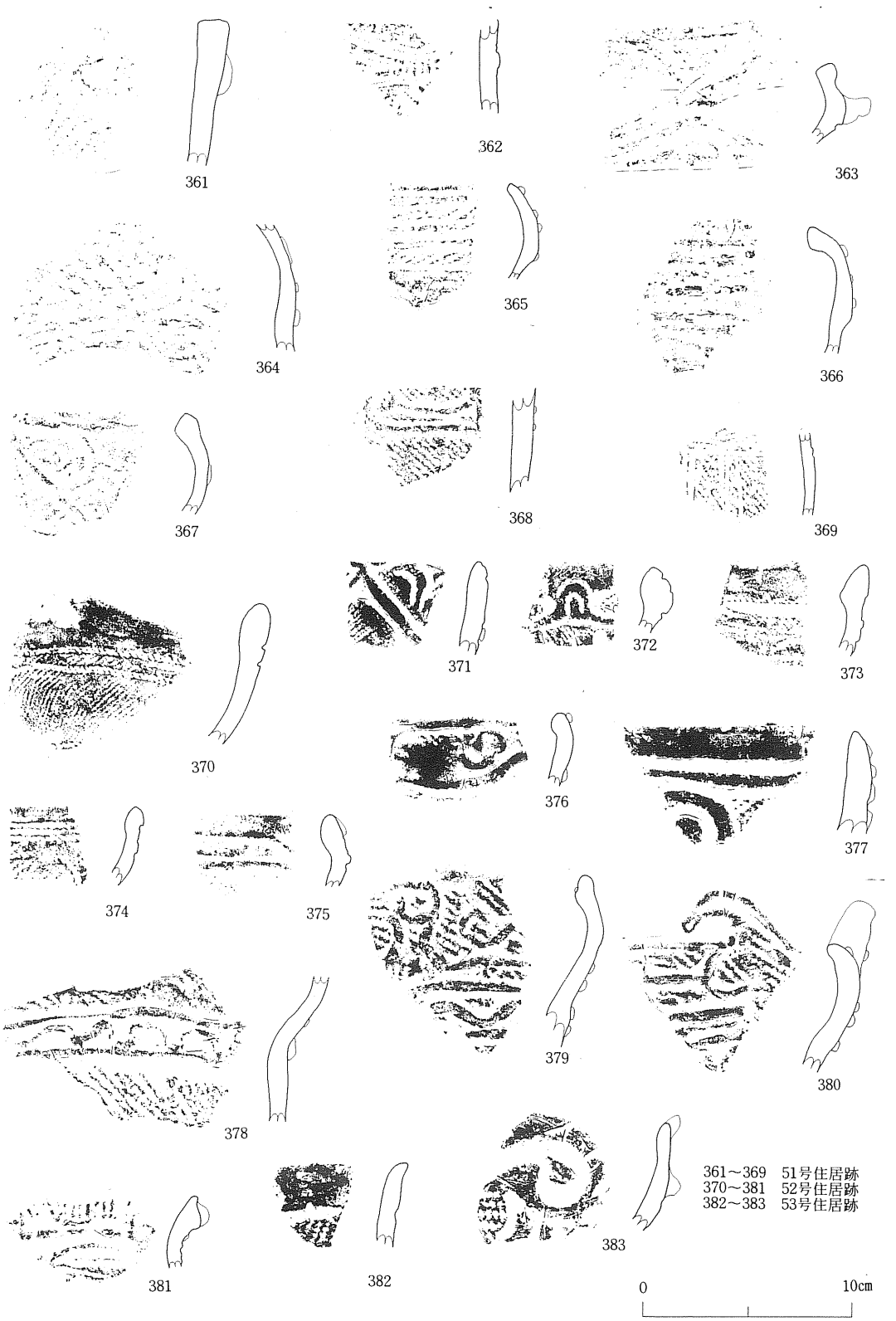
第79図　遺構内出土土器



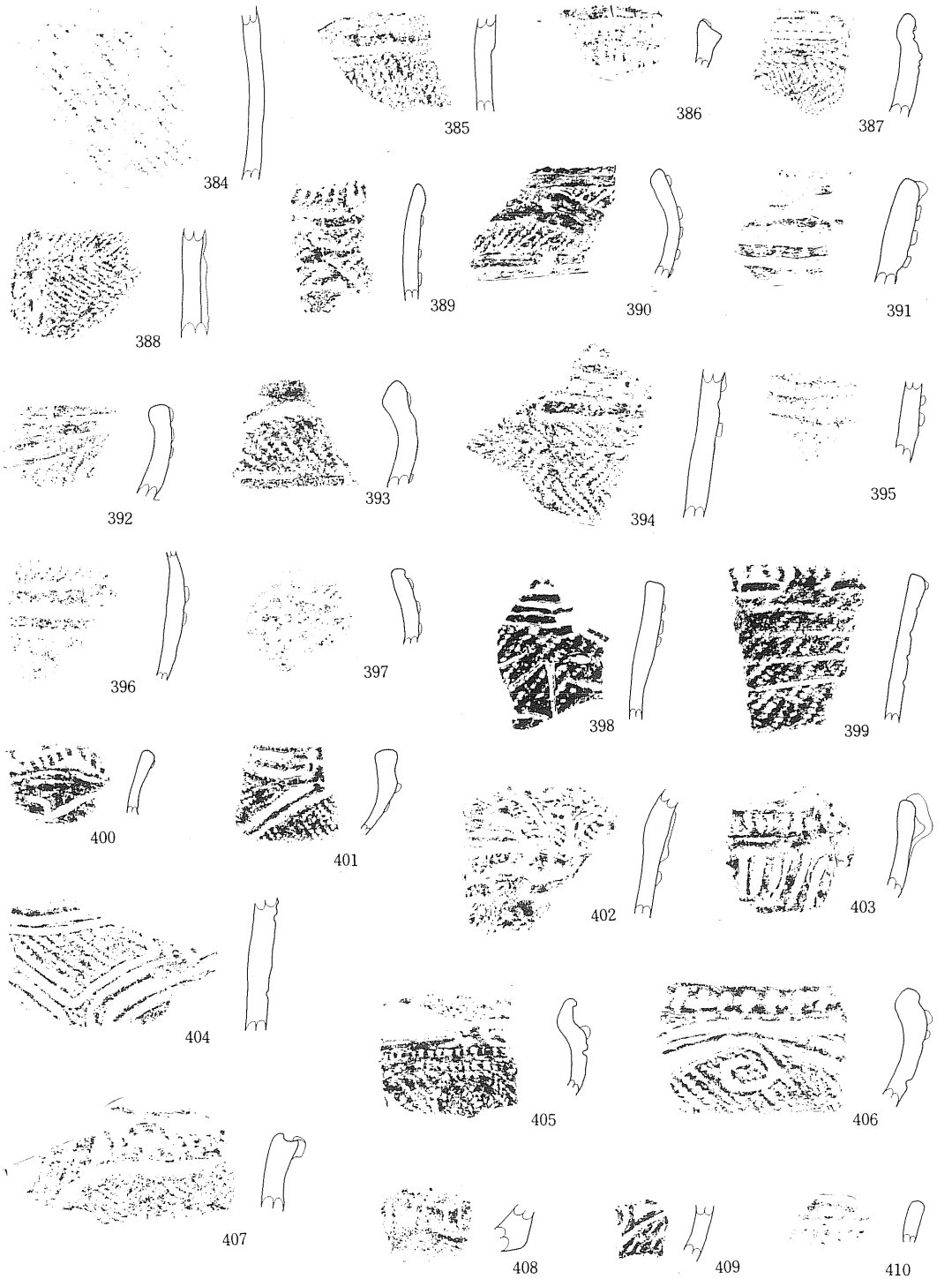
第80図　遺構内出土土器

第81図　遺構内出土土器

第82図　遺構内出土土器

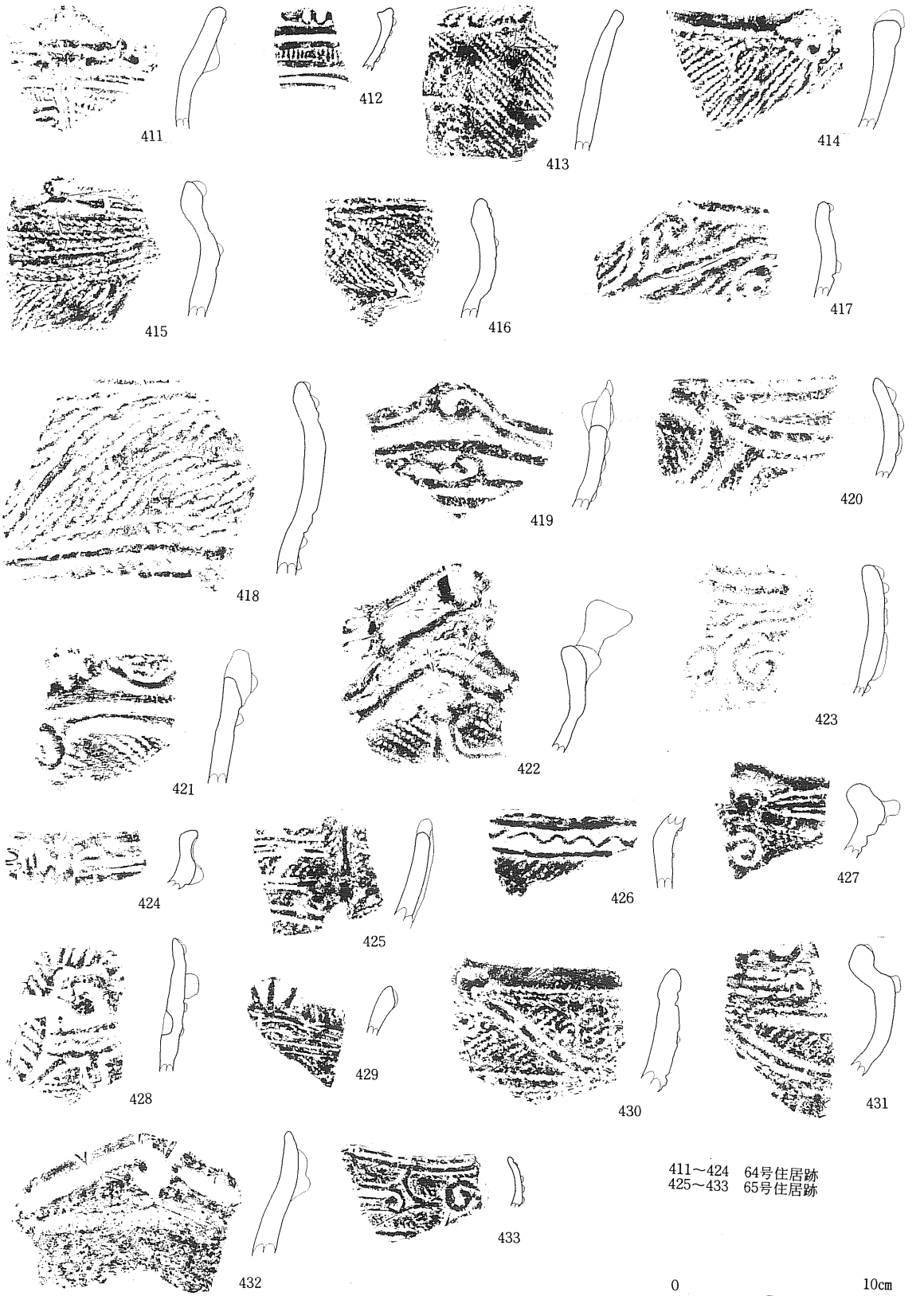


第83図　遺構内出土土器



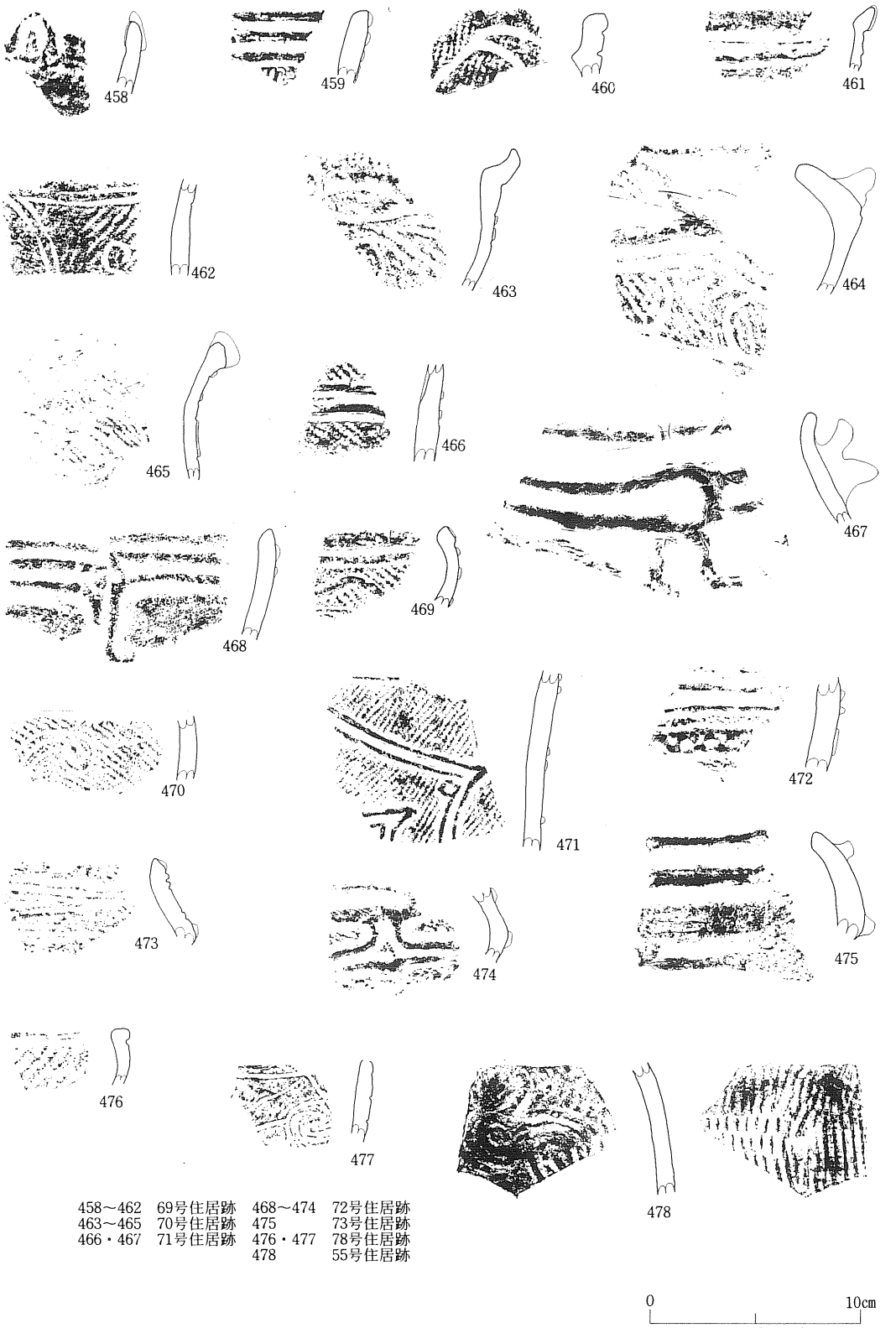
384～385　54号住居跡
386～394　57号住居跡
395～397　58号住居跡
398～401　60号住居跡
402～　61号住居跡
403～407　62号住居跡
408～410　63号住居跡

第84図　遺構内出土土器



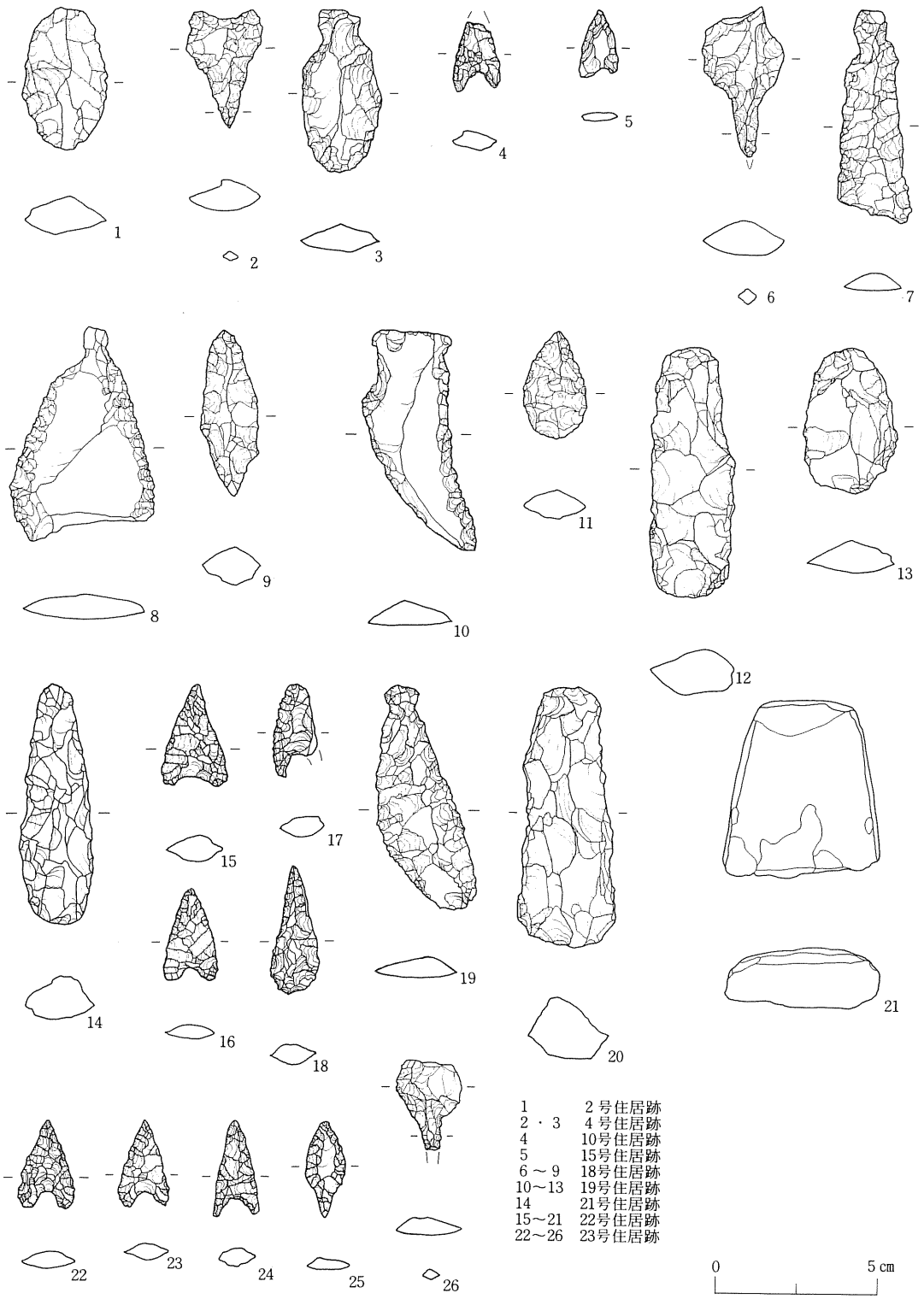
第85図　遺構内出土土器

第86図　遺構内出土土器



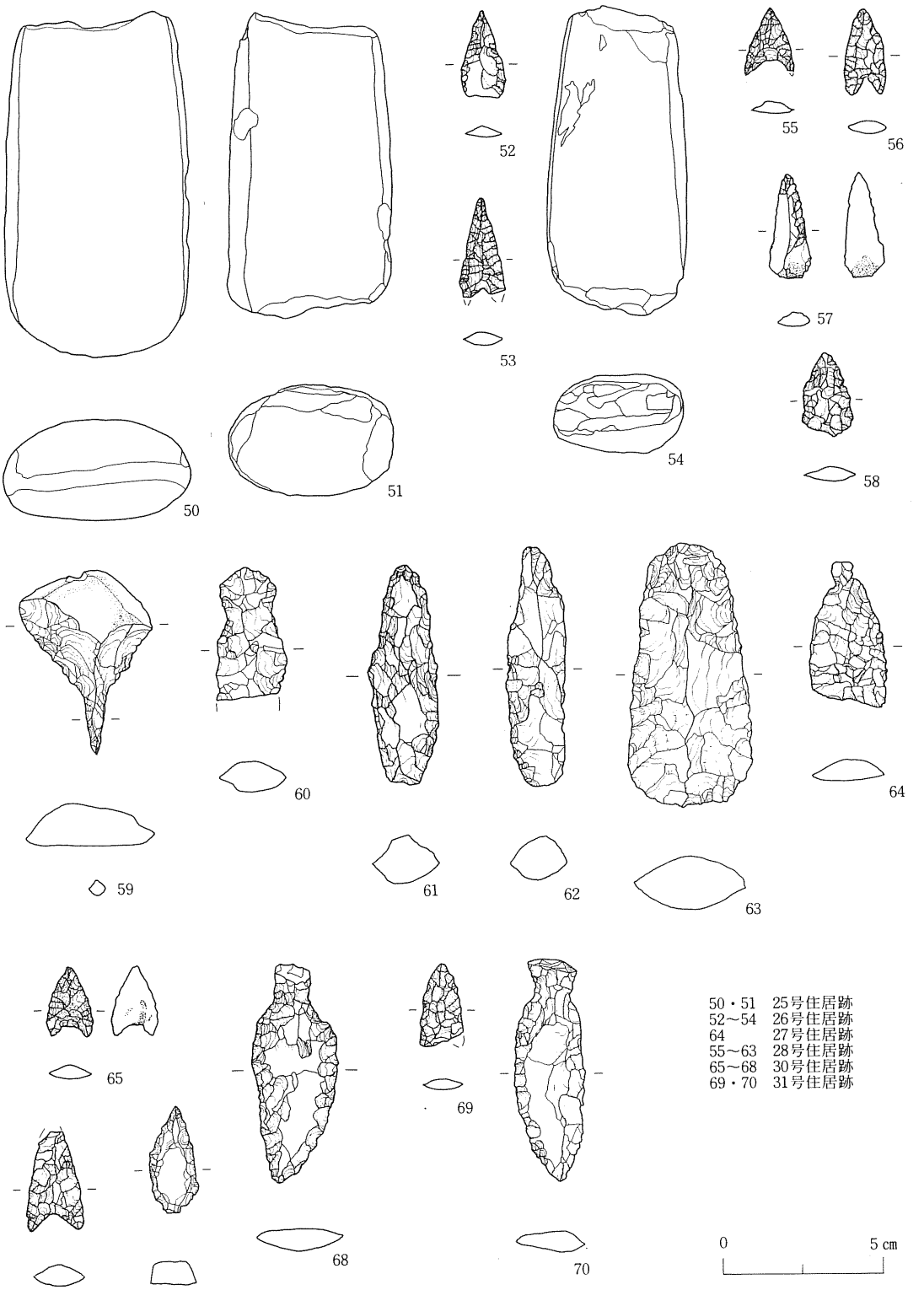
458～462	69号住居跡	468～474	72号住居跡
463～465	70号住居跡	475	73号住居跡
466・467	71号住居跡	476・477	78号住居跡
		478	55号住居跡

第87図　遺構内出土土器

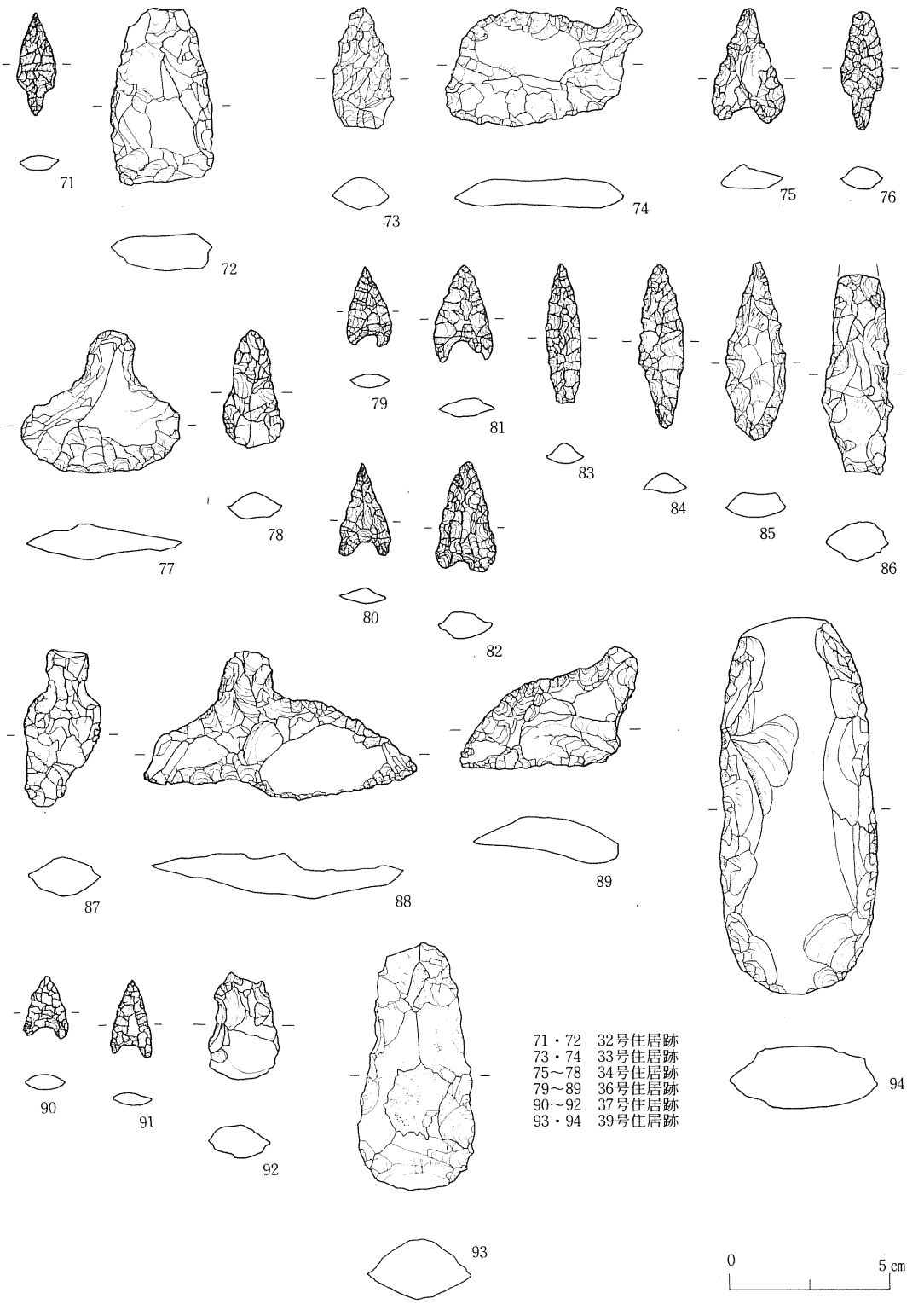


第88図　遺構内出土石器

第89図　遺構内出土石器

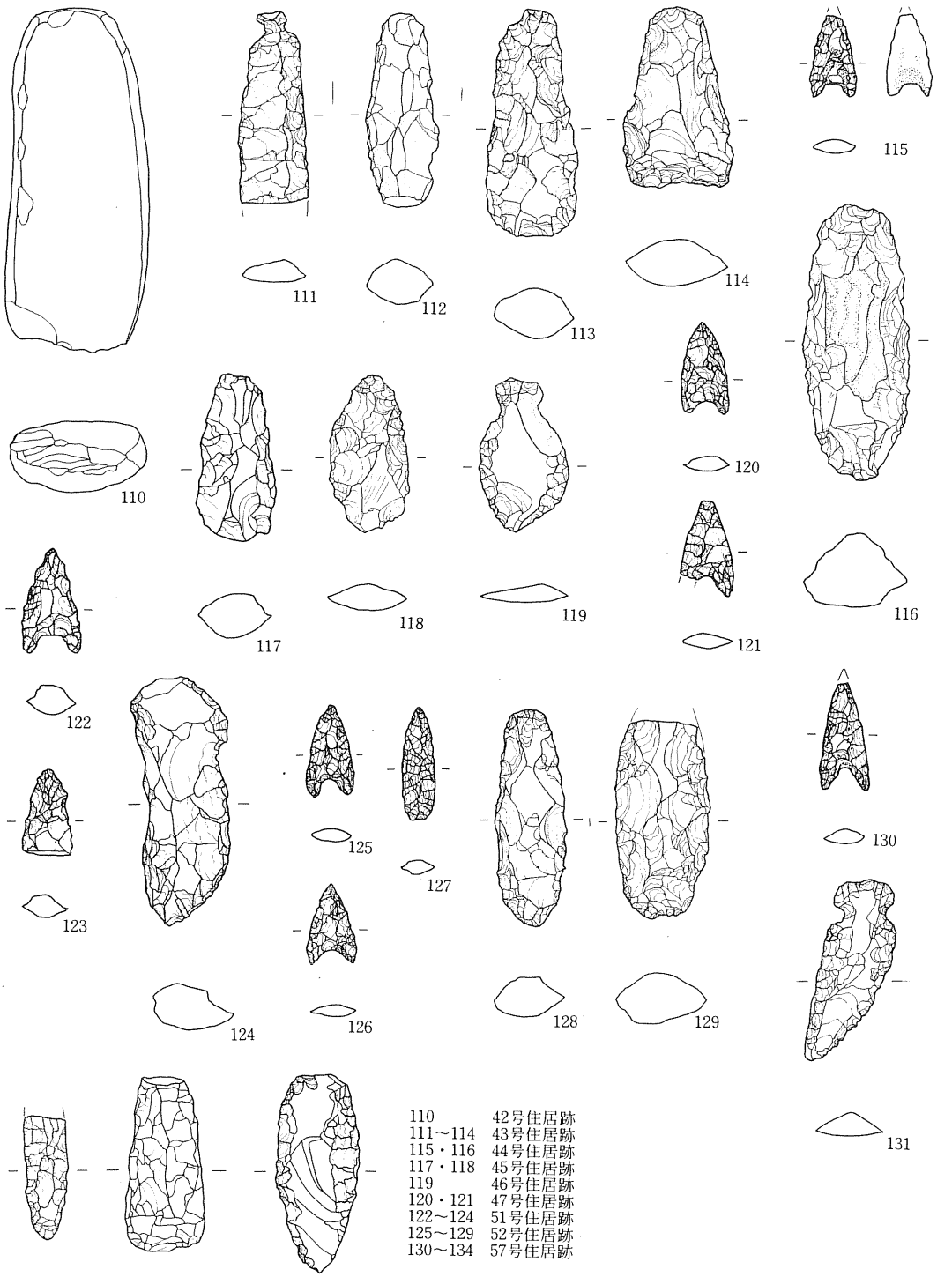


第90図　遺構内出土石器



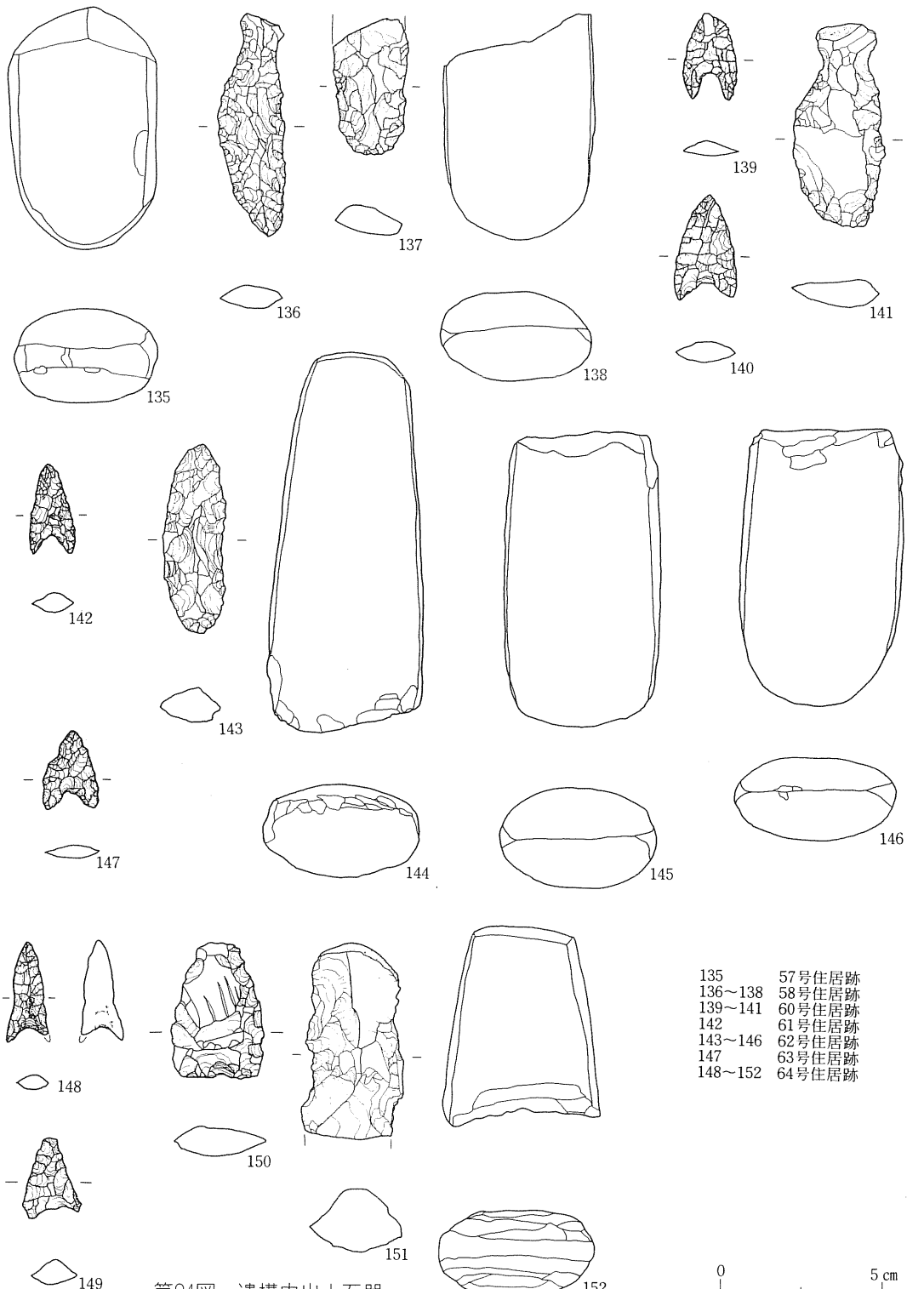
第91図　遺構内出土石器

第92図　遺構内出土石器



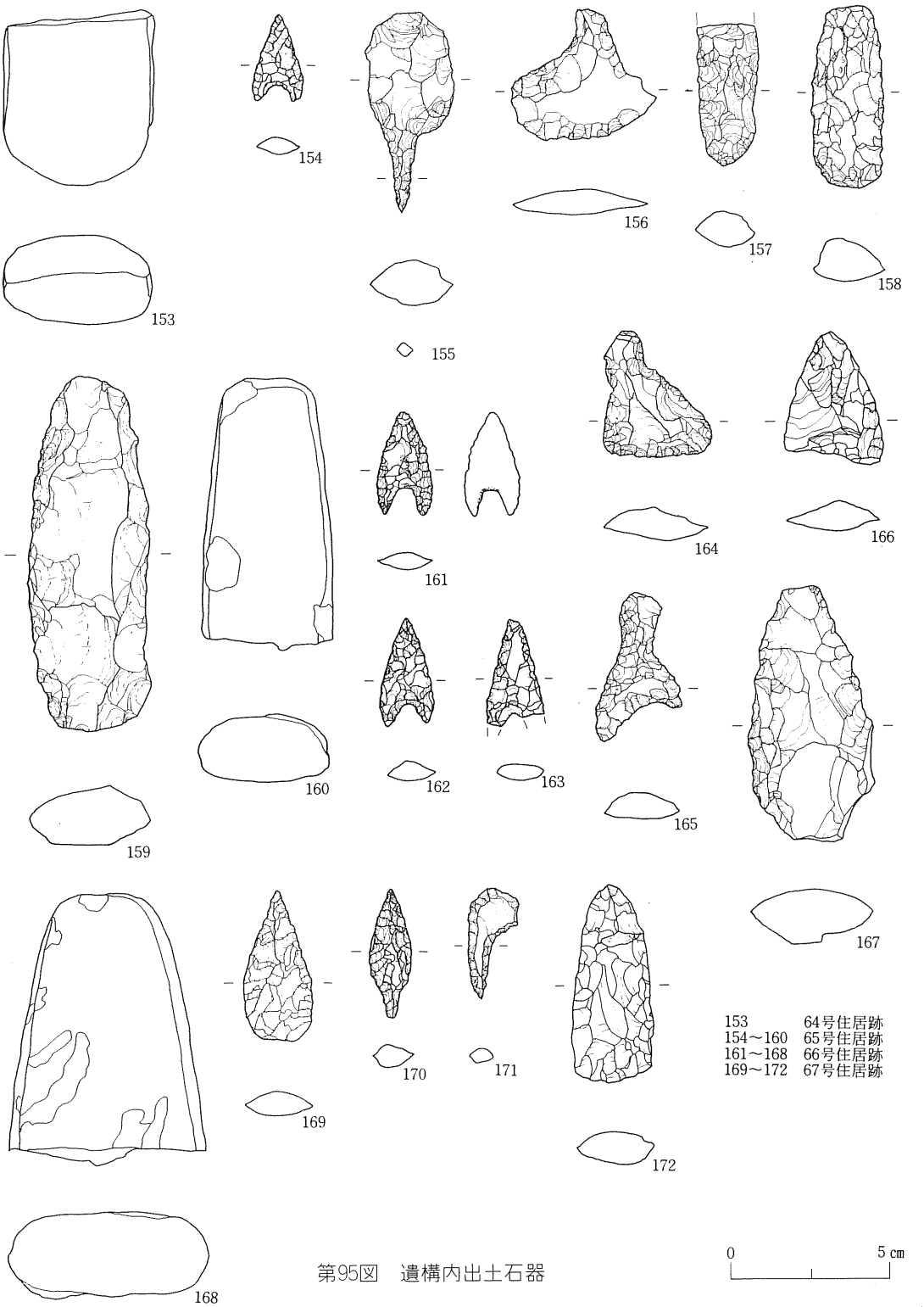
110	42号住居跡
111～114	43号住居跡
115・116	44号住居跡
117・118	45号住居跡
119	46号住居跡
120・121	47号住居跡
122～124	51号住居跡
125～129	52号住居跡
130～134	57号住居跡

第93図　遺構内出土石器

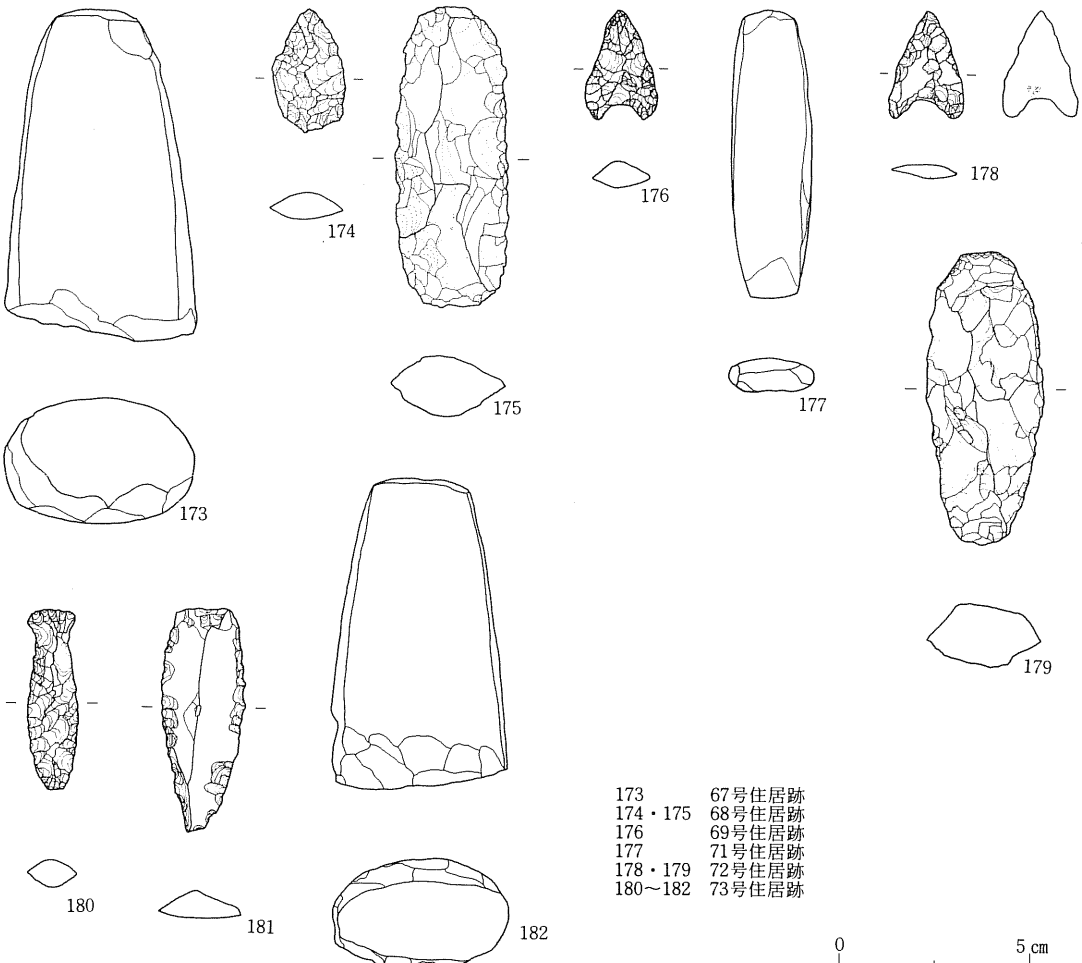


135	57号住居跡
136～138	58号住居跡
139～141	60号住居跡
142	61号住居跡
143～146	62号住居跡
147	63号住居跡
148～152	64号住居跡

第94図　遺構内出土石器



第95図　遺構内出土石器



第96図　遺構内出土石器

フラスコ状ピット内から多量の遺物が出土した。ここでは完形・半完形品で実測図を載せた土器と石器について記述することにしたい。

1号フラスコ状ピット出土遺物

土器（第125図）

482は覆土から出土した深鉢形土器である。口縁部は欠損する。地文は羽状縄文である。

3号フラスコ状ピット出土遺物

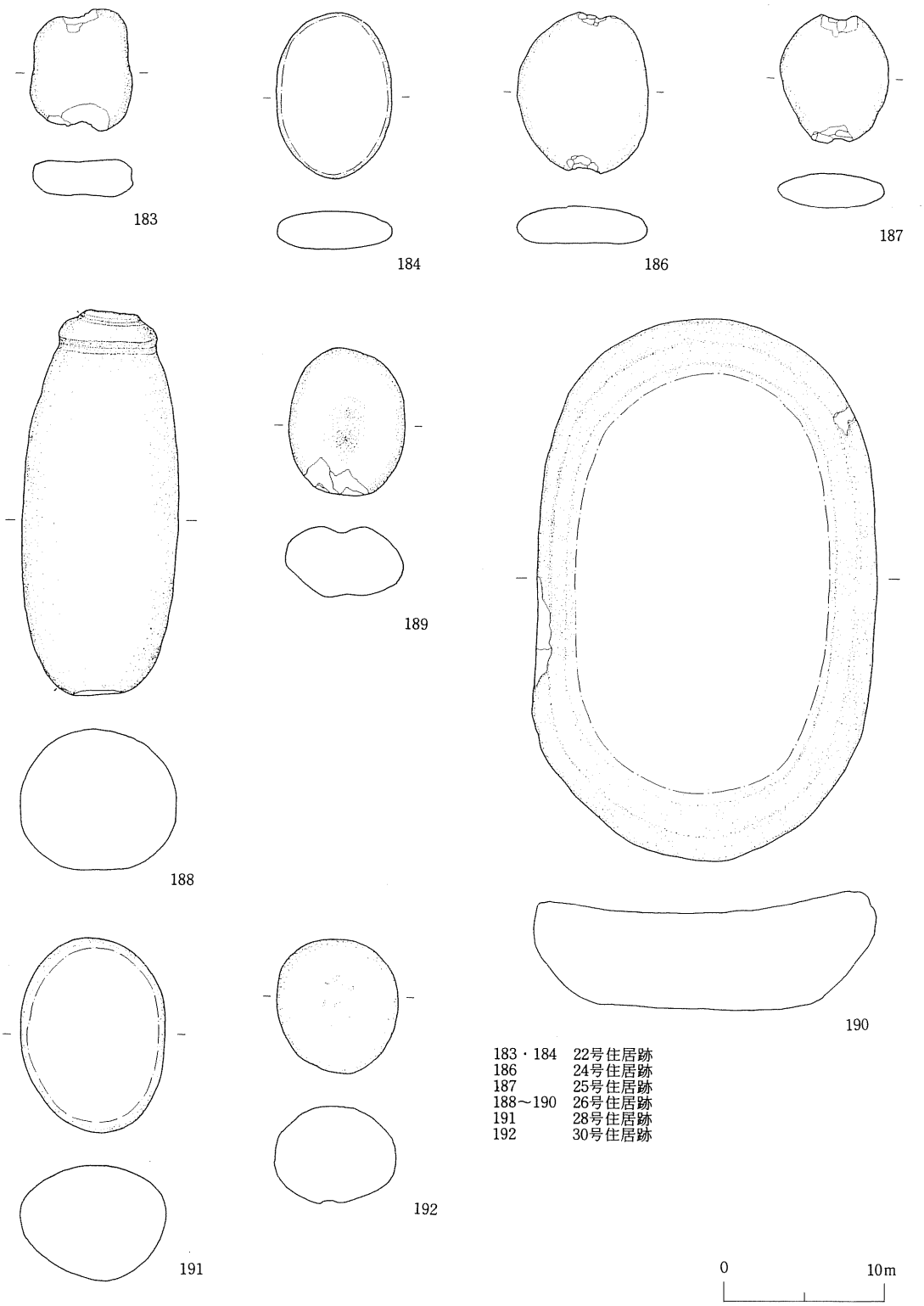
土器（第125図）

483は覆土から出土した口縁部欠損の鉢形土器である。沈線によって文様が施され、胴上半は方形区画文、下部は沈線が縦方向に施され棘状文がみられる。

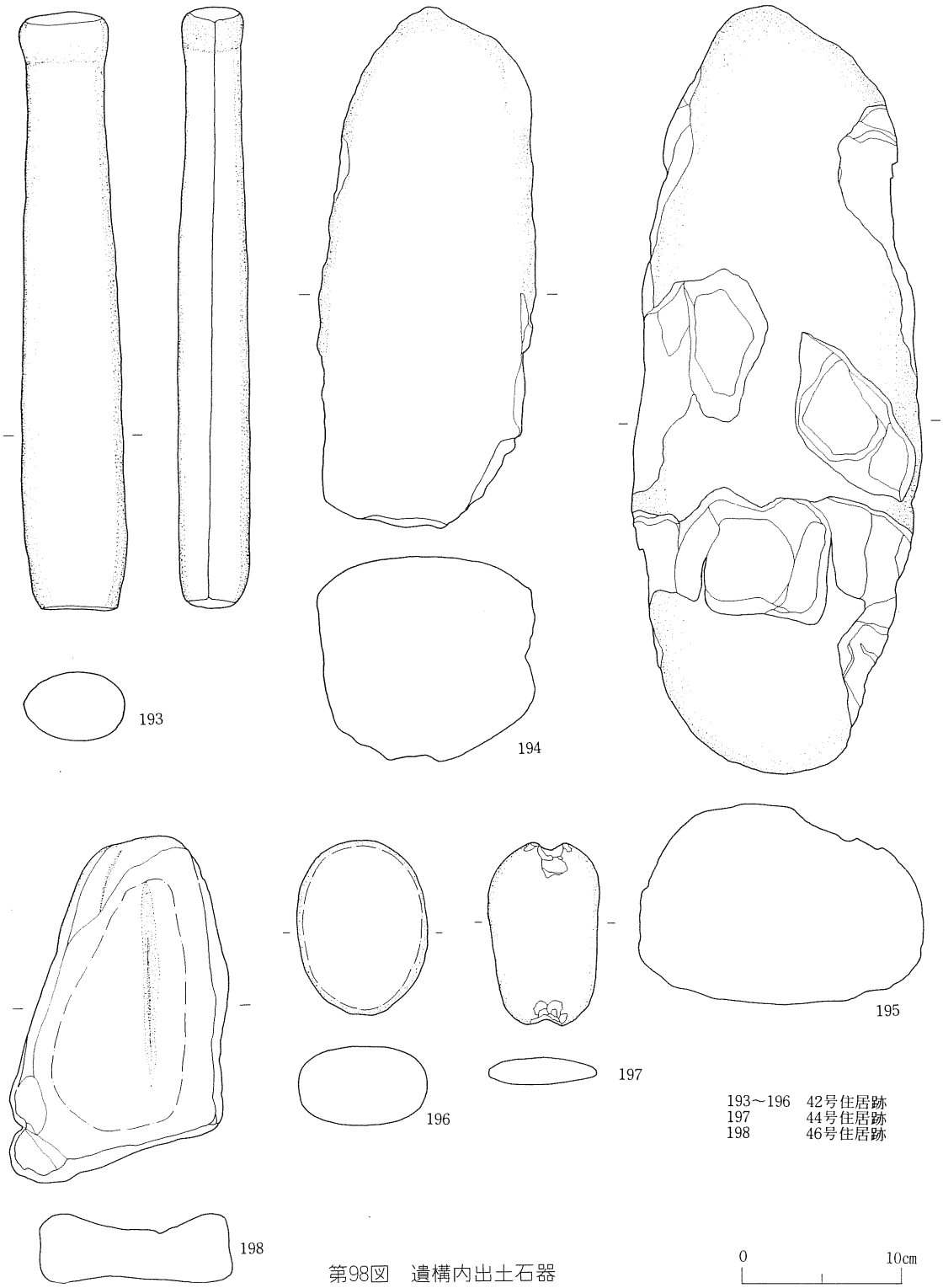
4号フラスコ状ピット出土遺物

土器（第125図）

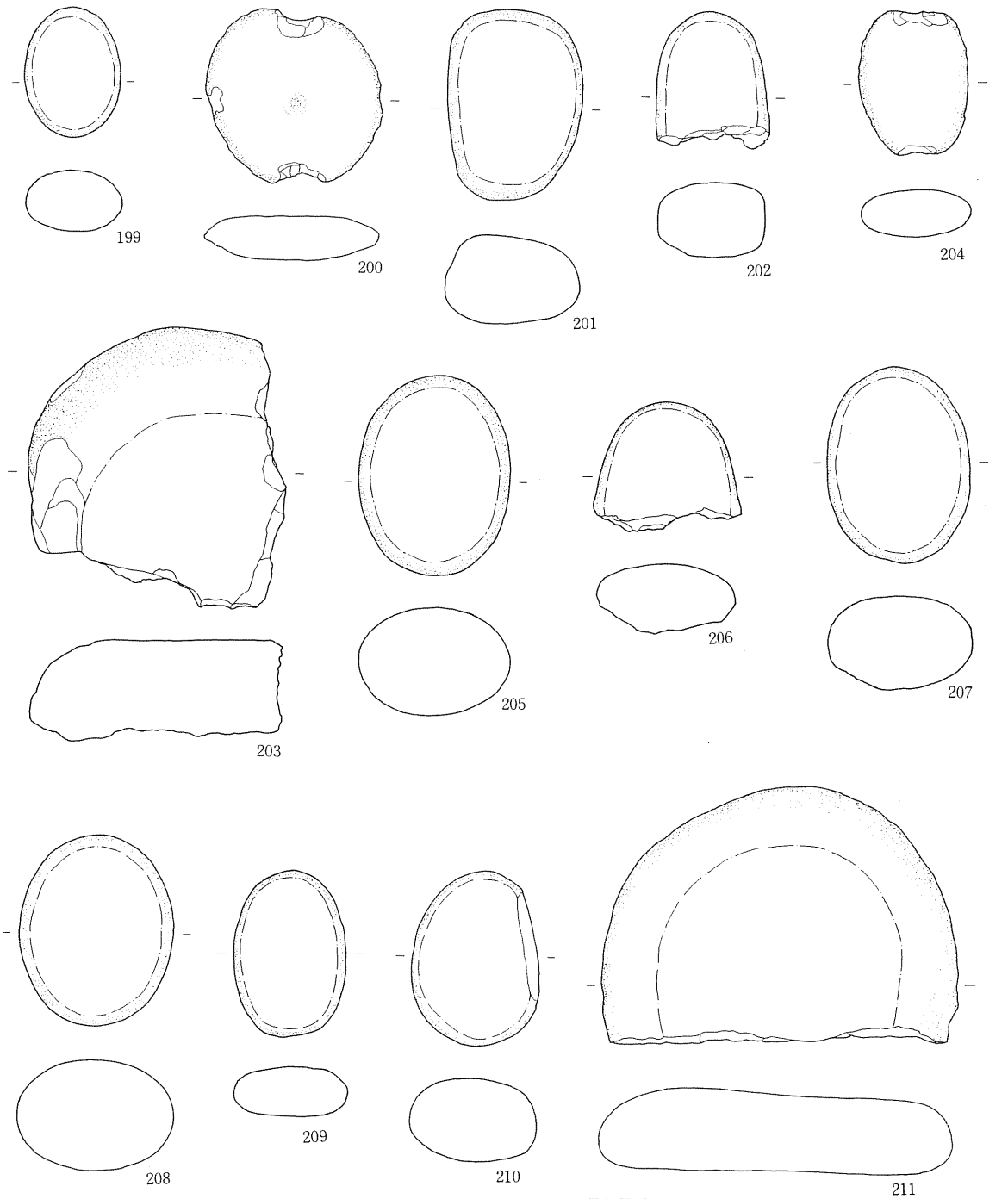
484・485は覆土から出土した。胴部がゆるく膨らみ口縁部が外反する深鉢形土器である。484は



第97図　遺構内出土石器



第98図　遺構内出土石器



199	47号住居跡	206	57号住居跡
200	50号住居跡	207	65号住居跡
201～203	51号住居跡	208	66号住居跡
204	52号住居跡	209～210	67号住居跡
205	53号住居跡	211	72号住居跡

0　10cm

第99図　遺構内出土石器

口縁部には粘土紐を波状に貼付し、上部に撚糸圧痕文が施される。胴上部は四単位に区画され縦に粘土紐を貼付し、その間を弧状に粘土紐を貼付して連絡させている。粘土紐間には撚糸圧痕文が縁どりされている。

地文はLR（横回転）単節斜縄文である。485は口縁部に波状の粘土紐貼付を行ない、上部に撚糸圧痕文が施される。地文はRL（横回転）単節斜縄文である。

5号フラスコ状ピット出土遺物

土器（第125図）

底部近くの覆土から出土した。486は浅鉢形土器である。口縁部に文様帯があり、撚糸圧痕文が施され、六区画に別れている。地文はRL（横回転）単節斜縄文である。487は口縁部が外反する深鉢形土器である。四単位の土器で四つの弁状把手があり、橋状突起が付けられている。胴上部までで文様帯があり、粘土紐貼付に撚糸圧痕文が施された隆帯が、下部では平行に、上部では波状・山形に施されている。その間には角形の刺突文を施している。地文はRL（縦回転）単節斜縄文である。488はキャリパー形の深鉢形土器である。口縁部文様帯は三区画され、その二ケ所に縦の撚糸圧痕文と渦巻文が配される。口縁に楕円区画された溝状の無文部があり、その下に山形に隆帯が施され、撚糸圧痕文によって縁どりされている。地文はLR（横回転）単節斜縄文である。

6号フラスコ状ピット出土遺物

石器（第149図）

212・213は覆土から出土した。212は左側が一部欠損しているが槍先状の石器と思われる。213はヘラ状石器である。石質は両方とも頁岩である。

7号フラスコ状ピット出土遺物

土器（第125・126図）

489・490は覆土から出土した。489は浅鉢形土器である。四単位に区画されており、四ケ所に小さな渦文が配される。その間は押圧縄文が長楕円形に施される。3本目の押圧縄文は中間点で山形を呈している。地文はLR（縦回転）単節斜縄文である。490は胴部が膨らみ口縁部が外反する深鉢形土器である。文様帯は胴上部に施される。撚糸圧痕文が施された粘土紐貼付の隆帯文が波状・平行に施される。地文はRL（縦回転）単節斜縄文である。

石器（第149図）

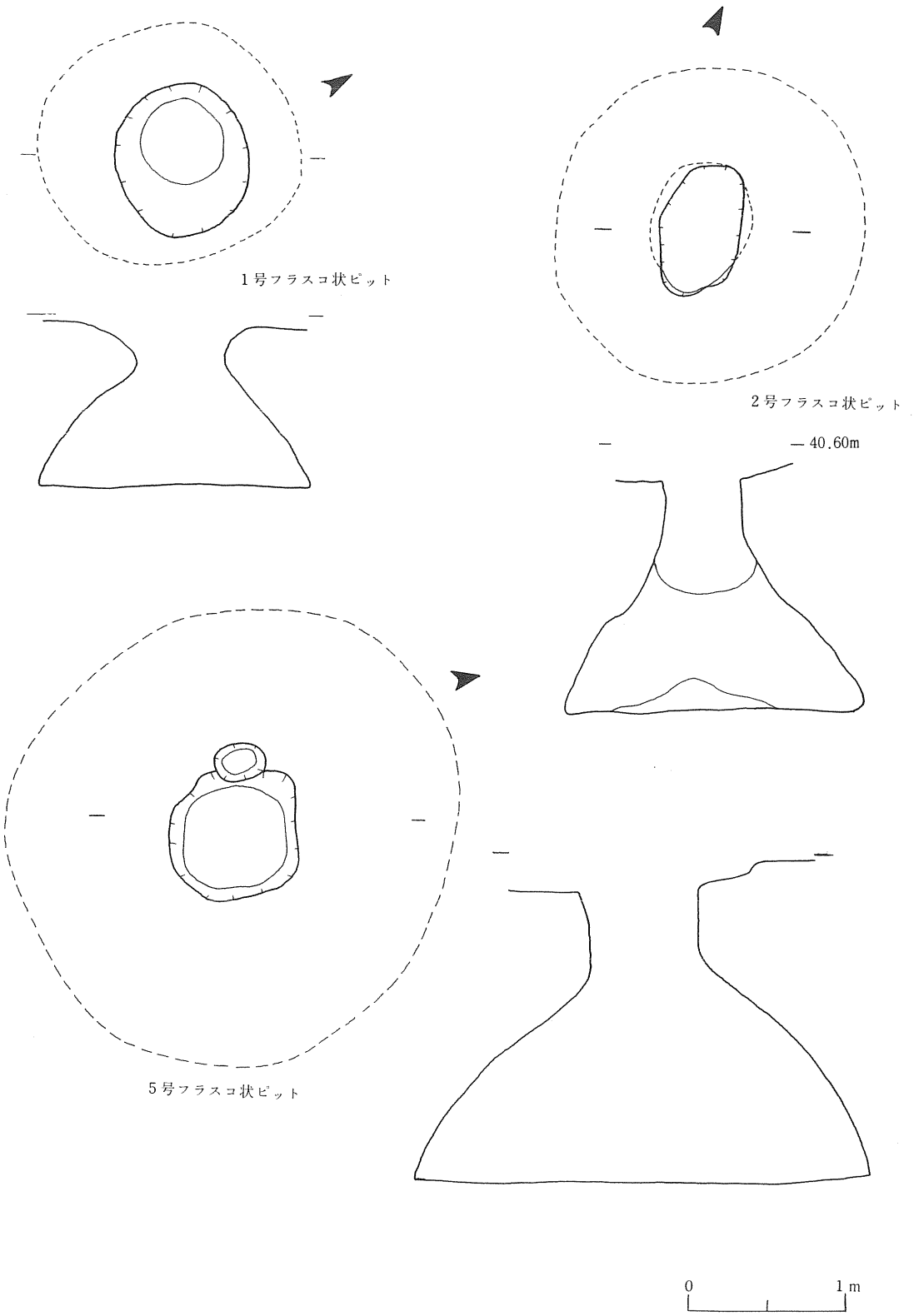
覆土から出土した。214は無茎石鏃、215は両面加工のヘラ状石器である。いずれも石質は頁岩である。

8号フラスコ状ピット出土遺物

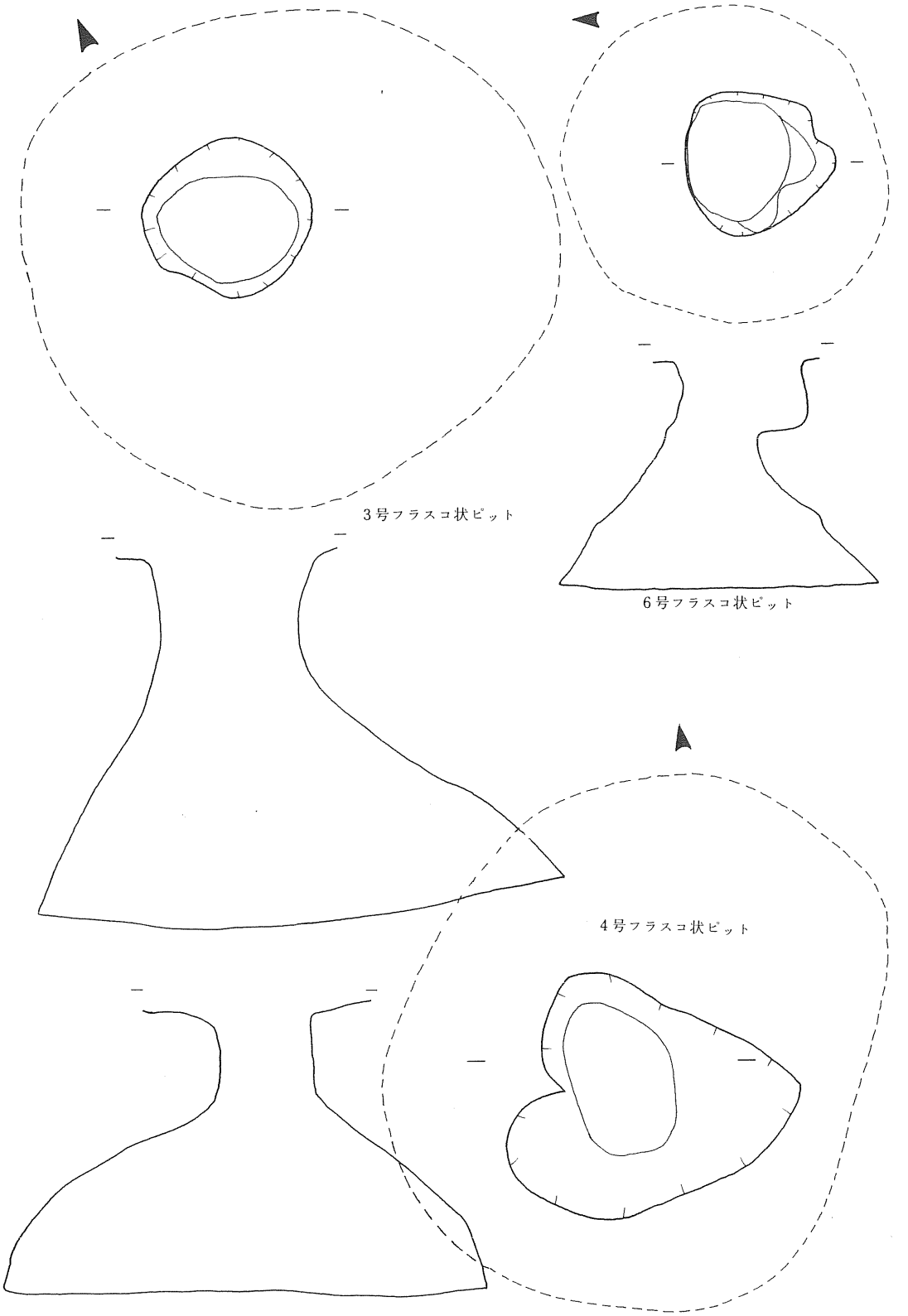
石器（第149図）

216は覆土から出土した。両面加工で、先端刃部が欠損するヘラ状石器で、石質は頁岩である。

9号フラスコ状ピット出土遺物

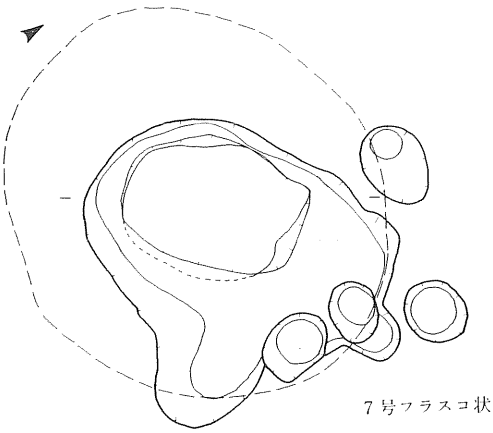


第100図　フラスコ状ピット

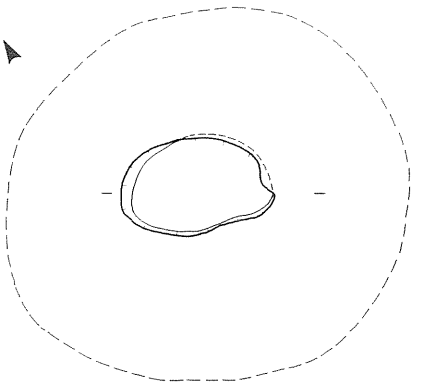


第101図　フラスコ状ピット

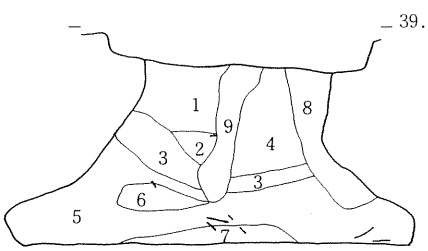
0　1 m



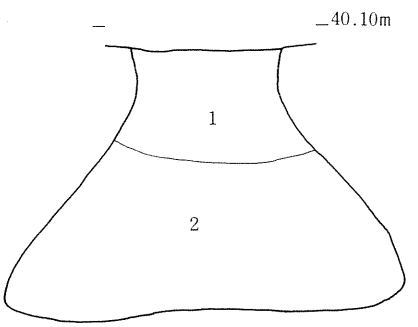
7号フラスコ状ピット



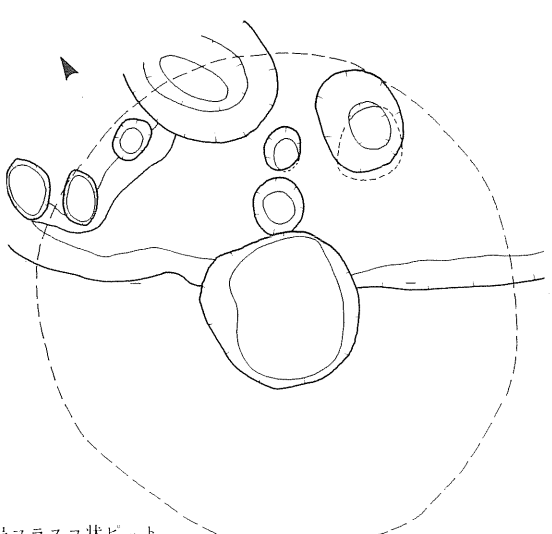
8号フラスコ状ピット



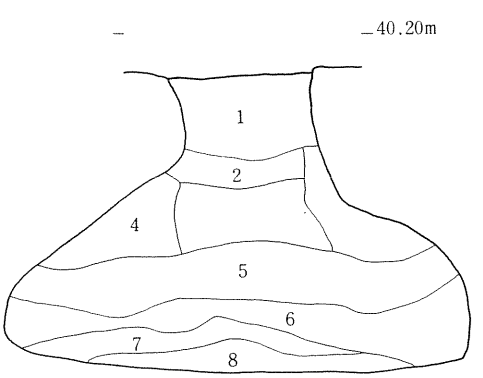
第1層　褐色土、焼土・炭化物・ローム粒子混入
第2層　褐色土、焼土・炭化物・ローム粒子混入
第3層　褐色土、焼土・炭化物混入
第4層　褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第5層　褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第6層　褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第7層　褐色土、炭化物・ローム粒子
　　ロームブロック混入
第8層　ローム
第9層　明褐色土、炭化物
　　ローム粒子混入



第1層　明褐色土、炭化物混入
第2層　褐褐色土、炭化物、黄白色粘土ブロック混入



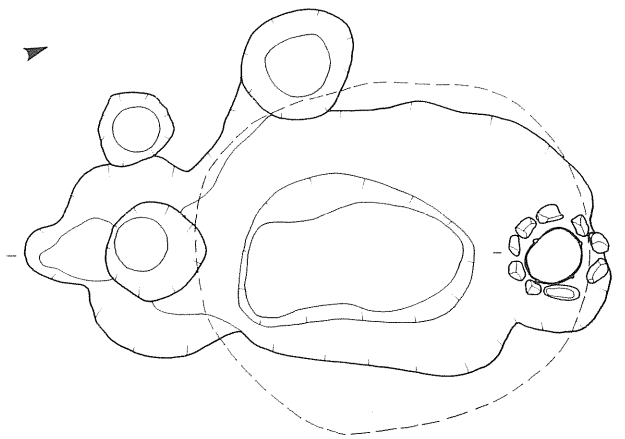
9号フラスコ状ピット



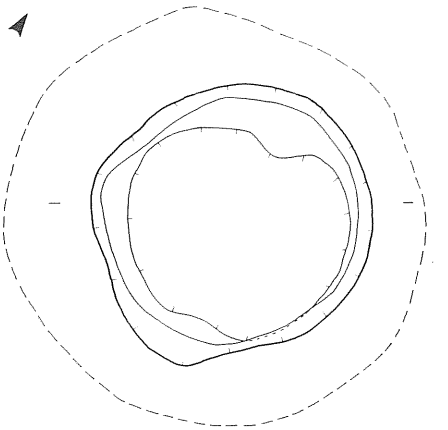
第1層
第2層　明褐色土
第3層　褐色土、炭化物焼土混入
第4層　明褐色土、炭化物混入
第5層　褐色土、炭化物・明褐色土・ブロック混入
第6層　褐色土、炭化物混入
第7層　暗褐色土、炭化物多量混入
第8層　褐色土、小礫を若干含む

0　1m

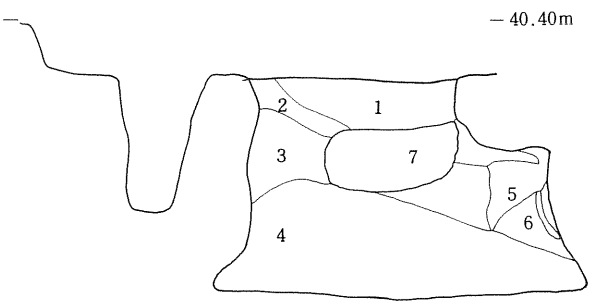
第102図　フラスコ状ピット



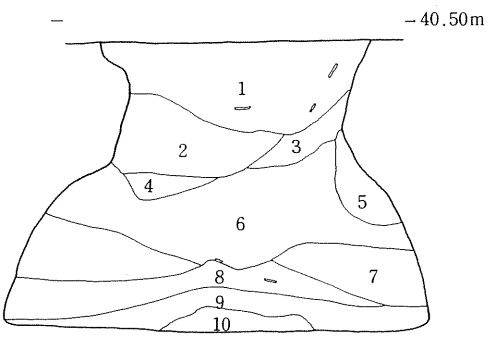
10号フラスコ状ピット



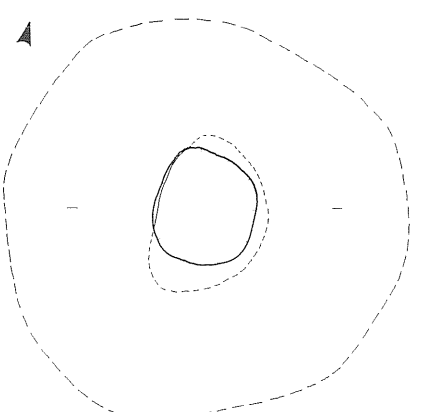
11号フラスコ状ピット



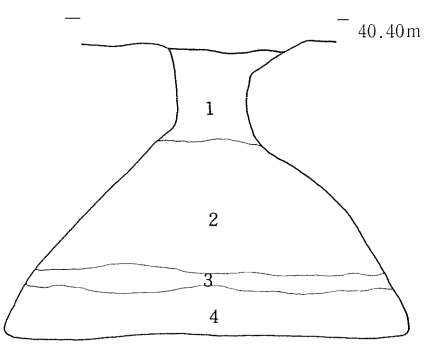
第１層　褐色土、炭化物混入
第２層　明褐色土
第３層　褐色土、明褐色土混入
第４層　暗褐色土
第５層　褐色土
第６層　黄白色土
第７層　崩落土（明黄褐色土）



第１層　褐色土、炭化物、焼土、明褐色土、ブロック混入
第２層　暗褐色土、炭化材混入
第３層　褐色土、炭化物混入
第４層　褐色土、暗褐色土混入
第５層　暗褐色土、明褐色土混合
第６層　暗褐色土、炭化物、焼土混入
第７層　暗褐色土、明褐色土多量混入
第８層　暗褐色土、炭化材混入
第９層　褐色土
第10層　明黄褐色土、明褐色土混入



14号フラスコ状ピット



第１層　黒褐色土、炭化物混入
第２層　褐色土、炭化物・明黄褐色・ブロック混入
第３層　明褐色土、炭化物多量混入
第４層　褐色土、炭化物混入

0　1 m

第103図　フラスコ状ピット

石器（第 149 図）

217 ・ 218 は覆土から出土した。上部が欠損する磨製石斧である。

10 号フラスコ状ピット出土遺物

土器（第 126 図）

覆土から出土した。491 は胴部が若干膨らみ、口縁部が外反する深鉢形土器である。口縁部と胴上部には粘土紐貼付の隆帯がまわり、上部に撚糸圧痕文が施される。また等間隔に二本一組の粘土紐貼付が縦に施されている。頸部には撚糸圧痕文と粘土紐貼付の隆帯が施され上下を連絡している。胴部にはＳ字状に二列縄文が横走する。地文は LR（縦回転）単節斜縄文である。492 は二ケ所に山形口縁を有する深鉢形土器である。半截竹管状工具内面を使用して施される半隆起線文と粘土紐貼付の隆帯によって文様が展開される。口縁部、頸部には二条の半隆起線文がまわり、頸部には二単位づつ四ケ所に長・短の粘土紐貼付が施される。胴部には最初竹管状工具により細かい格子目文が施され、その後半隆起線文がＬ字・クランク状に展開する。北陸系の土器である。493 は複合口縁を有する深鉢形土器で一ケ所が山形口縁を呈する。その頂部に粘土紐を「P」状に貼付している。地文は RL（縦回転）単節斜縄文である。494 は胴部が膨らむ深鉢形土器である。地文は LR（縦回転）単節斜縄文である。

11 号フラスコ状ピット出土遺物

土器（第 127 図）

覆土から出土した。495 は口縁部が外反する深鉢形土器の破片である。弁状把手を有する。口唇部には撚糸圧痕文が施される。頸部、口縁部は粘土紐貼付の隆帯文が施され、上部には撚糸圧痕文が付される。隆帯間には撚糸圧痕文が波状に施文されている。496 は上半部欠損の深鉢形土器である。地文は LR（縦回転）単節斜縄文である。

石器（第 149 図）

219 ～ 223 は覆土から出土した。219 ・ 220 は両面加工で先端部に刃部のあるヘラ状石器である。221 は側縁に刃部のある掻器状の石器と思われる。222 ・ 223 は刃部欠損の磨製石斧である。

土製品（第 161 図）

22 は覆土から出土した土偶である。頭・手は欠損する。腹部が非常に膨らんでおり、両足は非常にリアルに作られている。

14 号フラスコ状ピット出土遺物

石器（第 149 ・ 151 図）

覆土から出土した。224 は基部に対して刃部が直角に近くなるヘラ状石器と思われる。225 は小型のヘラ状石器である。241 ・ 242 は磨石である。

土製品（第 162 図）

27 は覆土から出土した土偶の頭部である。沈線によって文様が描かれている。

15 号フラスコ状ピット出土遺物

土器（第 127 図）

498 は覆土から出土した。キャリパー形を呈する深鉢形土器である。四単位の土器で波状口縁である。各頂部に半截竹管状工具内面による半隆起線文を描き、上部に刻目文を施している。頸部には一条の粘土紐貼付の隆帯がめぐり、同様に刻目文が施される。地文は LR（縦回転）単節斜縄文である。

石器（第 149 ・ 151 図）

226 ・ 243 ～ 248 は覆土から出土した。226 は両面加工のヘラ状石器である。243 は両端を打ち欠いた石錘である。244 は片面使用のくぼみ石、245 ～ 248 は磨石である。

土製品（第 160 図）

11 は覆土から出土した三角形土製品である。中央部、三角形の各頂部に粘土を貼付している。全面に規則的に刺突文が配される。

16 号フラスコ状ピット出土遺物

石器（第 149 図）

227 は覆土から出土した。刃部が欠損するヘラ状石器である。石質は頁岩である。

17 号フラスコ状ピット出土遺物

土器（第 127 ・ 128 図）

覆土から出土した。499 は浅鉢形土器で、頸部は内反し、口縁は短かく外反している。四単位の土器と思われ、頸部に一対の押圧縄文を施す突起を有し、口縁部から粘土紐貼付の隆帯で連絡している。胴部は上部に粘土紐貼付の隆帯が波状にまわり、四ケ所からは縦に垂下させ、中間で「＋」字状に施される。隆帯に沿ってヘラ状工具による沈線で縁どられている。地文は LR（縦回転）単節斜縄文である。500 はキャリパー形を呈する深鉢形土器である。四単位の土器で口縁部に文様帯がある。頸部の四ケ所に瘤状の突起を貼付し、その間を粘土紐貼付の隆帯で連絡させている。口縁部は同様の隆帯を大きく波状に施しており、押圧縄文で縁どりをしている。口縁にも押圧縄文が施される。地文は口縁部が LR（横回転）胴部が LR（縦回転）単節斜縄文である。501 は胴部が膨らみ、頸部から口縁部にかけて外反し、口縁が直立する深鉢形土器の破片である。口縁部は粘土紐貼付の隆帯を波状にめぐらし、上部に刻目文を施している。胴部は粘土紐貼付の隆帯で文様帯を区画しその内側にヘラ状工具による沈線文で渦文などの文様が施されている。地文は LR（縦回転）単節斜縄文である。

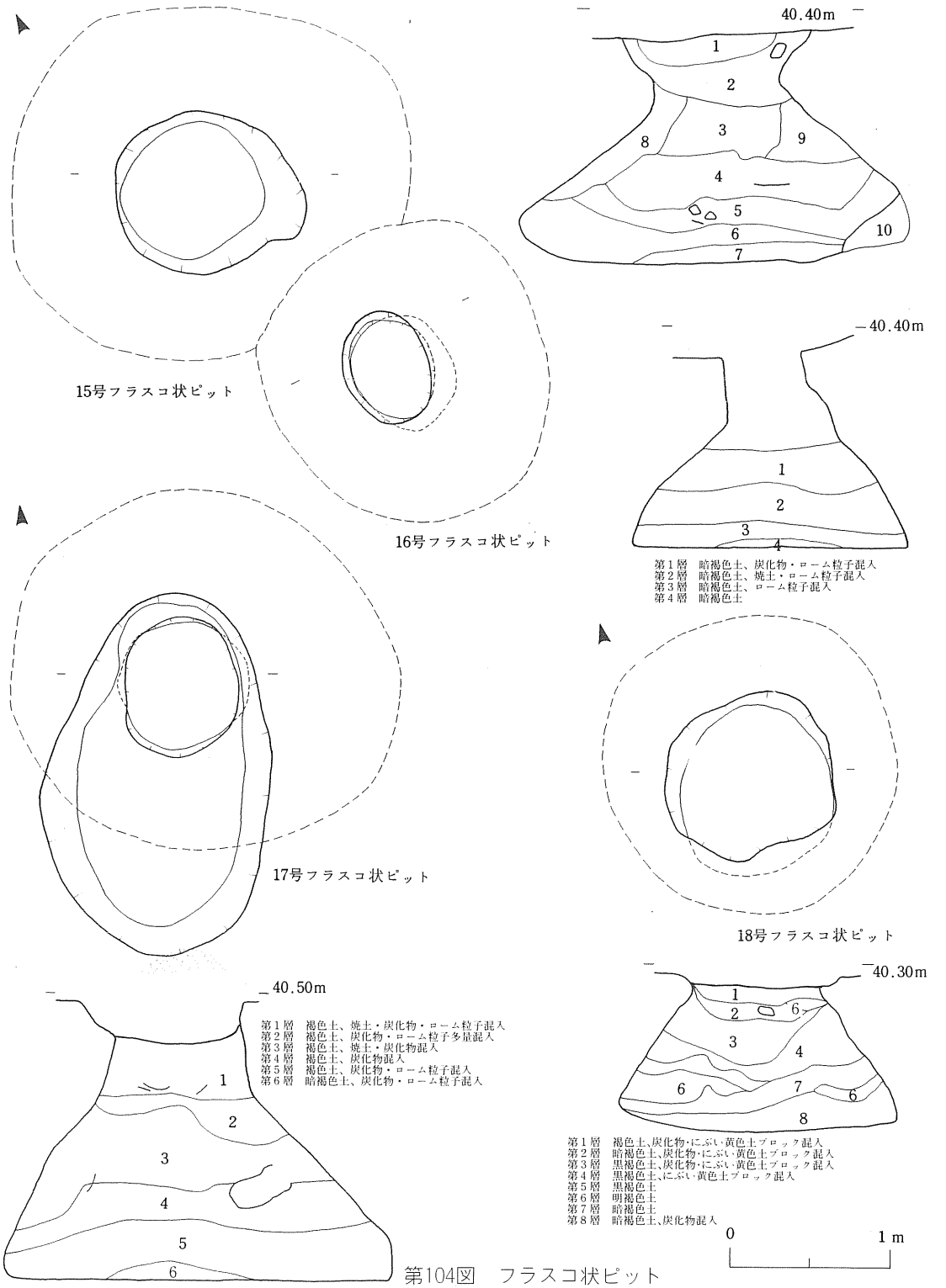
石器（第 150 図）

覆土から出土した。228 は無茎の石鏃で抉りが深く、先端は細く鋭角になっている。229 は両面加工のヘラ状石器である。いずれも石質は頁岩である。

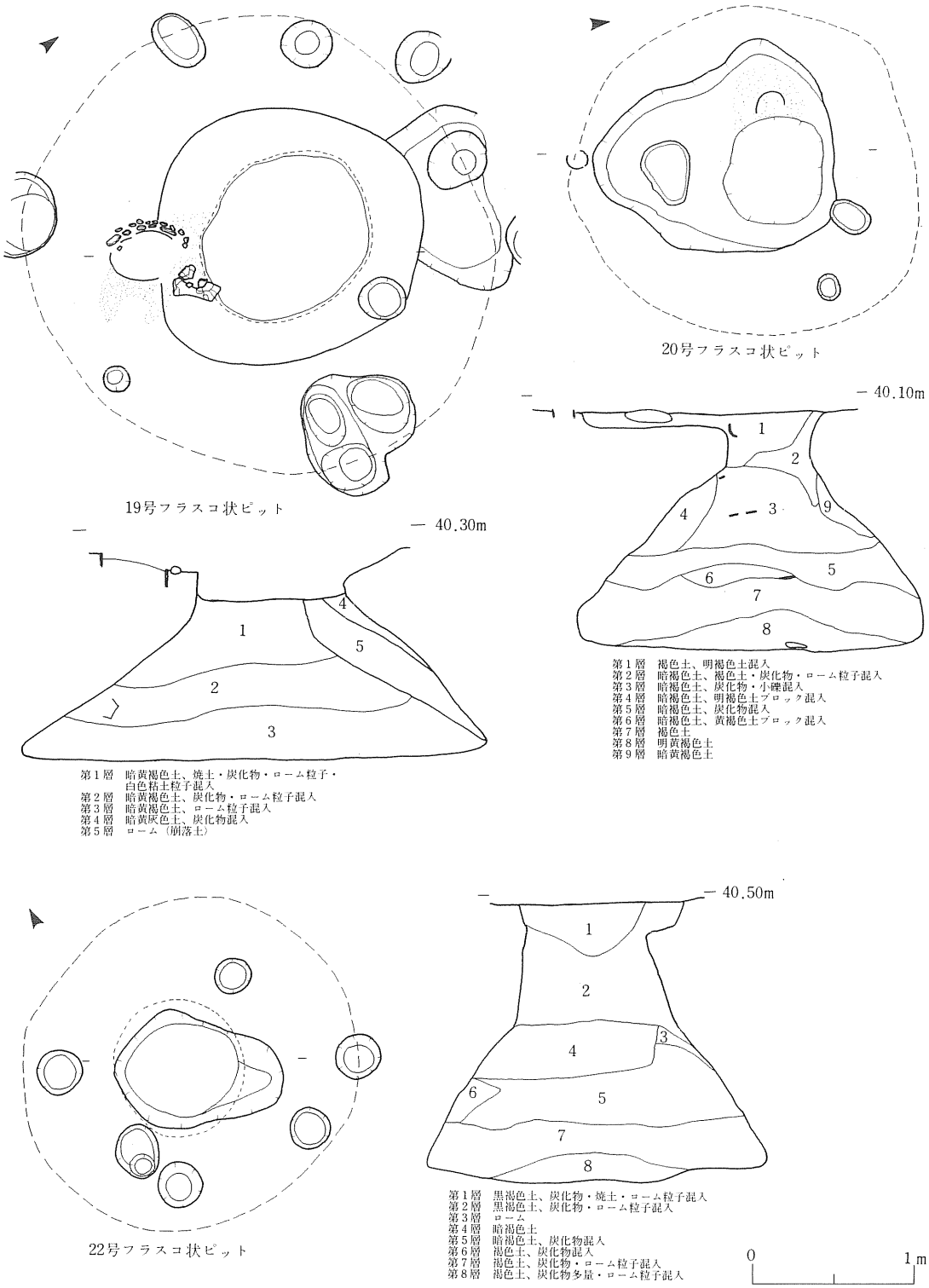
19 号フラスコ状ピット出土遺物

フラスコ状ピット一覧表

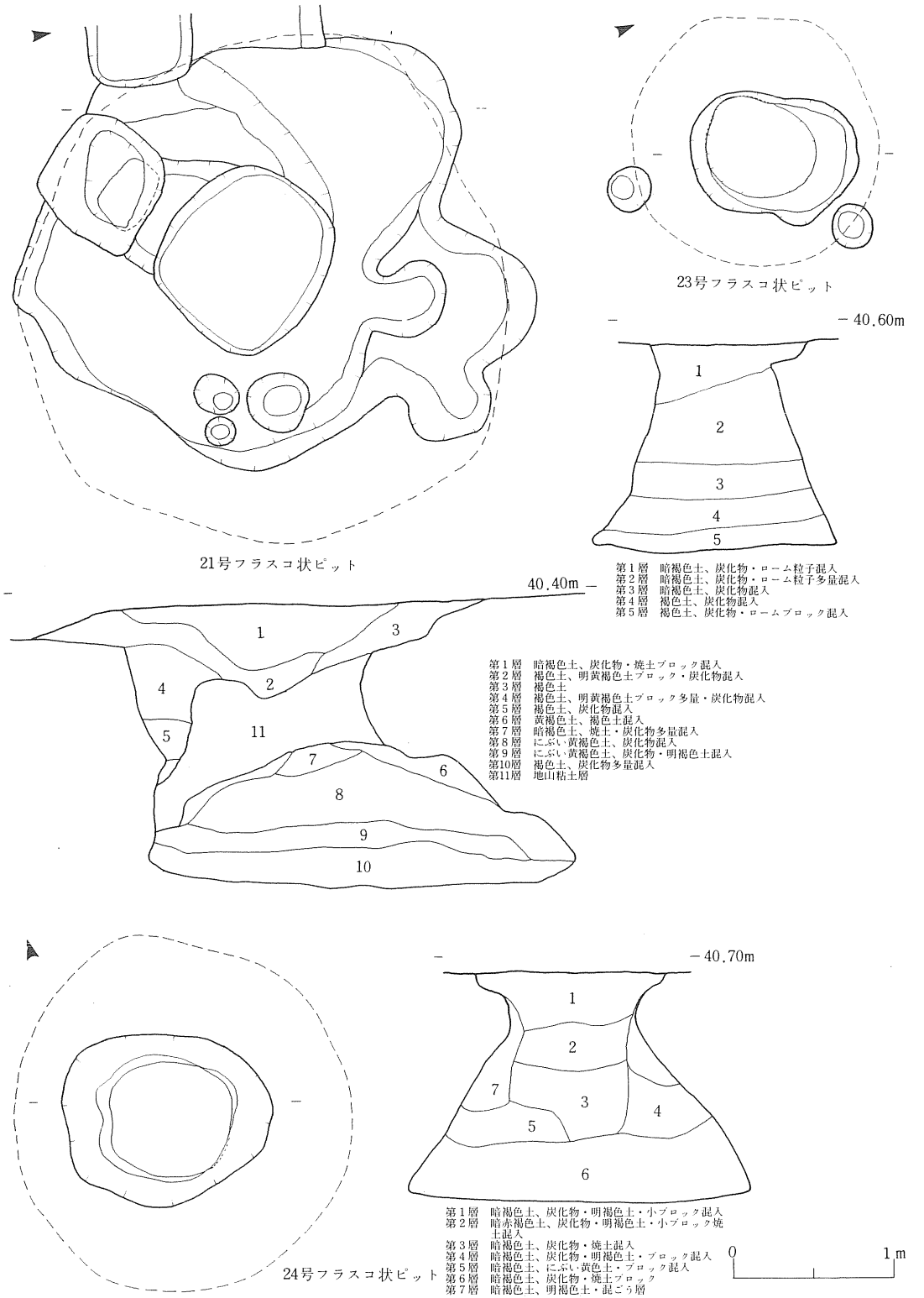
番号	壙口部			壙底部			深さ(cm)	出土遺物	備考
	長軸(cm)	短軸(cm)	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	平面形			
1	99	86	楕円形	170	160	楕円形	101	第125図482	
2	88	52	楕円形	200	198	円形	146		
3	109	102	楕円形	348	320	楕円形	237	第125図483	
4	193	150	不整形	347	289	楕円形	177	第125図484・485	
5	94	84	隅丸方形	302	279	楕円形	194	第125図486～488	
6	96	88	不整形	215	201	楕円形	146	第149図212・213	
7	97	67	楕円形	215	191	楕円形	111	第125図489、第126図490、第129図、第149図214・215	
8	82	51	楕円形	218	197	楕円形	138	第130図、第149図216	
9	87	81	楕円形	262	249	楕円形	157	第131図536～546、第149図217・218	
10	127	81	楕円形	216	196	楕円形	118	第126図491～494、第131図547～549	
11	157	147	円形	225	214	楕円形	153	第127図495・496、第132図550～557、第149図219～223、第161図22	
12								第132図558～562	崩落のため調査不能
13									
14	64	57	楕円形	212	209	円形	151	第132図563～568、第133図569～577、第149図224・225、第151図241・242、第162図27	
15	122	102	楕円形	250	222	楕円形	144	第127図498、第133図578～583、第134図584～588、第149図226、第151図243～248、第160図11	
16	72	53	楕円形	187	175	楕円形	121	第134図589～595、第149図227	
17	89	71	楕円形	248	226	楕円形	174	第127図499、第128図500・501、第134図596～600、第135図、第136図613～621、第150図228・229	
18	113	104	不整形	188	182	円形	98	第136図622～624	
19	180	161	楕円形	291	271	楕円形	130	第128図502、第137図、第151図249・250	
20	148	110	不整形	221	203	楕円形	148	第138図639～643、第150図230	
21	119	112	不整形	314	305	楕円形	196	第138図644～658、第139図659～670、第150図231・232,第151図251～253、第161図16	
22	105	66	楕円形	210	194	楕円形	173	第128図503、第139図671～675、第140図676～685	
23	106	74	楕円形	162	154	楕円形	132	第140図686～687、第151図233	
24	132	108	楕円形	226	212	楕円形	144	第140図688～693、第141図694～696	
25	77	75	円形	242	217	楕円形	178	第127図497、第128図504・505、第141図697～705、第150図234・235、第151図254、第160図9、第161図17	
26	84	63	楕円形	193	178	楕円形	135	第128図506、第141図706～708	
27	99	67	楕円形	170	155	楕円形	138	第141図709～713	
28	124	106	不整形	191	183	隅丸方形	88		



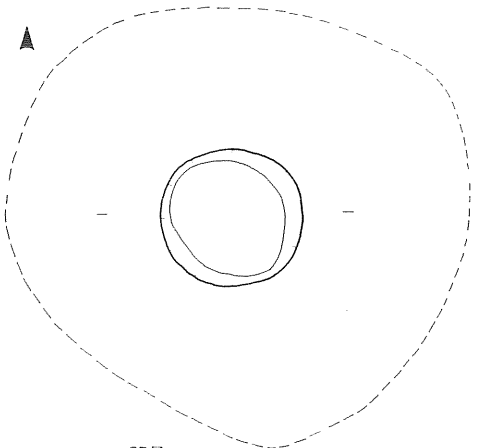
第104図　フラスコ状ピット



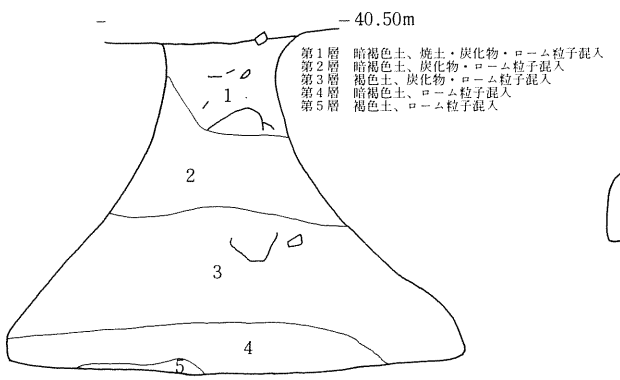
第105図　フラスコ状ピット

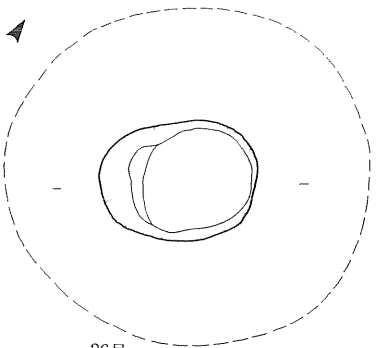


第106図　フラスコ状ピット

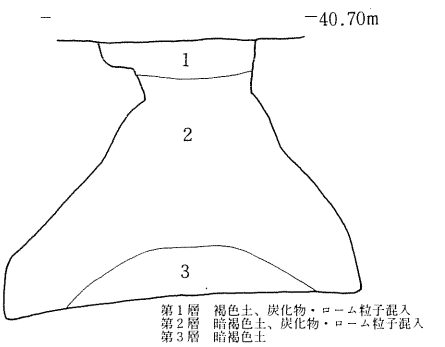


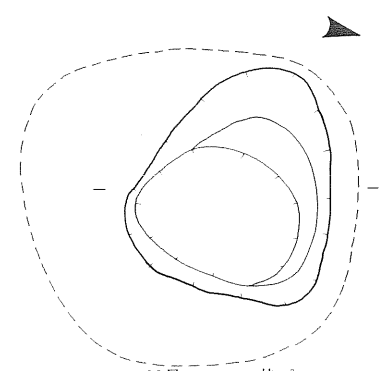
25号フラスコ状ピット



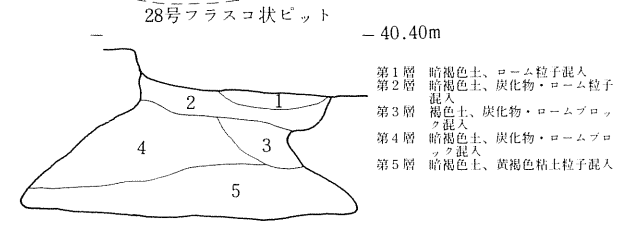


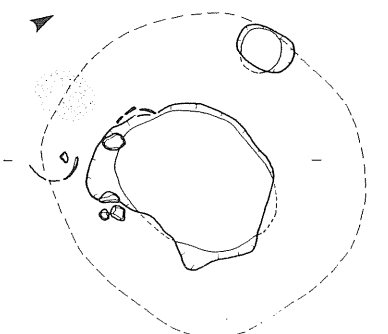
26号フラスコ状ピット



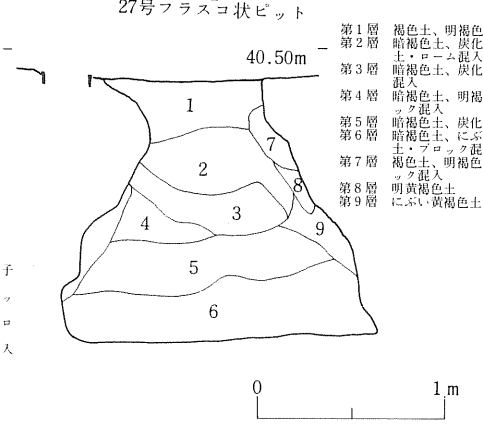


28号フラスコ状ピット





27号フラスコ状ピット



第107図　フラスコ状ピット

土器（第 128 図）

覆土から出土した。502 は胴部が膨らみ口縁部が若干外反する鉢形土器である。口縁部には撚糸圧痕文を等間隔に配し、四ケ所に細い粘土紐貼付を施す。頸部から胴上部は沈線文で区画し、渦文が横方向に施される。地文は撚糸文である。

石器（第 151 図）

覆土から出土した。249 ・ 250 は両端を打ち欠いて作られた石錘である。

20 号フラスコ状ピット出土遺物

石器（第 150 図）

覆土から出土した。230 は両面加工のヘラ状石器と思われる。頁岩である。

21 号フラスコ状ピット出土遺物

石器（第 150 ・ 151 図）

覆土から出土した。230 は先端が尖った縦型の石匙、231 は上部が欠損する磨製石斧である。251 は両端を打ち欠いた石錘、252 ・ 253 は磨石である。

土製品（第 161 図）

覆土から出土した。16 は三角形土製品である。二つの頂部は欠損しているが、残っている頂部には粘土を貼付て盛りあげている。

22 号フラスコ状ピット出土遺物

土器（第 128 図）

覆土から出土した。頸部から口縁部にかけてゆるやかに外反する深鉢形土器である。四つの弁状把手を有し、口唇部には等間隔に粘土紐を貼付している。文様帯は胴部中程まで下がり、頂部四ケ所からは粘土紐貼付の隆帯が二本垂下し中に波状文を施している。間には角形の刺突文を肋骨状に配している。地文は LR（縦回転）単節斜縄文である。

23 号フラスコ状ピット出土遺物

石器（第 151 図）

覆土から出土した。233 は上部が若干くびれ、先端部に刃部をもつ両面加工のヘラ状石器である。石質は頁岩である。

25 号フラスコ状ピット出土遺物

土器（第 127 ・ 128 図）

覆土から出土した。497 はキャリパー形を呈する深鉢形土器である。口縁と頸部に細い粘土紐貼付の隆帯がまわる。間には二本一組の同様の隆帯を縦に施し連絡する。地文は RL（縦回転）単節斜縄文である。504 は LR（縦回転）単節斜縄文の浅鉢形土器である。505 は口縁部が「く」の字状に外反する浅鉢形土器である。口縁部は粘土紐貼付によって楕円区画され、中に押圧縄文が施される。地文は RL（縦回転）単節斜縄文である。

石器（第 150 ・ 151 図）

覆土から出土した。234 はツマ部に対して刃部が鋭角につく石匙で縦型に入ると思われる。235 は両面加工のヘラ状石器である。いずれも石質は頁岩である。254 は両端を欠いて作られた石錘である。

土製品（第 160 ・ 161 図）

覆土から出土した。9 は長方形を呈する土製品で等間隔に沈線がまわり、片面に縦に三本の沈線が走る。17 は三角形土製品である。

26 号フラスコ状ピット出土遺物

土器（第 128 図）

覆土から出土した。506 は口縁部がゆるやかに外反する深鉢形土器である。四単位の土器で、口縁

土器埋設遺構一覧表

遺構番号	プラン	堀り方規模		出土遺物（埋設土器）	備考
		径(cm)	深さ(cm)		
1 号土器埋設遺構	円　形	60	27	深鉢形土器、口線部外反、口縁、頸部に二条ずつ粘土紐貼付隆帯がめぐる。上に刻み状の撚糸圧痕、隆帯間に撚糸圧痕による擬似爪形文。	第146図759
2 号土器埋設遺構	円　形	35	28	深鉢形土器、垂下する粘土紐貼付の隆帯か蛇行する。地文、LR（縦回転）単節斜縄文。	第146図760
3 号土器埋設遺構	円　形	33	15	深鉢形土器胴部、地文、LR（縦回転）単節斜縄文。	第146図761
4 号土器埋設遺構	円　形	55	27	深鉢形土器、胴部、地文、LR（縦回転）単節斜縄文。	第147図762
5 号土器埋設遺構	円　形	32	32	深鉢形土器、平縁、平行、垂下、Y状の撚糸圧痕文が施文される。(763) 深鉢形土器、破片、粘土紐貼付の隆帯上に撚糸圧痕文、間には擬似爪形文、地文、結束のある羽状縄文。	第147図763、764
6 号土器埋設遺構	円　形	47	34	深鉢形土器、波状口縁、地文、LR（縦回転）単節斜縄文	第148図766、周辺焼土分布
7 号土器埋設遺構	円　形	34	20	深鉢形土器、胴部、頸部に隆線、口縁部は隆線に沿って押圧縄文。	第147図765
8 号土器埋設遺構	円　形	47	57	深鉢形土器、四単位、四ケ所に細い粘土紐貼付二本一組を縦に施す。その間を連絡して、4 条の平行な押圧線文をめぐらし、間に波状に押圧縄文が施文される。	第148図767、倒立して埋設

土 壙 一 覧 表

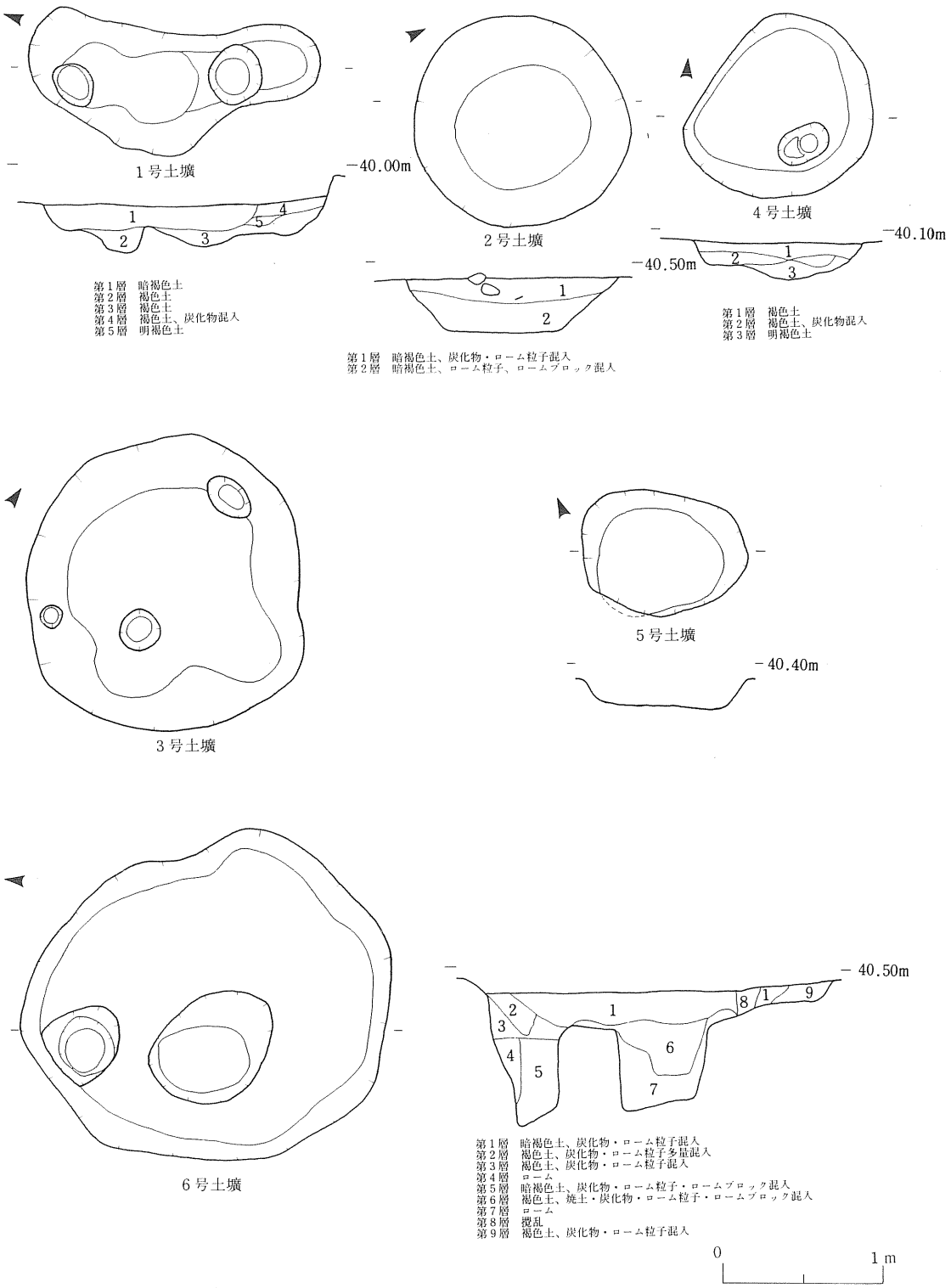
土壙番号	規模（cm）			平面形	断面形	出土遺物
	長軸	短軸	深さ			
1	183	76	30	不整形	皿状	
2	134	133	34	円形	洗面器状	
3	182	169	55	楕円形	皿状	第144図723
4	118	114	24	楕円形	洗面器状	第145図755
5	105	76	20	楕円形	洗面器状	
6	236	199	83	楕円形	皿状	第144図724～725
7	210	129	32	不整形	皿状	第151図255、第144図726
8	225	172	68	不整形	ロート状	第144図727・728
9	134	121	48	円形	鍋状	第150図236、第144図729
10	234	213	16	不整形	皿状	
11	227	125	40	不整形	洗面器状	
12	110	80	64	不整形	ロート状	第144図730
13	142	116	50	不整形	鍋状	第144図731・732
14	93	74	65	楕円形	ビーカー状	第142図714～716、第150図237
15	92	75	73	楕円形	ロート状	第144図733・734
16	156	84	15	不整形	皿状	
17	90	83	27	円形	鍋状	
18	76	59	33	楕円形	鍋状	第144図735
19	153	129	82	楕円形	ビーカー状	第144図736
20	122	95	61	楕円形	洗面器状	
21	147	104	66	楕円形	ビーカー状	第142図717
22	226	165	39	楕円形	洗面器状	第150図238、第144図737～744
23	94	88	31	円形	鍋状	
24	78	74	51	円形	ビーカー状	
25	84	57	44	楕円形	ビーカー状	
26	66	57	22	楕円形	鍋状	
27	77	66	27	楕円形	鍋状	
28	86	69	11	楕円形	皿状	
29	70	62	14	円形	皿状	第142図718
30	73	67	13	円形	洗面器状	
31	107	68	29	不整形	鍋状	第145図745～747
32	67	65	22	円形	鍋状	
33	79	73	12	円形	洗面器状	
34	297	103	28	楕円形	皿状	
35	114	96	35	楕円形	鍋状	
36	81	64	30	楕円形	鍋状	
37	64	59	24	円形	鍋状	
38	69	64	26	円形	鍋状	

土壙番号	規模（cm）			平面形	断面形	出土遺物
	長軸	短軸	深さ			
39	72	65	16	円形	洗面器状	第151図256
40	69	63	18	円形	洗面器状	
41	64	62	39	円形	ビーカー状	
42	80	73	26	楕円形	鍋状	
43	83	80	17	円形	鍋状	
44	65	59	28	円形	袋状	
45	73	70	53	円形	袋状	
46	77	66	52	楕円形	袋状	
47	90	74	25	楕円形	鍋状	
48	92	83	31	楕円形	鍋状	
49	67	62	17	円形	鍋状	
50	100	92	55	楕円形	ビーカー状	
51	107	71	31	楕円形	鍋状	
52	83	77	14	円形	洗面器状	
53	87	87	17	円形	洗面器状	
54	65	50	14	不整形	洗面器状	
55	59	49	23	楕円形	鍋状	
56	90	84	31	楕円形	鍋状	
57	68	60	25	円形	鍋状	
58	55	52	9	円形	皿状	
59	69	65	13	円形	皿状	
60	101	99	13	円形	皿状	
61	72	71	39	円形	鍋状	
62	73	70	33	円形	鍋状	
63	71	69	28	円形	鍋状	
64	79	64	34	楕円形	鍋状	第142図719
65	84	74	47	楕円形	鍋状	
66	65	62	27	円形	鍋状	
67	79	77	15	円形	皿状	
68	76	71	51	円形	ビーカー形	
69	71	66	36	楕円形	鍋状	
70	84	71	43	楕円形	鍋状	
71	66	62	41	円形	ビーカー状	
72	98	96	57	円形	鍋状	
73	87	79	46	楕円形	ビーカー状	
74	79	72	66	楕円形	ビーカー状	
75	107	95	75	楕円形	ビーカー状	
76	85	75	39	楕円形	鍋状	

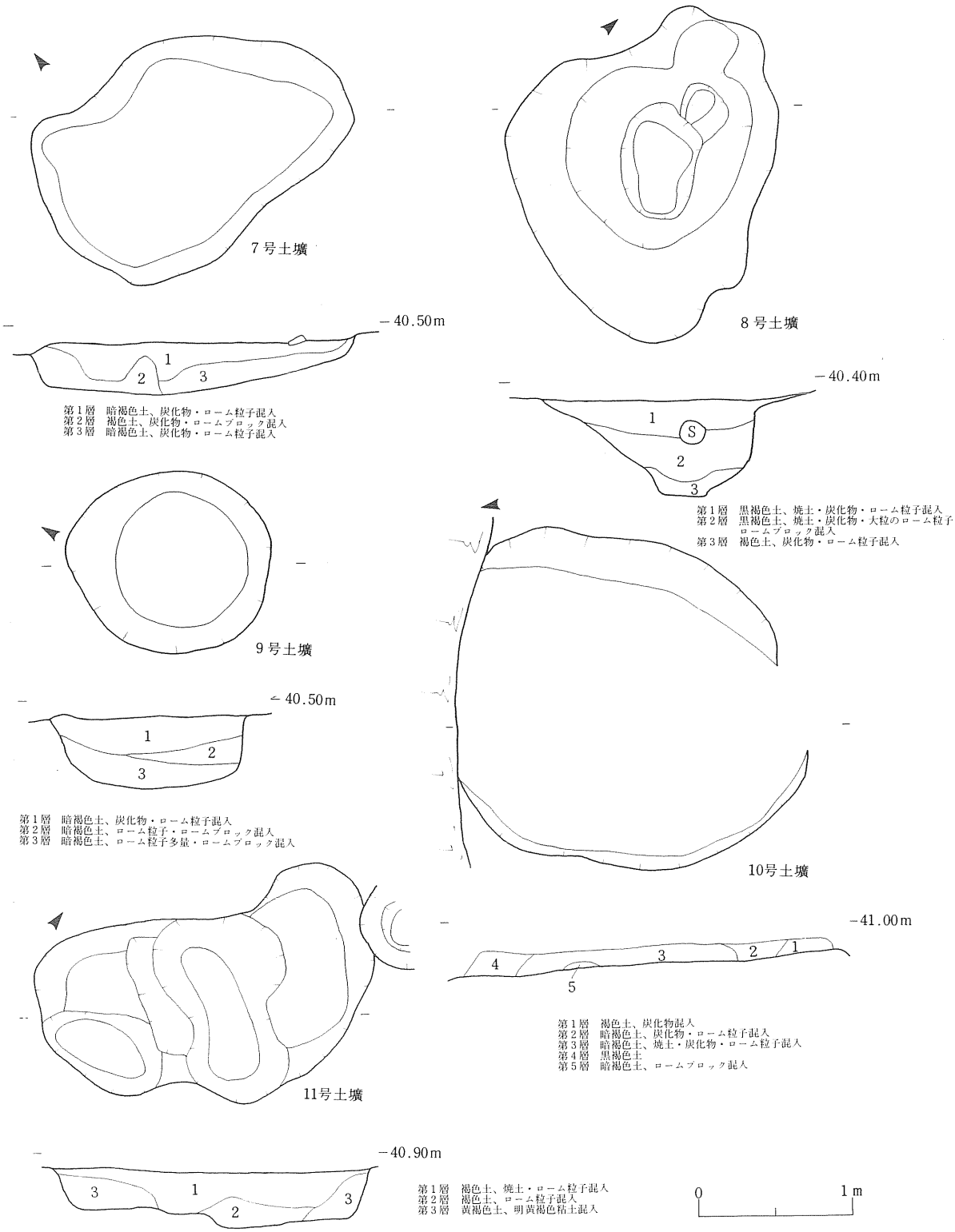
土壙番号	規模（cm）			平面形	断面形	出土遺物
	長軸	短軸	深さ			
77	75	72	46	円形	ビーカー状	
78	65	58	47	楕円形	鍋状	
79	87	73	52	楕円形	ビーカー状	
80	79	77	77	円形	ビーカー状	
81	73	64	58	楕円形	ビーカー状	
82	64	58	47	円形	鍋状	
83	94	84	63	楕円形	ビーカー状	
84	96	85	31	楕円形	鍋状	
85	78	75	45	円形	鍋状	
86	94	86	56	隅丸方形	鍋状	
87	99	76	22	楕円形	鍋状	
88	93	86	66	楕円形	ビーカー状	
89	75	72	46	円形	ビーカー状	
90	88	80	45	楕円形	鍋状	第150図239
91	75	72	65	円形	ビーカー状	
92	90	85	30	楕円形	鍋状	
93	77	70	37	楕円形	鍋状	
94	88	82	47	楕円形	ビーカー状	
95	93	76	33	楕円形	袋状	
96	86	82	41	楕円形	鍋状	
97	69	66	33	円形	鍋状	
98	66	59	14	楕円形	洗面器状	
99	72	71	36	円形	鍋状	
100	76	68	38	楕円形	ビーカー状	
101	70	65	50	楕円形	ビーカー状	
102	64	57	44	不整形	ビーカー状	
103	88	78	66	楕円形	ビーカー状	
104	71	69	47	円形	ビーカー状	
105	66	63	44	円形	ビーカー状	第143図720
106	75	62	28	楕円形	鍋状	
107	93	84	43	楕円形	鍋状	
108	84	71	70	楕円形	ビーカー状	
109	71	70	48	円形	鍋状	
110	111	101	108	円形	袋状	
111	114	102	41	不整形	鍋状	
112	71	65	52	円形	袋状	
113	61	57	46	円形	鍋状	
114	76	66	16	楕円形	洗面器状	

土壙番号	規模（cm）			平面形	断面形	出土遺物
	長軸	短軸	深さ			
115	68	65	49	円形	ビーカー状	
116	121	69	45	楕円形	鍋状	
117	233	65	30	不整形	鍋状	
118	95	85	68	楕円形	皿状	
119	148	84	35	楕円形	鍋状	
120	107	81	62	楕円形	鍋状	
121	67	63	40	楕円形	鍋状	
122	81	61	33	楕円形	鍋状	
123	77	70	21	楕円形	鍋状	
124	87	83	32	楕円形	鍋状	
125	99	79	44	楕円形	鍋状	
126	87	76	－	楕円形	－	
127	91	84	46	円形	鍋状	
128	97	83	55	楕円形	鍋状	
129	78	74	38	円形	鍋状	
130	78	73	19	円形	洗面器状	
131	102	77	57	楕円形	鍋状	
132	78	64	28	楕円形	鍋状	
133	92	71	54	楕円形	袋状	
134	88	42	24	楕円形	洗面器状	
135	84	56	25	楕円形	洗面器状	
136	85	81	77	円形	ビーカー状	
137	70	62	56	楕円形	鍋形	
138	62	60	51	楕円形	鍋状	第143図721
139	108	88	52	楕円形	鍋状	
140	87	84	53	円形	鍋状	
141	77	76	53	円形	鍋状	
142	86	81	66	円形	鍋状	
143	90	－	50	楕円形	鍋状	
144	88	－	48	楕円形	鍋状	
145	132	94	50	楕円形	鍋状	
146	87	79	57	円形	鍋状	
147	60	51	42	楕円形	鍋状	
148	97	87	53	楕円形	鍋状	
149	88	77	56	楕円形	ビーカー状	
150	90	74	45	楕円形	ビーカー状	第143図720
151	89	72	48	楕円形	鍋状	
152	77	69	49	楕円形	ビーカー状	

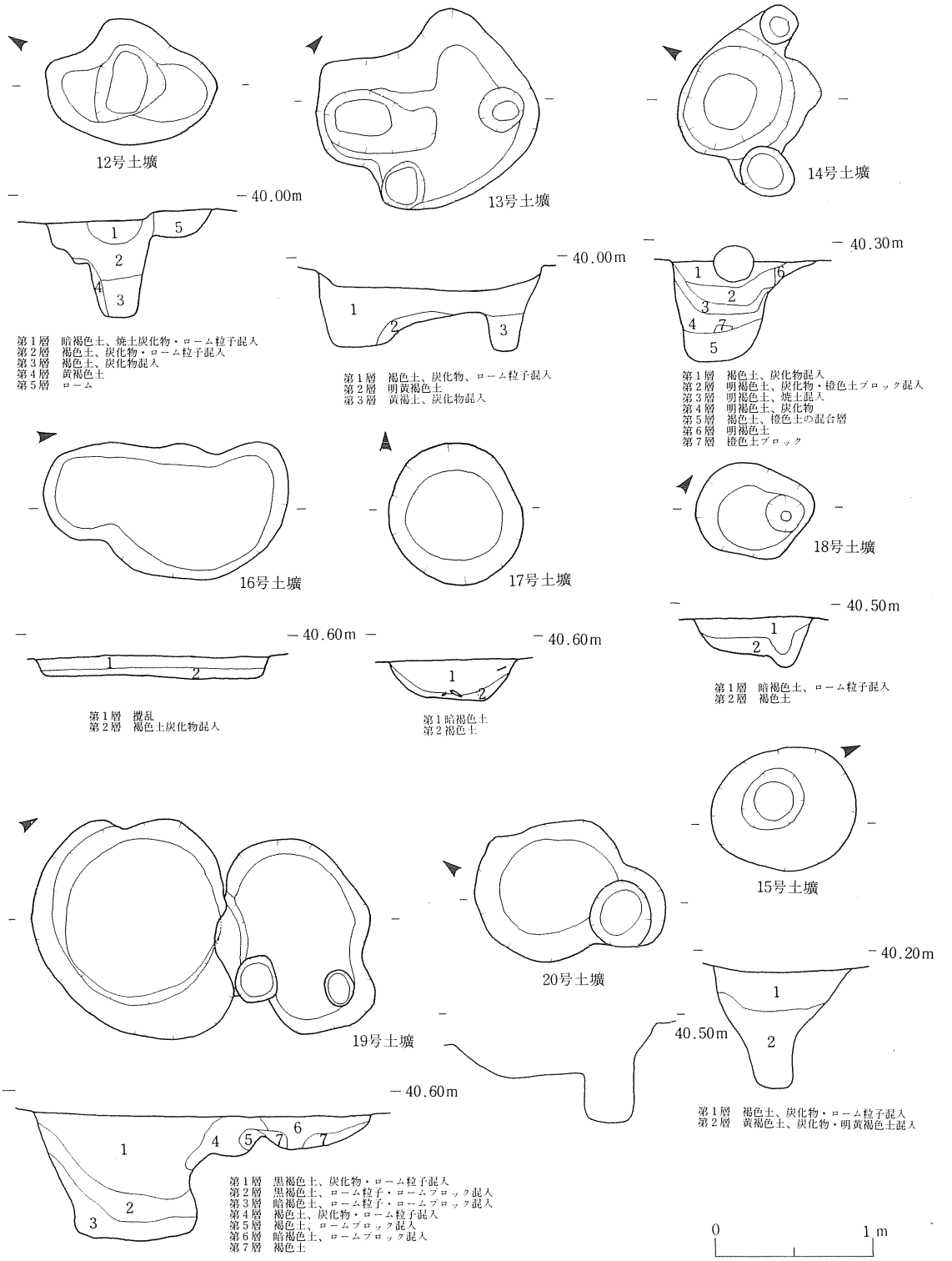
土壙番号	規模（cm）			平面形	断面形	出土遺物
	長軸	短軸	深さ			
153	70	63	37	楕円形	鍋状	
154	94	86	75	円形	ピーカー状	
155	80	75	45	円形	鍋状	
156	101	77	52	楕円形	鍋状	
157	63	59	36	楕円形	鍋状	
158	81	60	44	楕円形	鍋状	
159	89	71	62	楕円形	ピーカー状	
160	74	66	57	楕円形	ピーカー状	
161	89	85	42	楕円形	鍋状	
162	75	68	41	楕円形	鍋状	
163	86	73	49	楕円形	鍋状	
164	74	72	37	円形	鍋状	第143図722
165	97	76	54	楕円形	鍋状	
166	95	89	54	楕円形	鍋状	第145図748～752
167	106	98	69	楕円形	鍋状	
168	79	65	50	楕円形	鍋状	
169	106	80	68	楕円形	鍋状	
170	81	65	41	楕円形	鍋状	
171	113	103	50	楕円形	鍋状	
172	110	95	58	不整形	鍋状	
173	76	73	49	円形	鍋状	
174	90	73	52	楕円形	鍋状	
175	78	71	29	楕円形	鍋状	
176	101	78	34	楕円形	鍋状	第146図756
177	73	70	64	円形	ピーカー状	
178	96	80	71	楕円形	ピーカー状	第146図757
179	125	66	58	楕円形	鍋状	
180	80	74	75	楕円形	ピーカー状	
181	73	67	63	楕円形	ピーカー状	
182	72	70	53	円形	ピーカー状	
183	115	80	70	楕円形	ピーカー状	
184	82	65	48	楕円形	鍋状	
185	115	95	45	楕円形	鍋状	
186	69	60	53	楕円形	鍋状	
187	89	－	55	楕円形	鍋状	
188	82	65	54	楕円形	ピーカー状	
189	110	75	55	楕円形	鍋状	
190	58	55	27	円形	鍋状	第145図753～754


1号土壙
−40.00m
第1層　暗褐色土
第2層　褐色土
第3層　褐色土
第4層　褐色土、炭化物混入
第5層　明褐色土
2号土壙
−40.50m
第1層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第2層　暗褐色土、ローム粒子、ロームブロック混入
4号土壙
−40.10m
第1層　褐色土
第2層　褐色土、炭化物混入
第3層　明褐色土
3号土壙
5号土壙
−40.40m
6号土壙
−40.50m
第1層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第2層　褐色土、炭化物・ローム粒子多量混入
第3層　褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第4層　ローム
第5層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子・ロームブロック混入
第6層　褐色土、焼土・炭化物・ローム粒子・ロームブロック混入
第7層　ローム
第8層　撹乱
第9層　褐色土、炭化物・ローム粒子混入
0
1m

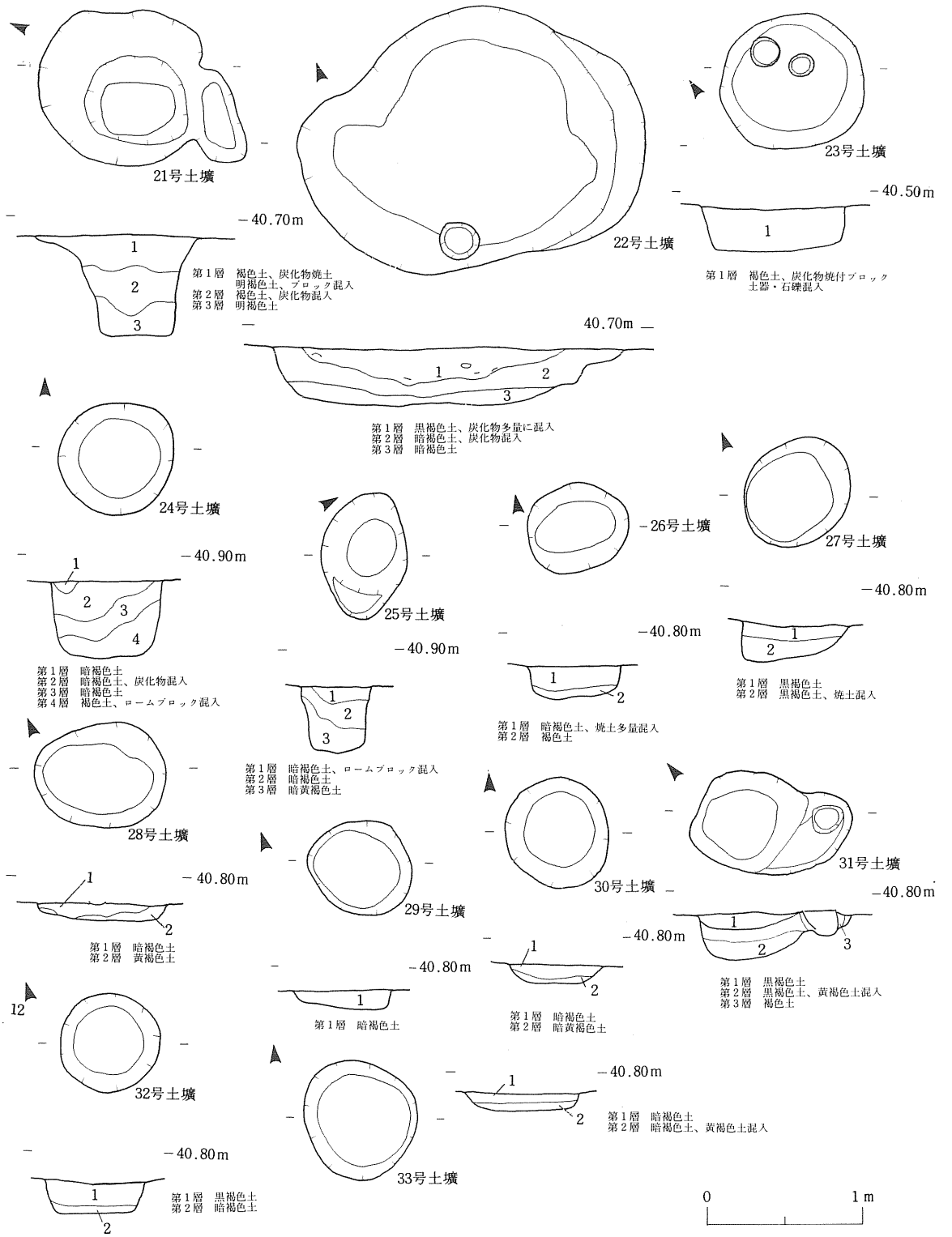
第108図　土壙


7号土壙
−40.50m
1
2
3
第1層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第2層　褐色土、炭化物・ロームブロック混入
第3層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
8号土壙
−40.40m
1
S
2
3
第1層　黒褐色土、焼土・炭化物・ローム粒子混入
第2層　黒褐色土、焼土・炭化物・大粒のローム粒子
ロームブロック混入
第3層　褐色土、炭化物・ローム粒子混入
9号土壙
−40.50m
1
2
3
第1層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第2層　暗褐色土、ローム粒子・ロームブロック混入
第3層　暗褐色土、ローム粒子多量・ロームブロック混入
10号土壙
−41.00m
1
2
3
4
5
第1層　褐色土、炭化物混入
第2層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第3層　暗褐色土、焼土・炭化物・ローム粒子混入
第4層　黒褐色土
第5層　暗褐色土、ロームブロック混入
11号土壙
−40.90m
1
2
3
3
第1層　褐色土、焼土・ローム粒子混入
第2層　褐色土、ローム粒子混入
第3層　黄褐色土、明黄褐色粘土混入
0
1m

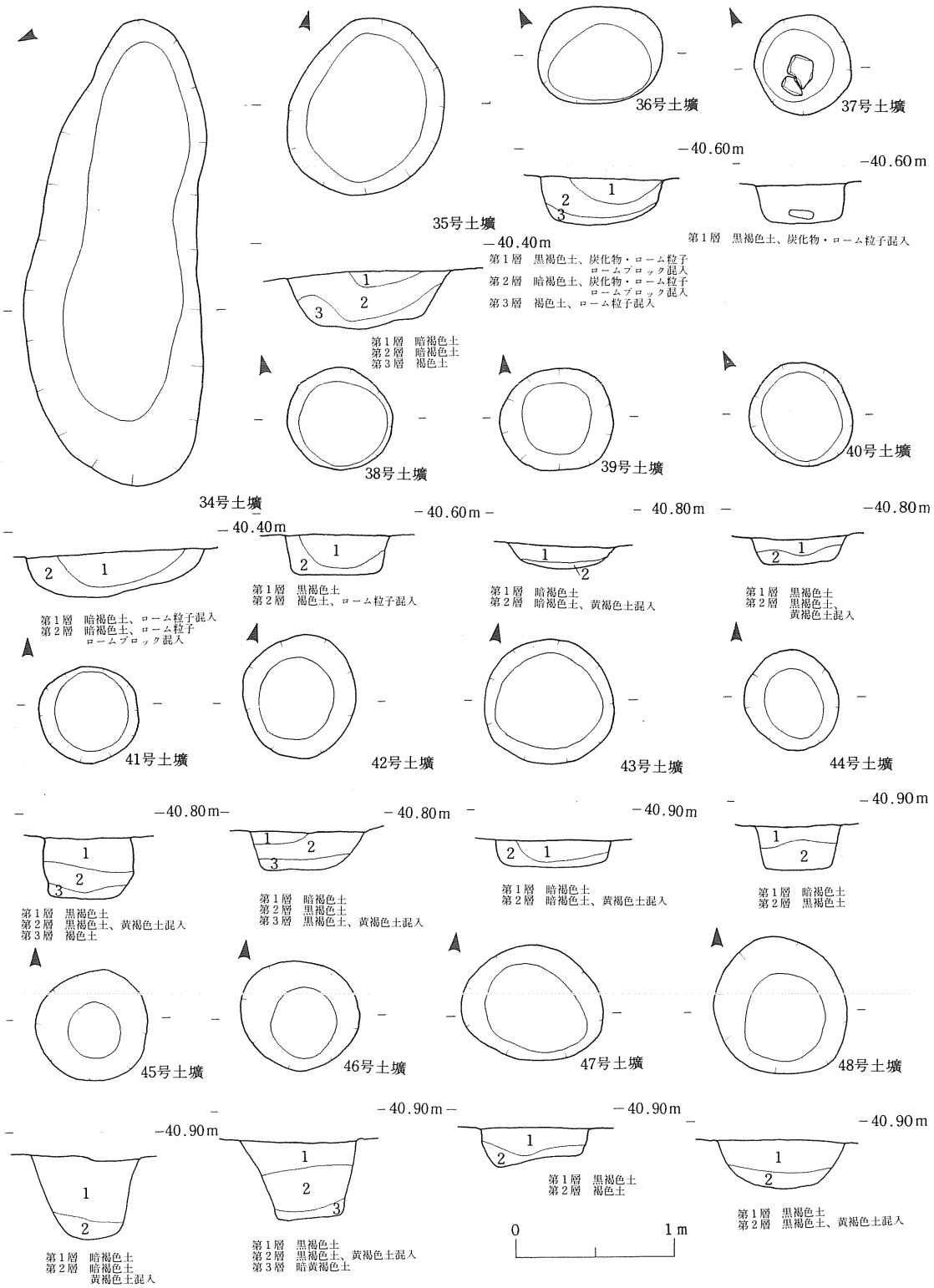
第109図　土壙


12号土壙
40.00m
第1層　暗褐色土、焼土炭化物・ローム粒子混入
第2層　褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第3層　褐色土、炭化物混入
第4層　黄褐色土
第5層　ローム
13号土壙
40.00m
第1層　褐色土、炭化物、ローム粒子混入
第2層　明黄褐色土
第3層　黄褐土、炭化物混入
14号土壙
40.30m
第1層　褐色土、炭化物混入
第2層　明褐色土、炭化物・橙色土ブロック混入
第3層　明褐色土、焼土混入
第4層　明褐色土、炭化物
第5層　褐色土、橙色土の混合層
第6層　明褐色土
第7層　橙色土ブロック
16号土壙
40.60m
第1層　攪乱
第2層　褐色土炭化物混入
17号土壙
40.60m
第1暗褐色土
第2褐色土
18号土壙
40.50m
第1層　暗褐色土、ローム粒子混入
第2層　褐色土
15号土壙
40.20m
第1層　褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第2層　黄褐色土、炭化物・明黄褐色土混入
19号土壙
40.60m
第1層　黒褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第2層　黒褐色土、ローム粒子・ロームブロック混入
第3層　暗褐色土、ローム粒子・ロームブロック混入
第4層　褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第5層　褐色土、ロームブロック混入
第6層　暗褐色土、ロームブロック混入
第7層　褐色土
20号土壙
40.50m
0
1m

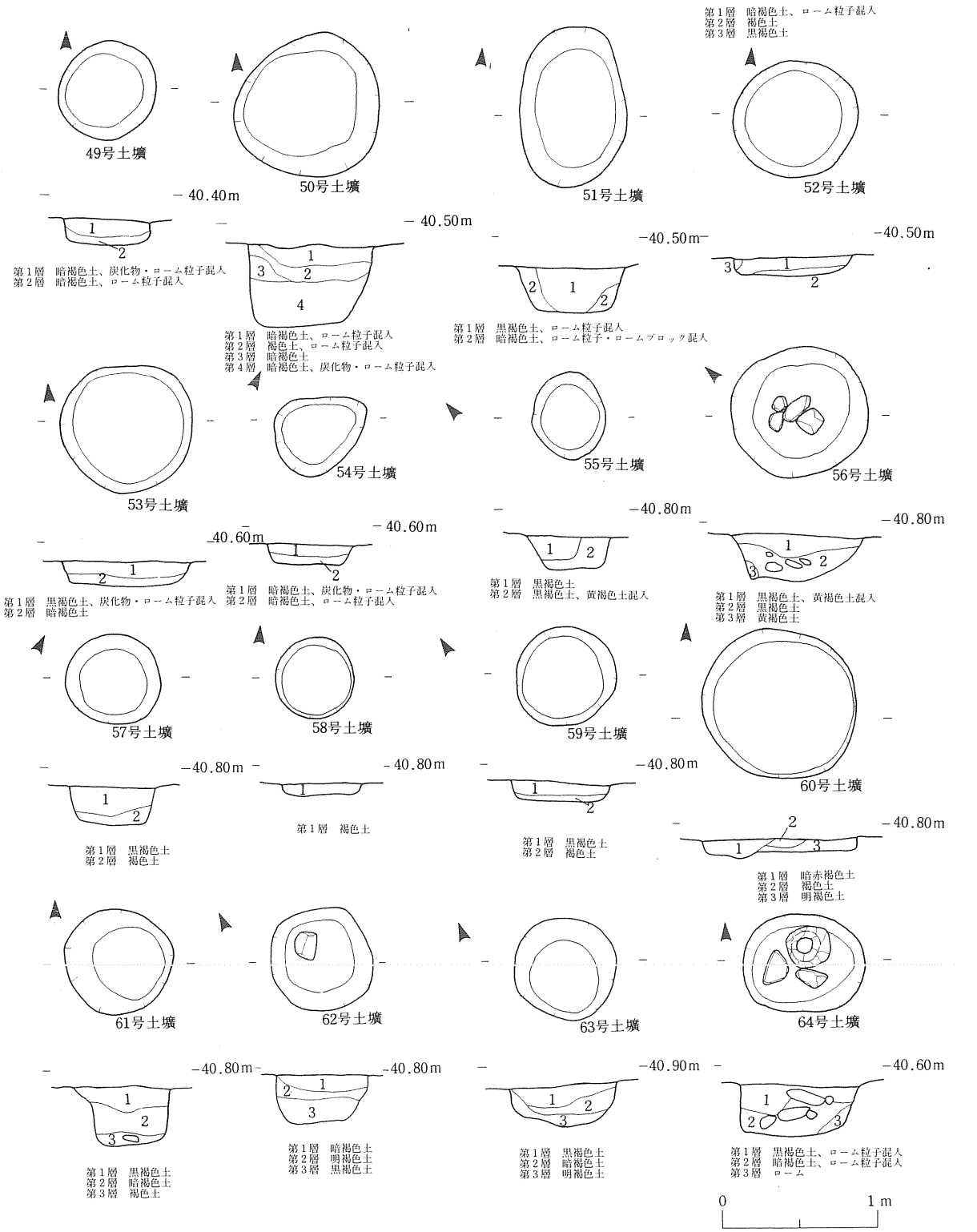
第110図　土壙


21号土壙
−40.70m
第1層　褐色土、炭化物焼土
明褐色土、ブロック混入
第2層　褐色土、炭化物混入
第3層　明褐色土
22号土壙
40.70m
第1層　黒褐色土、炭化物多量に混入
第2層　暗褐色土、炭化物混入
第3層　暗褐色土
23号土壙
−40.50m
第1層　褐色土、炭化物焼付ブロック
土器・石礫混入
24号土壙
−40.90m
第1層　暗褐色土
第2層　暗褐色土、炭化物混入
第3層　暗褐色土
第4層　褐色土、ロームブロック混入
25号土壙
−40.90m
第1層　暗褐色土、ロームブロック混入
第2層　暗褐色土
第3層　暗黄褐色土
26号土壙
−40.80m
第1層　暗褐色土、焼土多量混入
第2層　褐色土
27号土壙
−40.80m
第1層　黒褐色土
第2層　黒褐色土、焼土混入
28号土壙
−40.80m
第1層　暗褐色土
第2層　黄褐色土
29号土壙
−40.80m
第1層　暗褐色土
30号土壙
−40.80m
第1層　暗褐色土
第2層　暗黄褐色土
31号土壙
−40.80m
第1層　黒褐色土
第2層　黒褐色土、黄褐色土混入
第3層　褐色土
32号土壙
−40.80m
第1層　黒褐色土
第2層　暗褐色土
33号土壙
−40.80m
第1層　暗褐色土
第2層　暗褐色土、黄褐色土混入
0
1m

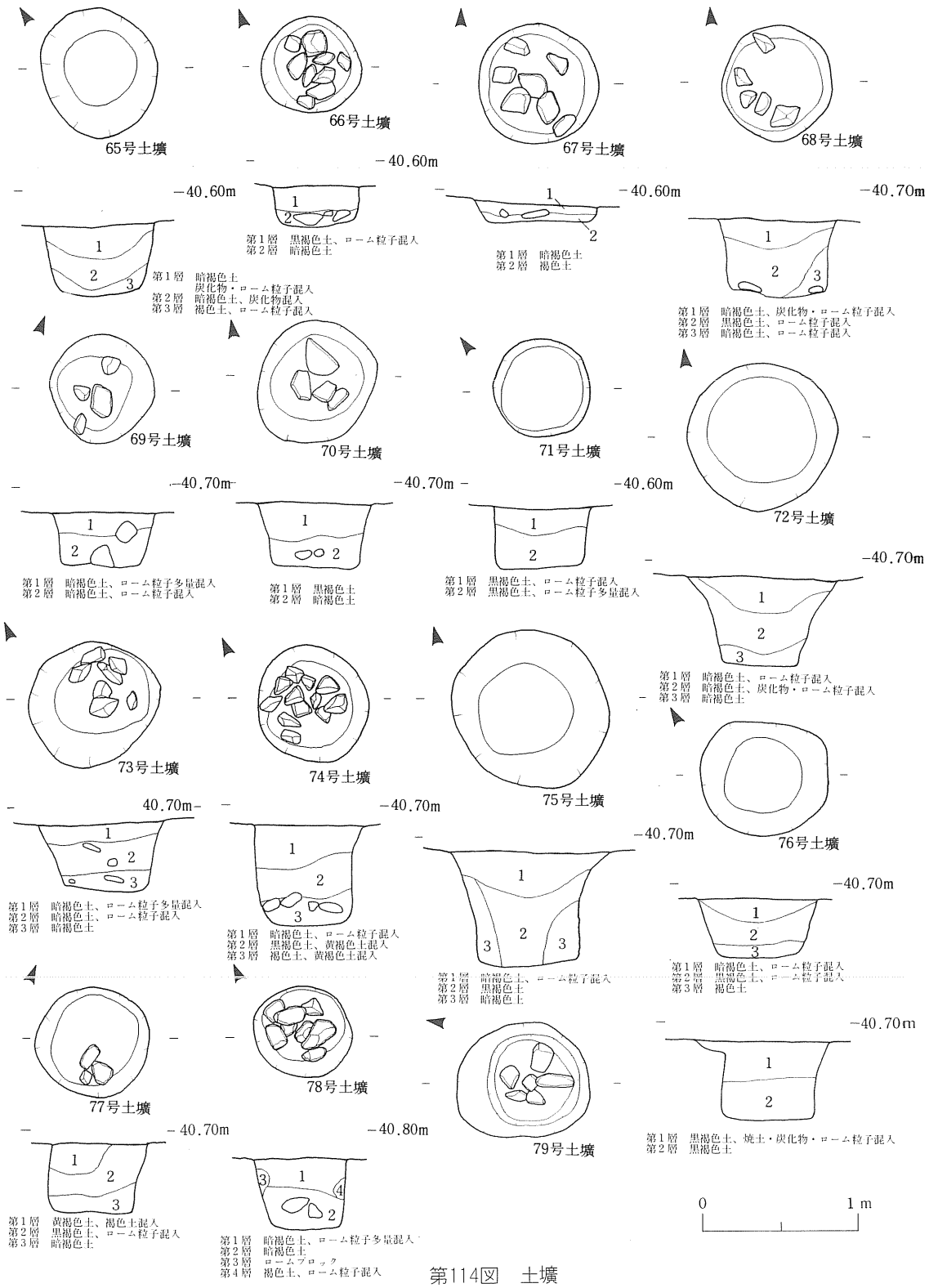
第111図　土壙


34号土壙
35号土壙
36号土壙
37号土壙
38号土壙
39号土壙
40号土壙
41号土壙
42号土壙
43号土壙
44号土壙
45号土壙
46号土壙
47号土壙
48号土壙
−40.40m
第1層　暗褐色土
第2層　暗褐色土
第3層　褐色土
−40.60m
第1層　黒褐色土、炭化物・ローム粒子
ロームブロック混入
第2層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子
ロームブロック混入
第3層　褐色土、ローム粒子混入
第1層　黒褐色土、炭化物・ローム粒子混入
−40.80m
第1層　暗褐色土、ローム粒子混入
第2層　暗褐色土、ローム粒子
ロームブロック混入
第1層　黒褐色土
第2層　褐色土、ローム粒子混入
第1層　暗褐色土
第2層　暗褐色土、黄褐色土混入
第1層　黒褐色土
第2層　黒褐色土、
黄褐色土混入
−40.90m
第1層　黒褐色土
第2層　黒褐色土、黄褐色土混入
第3層　褐色土
第1層　暗褐色土
第2層　黒褐色土
第3層　黒褐色土、黄褐色土混入
第1層　暗褐色土
第2層　暗褐色土、黄褐色土混入
第1層　暗褐色土
第2層　黒褐色土
第1層　暗褐色土
第2層　暗褐色土
黄褐色土混入
第1層　黒褐色土
第2層　黒褐色土、黄褐色土混入
第3層　暗黄褐色土
第1層　黒褐色土
第2層　褐色土
第1層　黒褐色土
第2層　黒褐色土、黄褐色土混入
0
1m

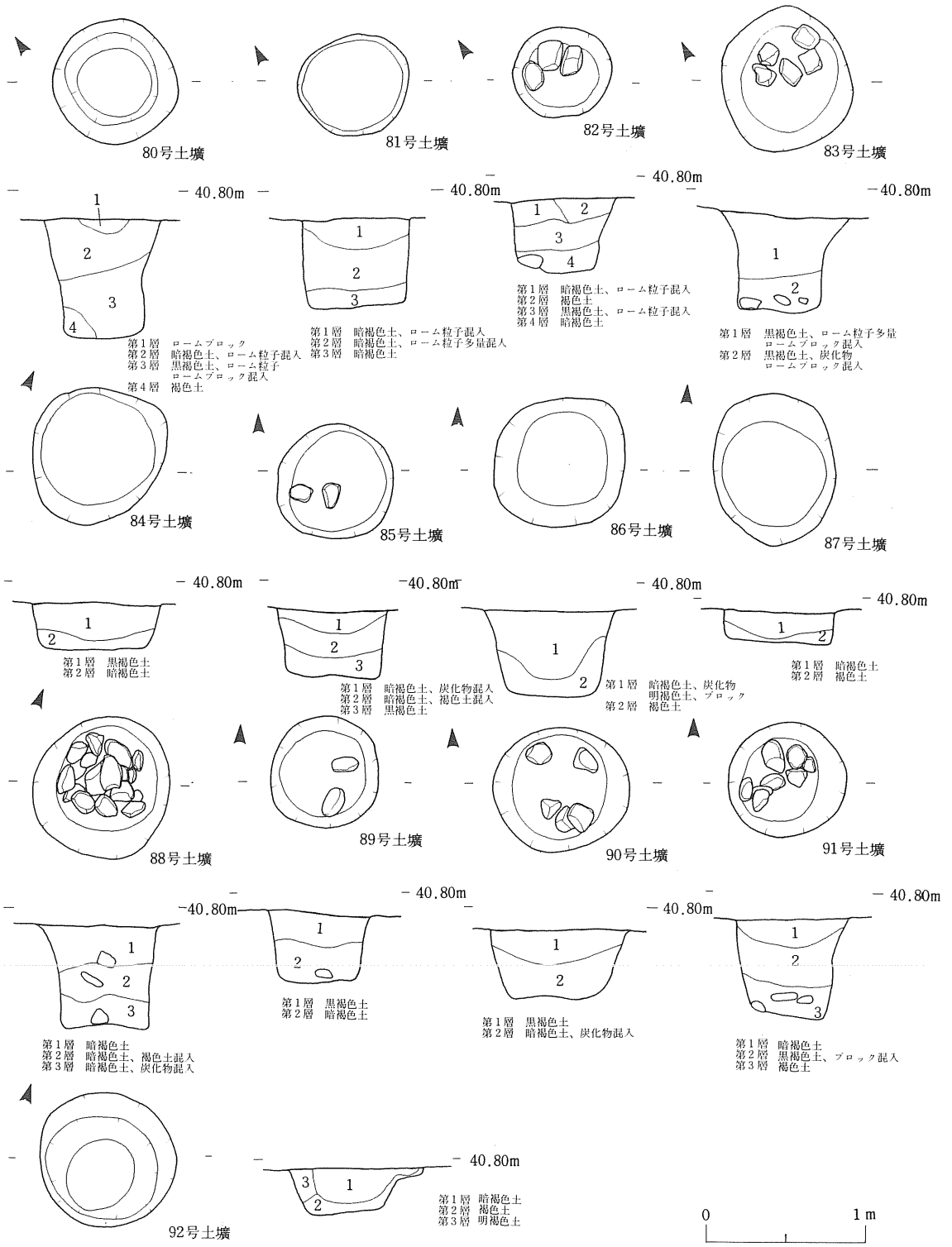
第112図　土壙


49号土壙
50号土壙
51号土壙
52号土壙
第1層　暗褐色土、ローム粒子混入
第2層　褐色土
第3層　黒褐色土
－40.40m
－40.50m
第1層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第2層　暗褐色土、ローム粒子混入
第1層　暗褐色土、ローム粒子混入
第2層　褐色土、ローム粒子混入
第3層　暗褐色土
第4層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
－40.50m
第1層　黒褐色土、ローム粒子混入
第2層　暗褐色土、ローム粒子・ロームブロック混入
53号土壙
54号土壙
55号土壙
56号土壙
－40.60m
－40.80m
第1層　黒褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第2層　暗褐色土
第1層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第2層　暗褐色土、ローム粒子混入
第1層　黒褐色土
第2層　黒褐色土、黄褐色土混入
第1層　黒褐色土、黄褐色土混入
第2層　黒褐色土
第3層　黄褐色土
57号土壙
58号土壙
59号土壙
60号土壙
第1層　黒褐色土
第2層　褐色土
第1層　褐色土
第1層　黒褐色土
第2層　褐色土
第1層　暗赤褐色土
第2層　褐色土
第3層　明褐色土
61号土壙
62号土壙
63号土壙
64号土壙
第1層　黒褐色土
第2層　暗褐色土
第3層　褐色土
第1層　暗褐色土
第2層　明褐色土
第3層　黒褐色土
－40.90m
第1層　黒褐色土
第2層　暗褐色土
第3層　明褐色土
第1層　黒褐色土、ローム粒子混入
第2層　暗褐色土、ローム粒子混入
第3層　ローム
0
1 m

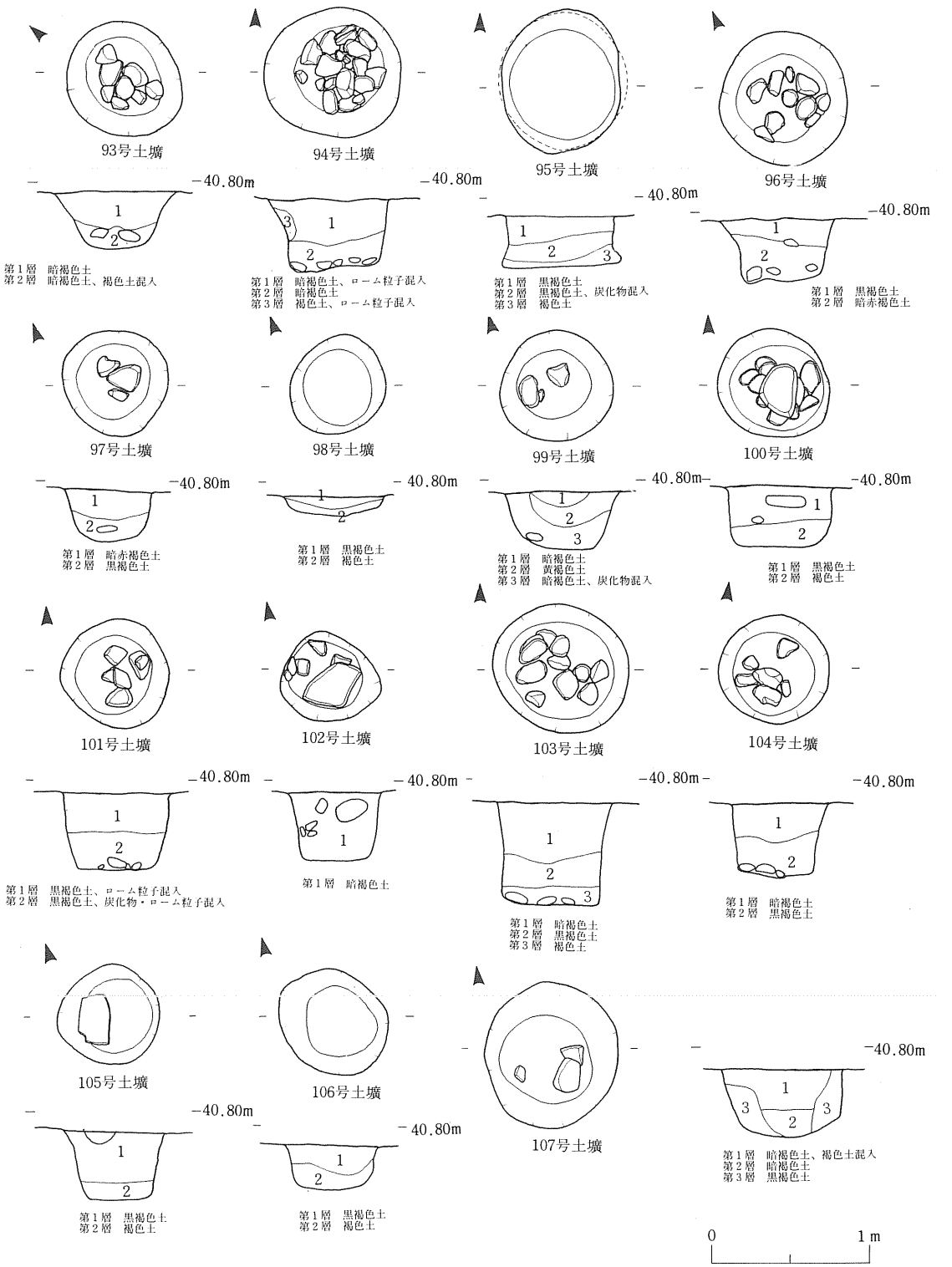
第113図　土壙


65号土壙
66号土壙
67号土壙
68号土壙
−40.60m
−40.60m
−40.60m
−40.70m
第1層　暗褐色土
第2層　暗褐色土
第1層　暗褐色土
炭化物・ローム粒子混入
第2層　暗褐色土、炭化物混入
第3層　褐色土、ローム粒子混入
第1層　黒褐色土、ローム粒子混入
第2層　暗褐色土
第1層　暗褐色土
第2層　褐色土
第1層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第2層　黒褐色土、ローム粒子混入
第3層　暗褐色土、ローム粒子混入
69号土壙
70号土壙
71号土壙
72号土壙
−40.70m
−40.70m
−40.60m
−40.70m
第1層　暗褐色土、ローム粒子多量混入
第2層　暗褐色土、ローム粒子混入
第1層　黒褐色土
第2層　暗褐色土
第1層　黒褐色土、ローム粒子混入
第2層　黒褐色土、ローム粒子多量混入
第1層　暗褐色土、ローム粒子混入
第2層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第3層　暗褐色土
73号土壙
74号土壙
75号土壙
76号土壙
40.70m
−40.70m
−40.70m
−40.70m
第1層　暗褐色土、ローム粒子多量混入
第2層　暗褐色土、ローム粒子混入
第3層　暗褐色土
第1層　暗褐色土、ローム粒子混入
第2層　黒褐色土、黄褐色土混入
第3層　褐色土、黄褐色土混入
第1層　暗褐色土、ローム粒子混入
第2層　黒褐色土
第3層　暗褐色土
第1層　暗褐色土、ローム粒子混入
第2層　黒褐色土、ローム粒子混入
第3層　褐色土
77号土壙
78号土壙
79号土壙
−40.70m
−40.80m
−40.70m
第1層　黒褐色土、焼土・炭化物・ローム粒子混入
第2層　黒褐色土
第1層　黄褐色土、褐色土混入
第2層　黒褐色土、ローム粒子混入
第3層　暗褐色土
第1層　暗褐色土、ローム粒子多量混入
第2層　暗褐色土
第3層　ロームブロック
第4層　褐色土、ローム粒子混入
0
1 m

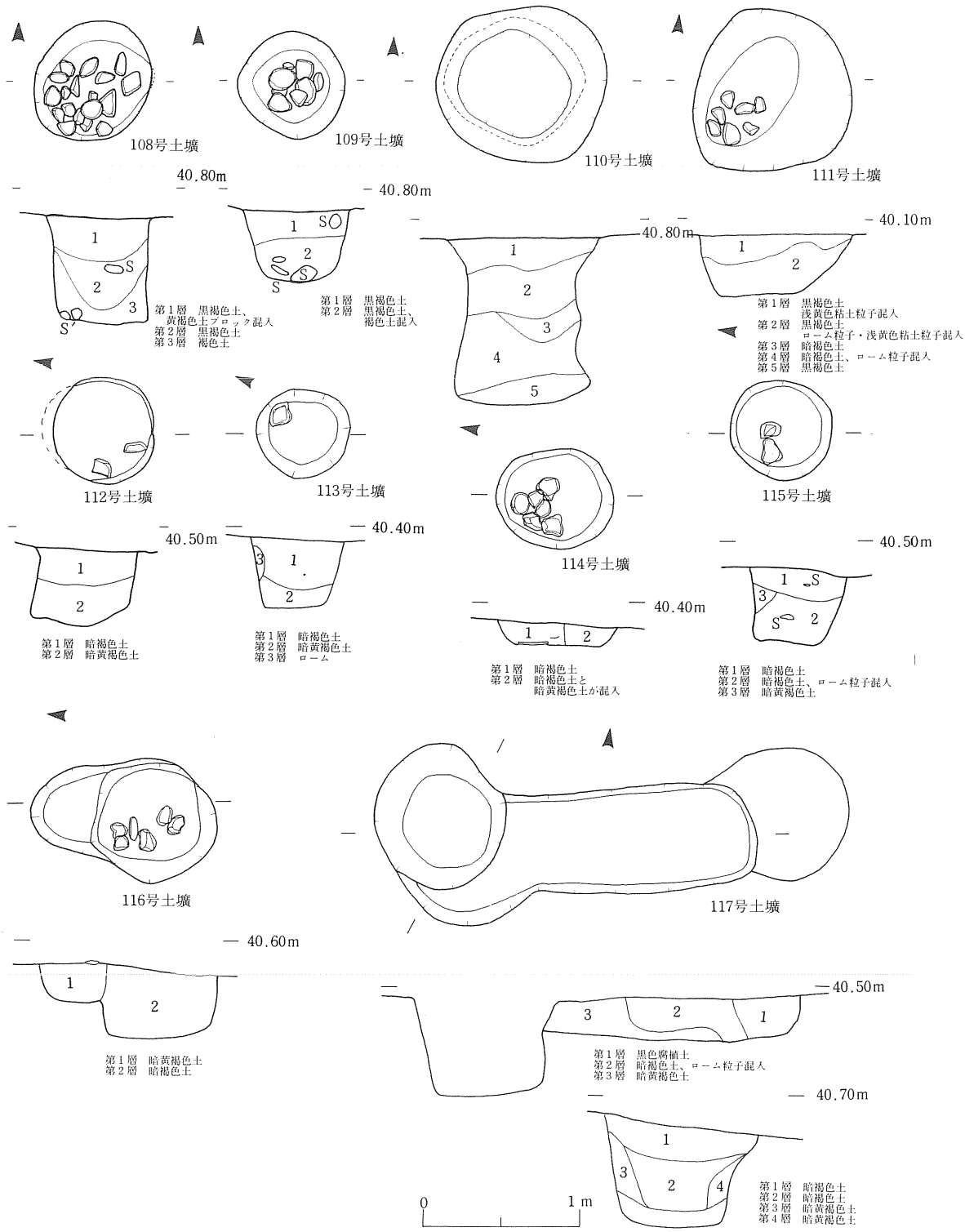
第114図　土壙


80号土壙
81号土壙
82号土壙
83号土壙
40.80m
第1層　ロームブロック
第2層　暗褐色土、ローム粒子混入
第3層　黒褐色土、ローム粒子
ロームブロック混入
第4層　褐色土
第1層　暗褐色土、ローム粒子混入
第2層　暗褐色土、ローム粒子多量混入
第3層　暗褐色土
第1層　暗褐色土、ローム粒子混入
第2層　褐色土
第3層　黒褐色土、ローム粒子混入
第4層　暗褐色土
第1層　黒褐色土、ローム粒子多量
ロームブロック混入
第2層　黒褐色土、炭化物
ロームブロック混入
84号土壙
85号土壙
86号土壙
87号土壙
第1層　黒褐色土
第2層　暗褐色土
第1層　暗褐色土、炭化物混入
第2層　暗褐色土、褐色土混入
第3層　黒褐色土
第1層　暗褐色土、炭化物
明褐色土、ブロック
第2層　褐色土
第1層　暗褐色土
第2層　褐色土
88号土壙
89号土壙
90号土壙
91号土壙
第1層　暗褐色土
第2層　暗褐色土、褐色土混入
第3層　暗褐色土、炭化物混入
第1層　黒褐色土
第2層　暗褐色土
第1層　黒褐色土
第2層　暗褐色土、炭化物混入
第1層　暗褐色土
第2層　黒褐色土、ブロック混入
第3層　褐色土
92号土壙
第1層　暗褐色土
第2層　褐色土
第3層　明褐色土
0
1 m

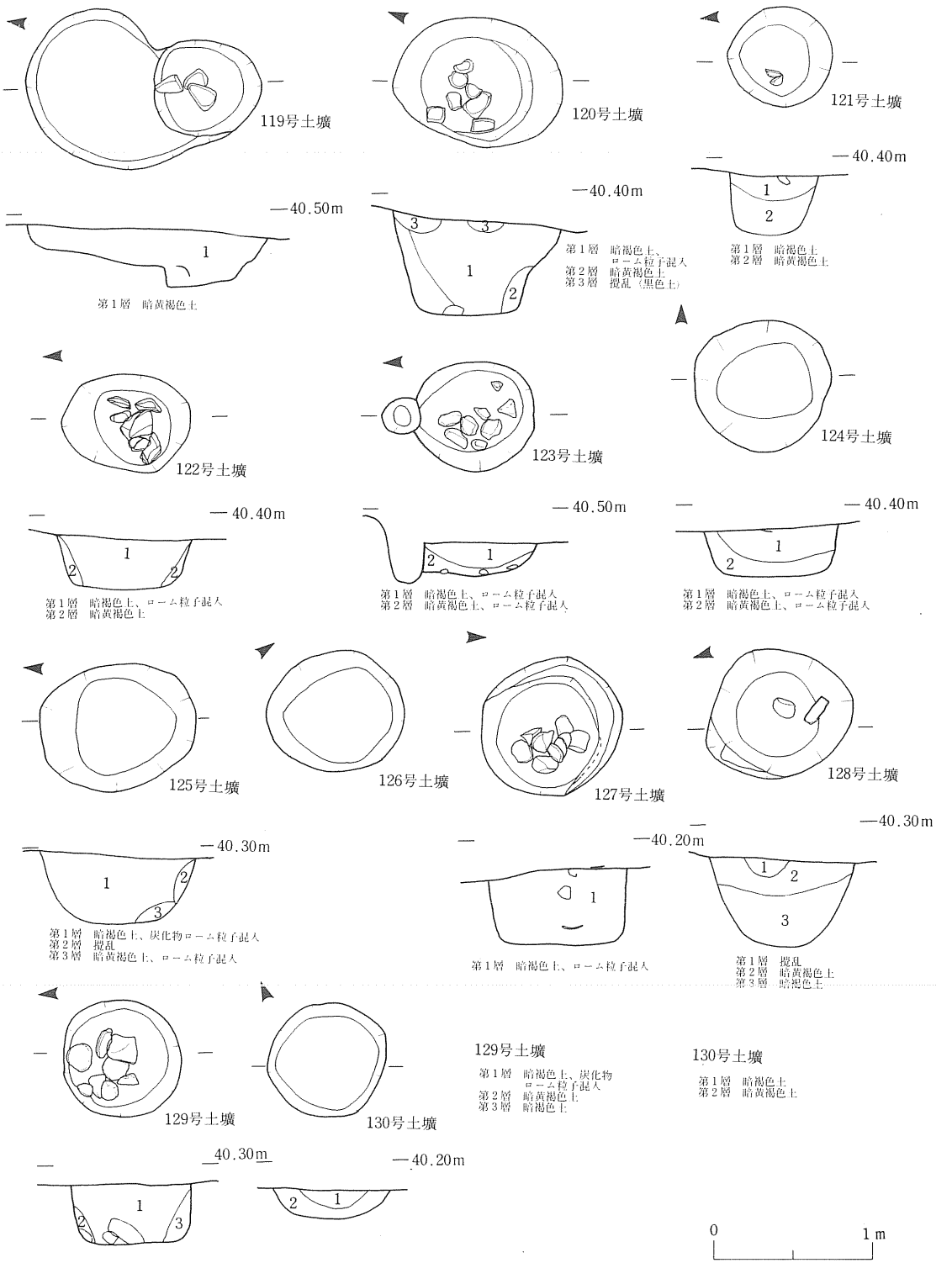
第115図　土壙


93号土壙
94号土壙
95号土壙
96号土壙
-40.80m
第1層　暗褐色土
第2層　暗褐色土、褐色土混入
第1層　暗褐色土、ローム粒子混入
第2層　暗褐色土
第3層　褐色土、ローム粒子混入
第1層　黒褐色土
第2層　黒褐色土、炭化物混入
第3層　褐色土
第1層　黒褐色土
第2層　暗赤褐色土
97号土壙
98号土壙
99号土壙
100号土壙
第1層　暗赤褐色土
第2層　黒褐色土
第1層　黒褐色土
第2層　褐色土
第1層　暗褐色土
第2層　黄褐色土
第3層　暗褐色土、炭化物混入
第1層　黒褐色土
第2層　褐色土
101号土壙
102号土壙
103号土壙
104号土壙
第1層　黒褐色土、ローム粒子混入
第2層　黒褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第1層　暗褐色土
第1層　暗褐色土
第2層　黒褐色土
第3層　褐色土
第1層　暗褐色土
第2層　黒褐色土
105号土壙
106号土壙
107号土壙
第1層　黒褐色土
第2層　褐色土
第1層　黒褐色土
第2層　褐色土
第1層　暗褐色土、褐色土混入
第2層　暗褐色土
第3層　黒褐色土
0
1 m

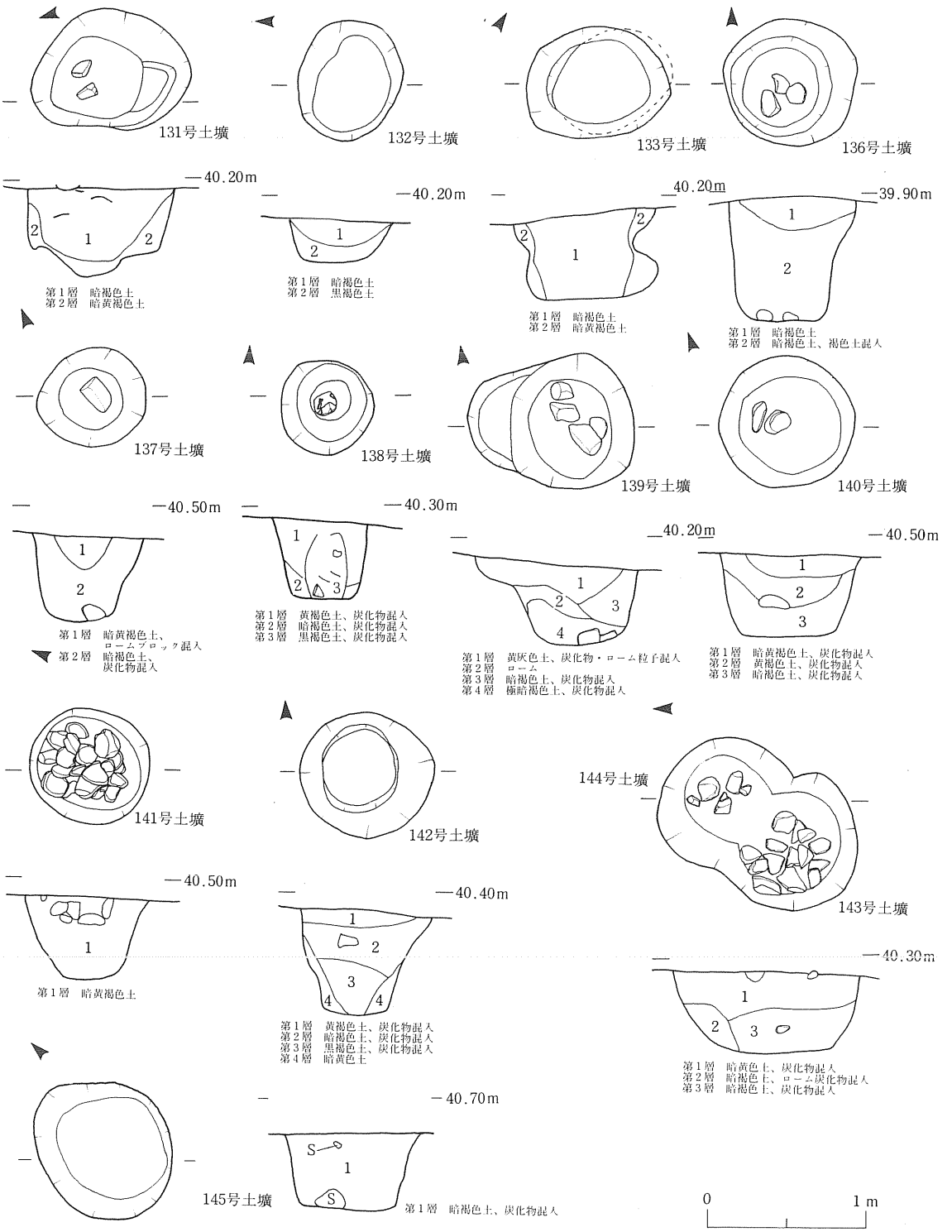
第116図　土壙


108号土壙
40.80m
第1層　黒褐色土、
黄褐色土ブロック混入
第2層　黒褐色土
第3層　褐色土
109号土壙
40.80m
第1層　黒褐色土
第2層　黒褐色土、
褐色土混入
110号土壙
40.80m
111号土壙
40.10m
第1層　黒褐色土
浅黄色粘土粒子混入
第2層　黒褐色土
ローム粒子・浅黄色粘土粒子混入
第3層　暗褐色土
第4層　暗褐色土、ローム粒子混入
第5層　黒褐色土
112号土壙
40.50m
第1層　暗褐色土
第2層　暗黄褐色土
113号土壙
40.40m
第1層　暗褐色土
第2層　暗黄褐色土
第3層　ローム
114号土壙
40.40m
第1層　暗褐色土
第2層　暗褐色土と
暗黄褐色土が混入
115号土壙
40.50m
第1層　暗褐色土
第2層　暗褐色土、ローム粒子混入
第3層　暗黄褐色土
116号土壙
40.60m
第1層　暗黄褐色土
第2層　暗褐色土
117号土壙
40.50m
第1層　黒色腐植土
第2層　暗褐色土、ローム粒子混入
第3層　暗黄褐色土
40.70m
第1層　暗褐色土
第2層　暗褐色土
第3層　暗黄褐色土
第4層　暗黄褐色土
0
1m

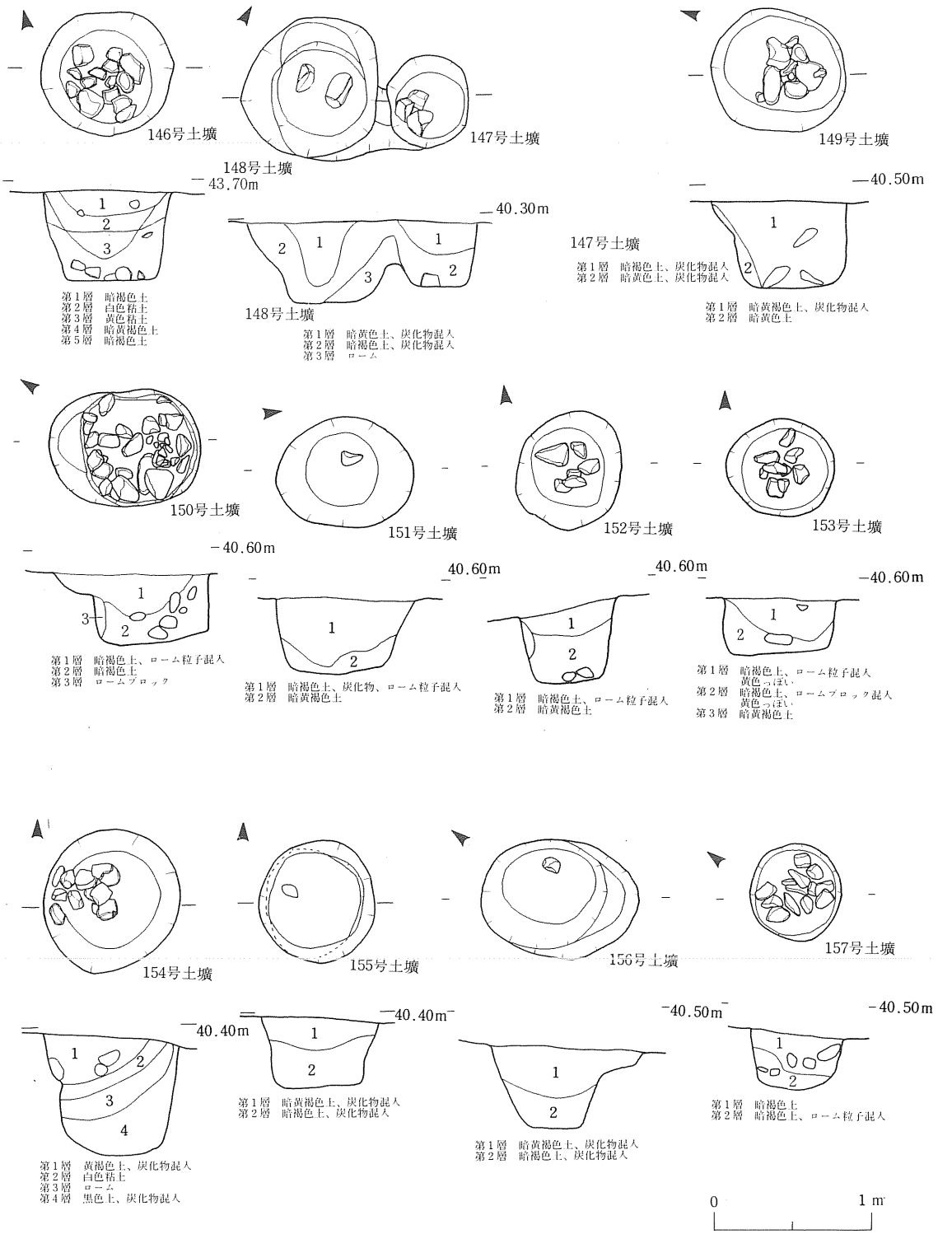
第117図　土壙


119号土壙
—40.50m
第1層　暗黄褐色土
120号土壙
—40.40m
第1層　暗褐色土、ローム粒子混入
第2層　暗黄褐色土
第3層　撹乱（黒色土）
121号土壙
—40.40m
第1層　暗褐色土
第2層　暗黄褐色土
122号土壙
—40.40m
第1層　暗褐色土、ローム粒子混入
第2層　暗黄褐色土
123号土壙
—40.50m
第1層　暗褐色土、ローム粒子混入
第2層　暗黄褐色土、ローム粒子混入
124号土壙
—40.40m
第1層　暗褐色土、ローム粒子混入
第2層　暗黄褐色土、ローム粒子混入
125号土壙
—40.30m
第1層　暗褐色土、炭化物ローム粒子混入
第2層　撹乱
第3層　暗黄褐色土、ローム粒子混入
126号土壙
127号土壙
—40.20m
第1層　暗褐色土、ローム粒子混入
128号土壙
—40.30m
第1層　撹乱
第2層　暗黄褐色土
第3層　暗褐色土
129号土壙
40.30m
130号土壙
—40.20m
129号土壙
第1層　暗褐色土、炭化物ローム粒子混入
第2層　暗黄褐色土
第3層　暗褐色土
130号土壙
第1層　暗褐色土
第2層　暗黄褐色土
0
1m

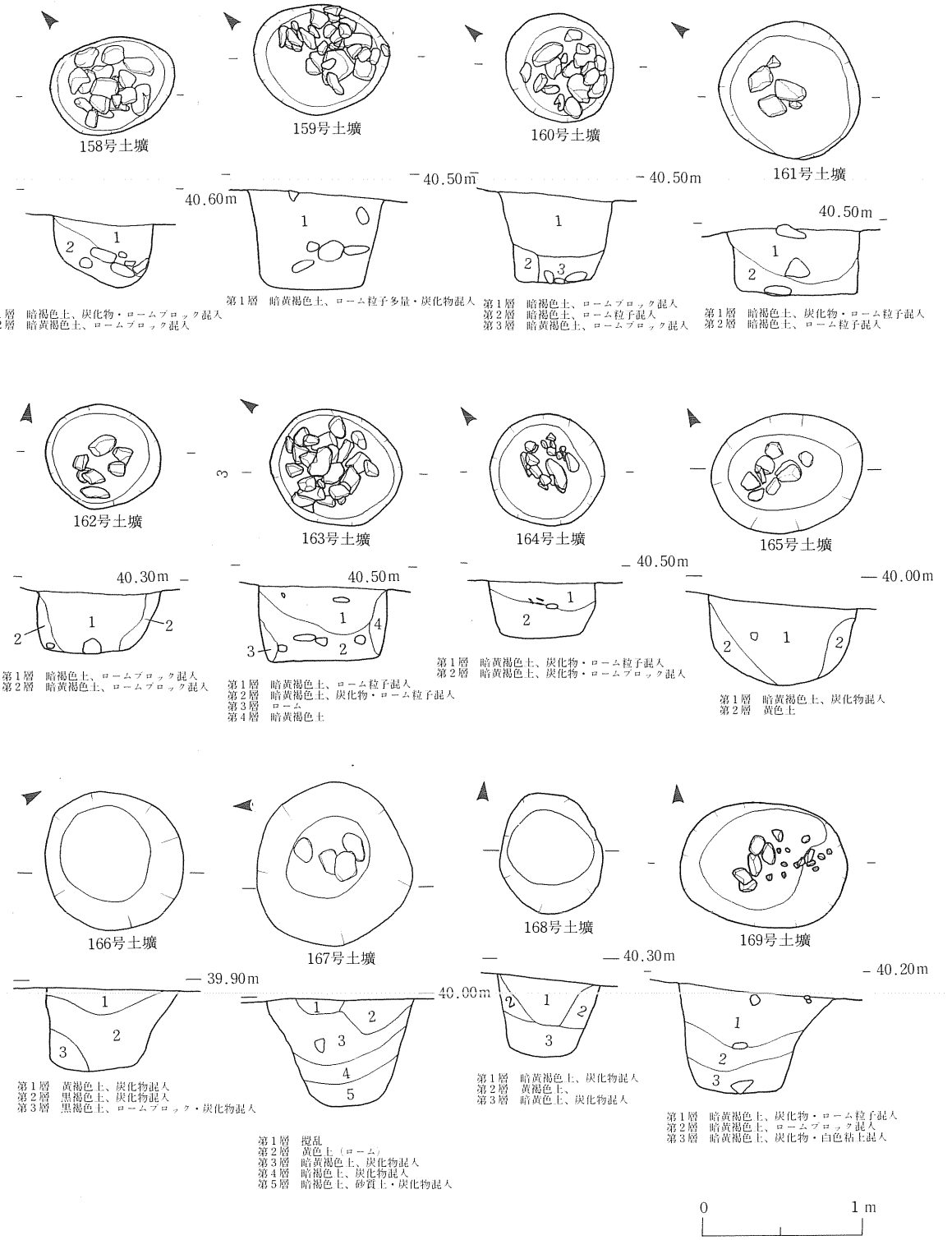
第118図　土壙


131号土壙
132号土壙
133号土壙
136号土壙
40.20m
第1層　暗褐色土
第2層　暗黄褐色土
第1層　暗褐色土
第2層　黒褐色土
第1層　暗褐色土
第2層　暗黄褐色土
39.90m
第1層　暗褐色土
第2層　暗褐色土、褐色土混入
137号土壙
138号土壙
139号土壙
140号土壙
40.50m
40.30m
第1層　暗黄褐色土、ロームブロック混入
第2層　暗褐色土、炭化物混入
第1層　黄褐色土、炭化物混入
第2層　暗褐色土、炭化物混入
第3層　黒褐色土、炭化物混入
第1層　黄灰色土、炭化物・ローム粒子混入
第2層　ローム
第3層　暗褐色土、炭化物混入
第4層　極暗褐色土、炭化物混入
第1層　暗黄褐色土、炭化物混入
第2層　黄褐色土、炭化物混入
第3層　暗褐色土、炭化物混入
141号土壙
142号土壙
144号土壙
143号土壙
第1層　暗黄褐色土
第1層　黄褐色土、炭化物混入
第2層　暗褐色土、炭化物混入
第3層　黒褐色土、炭化物混入
第4層　暗黄色土
第1層　暗黄色土、炭化物混入
第2層　暗褐色土、ローム炭化物混入
第3層　暗褐色土、炭化物混入
145号土壙
40.70m
第1層　暗褐色土、炭化物混入
0
1 m

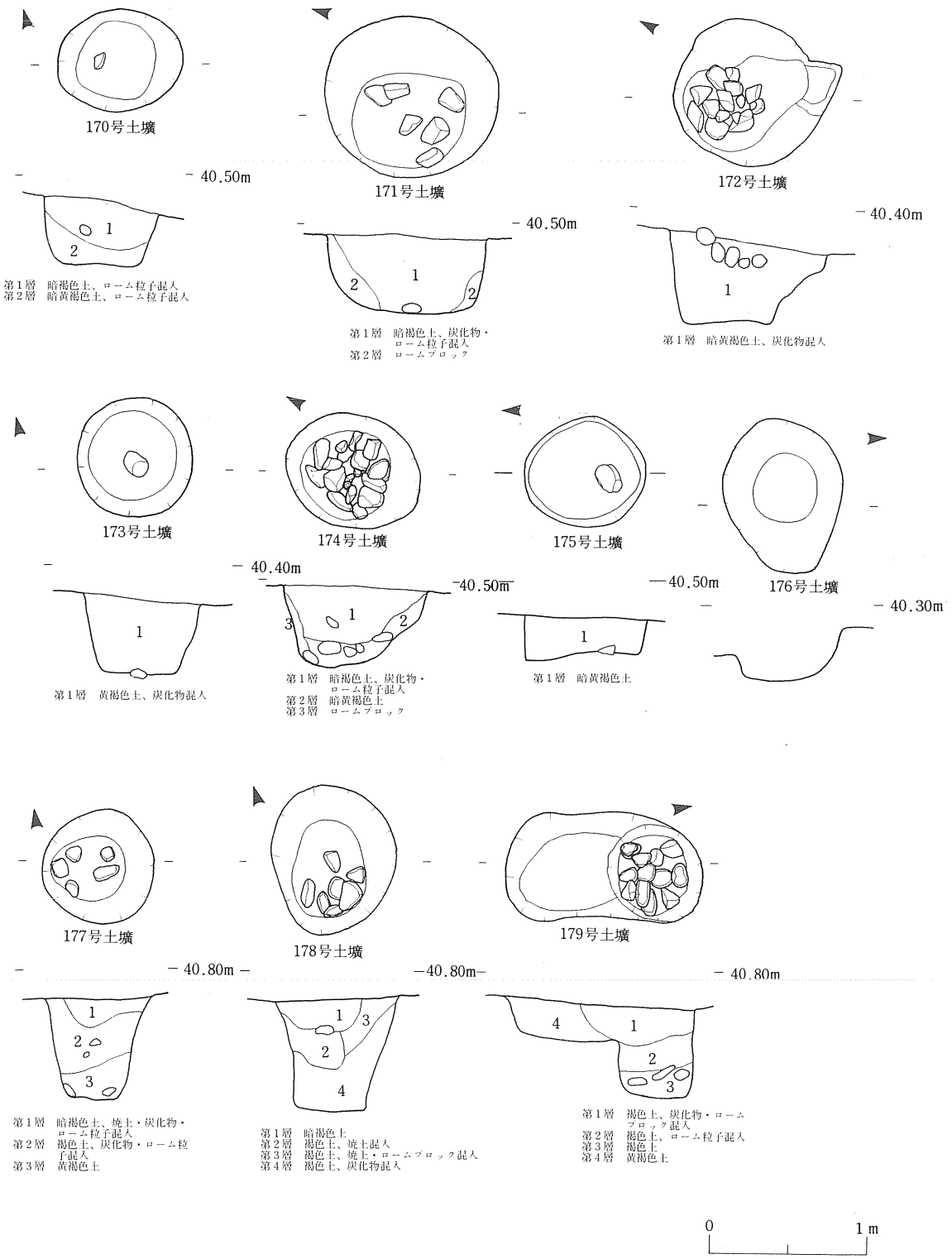
第119図　土壙


146号土壙
147号土壙
148号土壙
149号土壙
43.70m
40.30m
40.50m
147号土壙
第1層　暗褐色土、炭化物混入
第2層　暗黄色土、炭化物混入
第1層　暗褐色土
第2層　白色粘土
第3層　黄色粘土
第4層　暗黄褐色土
第5層　暗褐色土
第1層　暗黄色土、炭化物混入
第2層　暗褐色土、炭化物混入
第3層　ローム
第1層　暗黄褐色土、炭化物混入
第2層　暗黄色土
150号土壙
151号土壙
152号土壙
153号土壙
40.60m
第1層　暗褐色土、ローム粒子混入
第2層　暗褐色土
第3層　ロームブロック
第1層　暗褐色土、炭化物、ローム粒子混入
第2層　暗黄褐色土
第1層　暗褐色土、ローム粒子混入
第2層　暗黄褐色土
第1層　暗褐色土、ローム粒子混入
黄色っぽい
第2層　暗褐色土、ロームブロック混入
黄色っぽい
第3層　暗黄褐色土
154号土壙
155号土壙
156号土壙
157号土壙
40.40m
40.50m
第1層　黄褐色土、炭化物混入
第2層　白色粘土
第3層　ローム
第4層　黒色土、炭化物混入
第1層　暗黄褐色土、炭化物混入
第2層　暗褐色土、炭化物混入
第1層　暗黄褐色土、炭化物混入
第2層　暗褐色土、炭化物混入
第1層　暗褐色土
第2層　暗褐色土、ローム粒子混入
0
1 m

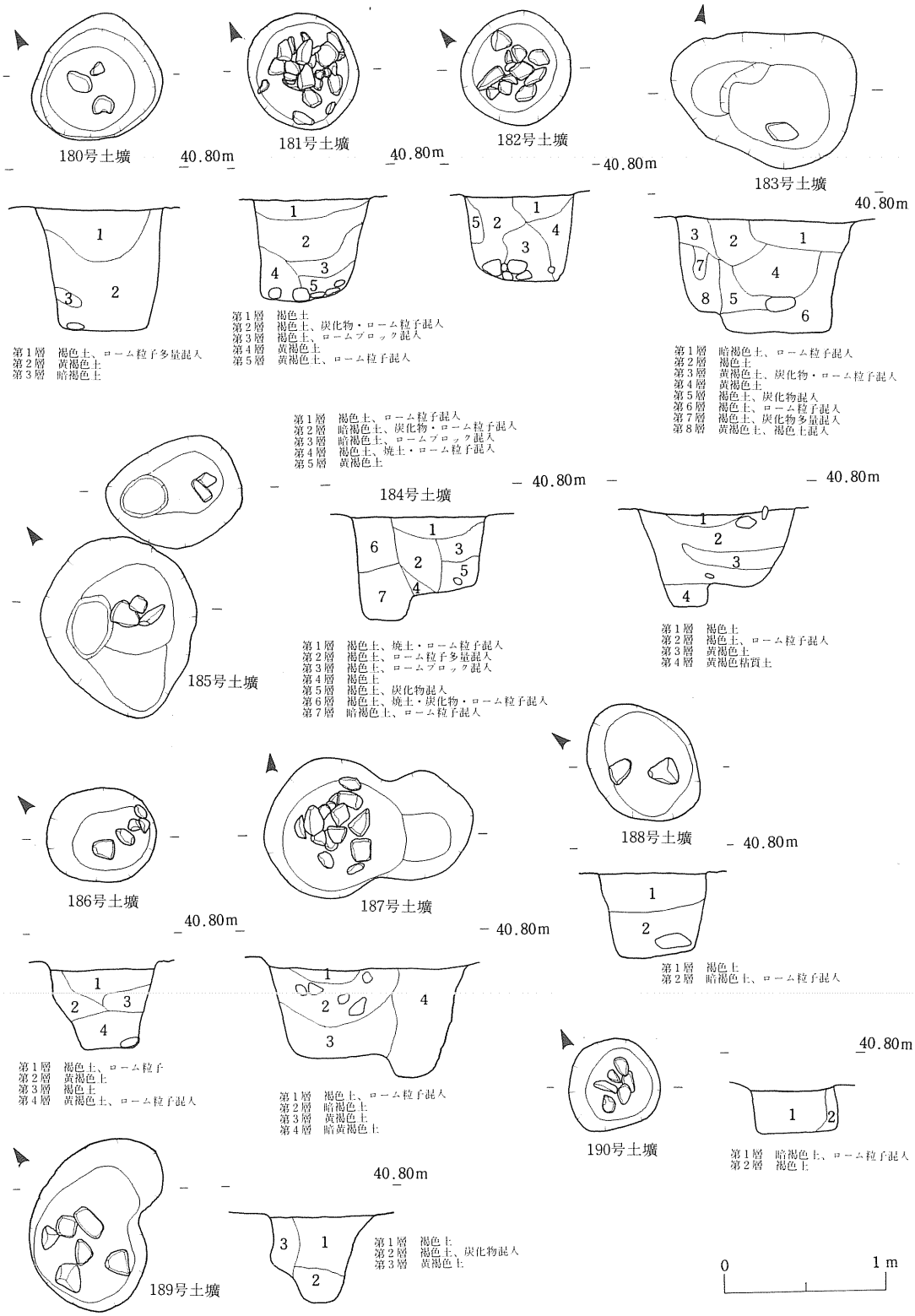
第120図　土壙


158号土壙
159号土壙
160号土壙
161号土壙
40.60m
40.50m
40.50m
40.50m
第1層　暗褐色土、炭化物・ロームブロック混入
第2層　暗黄褐色土、ロームブロック混入
第1層　暗黄褐色土、ローム粒子多量・炭化物混入
第1層　暗褐色土、ロームブロック混入
第2層　暗褐色土、ローム粒子混入
第3層　暗黄褐色土、ロームブロック混入
第1層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第2層　暗褐色土、ローム粒子混入
162号土壙
163号土壙
164号土壙
165号土壙
40.30m
40.50m
40.50m
40.00m
第1層　暗褐色土、ロームブロック混入
第2層　暗黄褐色土、ロームブロック混入
第1層　暗黄褐色土、ローム粒子混入
第2層　暗黄褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第3層　ローム
第4層　暗黄褐色土
第1層　暗黄褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第2層　暗黄褐色土、炭化物・ロームブロック混入
第1層　暗黄褐色土、炭化物混入
第2層　黄色土
166号土壙
167号土壙
168号土壙
169号土壙
39.90m
40.00m
40.30m
40.20m
第1層　黄褐色土、炭化物混入
第2層　黒褐色土、炭化物混入
第3層　黒褐色土、ロームブロック・炭化物混入
第1層　攪乱
第2層　黄色土（ローム）
第3層　暗黄褐色土、炭化物混入
第4層　暗褐色土、炭化物混入
第5層　暗褐色土、砂質土・炭化物混入
第1層　暗黄褐色土、炭化物混入
第2層　暗褐色土、
第3層　暗黄色土、炭化物混入
第1層　暗黄褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第2層　暗黄褐色土、ロームブロック混入
第3層　暗黄褐色土、炭化物・白色粘土混入
0
1 m

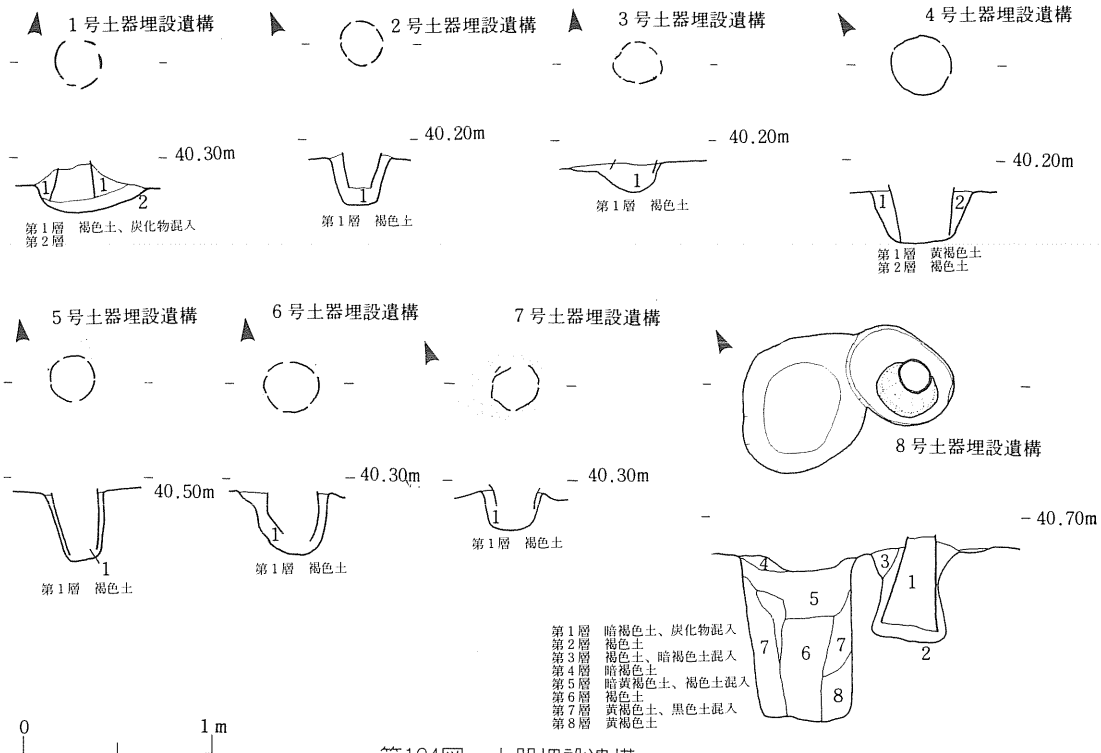
第121図　土壙


170号土壙
40.50m
第1層　暗褐色土、ローム粒子混入
第2層　暗黄褐色土、ローム粒子混入
171号土壙
40.50m
第1層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第2層　ロームブロック
172号土壙
40.40m
第1層　暗黄褐色土、炭化物混入
173号土壙
40.40m
第1層　黄褐色土、炭化物混入
174号土壙
40.50m
第1層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第2層　暗黄褐色土
第3層　ロームブロック
175号土壙
40.50m
第1層　暗黄褐色土
176号土壙
40.30m
177号土壙
40.80m
第1層　暗褐色土、焼土・炭化物・ローム粒子混入
第2層　褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第3層　黄褐色土
178号土壙
40.80m
第1層　暗褐色土
第2層　褐色土、焼土混入
第3層　褐色土、焼土・ロームブロック混入
第4層　褐色土、炭化物混入
179号土壙
40.80m
第1層　褐色土、炭化物・ロームブロック混入
第2層　褐色土、ローム粒子混入
第3層　褐色土
第4層　黄褐色土
0
1m

第122図　土壙


180号土壙
40.80m
181号土壙
40.80m
182号土壙
40.80m
183号土壙
40.80m
第1層　褐色土、ローム粒子多量混入
第2層　黄褐色土
第3層　暗褐色土
第1層　褐色土
第2層　褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第3層　褐色土、ロームブロック混入
第4層　黄褐色土
第5層　黄褐色土、ローム粒子混入
第1層　暗褐色土、ローム粒子混入
第2層　褐色土
第3層　黄褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第4層　黄褐色土
第5層　褐色土、炭化物混入
第6層　褐色土、ローム粒子混入
第7層　褐色土、炭化物多量混入
第8層　黄褐色土、褐色土混入
第1層　褐色土、ローム粒子混入
第2層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第3層　暗褐色土、ロームブロック混入
第4層　褐色土、焼土・ローム粒子混入
第5層　黄褐色土
184号土壙
40.80m
40.80m
185号土壙
第1層　褐色土、焼土・ローム粒子混入
第2層　褐色土、ローム粒子多量混入
第3層　褐色土、ロームブロック混入
第4層　褐色土
第5層　褐色土、炭化物混入
第6層　褐色土、焼土・炭化物・ローム粒子混入
第7層　暗褐色土、ローム粒子混入
第1層　褐色土
第2層　褐色土、ローム粒子混入
第3層　黄褐色土
第4層　黄褐色粘質土
186号土壙
40.80m
187号土壙
40.80m
188号土壙
40.80m
第1層　褐色土
第2層　暗褐色土、ローム粒子混入
第1層　褐色土、ローム粒子
第2層　黄褐色土
第3層　褐色土
第4層　黄褐色土、ローム粒子混入
第1層　褐色土、ローム粒子混入
第2層　暗褐色土
第3層　黄褐色土
第4層　暗黄褐色土
190号土壙
40.80m
第1層　暗褐色土、ローム粒子混入
第2層　褐色土
189号土壙
40.80m
第1層　褐色土
第2層　褐色土、炭化物混入
第3層　黄褐色土
0
1 m

第123図　土壙



第124図　土器埋設遺構

は波状、頸部には一条の粘土紐貼付の隆帯がまわり、上部に撚糸圧痕文が施される。間の四ケ所には「ハ」状の隆帯が貼付され、それらの間には擬似爪形文・撚糸圧痕文が配される。地文は結束のある縦方向の羽状縄文である。

土器埋設遺構（第 124 図）

住居跡外にあり、明確に土器を埋設する掘り方を掘り、完形、半完形土器を埋設した遺構である。周辺に焼土が分布するものも認められ、住居跡の炉と思われるものもある。以下表にしてまとめた。

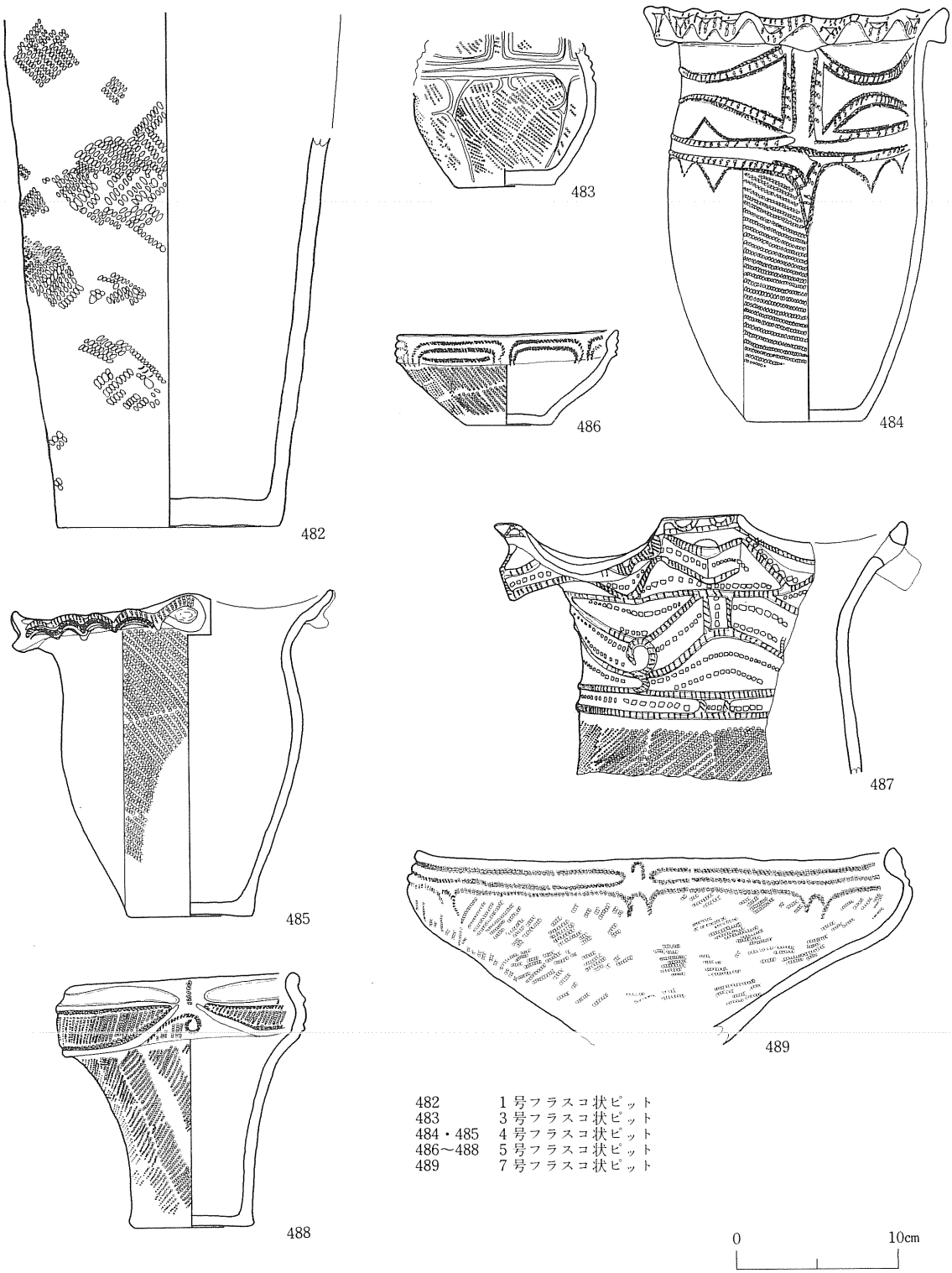
遺構内・外出土土器

遺構内・外から、大木式、円筒式、北陸系の土器が多数出土している。ここでは大木式土器をⅠ群、円筒式土器をⅡ群、北陸系土器をⅢ群、その他の土器をⅣ群とし、各々類別して述べることにする。

第Ⅰ群土器

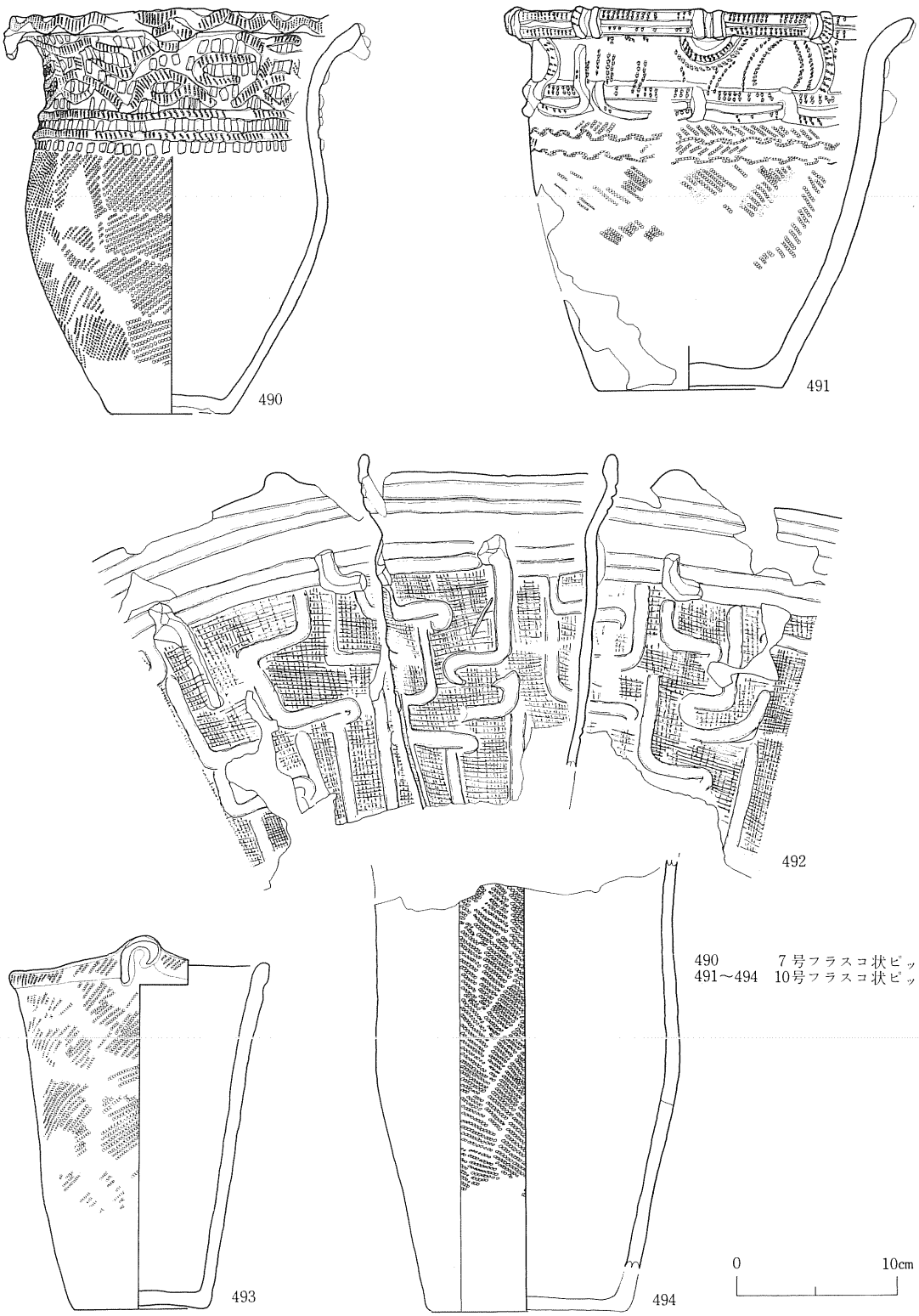
1類土器（26・36～40・44・45・47・82・85・222・242・276・285・286～288・308・309・349・425・426・435・451・453・493・521・536・550・551・585～587・589・623・624・697・698・728・729・731・736・737・740・741・745・746・748・749・750・760・768・775・780）

口縁が平縁、波状を呈する深鉢形土器が主体である。粘土紐貼付、半截竹管状工具により文様が施される。波状口縁の頂部から粘土紐貼付の隆帯が、蛇行・鋸歯状・直線に施されるもの、横方向の沈線で鋸歯状文が施されるもの、平行沈線間に細い粘土紐貼付の鋸歯状文、さらに交互刺突を施

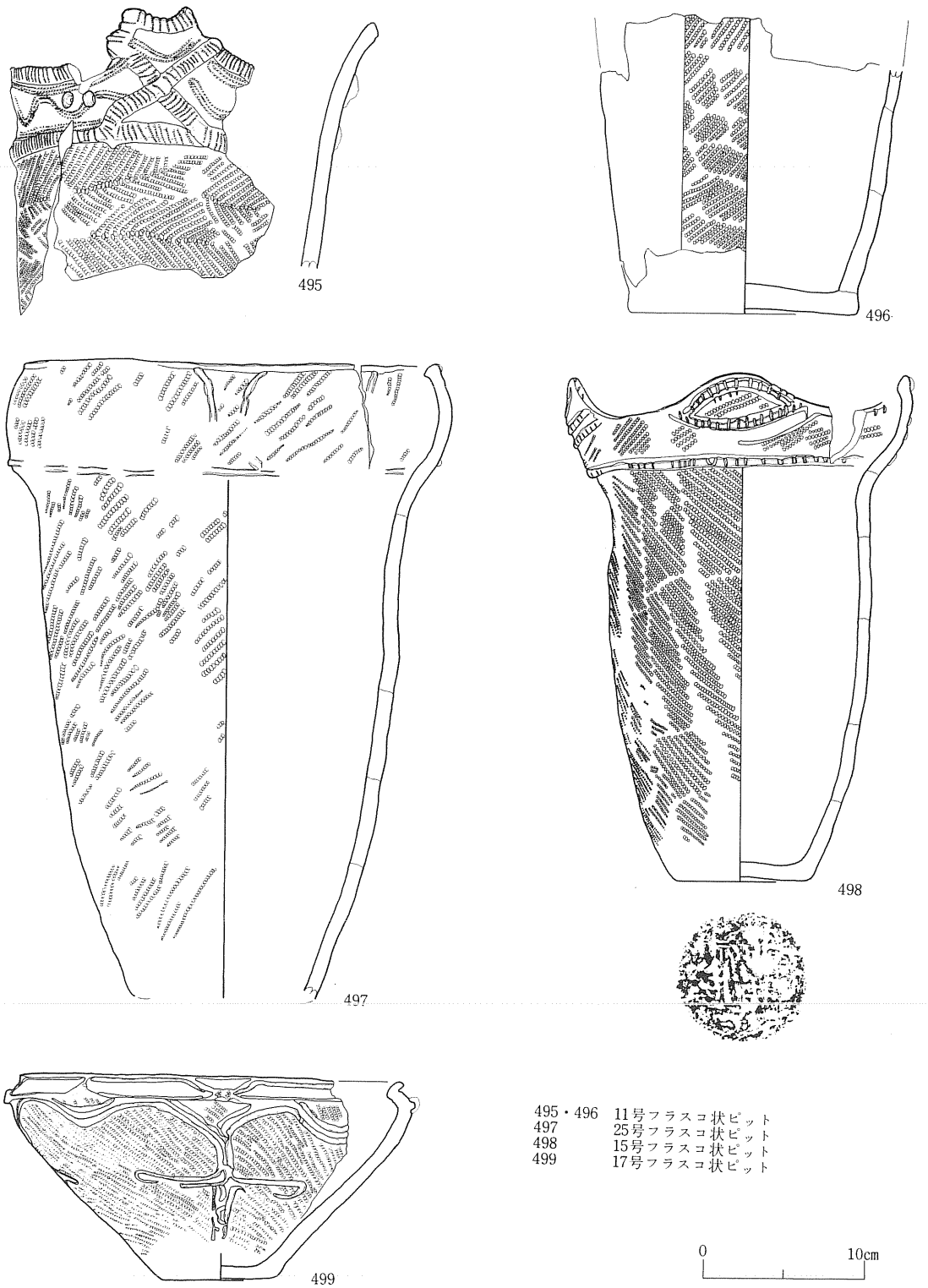


482　　1号フラスコ状ピット
483　　3号フラスコ状ピット
484・485　4号フラスコ状ピット
486～488　5号フラスコ状ピット
489　　7号フラスコ状ピット

第125図　遺構内出土土器

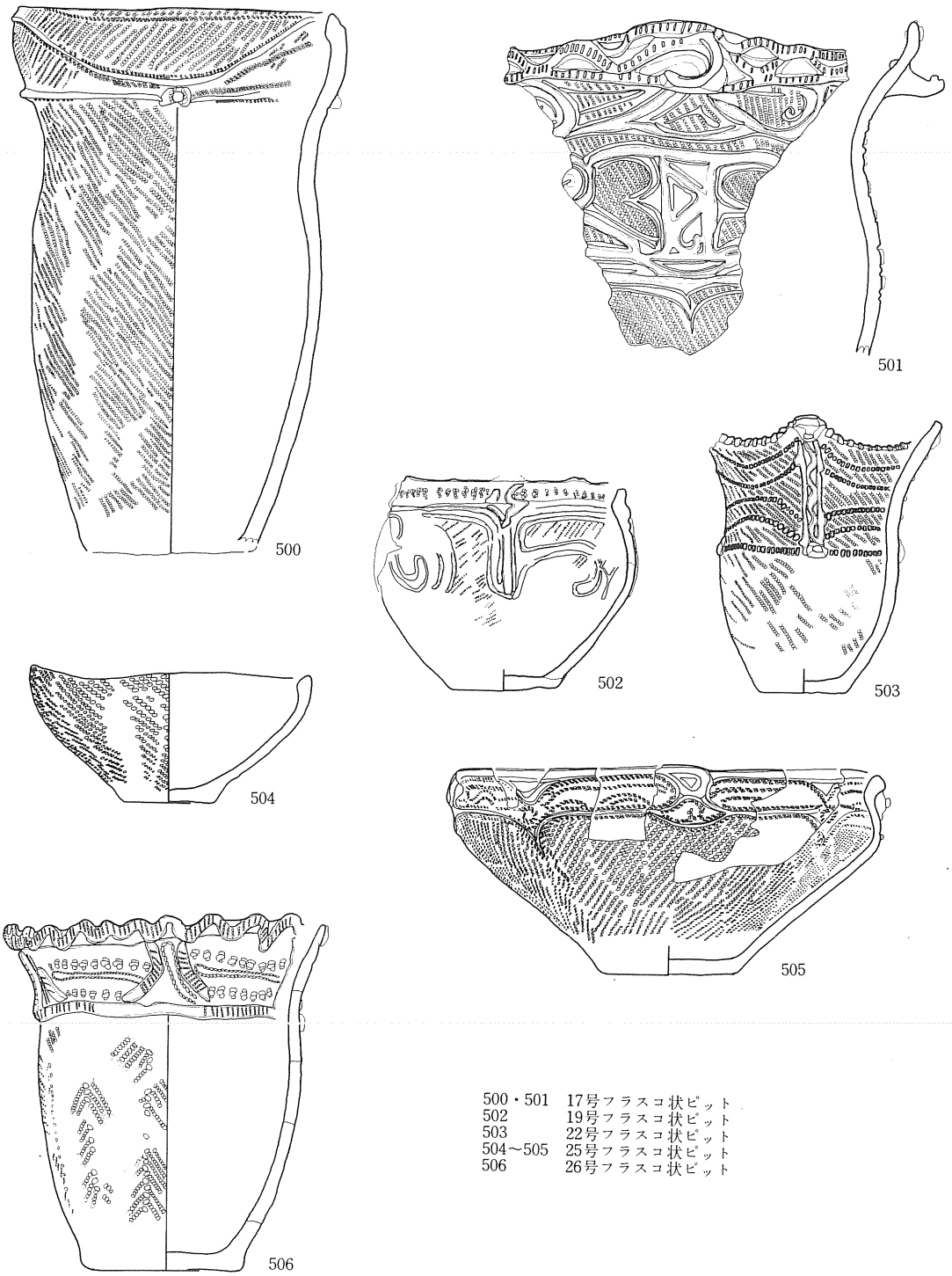


第126図　遺構内出土土器



495・496　11号フラスコ状ピット
497　25号フラスコ状ピット
498　15号フラスコ状ピット
499　17号フラスコ状ピット

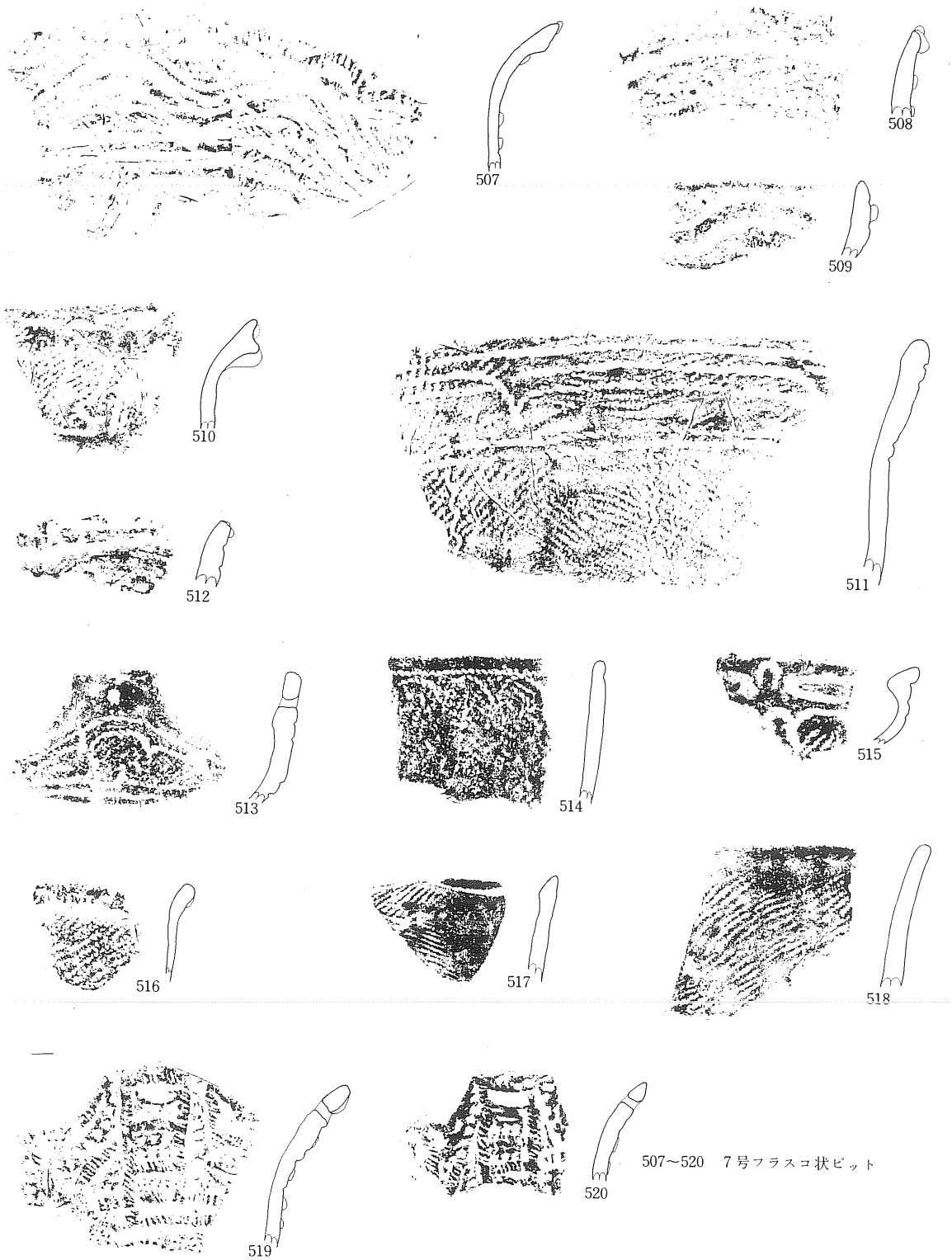
第127図　遺構内出土土器



500・501　17号フラスコ状ピット
502　19号フラスコ状ピット
503　22号フラスコ状ピット
504～505　25号フラスコ状ピット
506　26号フラスコ状ピット

0　10cm

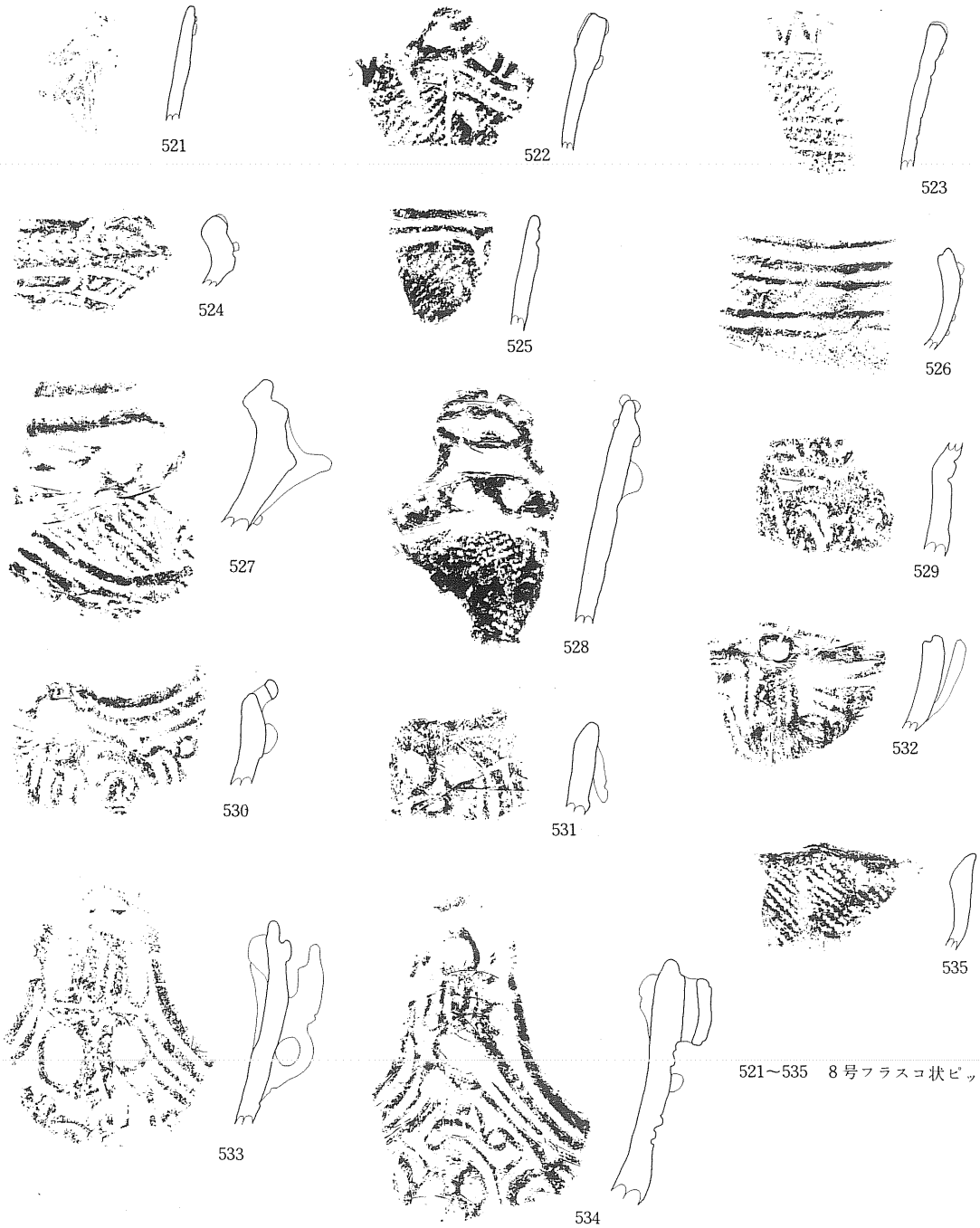
第128図　遺構内出土土器



507～520　7号フラスコ状ピット

第129図　遺構内出土土器

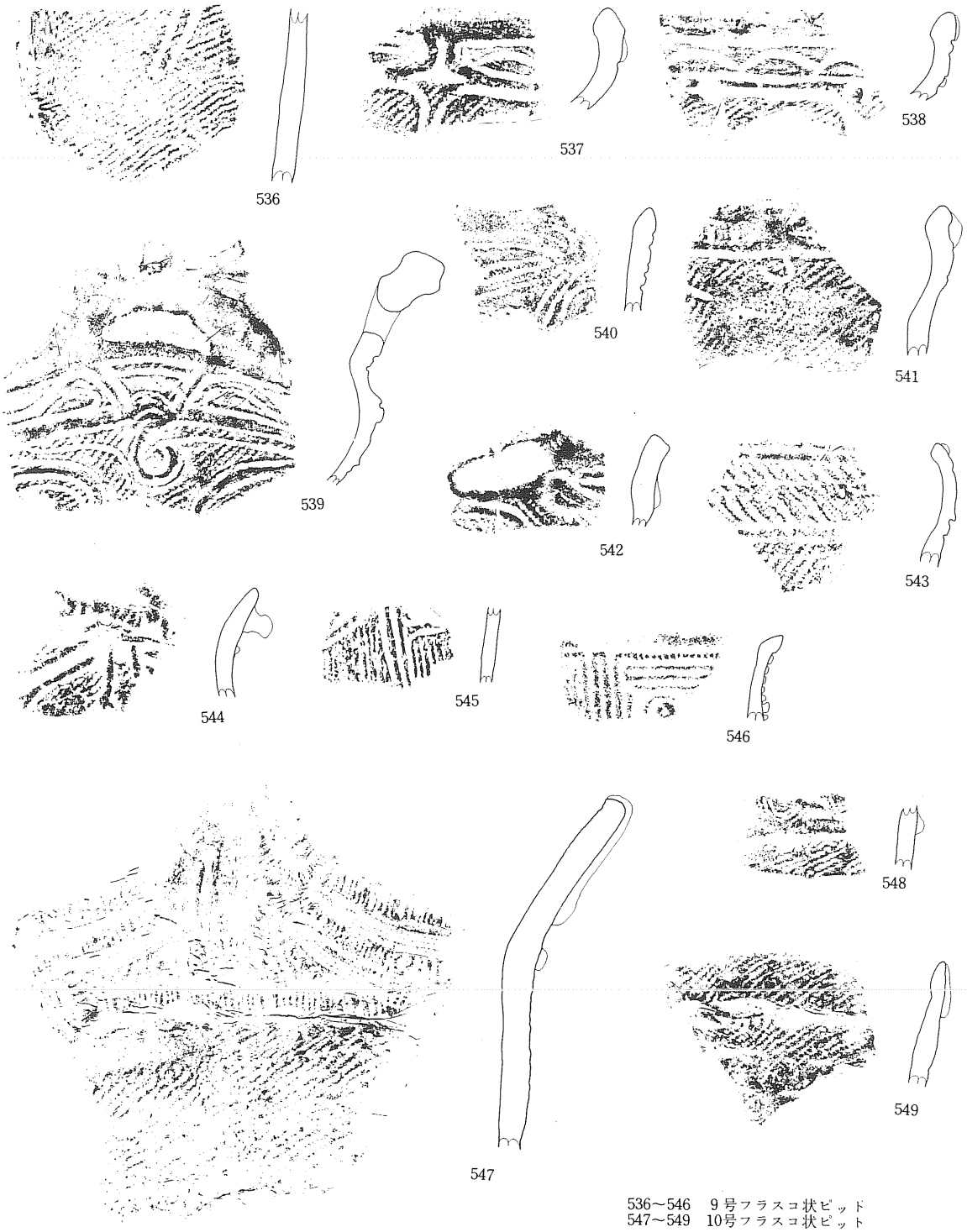
0　10cm



521～535　8号フラスコ状ピット

第130図　遺構内出土土器

0　10cm



536～546　9号フラスコ状ピット
547～549　10号フラスコ状ピット

0　10cm

第131図　遺構内出土土器

550～557　11号フラスコ状ピット
558～562　12号フラスコ状ピット
563～568　14号フラスコ状ピット

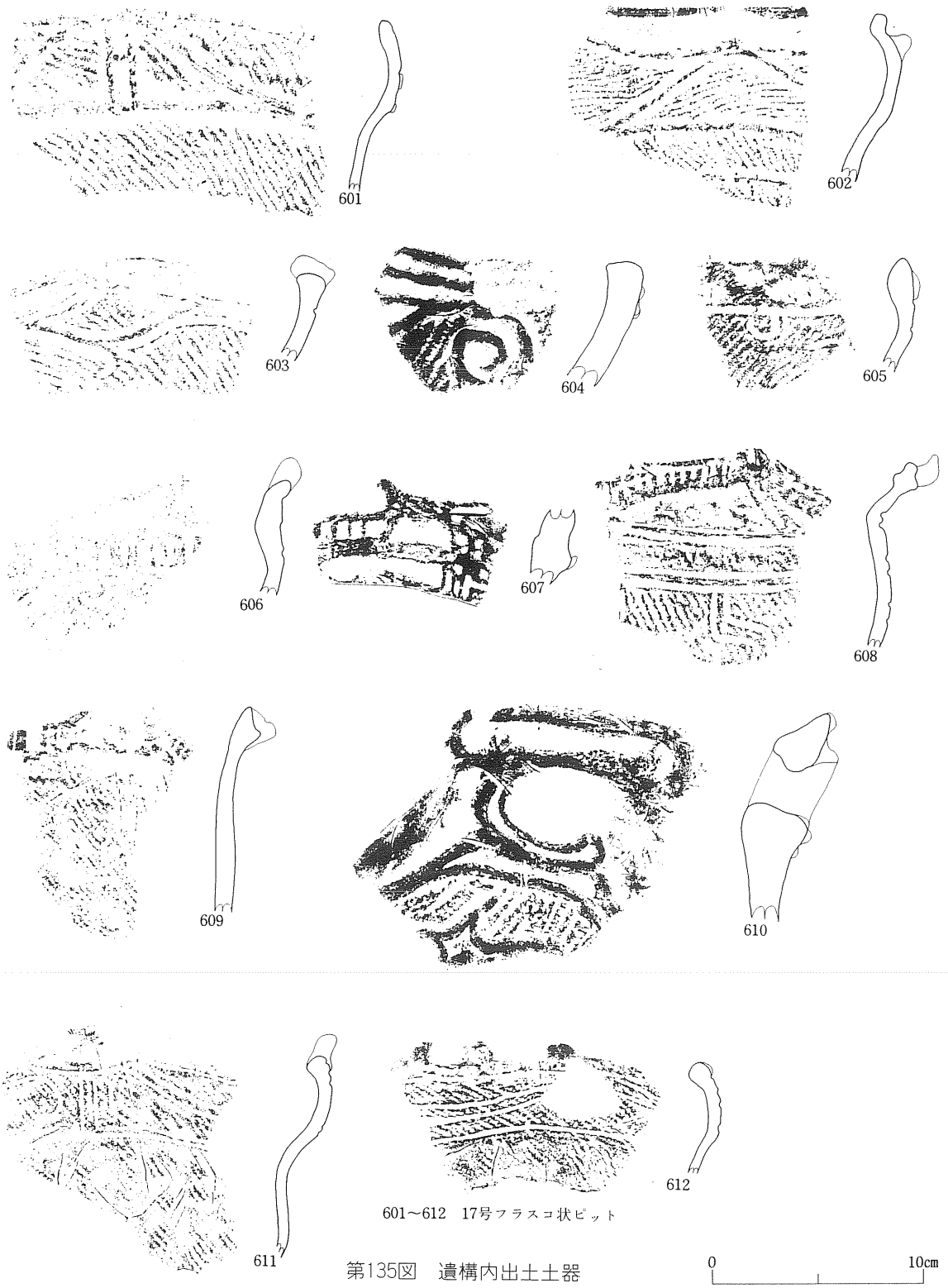
第132図　遺構内出土土器

569～577　14号フラスコ状ピット
578～583　15号フラスコ状ピット

0　10cm

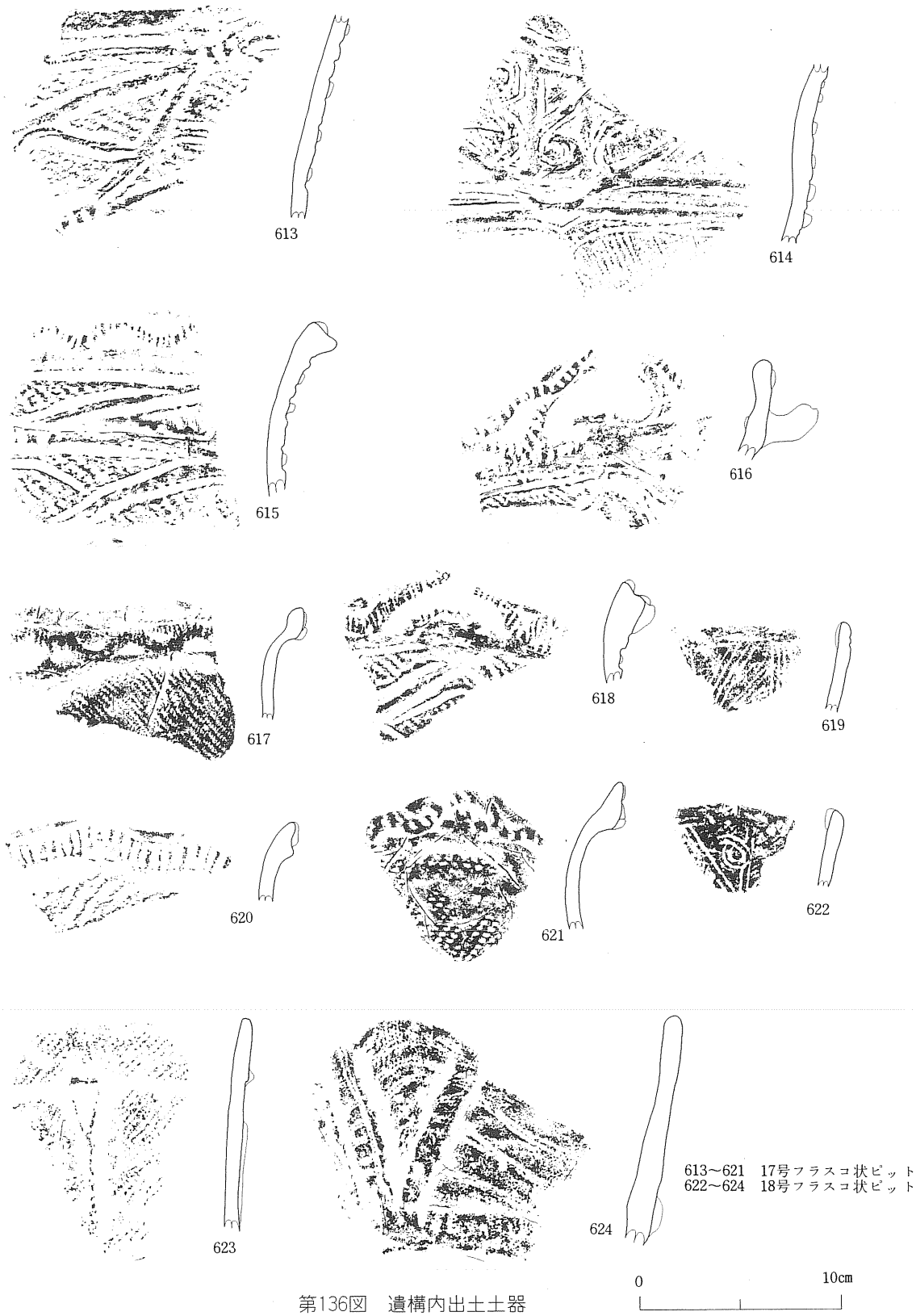
第133図　遺構内出土土器

第134図　遺構内出土土器



601～612　17号フラスコ状ピット

第135図　遺構内出土土器



第136図　遺構内出土土器

625～638　19号フラスコ状ピット

第137図　遺構内出土土器

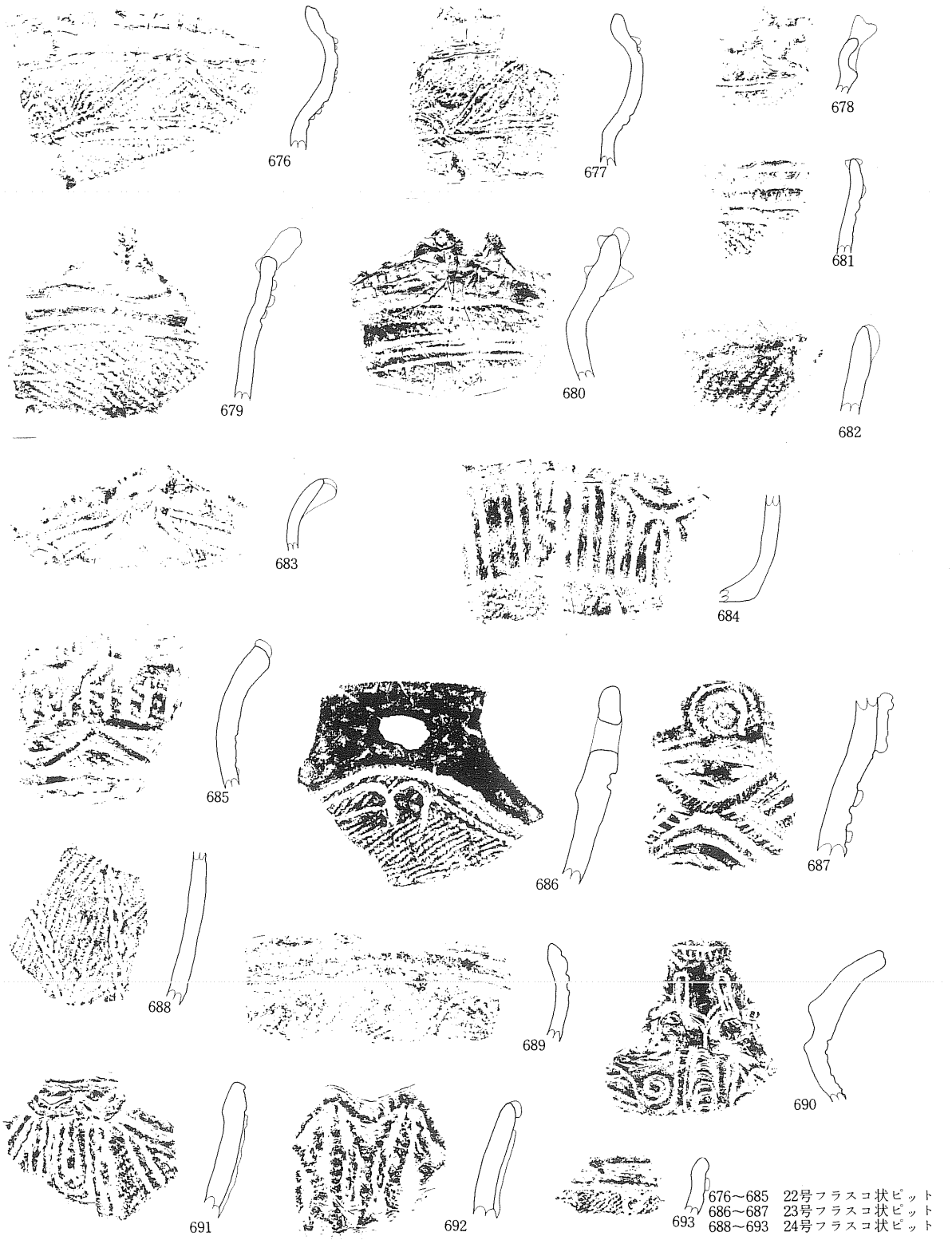
0　10cm

第138図　遺構内出土土器

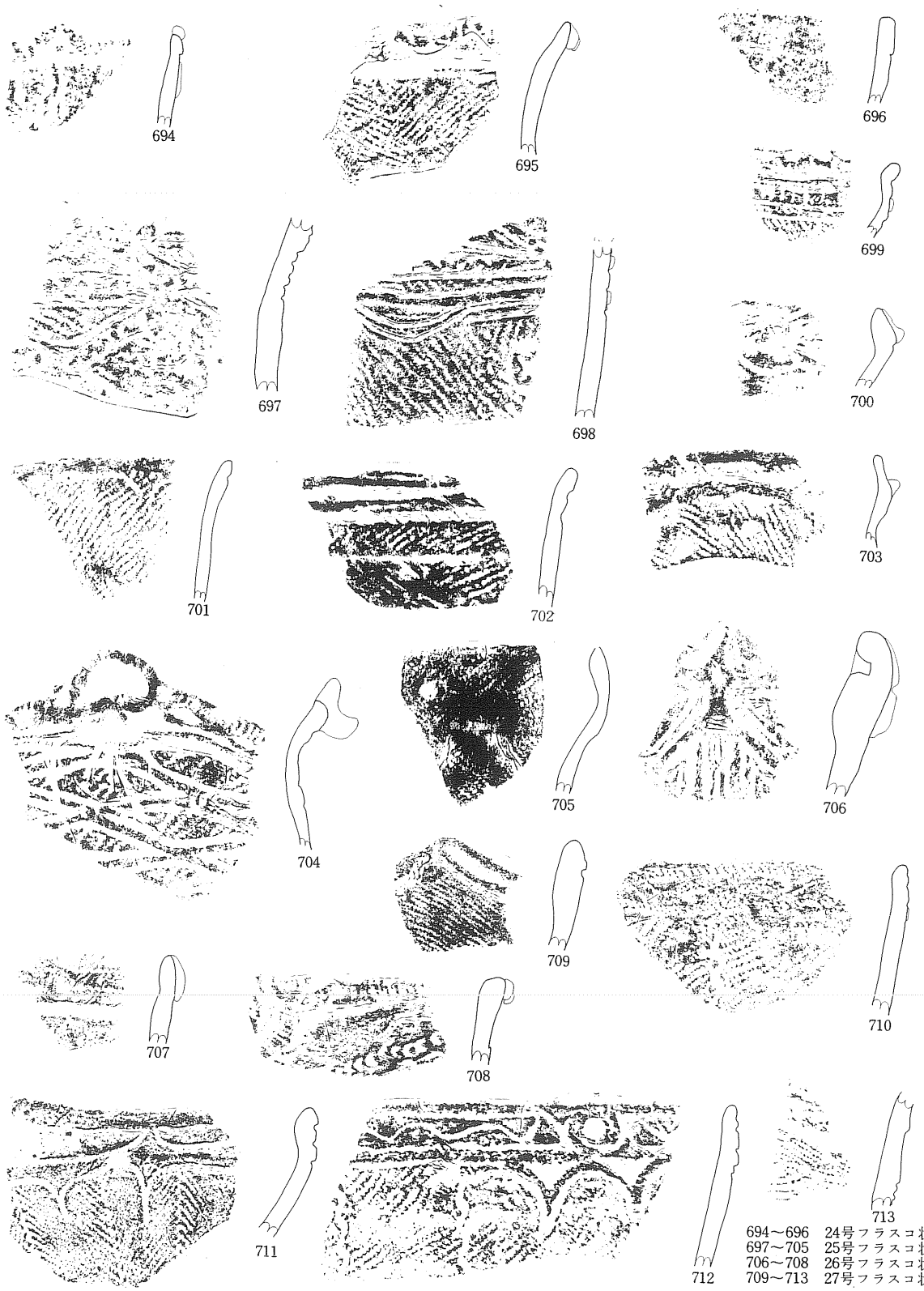
659～670　21号フラスコ状ピット
671～675　22号フラスコ状ピット

第139図　遺構内出土土器

0　10cm



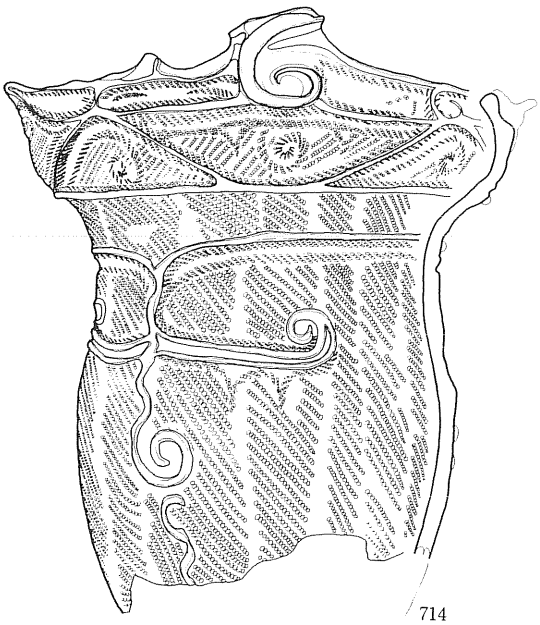
第140図　遺構内出土土器

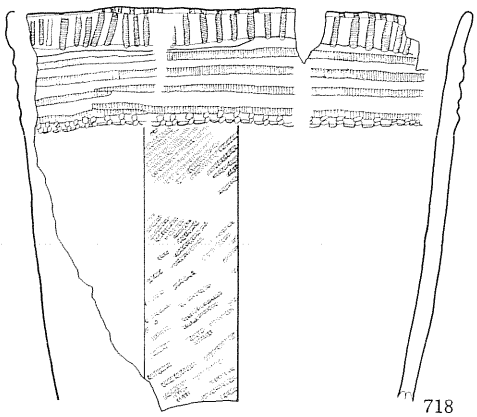


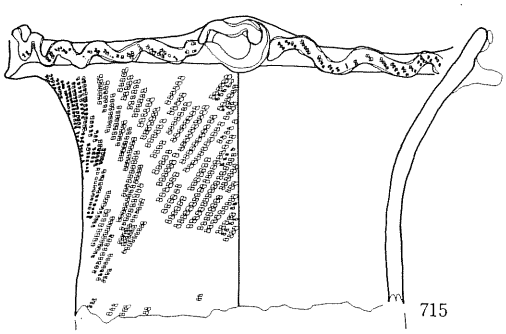
694～696　24号フラスコ状ピット
697～705　25号フラスコ状ピット
706～708　26号フラスコ状ピット
709～713　27号フラスコ状ピット

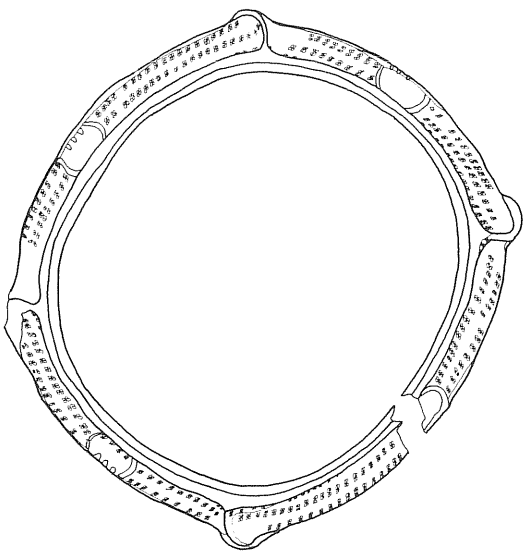
第141図　遺構内出土土器

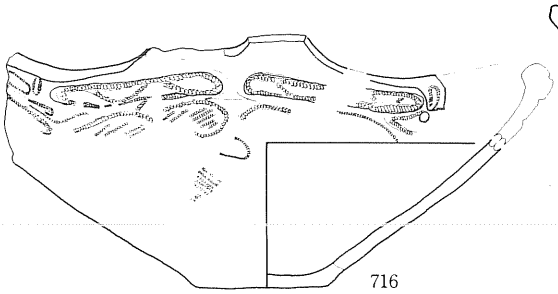
0　10cm

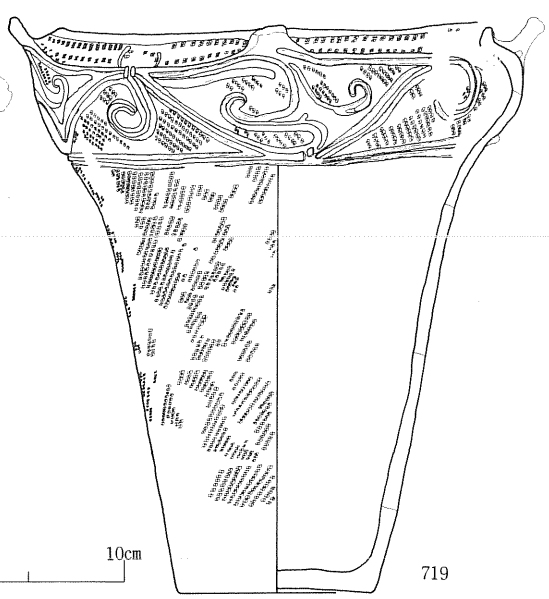


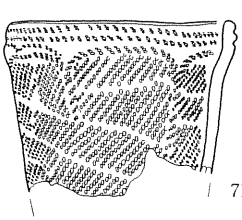








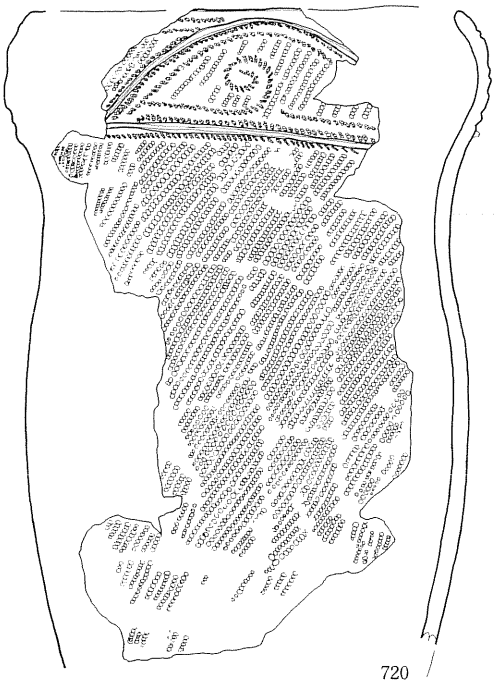


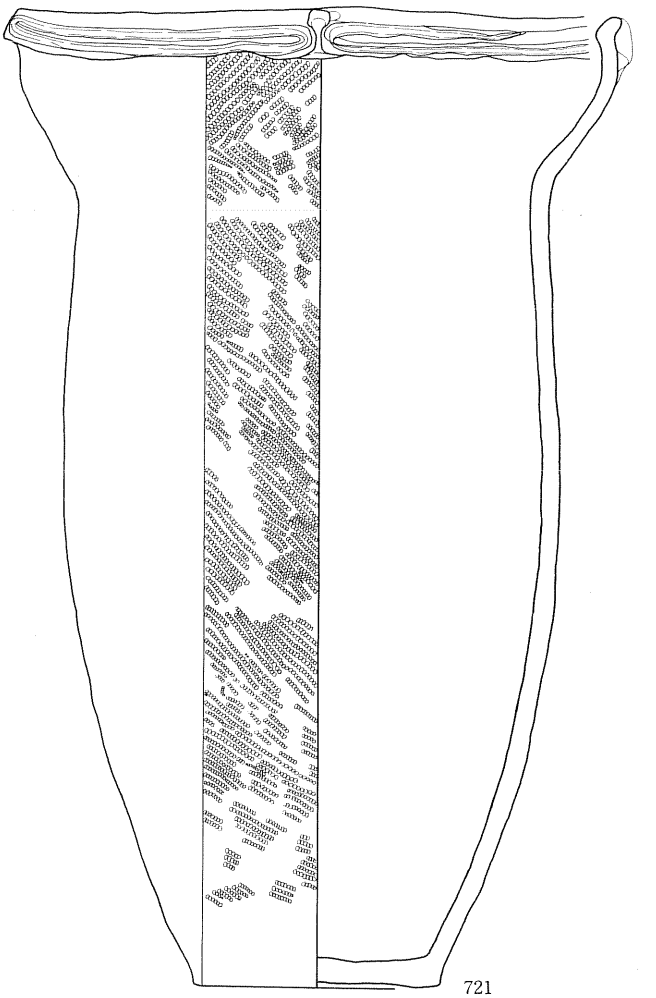


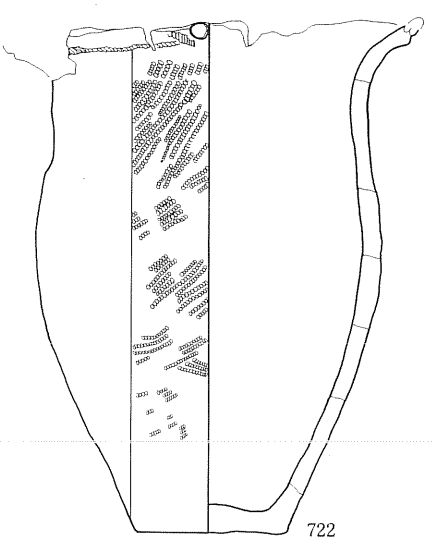
714～716　14号土壙
717　21号土壙
718　29号土壙
719　64号土壙

0　10cm

第142図　遺構内出土土器



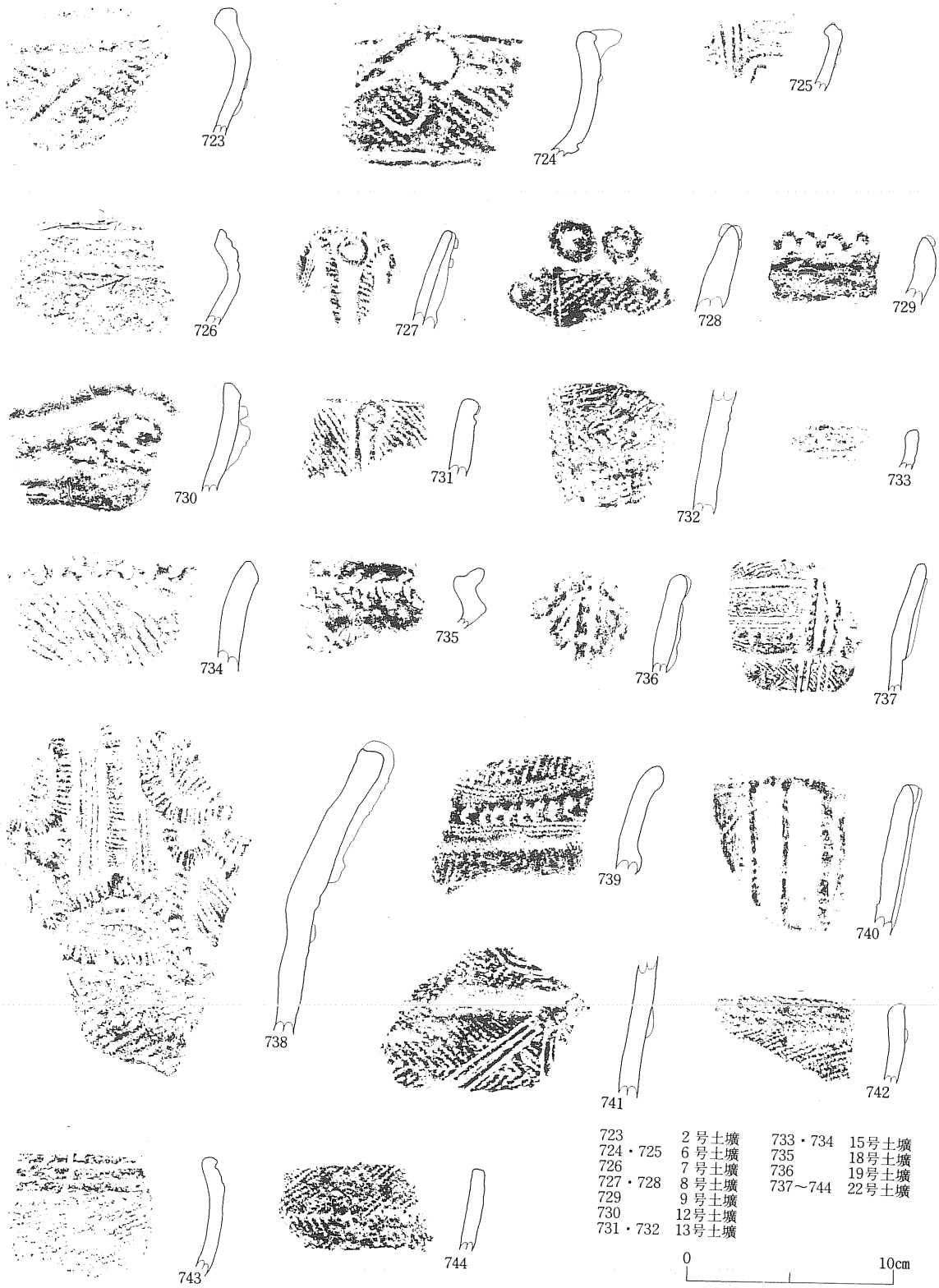




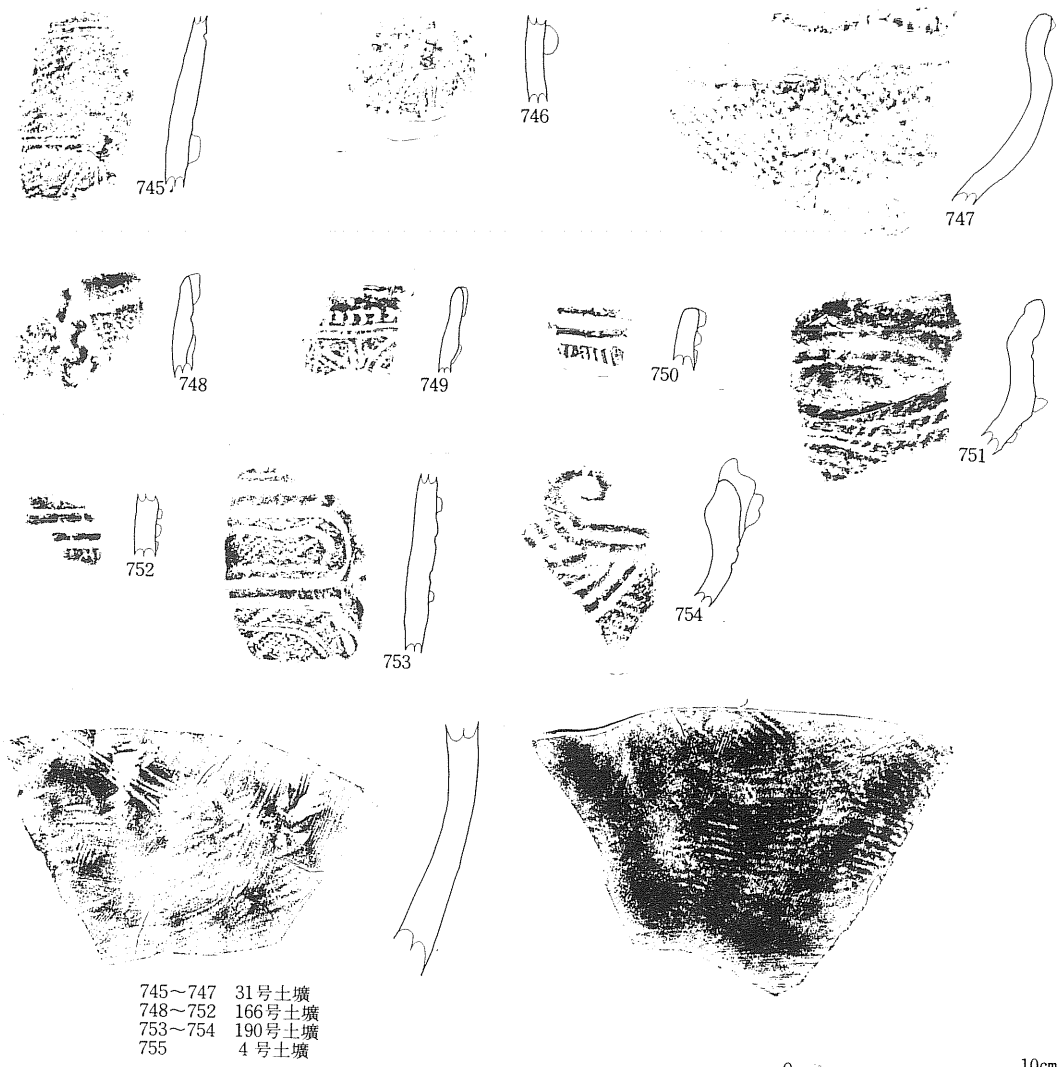
720　105号土壙
721　138号土壙
722　164号土壙

0　10cm

第143図　遺構内出土土器



第144図　遺構内出土土器



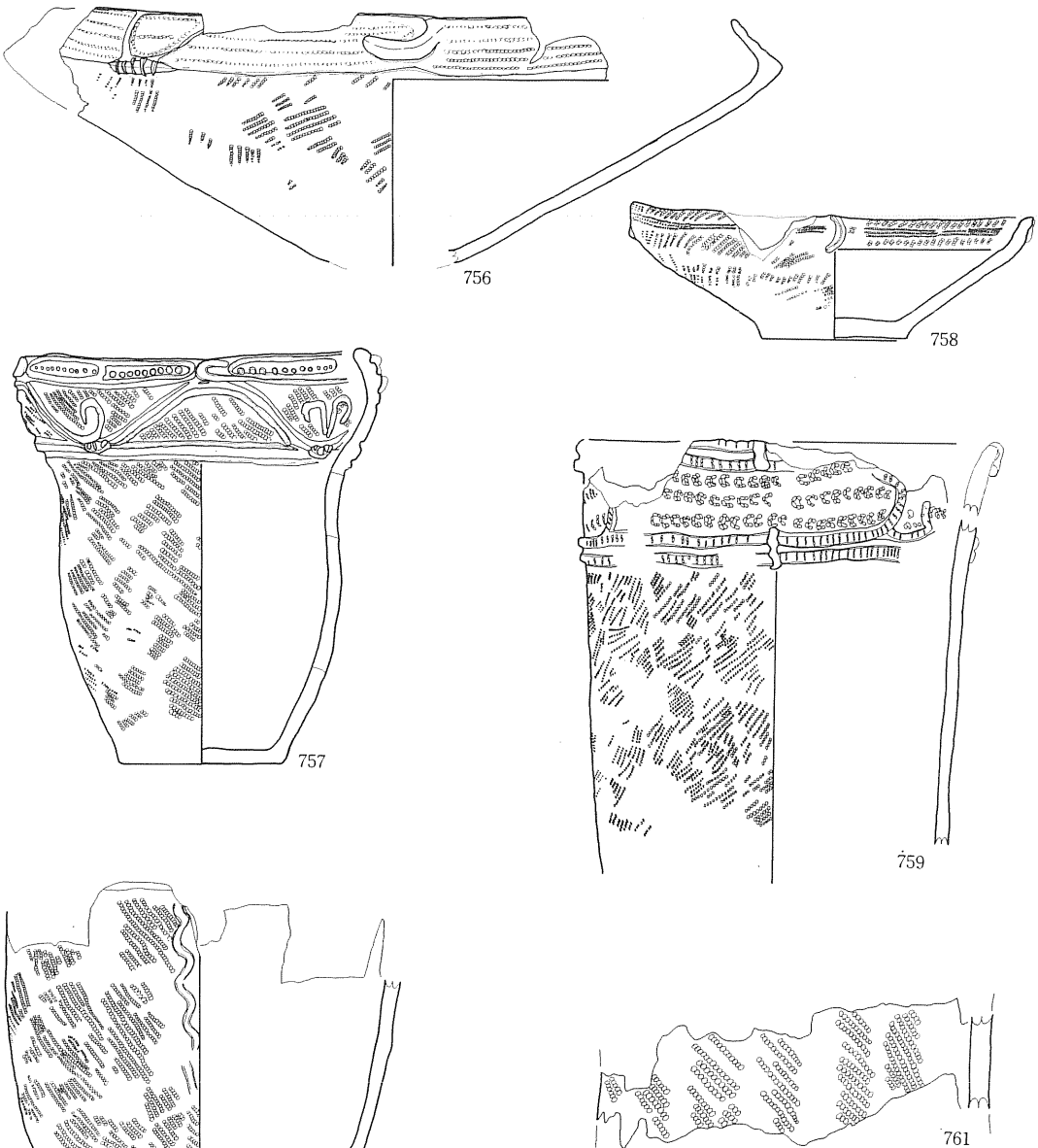
第145図　遺構内出土土器

すもの、半截竹管状工具による刺突で爪形文が施されるものなどがある。

2類土器

口縁部は平縁が主で、中には波状口縁のものもある。器種は口縁部が内傾する浅鉢形土器、口縁部がゆるく内湾するキャリパー形を呈する深鉢形土器などがある。文様は撚糸圧痕文・押圧縄文・粘土紐貼付文・隆帯文・楕円文・渦巻文などが施文される。施文様からa～c類に分られる。

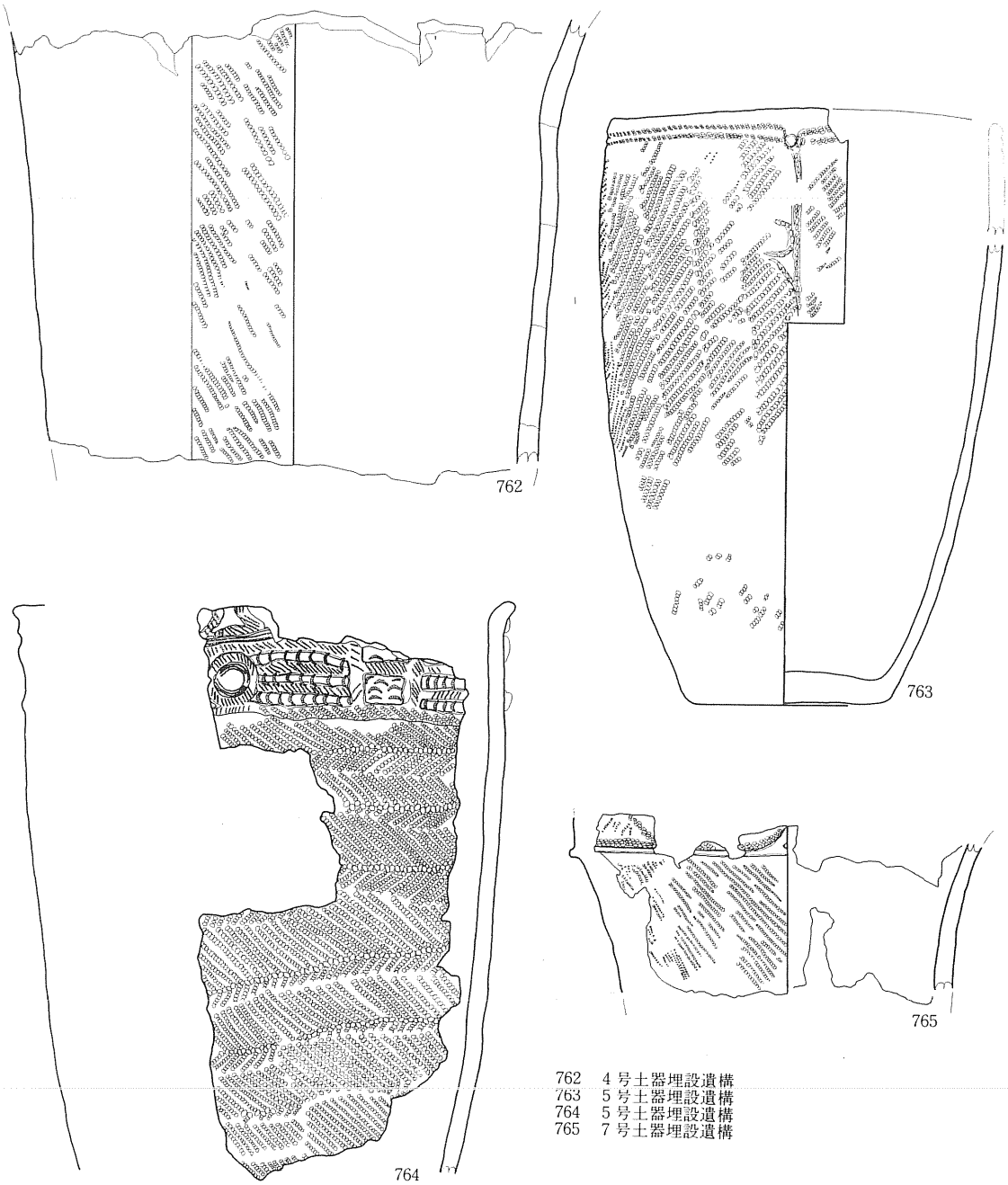
a類（2・7・17・41・97・106・109・111・116～119・170・172～175・208・224・225・237・246・262・268・277・278・313・314・356・370～375・387・414・415・454・486・488・489・505・508～517・525・548・592・634・635・639・672・686・689・700～703・707・709～713・718・722・726・742・743・756・758・763・765・769・782～798・800・803）



756　176号土壙
757　178号土壙
758　2号竪穴状遺構
759　1号土器埋設遺構
760　2号土器埋設遺構
761　3号土器埋設遺構

0　10cm

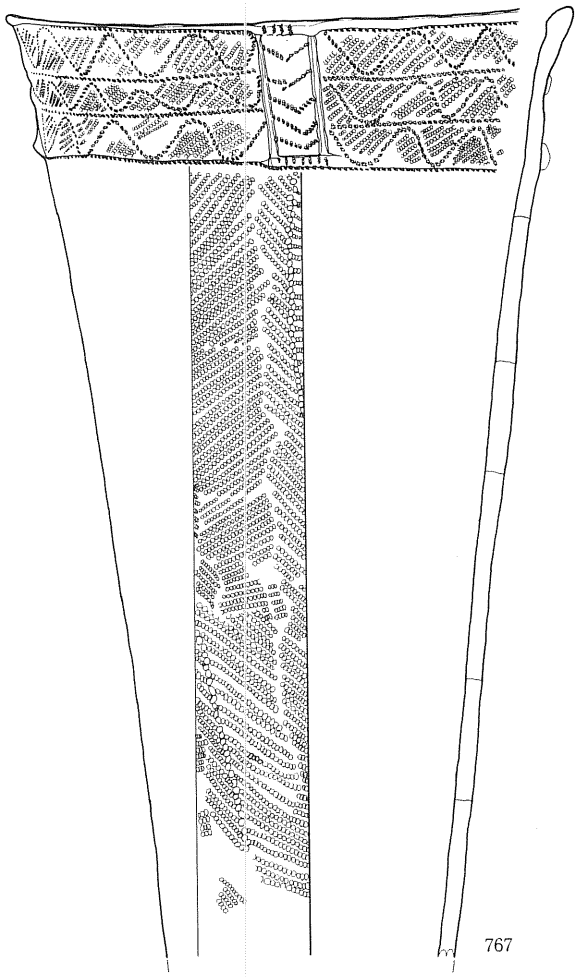
第146図　遺構内出土土器

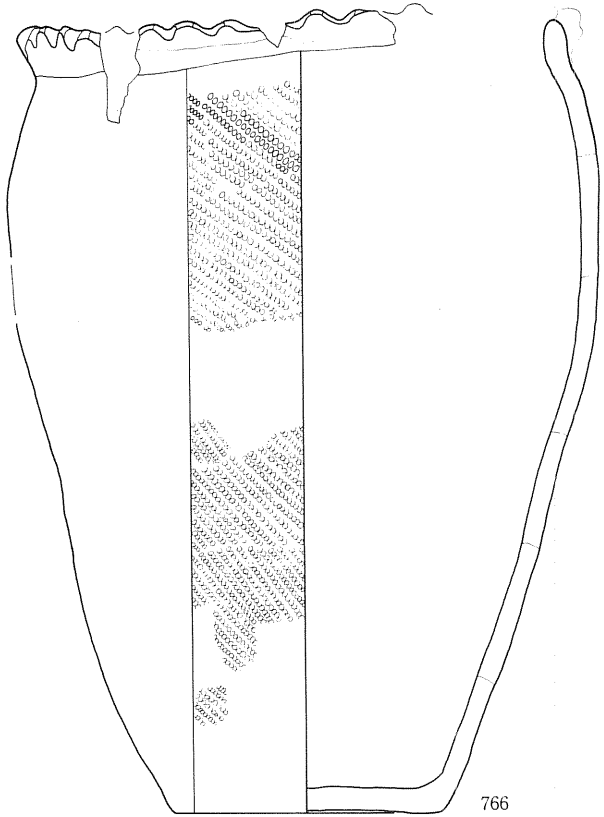


762　4号土器埋設遺構
763　5号土器埋設遺構
764　5号土器埋設遺構
765　7号土器埋設遺構

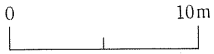
0　10cm

第147図　遺構内出土土器

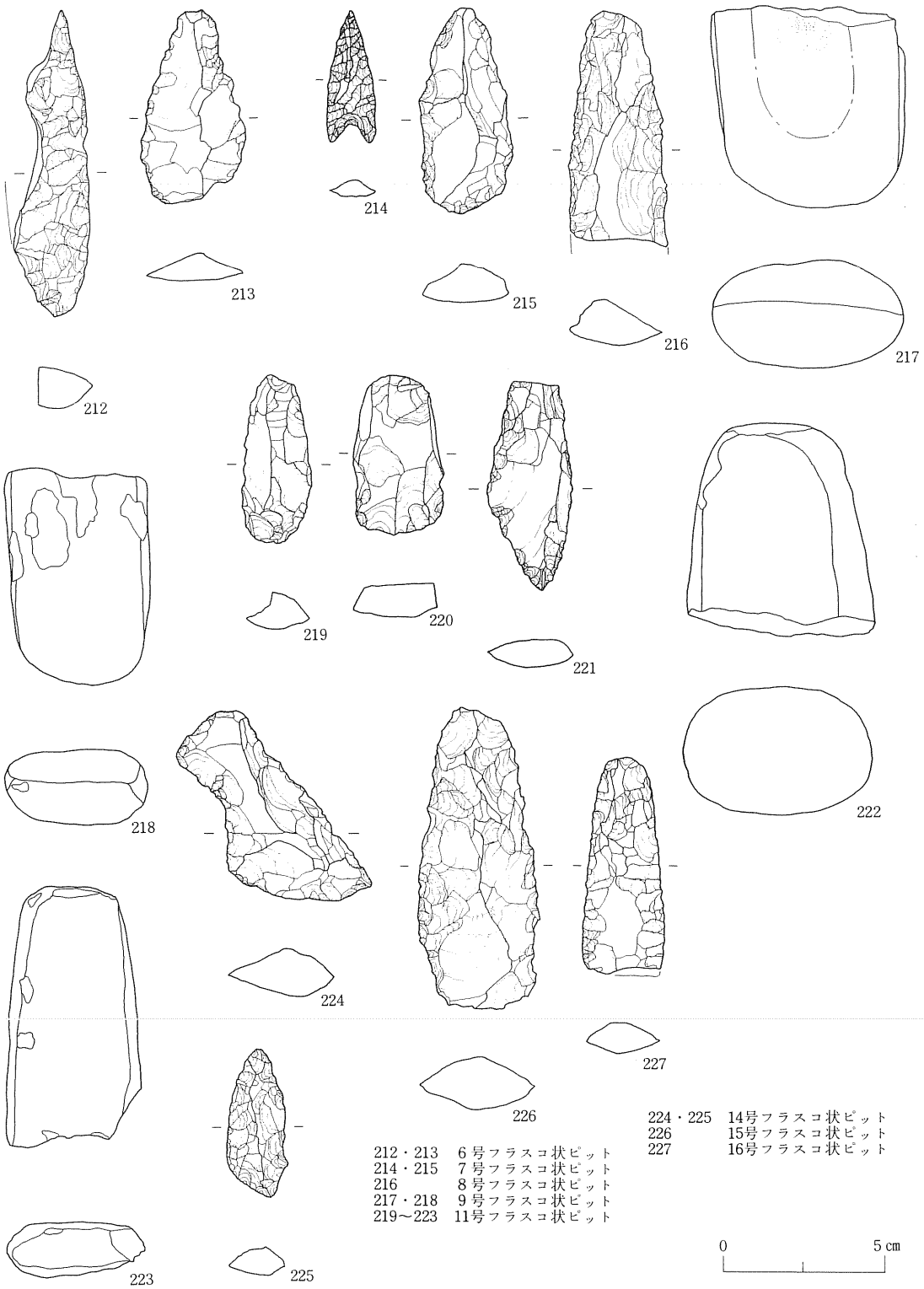




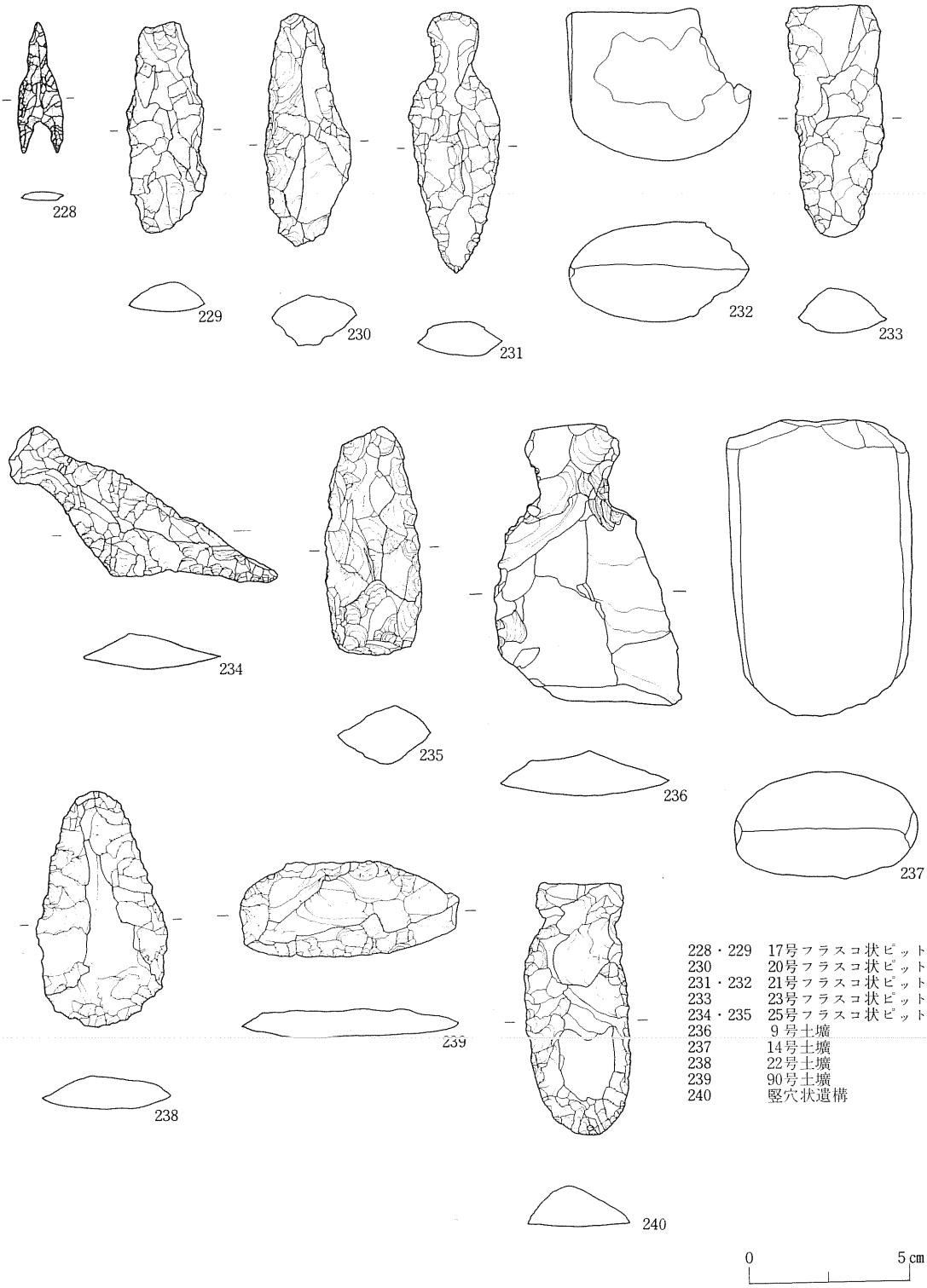
766　6号土器埋設遺構
767　8号土器埋設遺構



第148図　遺構内出土土器

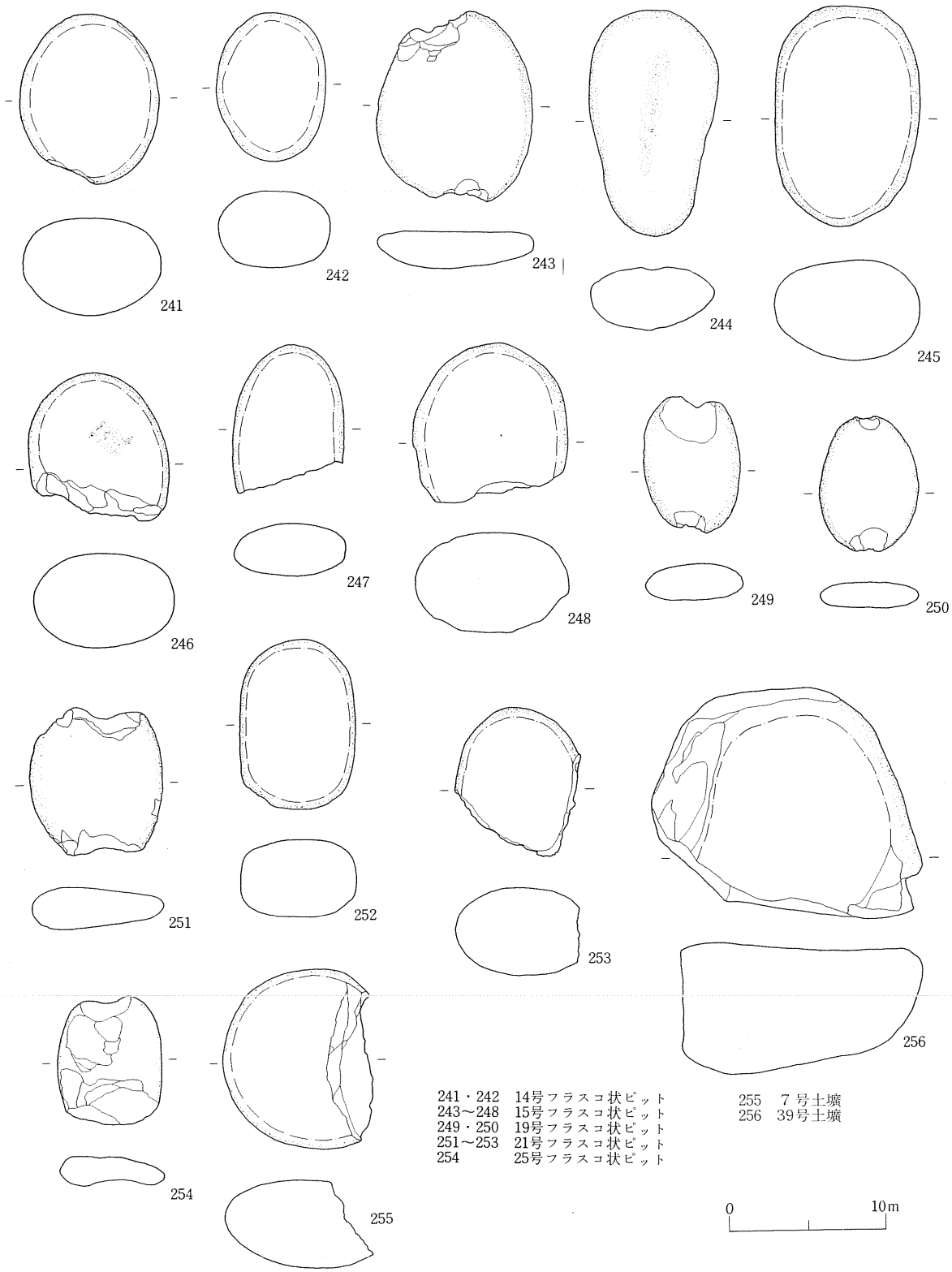


第149図　遺構内出土石器



228・229	17号フラスコ状ピット
230	20号フラスコ状ピット
231・232	21号フラスコ状ピット
233	23号フラスコ状ピット
234・235	25号フラスコ状ピット
236	9号土壙
237	14号土壙
238	22号土壙
239	90号土壙
240	竪穴状遺構

第150図　遺構内出土石器



241・242　14号フラスコ状ピット
243～248　15号フラスコ状ピット
249・250　19号フラスコ状ピット
251～253　21号フラスコ状ピット
254　25号フラスコ状ピット
255　7号土壙
256　39号土壙

第151図　遺構内出土石器

撚糸圧痕文によって主に口縁部、頸部に文様が施される土器である。撚糸圧痕文は単独で平行直線・連弧状・Y字状などに施文される。

b類（770・771）

口縁が内傾する浅鉢形土器である。四ケ所につまみ出したような瘤状の突起を貼付し、細長い楕円形に区画する。771は竹管状工具による爪形文が施される。

c類（1・6・33・56・92・154・206・207・233～236・247・310～312・315・333・338～342・360～364・416・417・418・427・430・456・498・499・502・507・522・524・537～542・554・563・564・674・687～688・690～693・716・723・724・804～820）

粘土紐貼付による隆帯が波状・山形に貼付され、それを縁どりする形で撚糸圧痕文・押圧縄文が施される。末端は渦巻文になるものが多い。また楕円文・渦巻文が展開するものもある。

3類土器

キャリパー形を呈する深鉢形土器が主体をなす。撚糸圧痕文・押圧縄文が施される土器も若干残るが、文様の主体は粘土紐貼付文が隆盛となる。また、沈線文によって文様が施される土器もみられる。施文様からa～d類に分けられる。

a類（75・292・297・406・464・500・543・544・599・658・676・677・720・772）

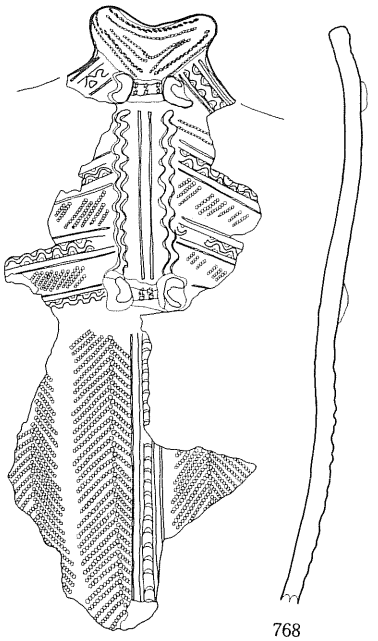
キャリパー形を呈する深鉢形土器で、口縁部に文様が施される。細い粘土紐貼付の隆帯を波状にめぐらし、その両側を撚糸圧痕文・押圧縄文によって縁どりする。さらに渦巻文などが施される。

b類（15・18・20・68・77・99・112・141・142・145・155～157・177～179・180～182・214・215・269・293・316～318・334・352・365～367・376・377・390～393・395～397・401・437・446～448・469・497・526～528・558・559・569～571・581・582・601～603・633・640・655～657・673・675・719・721・757・821・822・824・825）

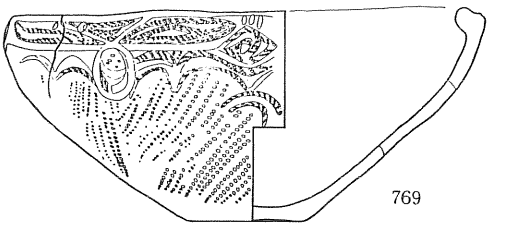
撚糸圧痕文・押圧縄文が消滅し、細い粘土紐貼付文が口縁部に施される。隆帯は直線・波状にめぐり、渦巻文もみられる。

c類（5・21・24・35・53・60～63・80・93・113・124・131～135・144・146・149・158～160・161～164・183・184・187・193・238・249・257・259・270・271・273・319・320・324・368・378～380・383・419～423・426・432・433・438～440・449・465・467・472・529～534・566・572～574・584・604～608・610・613・629～632・637・659～663・671・714・730・753・754・823・827～837・839・842～846）

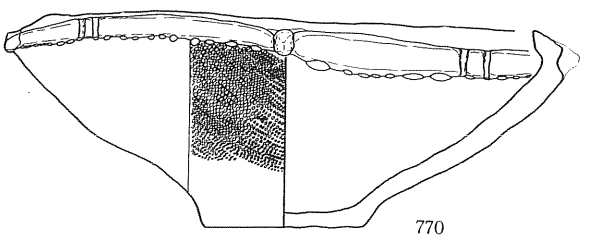
キャリパー形、波状口縁をなす深鉢形土器が主体を占める。口縁部に大きな把手が付されるものもある。粘土紐貼付が文様の主体をなし、胴部にまで施され、垂下・平行・鋸歯状・渦巻・楕円文などが施文される。842は橋状把手が付けられ、843・844は太い隆帯が付される。口縁部には縦方向に刻みが施されるものもある。地文は単節斜縄文が圧倒的に多く、口縁部と体部では縄文方向が異なるものも認められる。



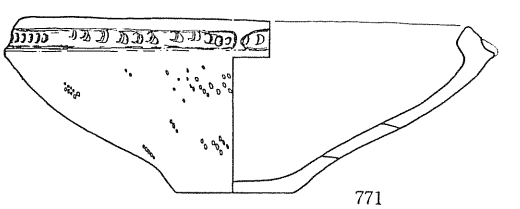
768



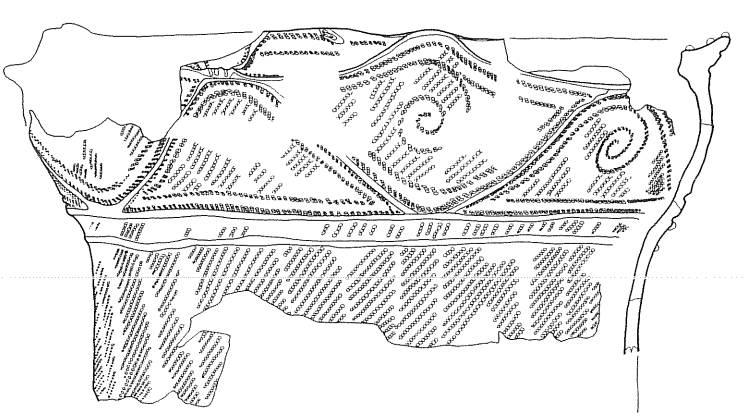
769



770

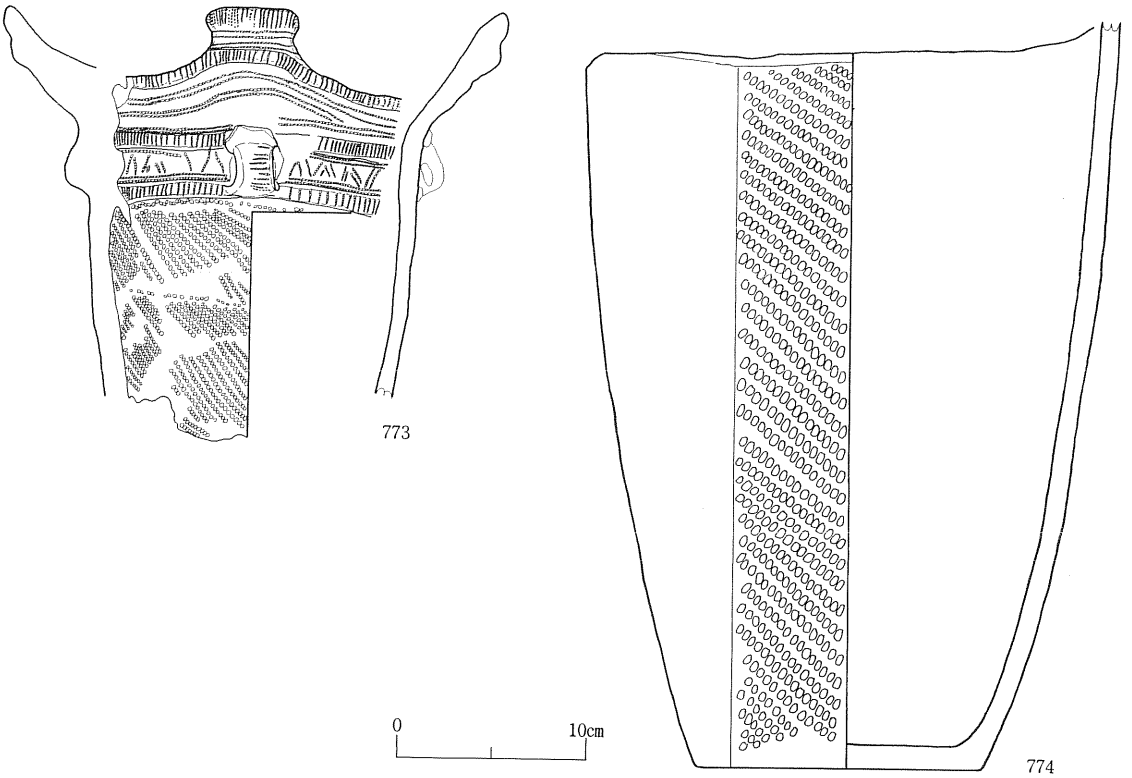


771



772

第152図　遺構外出土土器



第153図　遺構外出土土器

d 類（14・19・78・79・121・125・128～130・150・151・186・196・213・325・369・404・575・576・611・612・678～671・838・840・841・848）

粘土紐貼付文はほとんど消滅し沈線文が主体となる。平行沈線文・渦巻文などが施文される。848は縦に垂下する沈線文と、菱形をなす沈線文が付されている。

4 類土器（3・52・64・78・325・369・433・440・471・474・483・668・847・848）

胴部が膨らみ、頸部から口縁部にかけてゆるく外反する小形の深鉢形土器が主体をなす。沈線によって文様が施され、頸部に数条の沈線がめぐり胴部にかけて垂下する沈線から、渦巻文・フ字状文・棘状文などが展開する。

5 類土器（69・385）

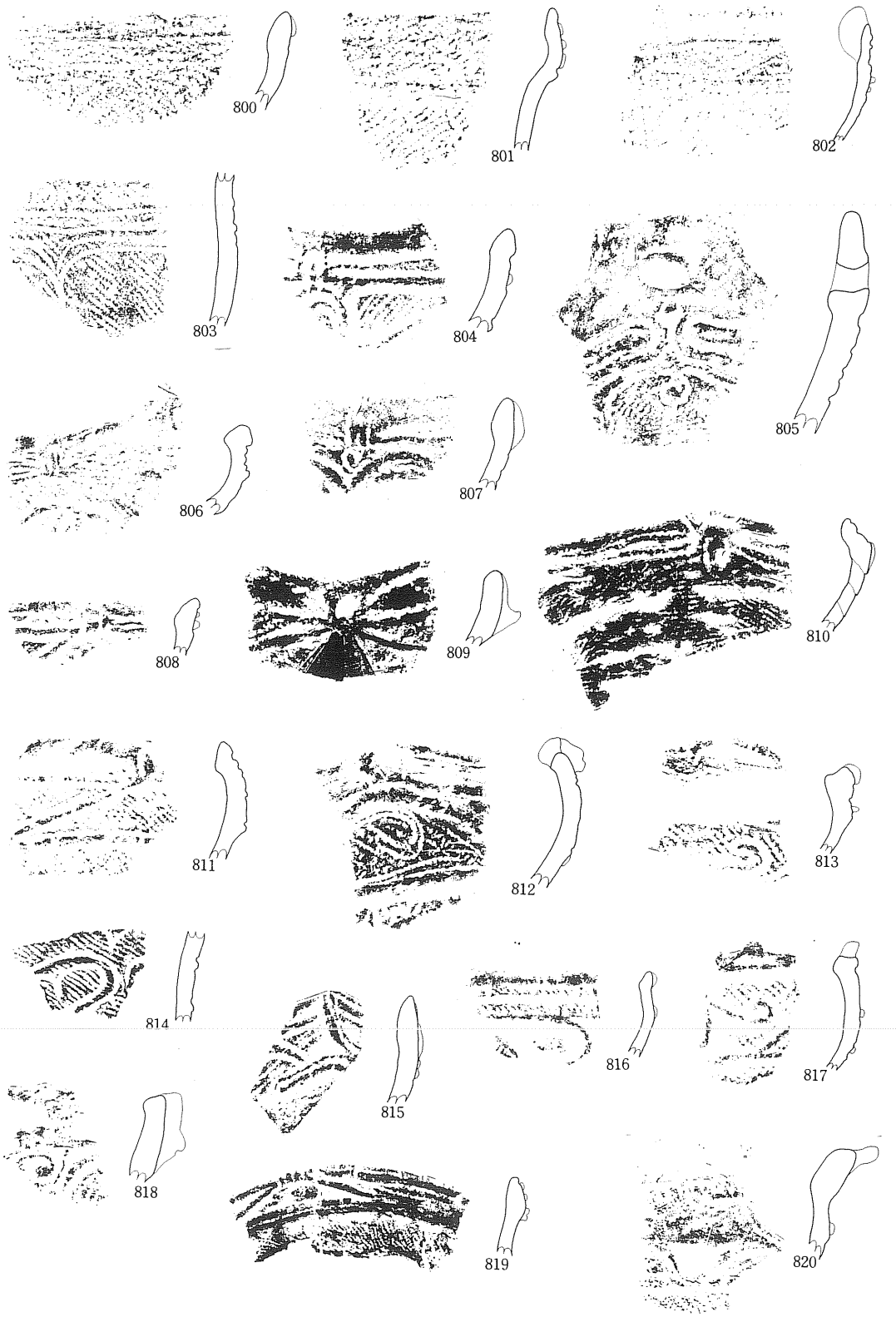
胴部がゆるく膨らみ、口縁部にかけてゆるく外反する深鉢形土器である。沈線区画の磨消帯によって文様が施され、「J」字状・曲線で横方向に大きく文様が展開する。

第Ⅱ群土器

1 類土器（34・250・261・272・303・327～329・457・491・495・692・738・767・773・858～863）

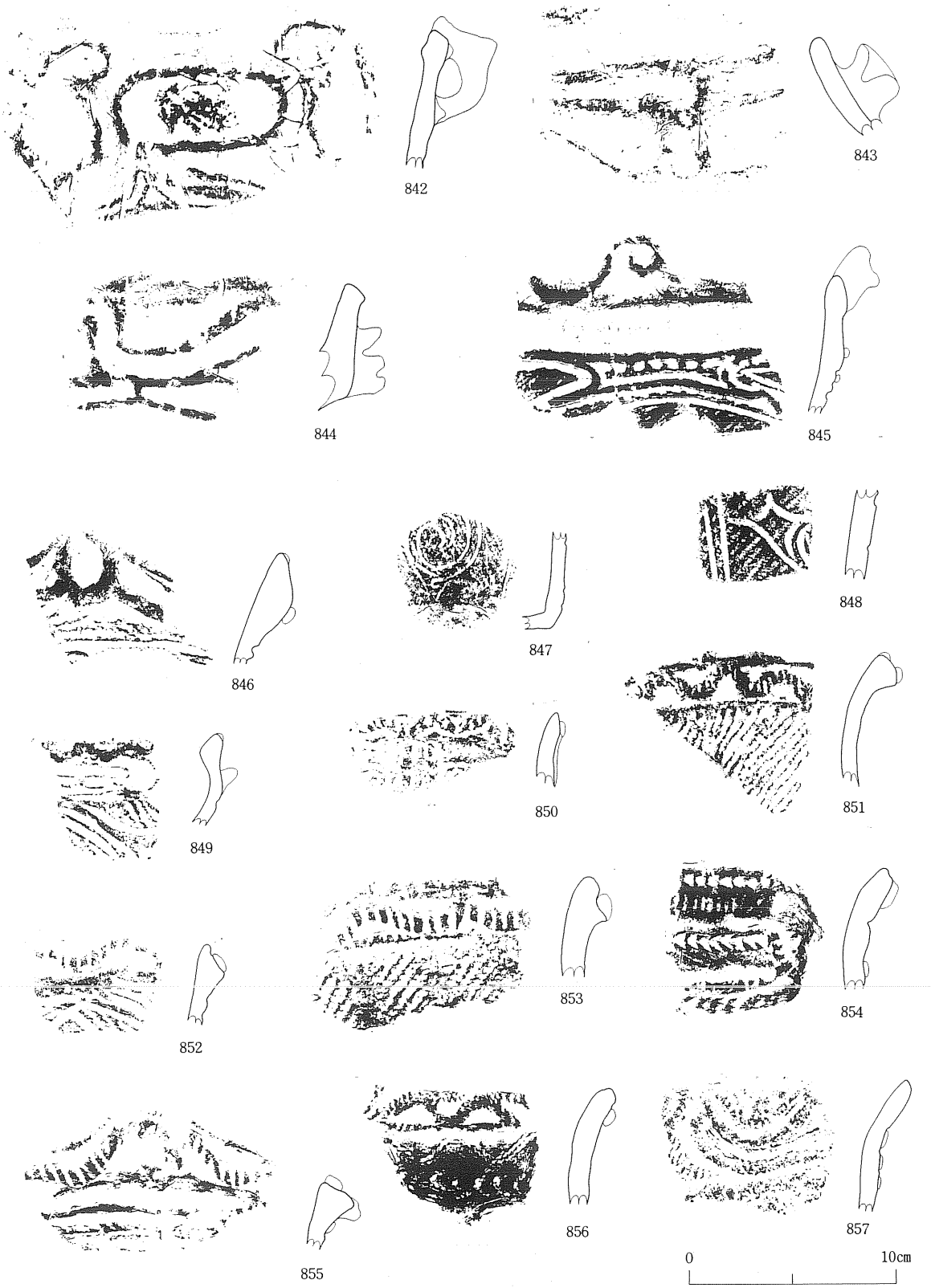
頸部から口縁部にかけて外反し、弁状把手を有する深鉢形土器である。773のように頸部に橋状把手を付すものもある。口縁部・頸部に粘土紐貼付の隆帯をめぐらし、その上部に刻み状の撚糸圧痕が施され、隆帯間を充填して、波状・鋸歯状に撚糸圧痕文が施文される。

第154図　遺構外出土土器



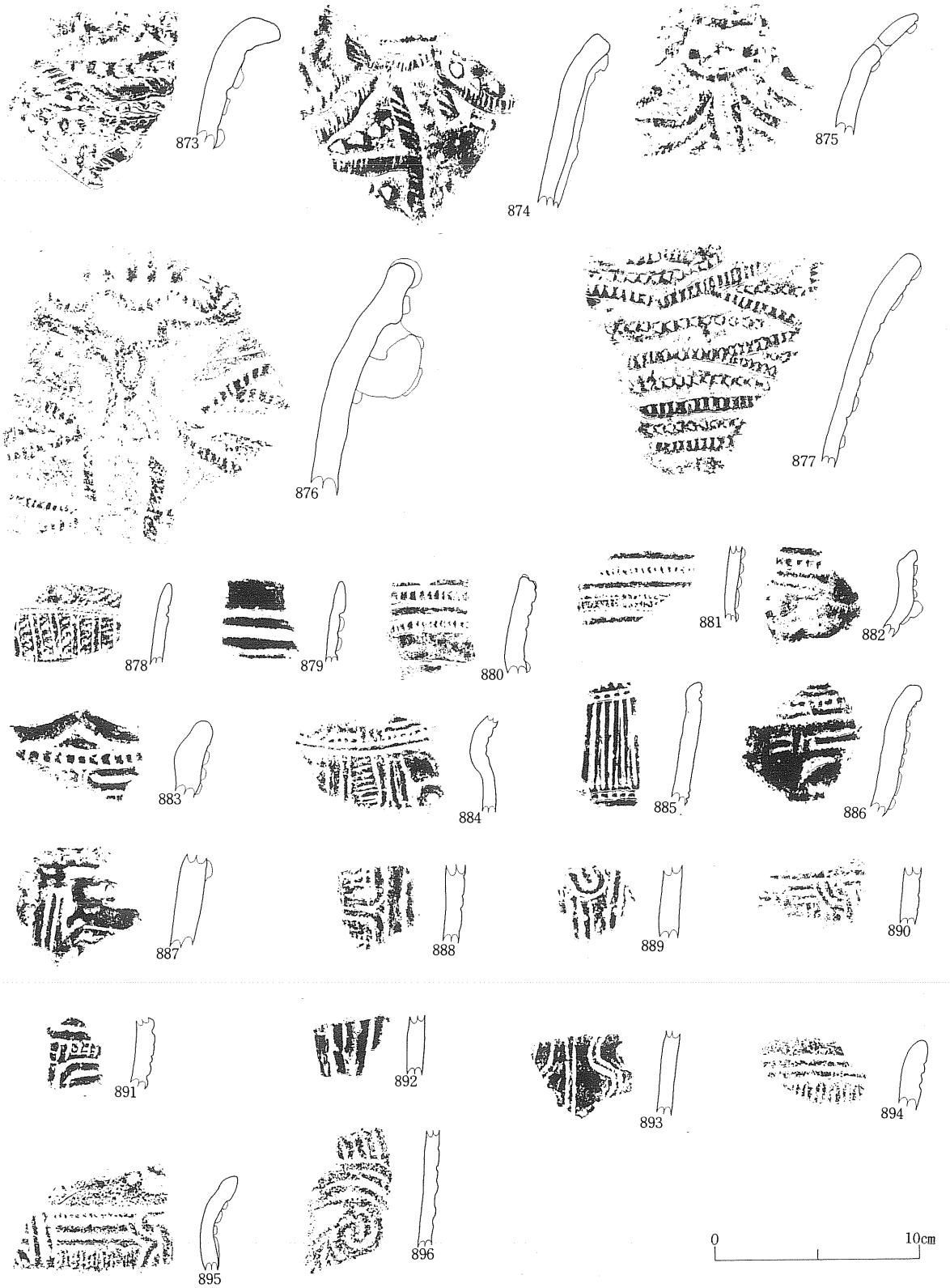
第155図　遺構外出土土器

第156図　遺構外出土土器



第157図　遺構外出土土器

第158図　遺構外出土土器



第159図　遺構外出土土器

2類土器（12・42・126・254・264・283・345・348・519・520・547・593・666・708・759・764・864～868）

頸部から口縁部にかけて外反し、弁状把手を有する深鉢形土器が主体である。粘土紐貼付の隆帯がめぐり、直線・山形・弧状など複雑になる。その上部には刻み状の撚糸圧痕・半截竹管工具による爪形の刺突文などが施文される。それらの間を充塡して撚糸圧痕文・撚糸圧痕による擬似爪形文が施される。

3類土器（23・27・30・31・70・114・195・231・232・240・255・304・305・428・435・487・544・869～877）

頸部から口縁部にかけて外反し、弁状把手を有するものと、平縁のものがある。粘土紐貼付の隆帯はわずかに細くなり、胴部にまで下がる土器もみられる。隆帯上には刻み状の撚糸圧痕が残るものと、まったく施文されないものがある。また、半截竹管状工具による爪形文が施文されるものもある。隆帯間を充塡する撚糸圧痕文はみられなくなり、変りに爪形・三角状の刺突文が施されるものがある。

第Ⅲ群土器

1類土器（349・350・386・408～410・412・545・684・685・878・884～887・890・892・893・896）

口縁部や胴部に縦位の半隆起線文が施文される。口縁、頸部に烈点状の刻みが施されるものもある。

2類土器（546・879～883）

口縁部に横方向に半隆起線文を施し、その上部に半截竹管状工具による爪形文を施している。

3類土器（263・492・638・888・891）

地文は無文、細かい格子目文である。半隆起線文によって曲線・直線・渦巻文などが施文されている。492は二ケ所に山形口縁を有する深鉢形土器である。口縁部、頸部に二条づつ半隆起線文がめぐり、頸部にL形・瘤状に粘土紐貼付が施される。胴部は細かい格子目文の地文に半隆起線がL字・クランク状に展開する。

4類土器（586・894・895）

口縁部は無文帯で横位に半隆起線文が施される。その下には連弧状に縦位に文様が施文されている。

第Ⅳ群土器（137・138・185・211・212・251・252・260・326・343・344・357～359・381・400・443・484・485・501・507・577・583・614～618・620・621・636・664・665・667・683・685・694・695・704・715・849～857）

大木式土器と円筒式土器の中間形式とも思われる土器群である。平縁のものもみられるが、波状口縁が主体を占める。頸部から口縁部にかけて外反し、胴部が膨らむ深鉢形土器が多い。文様の主

体は口唇、口縁に波状の粘土紐貼付による隆帯をめぐらし、上部に刻み状の撚糸圧痕が施されることである。口縁部以下の文様は、細い粘土紐貼付文・波状・弧状・r状に撚糸圧痕文、ヘラ状工具による沈線文が描かれる。また、爪形文なども施文される。

土製品（第160～163図）

1・2はミニチュア土器と思われる。1は口縁部の二ケ所に穿孔がある。3は舟形を呈する土製品である。内部は中空で上部の一端に穴が穿たれる。土笛と思われる。4・5は側面が鼓状を呈する。4は中心部に穿孔がある。耳飾りと思われる。6は中心に小さな穿孔のある円盤状土製品である。7～10は三角・円・角柱形を呈する。7は中央に一条の切り込みがまわっている。9は等間隔に沈線がまわり、片面に三条の沈線が縦に走っている。10はきれいに面取りされ、両端に沈線がまわる。11～18は三角形土製品である。11～14は片面に竹管状工具による刺突文が施されている。14は弧状に撚糸圧痕文が配される。16～18は無文である。19～27は土偶である。19は下半身が欠損する。顔は抽象的に表わされ、胸に乳房が付される。表裏に竹管状工具による細い沈線と刺突文が施される。20は胴部で背面に沈線が施され、背骨ラインがリアルである。21は足部、22は腹部が大きく膨らみ、両足は非常にリアルに作られている。23は胴・腹部で沈線で文様が描かれ、背面には渦巻文がみられる。首部の欠損箇所に厚くアスファルトが付着している。24・27は頭部で、目・口・鼻などが表されている。25は腹部が膨らみ中央に縦に1本沈線が施される。26は胴部で表面に刺突・鋸歯状文が施される。33は土冠である。長さ9.1㎝、底部巾5.3㎝、高さ6.1㎝を測る。側面は三角形を呈し、下部で段がつき底部となる。側面の一端に穿孔されており、沈線によって文様が描かれている。底部の中央部分はくぼんでいる。

石製品（第162・163図）

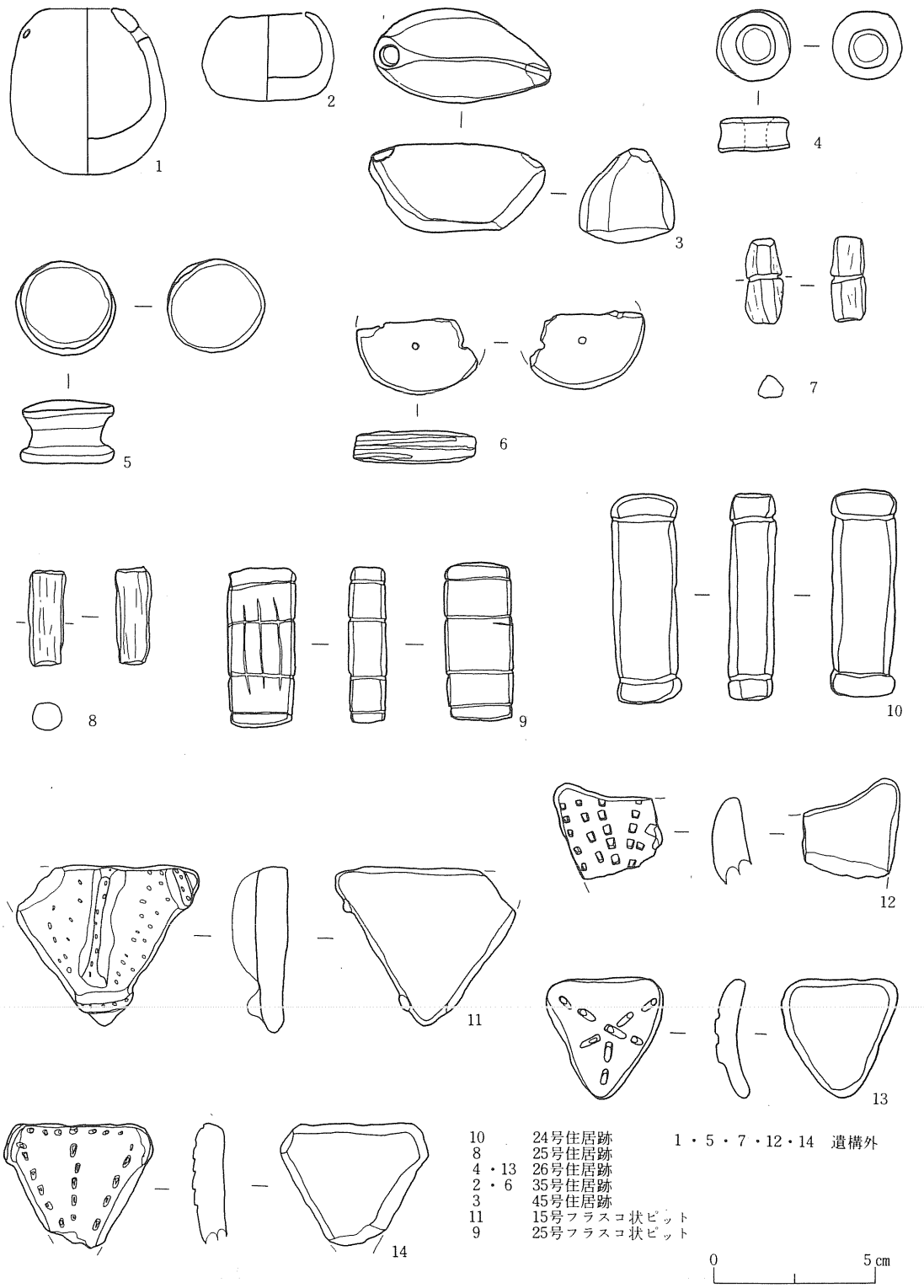
29は卵形を呈し上部に穿孔が施される。磨かれており硬玉製の大珠である。30は円形を呈し中央に穿孔がある。32はハート形を呈し、上部の両側に穿孔されている。表裏面には擦痕が多数みられる。これらはいずれも装飾品としての用途が考えられる。31は一端が欠損する石棒状のもので、きれいに面取りされている。34は石冠である。長さ10㎝、底部巾5㎝、高さ3.7㎝を測る。正面からみると「かまぼこ」形をなし、側面は三角形を呈し下部に広い段がつく。一側面から底部にかけて斜めに穴が穿たれている。段の正・側面には沈線によって円・渦巻文などが施されている。底部は平坦で擦痕が多数みられる。

遺構外出土石器（第164～171図）

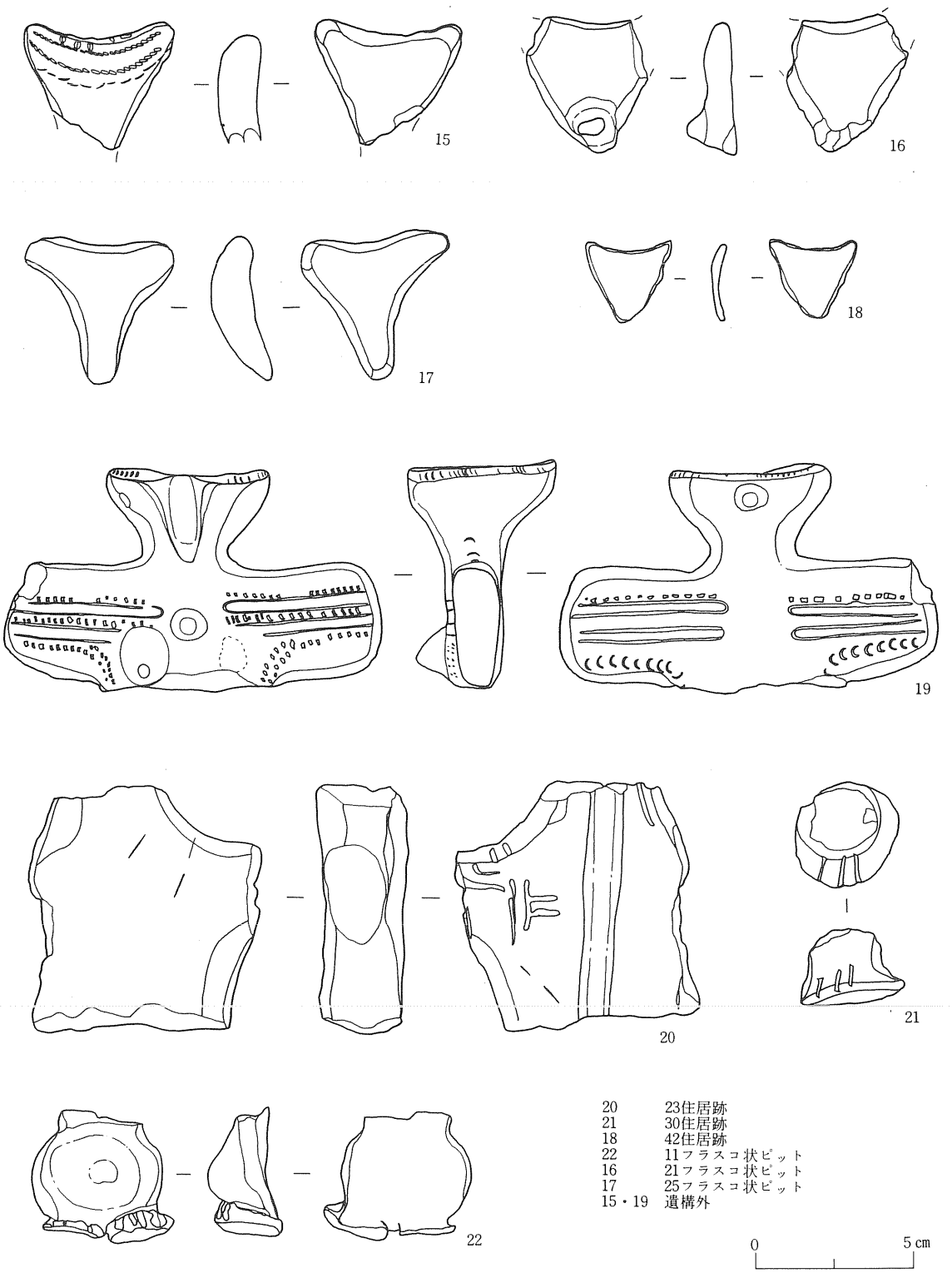
石鏃：257～273は無茎の石鏃で、258・266・271は表裏にアスファルトが付着している。274は柳葉形、275は有茎の石鏃である。石質はすべて頁岩である。

石錐：276～279は基部と錐部が明確に区別できる。278・279は錐部先端が欠損している。石質は頁岩である。

石匙：280～293は縦形、294～298は横型の石匙である。量的には縦型石匙が多い。297・298

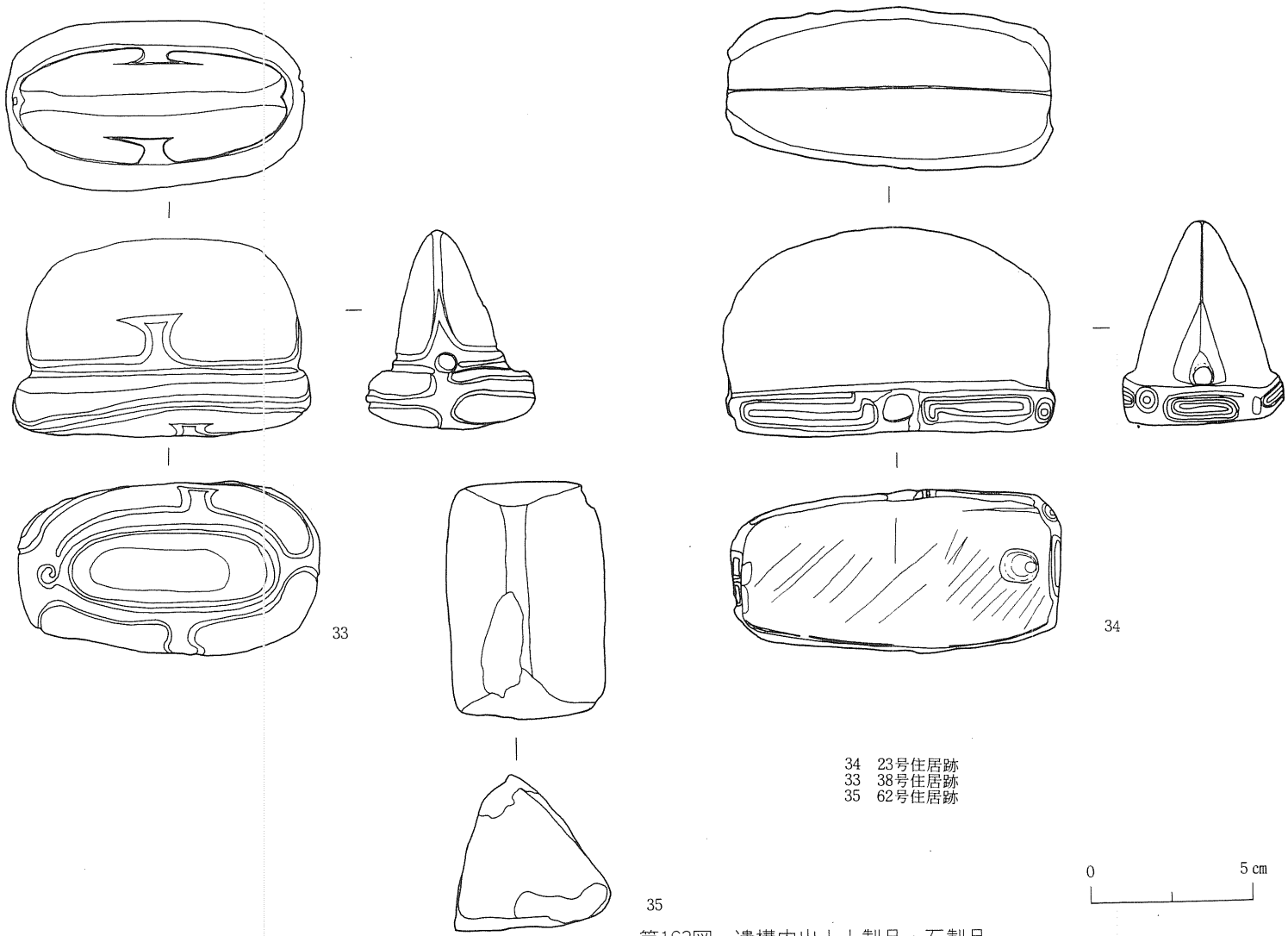


第160図　遺構内・外出土土製品



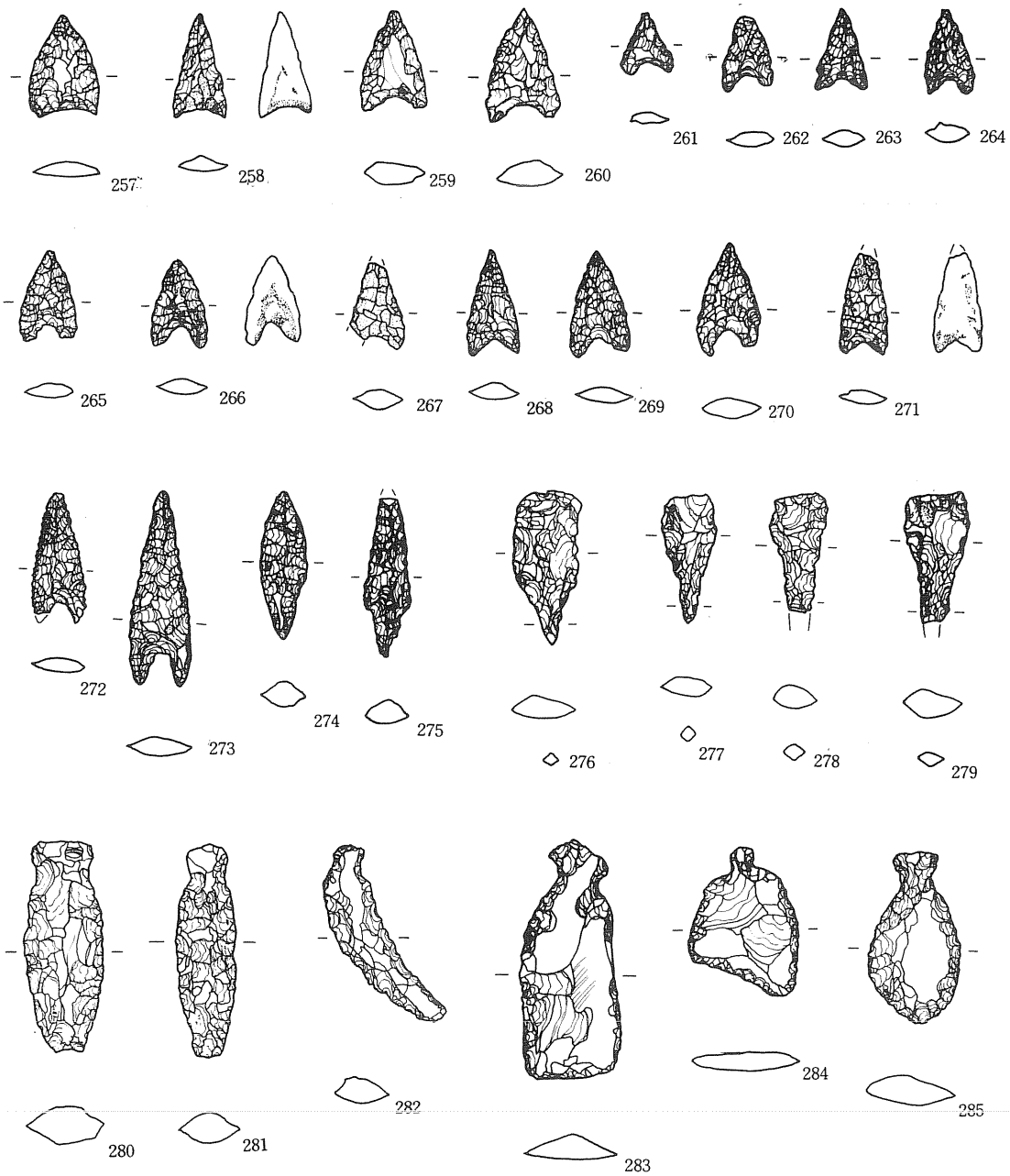
第161図　遺構内・外出土土製品

第162図　遺構内・外出土土製品・石製品

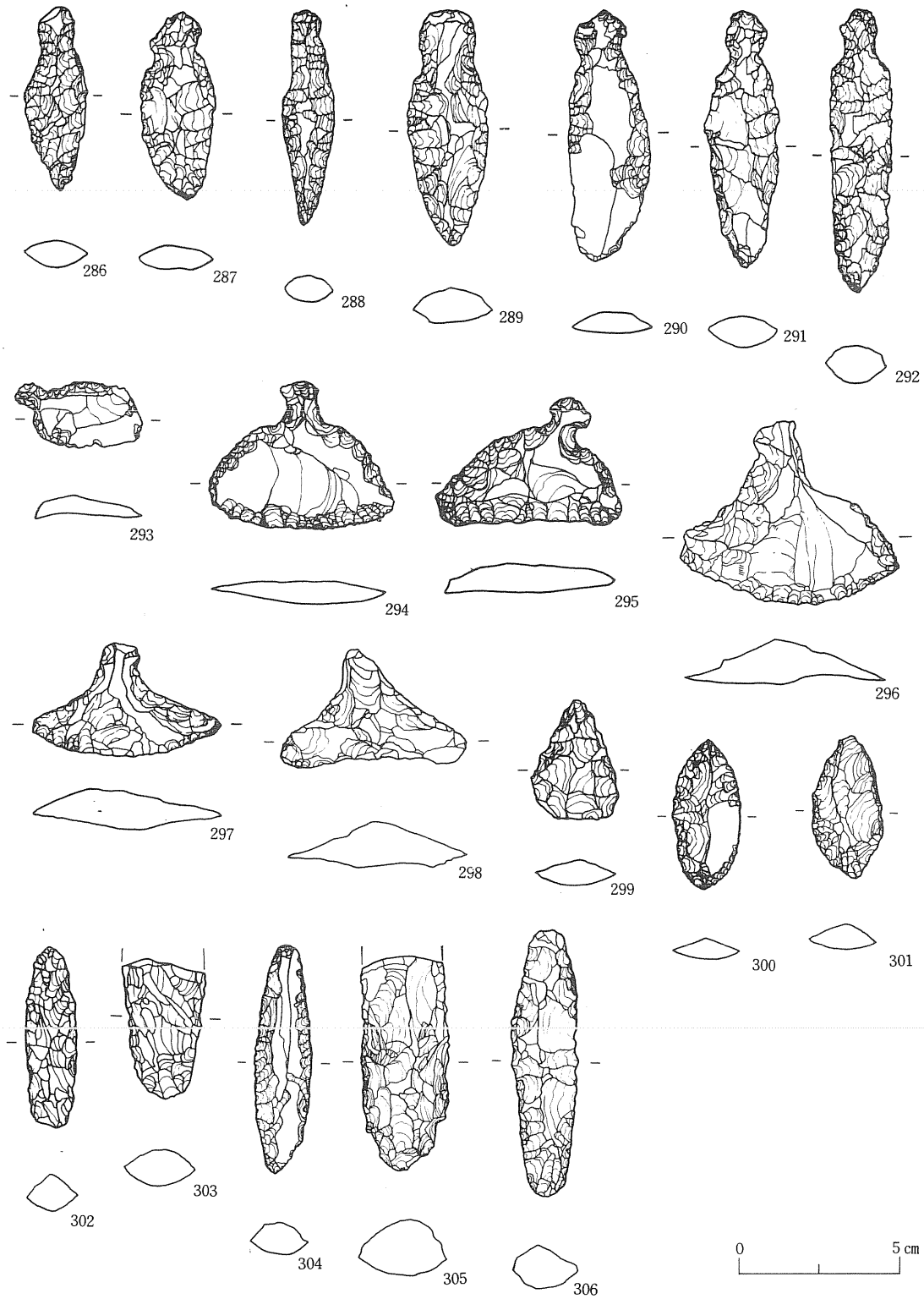


34　23号住居跡
33　38号住居跡
35　62号住居跡

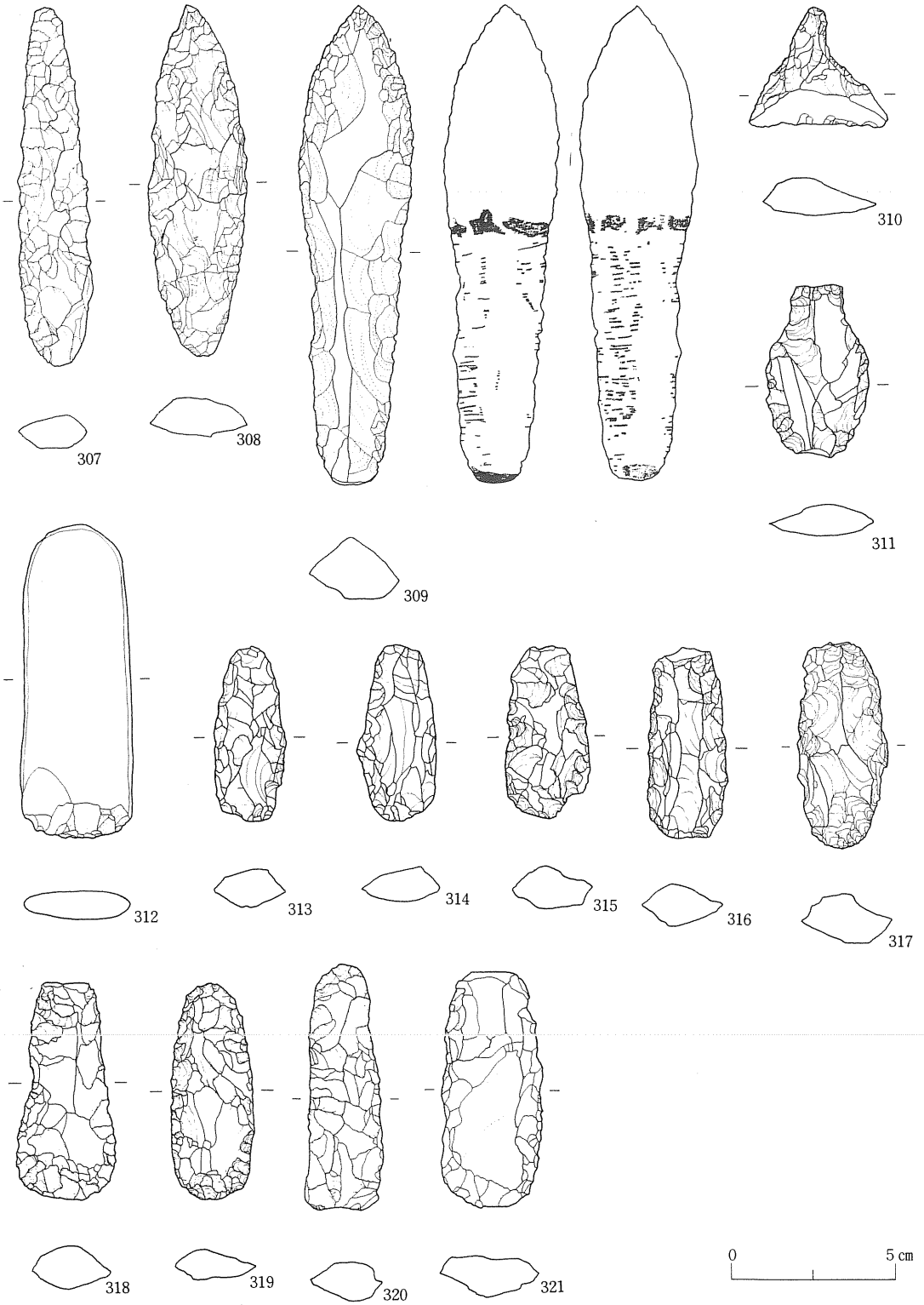
第163図　遺構内出土土製品・石製品



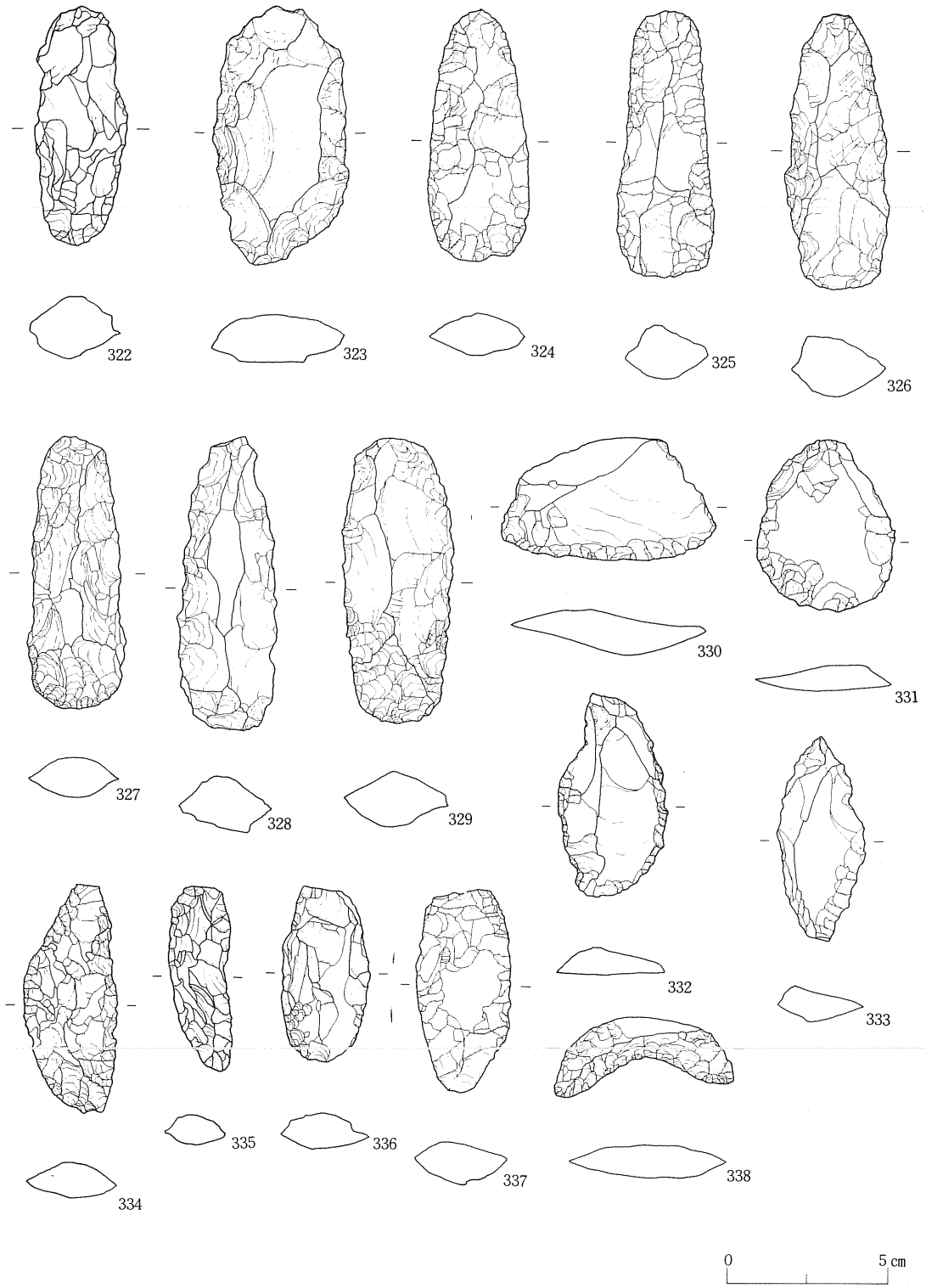
第164図　遺構外出土石器



第165図　遺構外出土石器

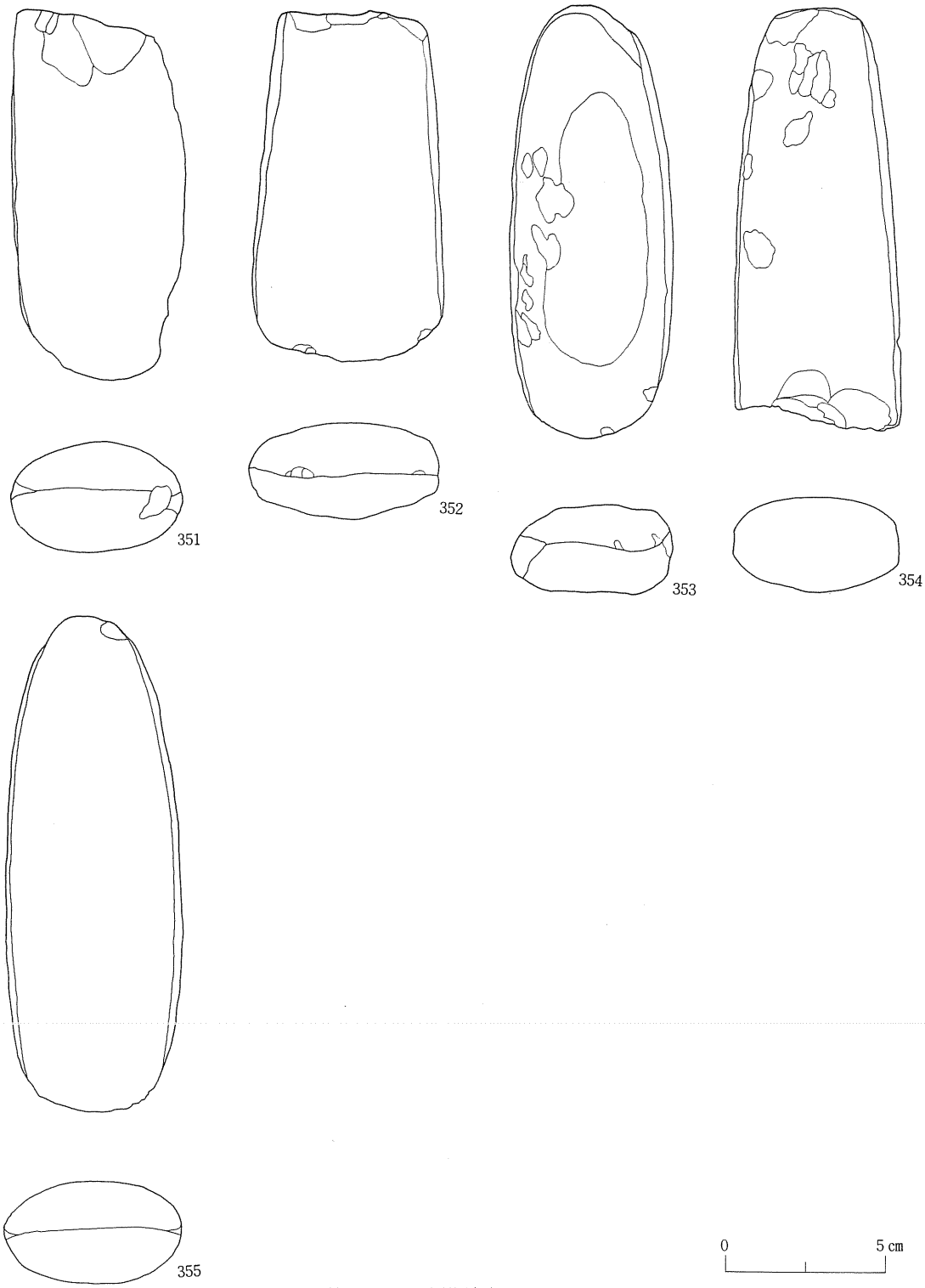


第166図　遺構外出土石器

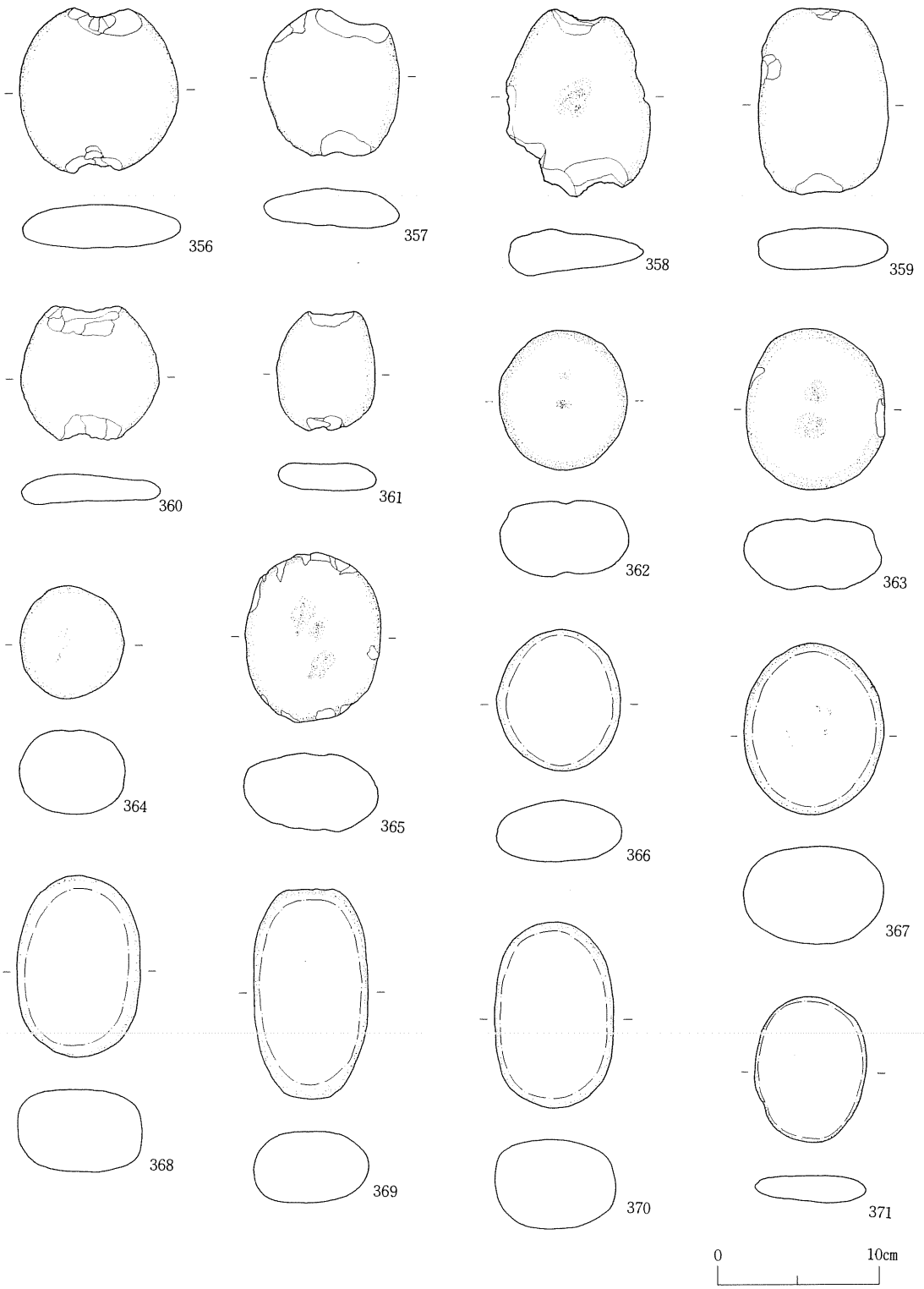


第167図　遺構外出土石器

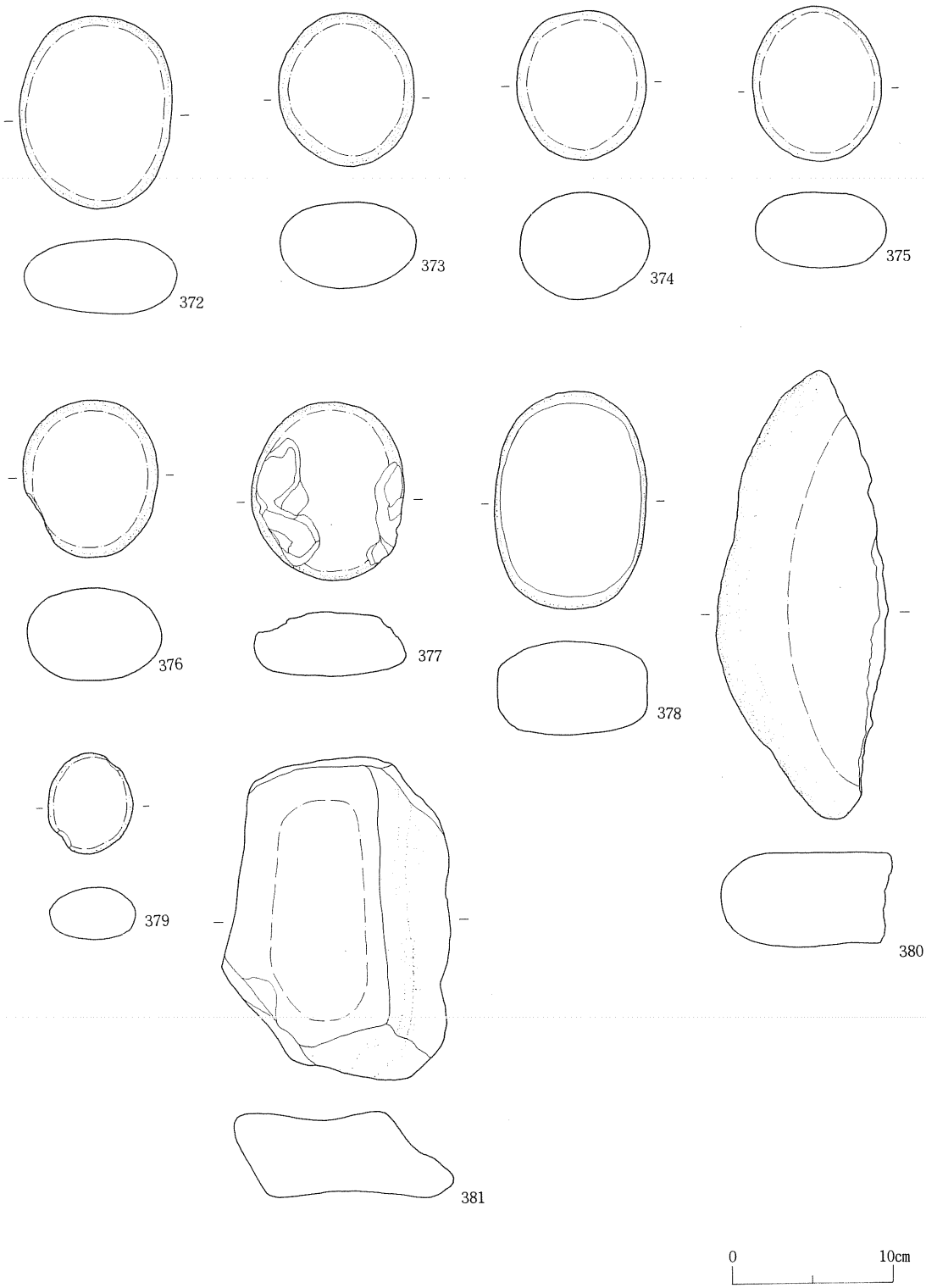
第168図　遺構外出土石器



第169図　遺構外出土石器



第170図　遺構外出土石器



第171図　遺構外出土石器

は横型石匙であるが三角形状を呈する。石質は頁岩である。

石槍：299 ～ 309 は石槍である。299 ～ 301 は小型のものである。302 ～ 307 は細身のもので 303 ・ 305 は先端部が欠損する。308 ・ 309 は先端部が鋭利に尖っている。309 は中程から基部にかけて柄を装着した時に使用したと思われる蔓状のものを巻いた痕跡が明瞭に残っている。さらにその前後にアスファルトが付着している。石質は 309 が凝灰岩、他は頁岩である。

ヘラ状石器：310 ～ 329 ・ 334 ～ 337 はヘラ状石器と思われるものである。310 は三角形を呈し、両側縁に剝離が施される。312 は扁平な石材の先端部に剝離を施し刃部にしている。313 ～ 329 はいわゆるヘラ状石器である。左右対称で両面加工がなされている。石質は 312 が凝灰岩、他は頁岩である。

掻器状石器：332 ・ 333 は両側縁部に加工が施されている。338 は弧状をなしている。石質は頁岩である。

磨製石斧：339 ～ 355 は磨製石斧である。基部・刃部が欠損するものが多い。石質は凝灰岩のものが多い。

石錘：356 ～ 361 は石錘である。扁平な丸い石材の両端を打ち欠いて作られている。

くぼみ石：362 ～ 365 はくぼみ石である。362 ・ 363 はくぼみ部が片面に二ケ所あり、両面使用のものである。

磨石：366 ～ 379 は磨石である。磨面が片面・両面のものがみられる。

石皿：380 ・ 381 は石皿の破損品である。381 は中央がくぼみ、磨痕跡が明瞭である。

平安時代

平安時代の遺構として竪穴住居跡 4 軒が検出された。住居番号が飛んでいるのは縄文時代の住居跡と通し番号にしたためである。

35 号住居跡（第 172 図）

調査区北端で検出された。縄文時代の 64 ・ 65 号住居跡の上部に構築されている。

プランは、東西 4.2 m、南北 4.5 m のほぼ方形を呈する。確認面からの深さは 16 cmで、壁は斜めに立ち上がる。ピットは 11 個検出されているが、東・西・南コーナー部にあるピットの他は明確に本住居跡にともなうものか不明である。カマドは東壁に付設されている。北側の袖がわずかに遺存するが他は不明である。燃焼部は火熱を受けて赤変している。

55 号住居跡（第 173 図）

調査区北西端部で検出された。

プランは長軸 5.8 m、短軸 4.3 m の長方形を呈する。確認面からの深さは 14 cmで、壁は斜めに立ち上がる。ピットは 28 個検出されている。主柱穴は各コーナー部、一辺の中間点にあるピットと思われる。カマドは検出されなかった。床面は平坦で堅く良好である。床面上に本住居跡を切る 3 号

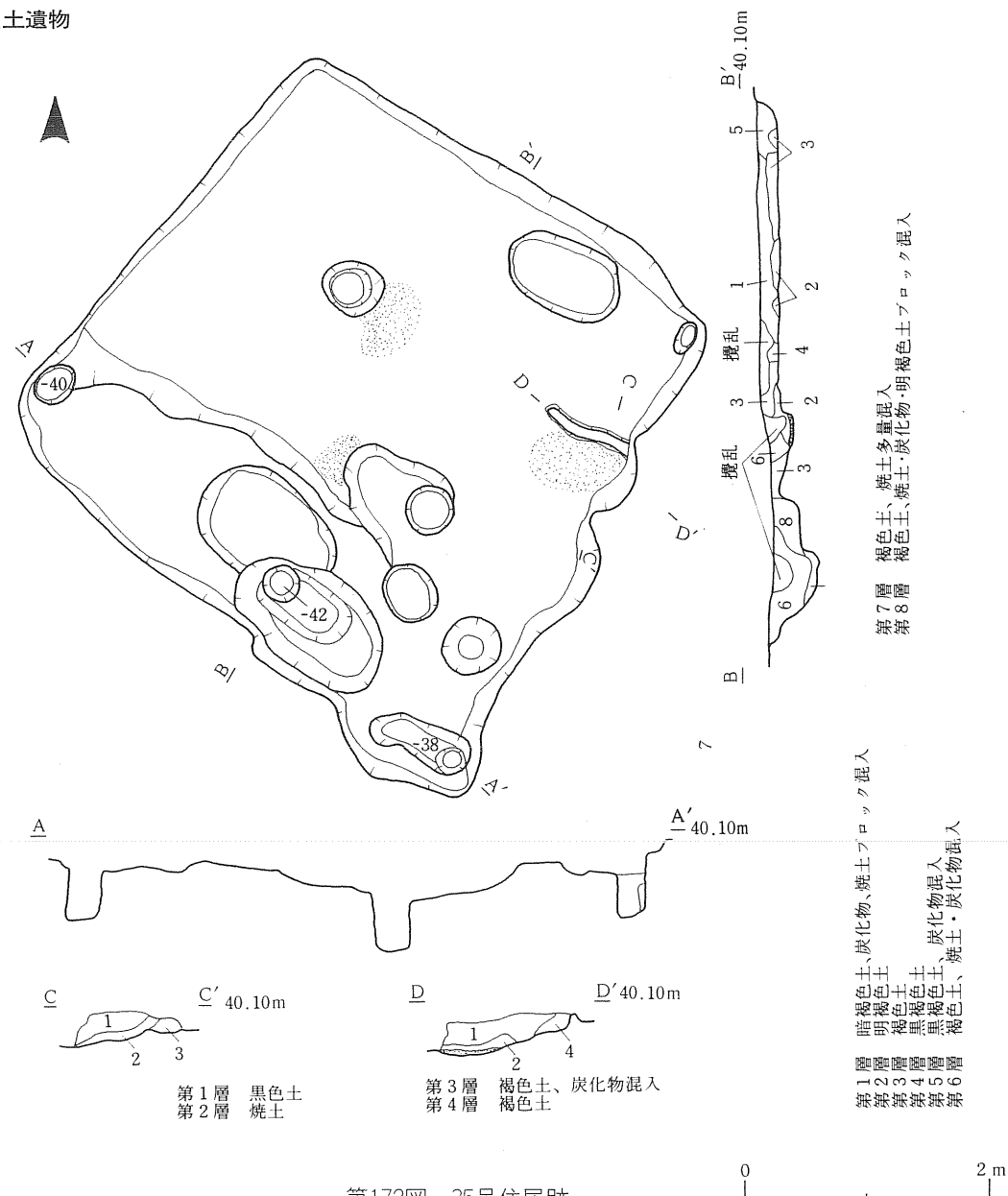
土壙が掘り込まれている。

70 号住居跡（第 174 図）

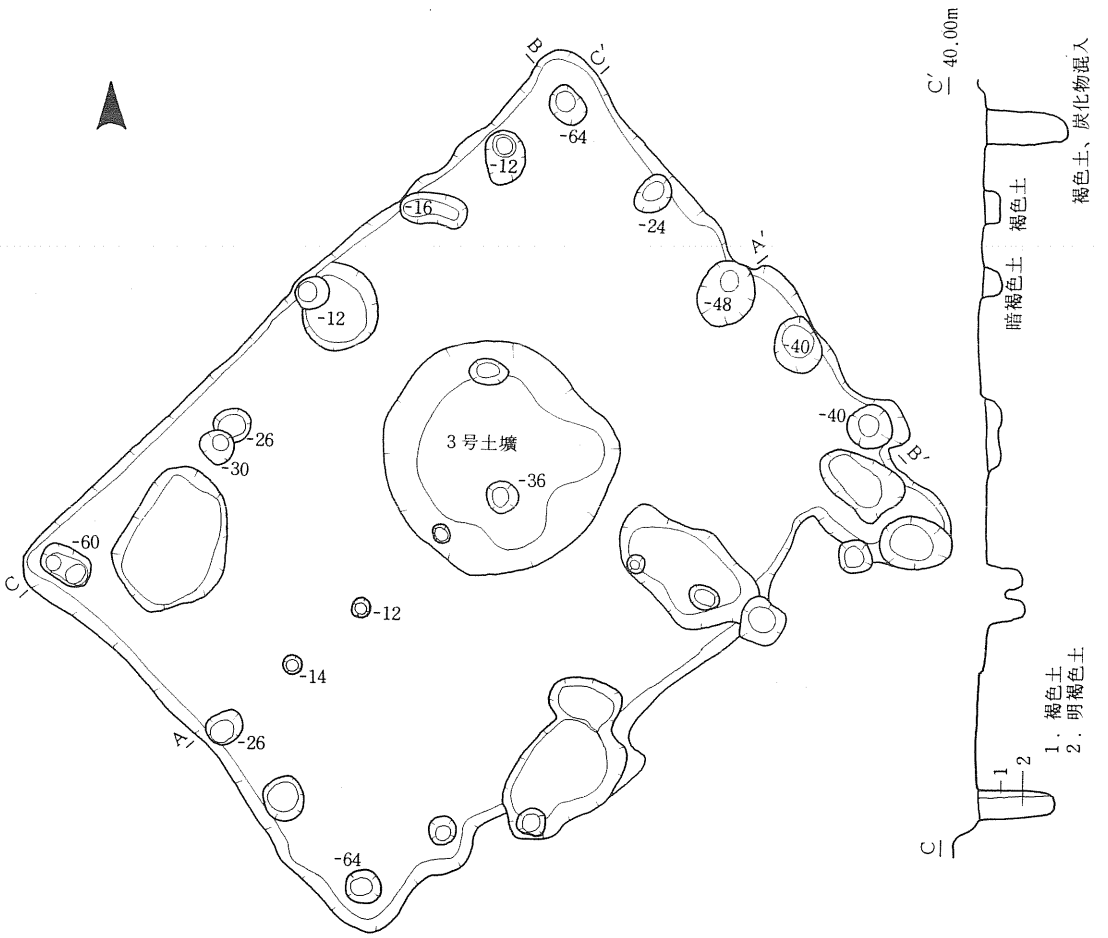
調査区中央西側で検出された。

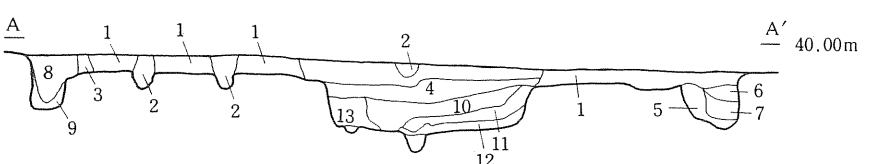
プランは、長軸 5.0 m、短軸 4.4 mのほぼ方形を呈する。確認面からの深さは 22 cmで、壁は斜めに立ち上がる。ピットは 15 個検出されているが主柱穴は不明である。カマドは明確でないが東壁際に二ケ所焼土が堅く分布する範囲が認められることからカマド痕跡の可能性も考えられる。床面は平坦で堅く良好である。

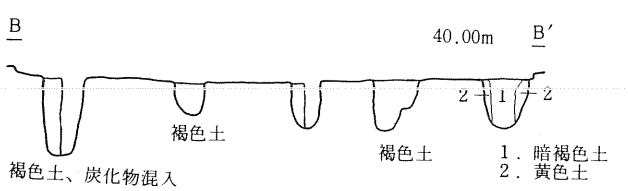
出土遺物



第172図　35号住居跡







第1層　暗褐色土
第2層　黒褐色土
第3層　暗褐色土、明褐色土ブロック混入
第4層　暗褐色土、焼土、明褐色土ブロック混入
第5層　明黄褐色土
第6層　明褐色土、褐色土混入
第7層　明褐色土
第8層　褐色土、炭化物混入
第9層　明褐色土
第10層　褐色土、炭化物・明褐色土ブロック混入
第11層　黒褐色土
第12層　にぶい黄褐色土
第13層　暗褐色土

0　2 m

第173図　55号住居跡

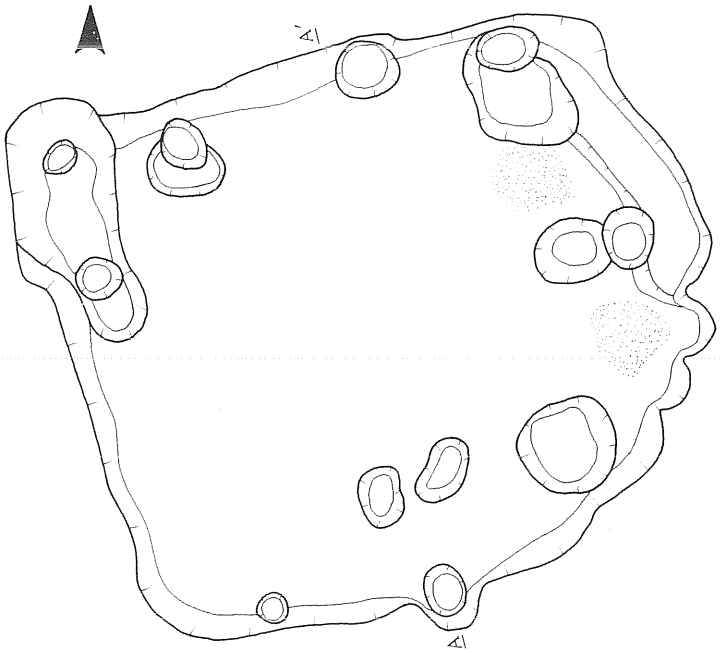
土器（第 176 図）

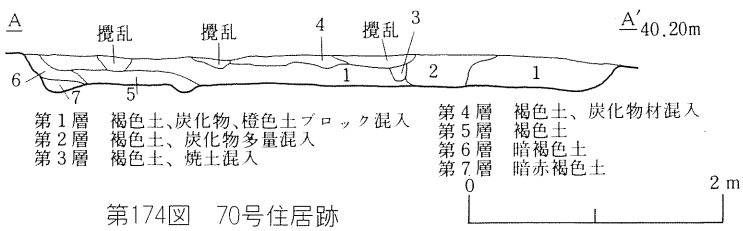
479 は覆土から出土した。台付坏で回転糸切り後に高台を貼付し、ナデを施している。赤橙色を呈している。

78 号住居跡（第 175 図）

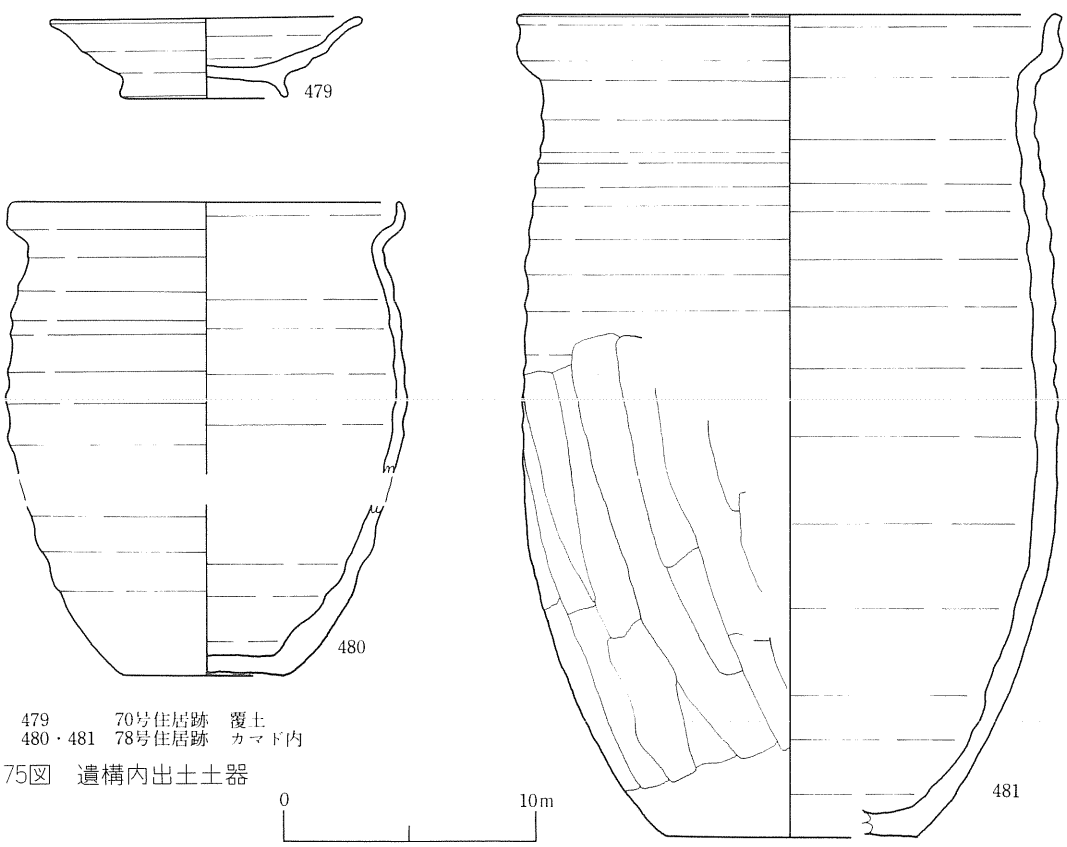
調査区中央西側で検出された。南西部は新しい土取りによって切られている。

プランは長軸 5.2 m、短軸 4.0 m の長方形を呈する。確認面からの深さは 16 cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは 18 個検出されている。主柱穴は各コーナー部にあるピットが考えられる。カマドは南壁東寄に付設されて





第174図　70号住居跡



479　　70号住居跡　覆土
480・481　78号住居跡　カマド内

第175図　遺構内出土土器

いる。両袖は壊されて不明であるが、住居外に長くのびる煙道が検出された。燃焼部には火熱を受け堅い焼土が認められる。床面は平坦で堅く良好である。

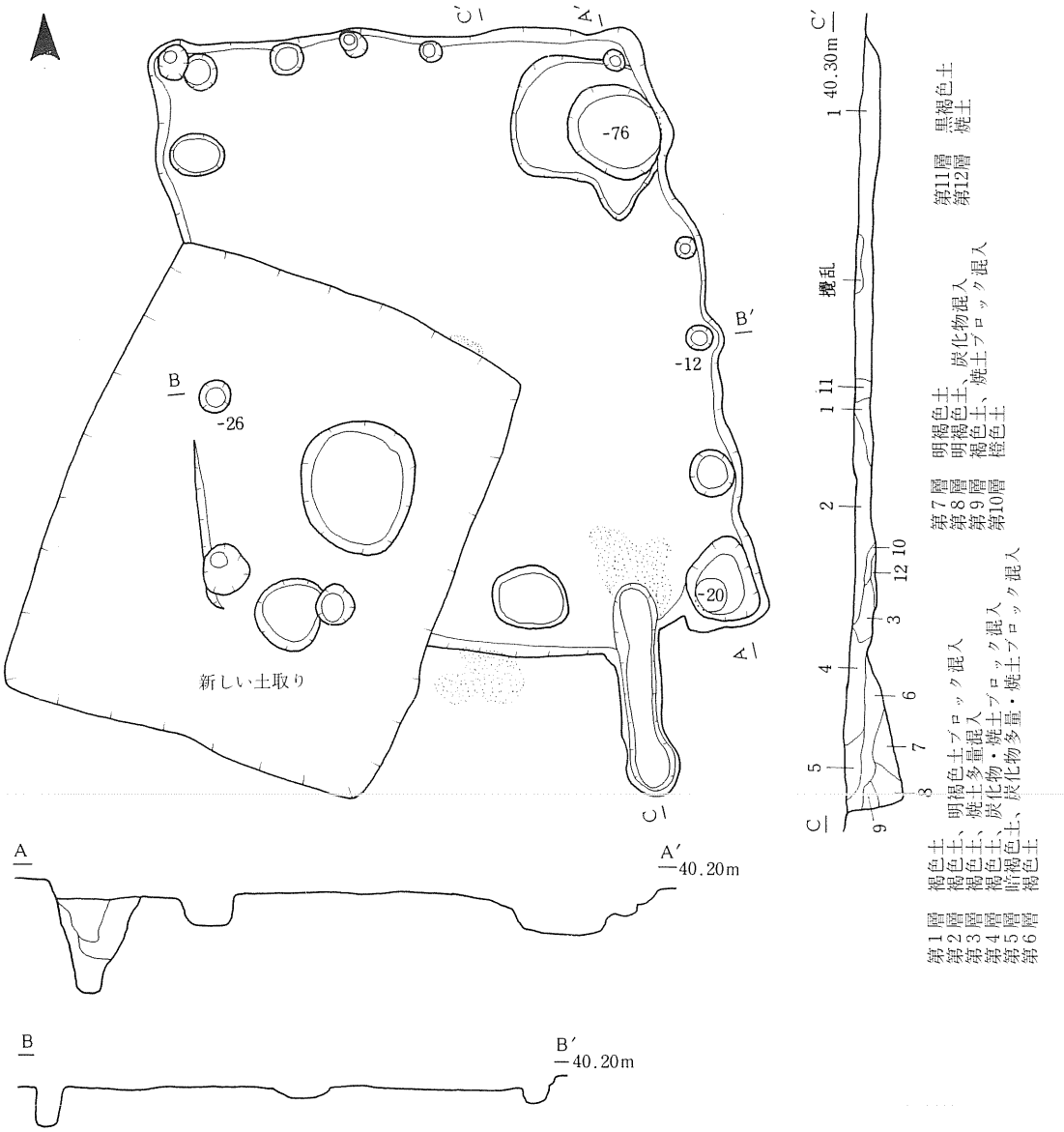
出土遺物

土器（第 176 図）

480・481 はカマド内から出土した。頸部が「く」の字状に外反し、口縁部が直立する土師器甕である。481 は胴部にヘラケズリ調整が施される。

遺構外出土遺物（第 162 図）

28 はフイゴ羽口である。上部は欠損するが先端部は火熱によりガラス状になっている。



第176図　78号住居跡

まとめ

—縄文時代中期—

住居跡について

本遺跡では4つの舌状部をもつ台地の中央部西端で74軒の竪穴住居跡を検出した。住居跡を構成する各要素（平面形・規模・長軸方向・炉等）について分析してみたい。

平面形は、円形・楕円形・隅丸方形・隅丸長方形があり、以下のように分類される。

第Ⅰ類、円形……29・32・38・40・45・53・54・57号住居跡

第Ⅱ類、楕円形……1・2・4～7・9・10～16・18・19・22～28・30・31・33・36・37・39・41～44・46～51・56・58・60・61・63～65・67・71～73・75号住居跡

第Ⅲ類、隅丸方形……8号住居跡

第Ⅳ類、隅丸長方形……34・52・62・68・69号住居跡

床面積（大きく重複しているため推定面積のものも含む）については、次の6つに分類される。

10㎡以下……29・33・36・40・43・45・54・62・72号住居跡

10.1～20㎡……12・13・22～24・26・28・32・46・49・50・56・63・67・74号住居跡

20.1㎡～30㎡……1・5・6・9・10・16・25・27・31・34・38・44・51・53・57・65号住居跡

30.1㎡～40㎡……4・7・11・14・15・41・58・62・64・71・73・75号住居跡

40.1㎡～50㎡……2・18・30・39号住居跡

50.1㎡以上……19・37・42・61・69号住居跡

長軸方向については、次のように分類される。

$0° \leqq \alpha < 45°$ E……1・7～12・14～16・22～28・34・37・44・50・51・56・69号住居跡

$45° \leqq \alpha < 90°$ E……18・41・42・43・46号住居跡

$0° \leqq \alpha < 45°$ W……2・6・30・31・48・49・50・64・71・72号住居跡

$45° \leqq \alpha < 90°$ W……4・13・19・57・58・61・62・65・67号住居跡

東—西方向に長軸がくるもの……5・33・36・39・60・62・63・68・75号住居跡

炉は74軒の住居跡のうち、27・28・31・33・45・49・50・51・60・65・72号住居跡を除く62軒から検出された。構造上から5つに大別される。

A類、地床炉……床面が焼けているもの

3・6・36・37・43・46・47・52・68・69号住居跡

B類、土器埋設炉……床面を掘りくぼめた後、土器を埋設して使用したもの

2・4・5・8～10・12・14～25・29・30・32・34・40・41・44・48・54・57・61・64・67・73～76号住居跡

C類、石囲炉……礫を組んで炉外部と区画したもので、方形のもの（C_1類）、Uまたはコの字形のもの（C_2類）に細別される。また、石囲炉であるが重複し、切られているため形態が不明瞭な

もの（C_3類）もある。

C_1類……1・38・56・63号住居跡

C_2類……13号住居跡

C_3類……19・30・39・42・57・58・62・64号住居跡

D類、石囲土器埋設炉……床面を掘りくぼめた後、土器を埋設し、礫を組んで炊外部と区画したものである。

7・10～12・26・34・59・71・77号住居跡

E類、複式炉……土器埋設部＋掘り込み部＋掘り込み部からなるものである。

53号住居跡

以上、住居跡の各要素について概観してみた。平面形と炉の組み合わせは表1のようになり、Ⅱ類が最も多い。A類はⅡ・Ⅳ類で認められ、C_3・D類はⅡ類にともなうものが多いようである。次に、時期の判明する31軒の炉について時期・形態別に分類すると表2のようになる。地床炉は大木7a・7b期に認められるが、それ以降はみられない。土器埋設炉は各時期にみられるが、大木8a期に最も多い。C_1・C_2類の石囲炉については埋設土器などの明確に時期を判別する資料もなく不明である。C_3類の石囲炉、D類の石囲土器埋設炉は、大木7a・7b期にはみられず、大木8a期以降に認められる。

最後に、炉埋設土器、床面出土土器から明確に時期のわかる住居跡は次のようである。

大木7a式期……36・37・40・41・75号住居跡

大木7b式期……2・3・5・9・34・43号住居跡

円筒上層b式期……17号住居跡

大木8a式期……8・19・22・23・24・25・26・44・58・64・67・71・73号住居跡

円筒上層C式期……12・32・57号住居跡

大木8b式期……7・56号住居跡

大木10式期……53・54号住居跡

表1　住居跡平面形と炉の形態

平面形＼炉形態	A	B	C_1	C_2	C_3	D	E	計
Ⅰ　類		5	1					7
Ⅱ　類	6	23	3	1	7	6		46
Ⅲ　類		1						1
Ⅳ　類	3	1			1	1		6

以上のように、本遺跡では7形式にわたる変遷が認められ、大木8a式期が最も多い。大木10式期は立地などから他とは若干様相が異なる。また一時期内での変遷については不明である。

表2　住居跡、炉の時期別分類

時期＼炉形態	A	B	C_1	C_2	C_3	D	E	計
大木7a	2	3						5
大木7b	2	3						5
円筒上層b		1						1
大木8a		10			3	1		14
円筒上層c		1				1		2
大木8b			1		1	1		3
大木10		1					1	2

特異なピットについて

22軒の住居跡で、長軸線上の一方の壁際寄りに比較的大きなピット、すなわち径50～130㎝、深さ45～100㎝、断面形がロート状を呈するものが検出された。構造から2つに分類される。

Ⅰ類……黄白色粘土、または黄褐色土で周囲に高く盛土し、馬蹄形状に縁取りしたもの。

4・23・25・27～29・32・40・44・62・64・67号住居跡

Ⅱ類……ピットの周囲に馬蹄形状の盛土を持たないもの。

16・18・19・22・34・37・39・58・68・73号住居跡

Ⅰ類に類似したピットは、山本郡八竜町萱刈沢貝塚(註1)では「有機物投捨施設」、また青森県近野遺跡(註2)では「特殊施設」と呼ばれている。Ⅱ類は、男鹿市船川大畑台遺跡(註3)、能代市館下Ⅰ遺跡(註4)、北秋田郡上小阿仁村不動羅遺跡(註5)で検出されている。いずれも具体的な性格、機能については不明であるとしている。本遺跡においてもこの種のピットの性格を特徴づける具体的要素は認められなかった。ただⅠ類では馬蹄形状の盛土で意識的に居住区域とを画しているように思われることから住居跡内において重要な位置を占める施設と思われる。今後資料の増加を待って検討しなければならない問題である。

フラスコ状ピットについて

フラスコ状ピットは28基検出された。1～6号フラスコ状ピットは昭和43～48年までの調査で検出されたものである。今回の調査で住居内に検出されたものは6基確認されたが、屋内施設として明確に捉えられるものは認められなかった。土層断面の観察結果から、10・19号の2基は住居の構築以前のもの、20・21・27・28号の4基は住居廃棄後に構築されたものである。特に19号フラスコ状ピットは壙口部に貼床を施し26号住居跡を構築している。

土壙について

調査区の東部、南部、南東部の三地区に集中して190基の土壙が検出された。これらの土壙は平面形が円形もしくは楕円形を呈し、断面形はビーカー状、鍋状を呈する。規模は長軸55㎝～113㎝、短軸50㎝～102㎝、深さ30～70㎝である。土壙の内部からは、こぶし大の礫が多数検出され

る。土器を検出する土壙は27基と少ないが、大木7b式期から大木8a式期に位置づけられる。これらの土壙の性格については例を待って検討したい。

遺物について

下堤A遺跡から土器・石器・土製品・石製品など多数が出土している。

前述したように、大木式、同筒式、北陸系の土器が出土しており、Ⅰ群を大木式、Ⅱ群を円筒式、Ⅲ群を北陸系、Ⅳ群をその他の土器として分類し、それぞれ形式によって類別した。

第Ⅰ群土器は1類から5類まで分類した。1類土器は深鉢形土器が主体で、粘土紐貼付、半截竹管状工具により文様が施される。粘土紐貼付の隆帯を垂下させ、鋸歯状、蛇行、直線に施し、横方向に鋸歯状文、交互刺突、爪形文などがみられる。大木7a式に比定されるものである。2類土器は大木7b式に比定される土器である。深鉢形土器、浅鉢形土器がある。撚糸圧痕文が主体で平行直線、連弧状、r状に施文されるa類と、粘土紐貼付文と撚糸圧痕文、押圧縄文とが組み合されるc類がみられる。3類土器は大木8a式に比定される土器で、施文様からa～d類に分類した。キャリパー形を呈する深鉢が主体であり、粘土紐貼付の隆帯によって全体に文様が施されるb・c類が主体を占める。口縁部に粘土紐貼帯を施し、両側を撚糸圧痕、押圧縄文で縁どりするa類は大木7b式に近いものである。また、粘土紐貼付文が消滅し、沈線文が主体となるa類は大木8a式でも新しい時期と思われる。4類土器は大木8b式に比定される。小形の深鉢形土器が主体であるが出土量は少ない。5類土器は大木10式に比定される。深鉢形土器が主体で、沈線区画の磨消帯によって文様が展開する。

第Ⅱ群土器は1類から3類まで分類した。弁状把手を有する深鉢形土器が主体であり、撚糸圧痕文により、波状、鋸歯状文が施される1類土器は円筒上層a類土器と思われる。2類土器は円筒上層b式土器である。隆帯が発達し複雑になる。隆帯間に撚糸圧痕による擬似爪形文が施文される。3類土器は円筒上層c式土器である。隆帯が細くなり、胴部近くまで下がる土器もある。隆帯間に撚糸圧痕文はみられなくなり、変りに爪形、三角状の刺突文が施される。

第Ⅲ群土器は1類土器から4類土器まで分類した。出土量は非常に少なく、小破片である。北陸系の土器は、坂ノ上下遺跡(註6)で多量に出土し、1群から6群まで分類している。本跡出土の1類土器は2群に、2・4類土器は3群、3類土器は5群にそれぞれ比定できるものと思われ、中期初頭円筒上層a式、大木7a式土器に併行する(註7)北陸系土器と思われる。

第Ⅳ群土器は波状口縁が主体の深鉢形土器である。口唇、口縁部に刻み状の撚糸圧痕を施す隆帯が波状にめぐり、同筒上層式土器とも思われる。一方、口縁部が外反し、胴部が膨らむ器形、胴部に施される文様は大木式と思われる。いわば円筒式土器と大木式土器の折衷形式とも言える土器群である。

表3　住居跡一覧

住居番号	平面形	長軸方向	周溝	床面積(㎡)	炉の構造	埋甕	時期	備考
1	楕円形	N 2° E	無	21.8	方形石囲炉	無		
2	楕円形	N27° W	無	42.7(推定)	土器埋設炉	有	大木7b	
3	—	—	無	—	地床炉	無	大木7b	
4	楕円形	N51° W	無	36.2	土器埋設炉	有		
5	楕円形	N104° E	無	23.4(推定)	土器埋設炉	有	大木7b	
6	楕円形	N19° W	無	20.7	地床炉	無		
7	楕円形	N 8° E	無	34.2	石囲土器埋設炉	有	大木8b	昭和43年
8	隅丸方形	N16° E	無	—	土器埋設炉	有	大木8a	〜
9	楕円形	N15° E	無	29.5	土器埋設炉	有	大木7b	昭和48年
10	不整楕円形	N36° E	無	22.7	石囲土器埋設炉	有		発掘調査
					土器埋設炉	有		
11	楕円形	N16° E	無	31.1	石囲土器埋設炉	有		
12	楕円形	N 9° E	無	15.1	石囲土器埋設炉	有	円筒上層c	
					土器埋設炉	有		
13	楕円形	N60° W	無	18.9(推定)	コ字形石囲炉	抜き取痕有り		
14	楕円形	N38° E	無	33.1(推定)	土器埋設炉			
15	楕円形	N33° E	無	33.4	土器埋設炉			
16	楕円形	N16°	無	29.1	土器埋設炉		大木8a?	
17	—	—	無	—	土器埋設炉	有	円筒上層b	
18	楕円形	N52° E	無	41.0	土器埋設炉	有	?	
19	楕円形	N52° W	無	52.9	石囲炉			
					土器埋設炉	有	大木8a	
20	—	—	無	—	土器埋設炉	有	円筒上層b?	昭和43〜48年発掘調査
21	—	—	無	—	土器埋設炉	有	?	
22	不整楕円形	N16° E	無	18.0	土器埋設炉	有	大木8a	
23	楕円形	N 3° E	無	18.9	土器埋設炉	有	大木8a	
24	楕円形	N 9° E	無	11.6	土器埋設炉	有	大木8a	
25	楕円形	N 2° E	無	22.3	土器埋設炉	有	大木8a	
26	楕円形	N10° E	無	19.8	石囲土器埋設炉	有	大木8a	
27	楕円形	N31° E	有	47.7(推定)				
28	楕円形?	N25° E	無	16.3(推定)				
29	円形	—	無	8.0	土器埋設炉	有	?	
30	楕円形	N12° W	無	42.4(推定)	石囲炉			
					土器埋設炉	有		炉4,大木7a,円筒上層c
31	楕円形	N19° W	無	28.7				
32	円形	—	無	11.9	土器埋設炉	有	円筒上層c	
33	不整楕円形	N103° W	無	6				
34	隅丸長方形	N24° E	無	26.2	土器埋設炉	有	?	
					石囲土器埋設炉	有	大木7b	
35								平安住居跡
36	楕円形	N97° E	無	9.8	地床炉	無	大木7a	
37	楕円形	N 3° E	無	53.7	地床炉	無	大木7a	
38	円形	—	無	25.5	長方形石囲炉	無		

表3　住居跡一覧

住居番号	平面形	長軸方向	周溝	床面積(㎡)	炉の構造	埋甕	時期	備考
39	楕円形	N95° W	無	49.2	石囲炉	無		
40	不整円形	—	無	8.1	土器埋設炉	有	大木7 a	
41	楕円形	N64° E	無	30.1(推定)	土器埋設炉	有	大木7 a	
42	楕円形	N54° E	無	58.2	石囲炉	無		
43	楕円形	N52° E	無	7.5	地床炉	無	大木7 b	
44	楕円形	N20° E	無	29.8	土器埋設炉	有	大木8 a	
45	円形	—	無	9.4			大木8 a	
46	楕円形	N66° E	無	14	地床炉			
47	楕円形		無		地床炉			
48	楕円形	N 9° W	無	—	土器埋設炉	有	?	
49	楕円形	N12° W	無	17.8				
50	楕円形	N15° E	無	11.6(推定)				
51	楕円形	N36° E	無	20.5				
52	隅丸長方形		無		地床炉			
53	円形	—	無	2.3	複式炉	有	大木10	
54	円形	—	無	9.4	土器埋設炉		大木10	
55								平安住居跡
56	楕円形	N23° E	無	10.5(推定)	長方形石囲炉	有	大木8 b	S43〜48年発掘調査
57	楕円形	N58° W	無	27.5(推定)	石囲炉			
					土器埋設炉	有	円筒上層c	
58	楕円形	N52° W	無	39.5(推定)	石囲炉	有	大木8 a	S43〜48年発掘調査
59		—	無	—	石囲土器埋設炉	—		
60	楕円形	N85° W	無	9.6				
61	楕円形	N57° W	無	51(推定)	土器埋設炉		?	
62	隅丸長方形	N84° W	無	32.8(推定)	石囲炉			
63	楕円形	N97° W	無	16.9(推定)	長方形石囲炉	無		
64	楕円形	N36° W	無	32.5(推定)	石囲炉			
					土器埋設炉	有	大木8 a	
65	楕円形	N47° W	無	24(推定)				
66	—	—	無	—				
67	楕円形	N50° W	無	14	土器埋設炉	有	大木8 a	
68	隅丸長方形	N90° W	無		地床炉			
69	隅丸長方形	N18° E	無	106	地床炉			
70								平安住居跡
71	楕円形	N 5° W	無	34.2	石囲土器埋設炉	有	大木8 a	
72	楕円形	—	無	8.2				
73	楕円形	N10° W	無	37.6	土器埋設炉	有	大木8 a	
74	円形	—	無	19.5	土器埋設炉	有	?	
75	楕円形	N90° W	無	32	土器埋設炉	有	大木7 a	
76		—	無	—	土器埋設炉	有	?	
77		—	無	—	石囲土器埋設炉	有	?	
78								平安住居跡

—平安時代—

遺構と遺物

調査区の北西端から平安時代の竪穴住居跡4軒が検出された。方形、長方形のプランをもち、カマドは35号住居跡が南東壁、78号住居跡は南壁に付設されている。南西300 mにある下堤B遺跡から3軒、東に隣接する下堤C遺跡からは31軒の住居跡が検出されている。出土遺物は非常に少ないが、赤褐色土器が出土しており、下堤B、C遺跡と同様な時期と思われる。

註1.「萱刈沢貝塚」 山本郡八竜町萱刈貝塚発掘調査報告書　八竜町教育委員会　1979

註2.「近野遺跡発掘調査報告書」 青森県教育委員会　1978

註3.「大畑台遺跡発掘調査報告書」 日本鉱業株式会社船川製油所　1979

註4.「館下I遺跡発掘調査報告書」秋田県教育委員会　1979

註5. 上小阿仁村「不動羅遺跡概要」 上小阿仁村教育委員会　1978

註6.「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書　坂ノ上F遺跡」秋田市教育委員会　1985

註7. 山本郡八竜町「萱刈沢貝塚」で5号住居跡から円筒上層a式土器と大木7a式、新崎式の土器が伴出している。

参　考　文　献

秋田市教育委員会:「小阿地下堤遺跡/坂ノ上遺跡発掘調査報告書」 1976

秋田市教育委員会:「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書　湯ノ沢B遺跡」 1983

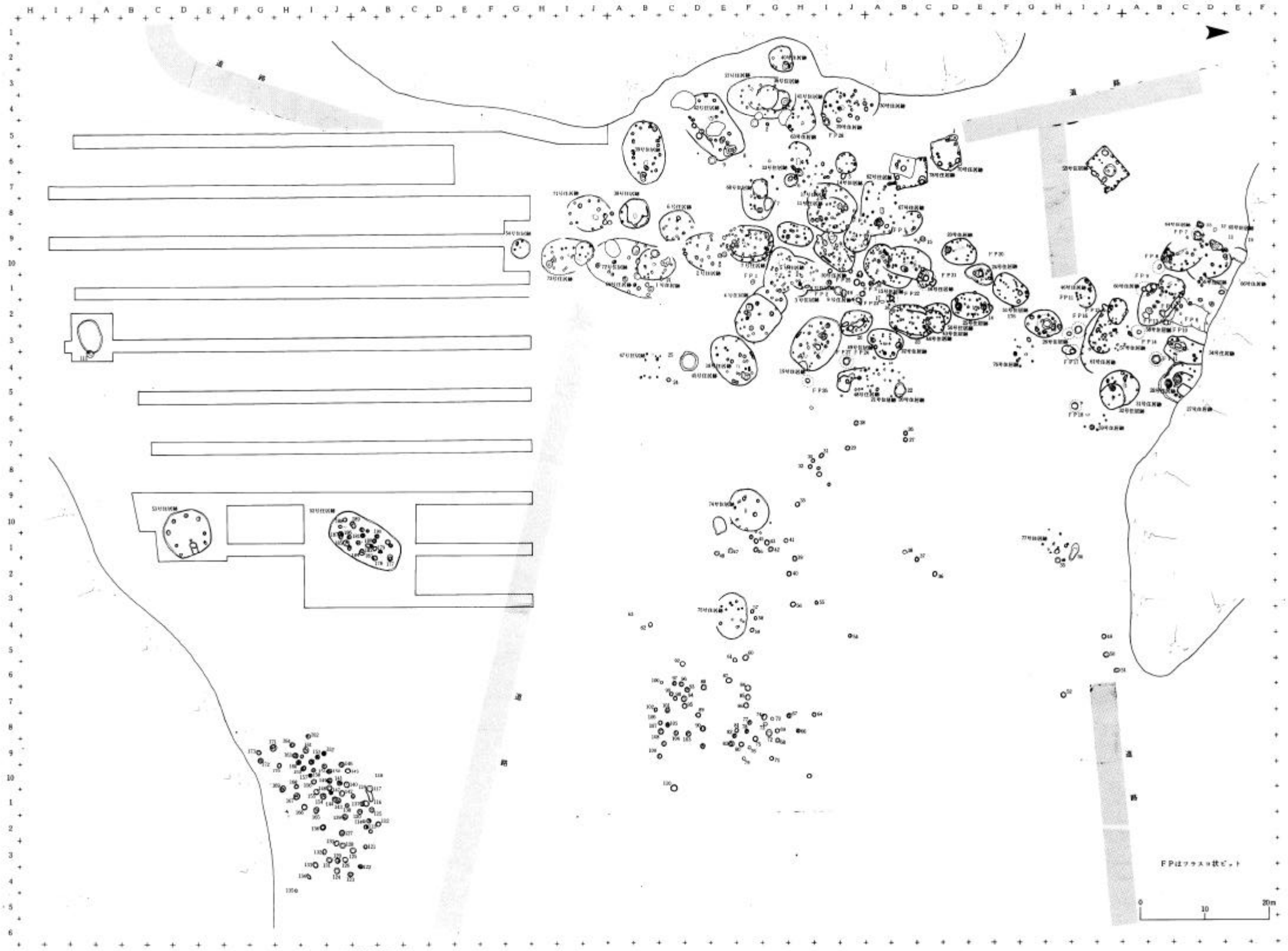
秋田市教育委員会:「秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書　下堤C遺跡」 1987

秋田県教育委員:「杉沢台遺跡発掘調査報告書」 1981

田沢湖町教育委員会:「黒倉B遺跡—第1次発掘調査報告書」 1985

青森県教育委員会:「中の平遺跡発掘調査報告書」 1975

芹沢長介　坪井清足他:「縄文土器大成第2巻中期」 講談社　1981



第177図　遺構配置図

下堤Ａ・Ｂ・Ｃ遺跡航空写真（北西→）

下堤Ａ遺跡航空写真（北西→）

図版１

1号・69号住居跡（東→）

2号住居跡（東→）

図版2

3号・5号住居跡（北→）

4号住居跡（北→）

図版 3